

# 奇譚クラブ

奇譚クラブ

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan

7

7

1972

7

1972.7



新しい風俗文献誌

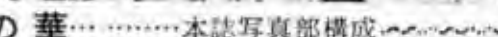
雑誌 2805-7

7月号 ¥400



女体緊縛写真集V Ⅱ 定価一〇〇〇円 送料50円

1



唯此是厚福有口

~~~~~女体堅糸

・本誌写真部構成

堅練女性の光と影

·編集部構成

.....

女性モデル募集

勇敢な女性の出現を望む

一、応募作品は編集部に於て慎重鑑査の上、入選決定しましたものは速かに筆者に通知致します。入選作品に対しては掲載の如何致し、御応募下さるようお願い致します。

▽規定△

著作権は当社に帰属するものとします。

一、応募作品は、必ず「大阪毎日」の「小説」欄に掲載される。但し、応募作品の数が多すぎた場合は、掲載できない作品がある。その場合は、応募作品の「大阪毎日」の「小説」欄に掲載される。但し、応募作品の数が多すぎた場合は、掲載できない作品がある。その場合は、応募作品の「大阪毎日」の「小説」欄に掲載される。但し、応募作品の数が多すぎた場合は、掲載できない作品がある。

~~~~~





奇

譚

ク

ラ

ブ



## 七月号目次

△昭和四十七年▽

△第二十六卷Ⅱ第七号Ⅱ通刊第二九三号▽

### 巻頭緊縛美フォト

- 京都慕情の女(ひと)……………前田 真知子  
奈保子の日記帳より「私の玉手箱秘録」…笠井 奈保子  
投げだされた女体……………深田 菊子  
『M女通信』に悶えるとき……………高村 浩子  
「私を縛ってみない?」……………深田 菊子

本

文

- フォト「女があえぐとき」△加茂芳子▽…小池清一郎…(13)  
おれも責めたや高村浩子『渚責めの構想』…城崎 恭介…(14)  
森中雨奇男様へ  
「猿轡と汚臭責めについて」……………青木 順一…(24)  
M女通信「お便りにお答えして」……………高村 浩子…(26)  
告白「禁じられた遊び」……………木戸川 健…(39)  
懸賞入選創作『あ の 女』……………花田咲太郎…(42)  
想いの譜「前田真知子恋歌」……………利根川五郎…(50)  
連載小説『大噴火』△第四十六回▽…千葉 青鬼…(52)  
奈保子の自由日記帳より「私の玉手箱」…笠井奈保子…(60)  
女性切腹史「花の墓碑銘」……………中康 弘通…(80)



奇クサロン

(226)

六月号雑誌「またまた新人登場」

しぼりのモデルになりたい

告白「ああ、真赤な腰巻」

SM通信「沖縄復帰と沖縄美人」

レポート「明美の緊縛フォト」

告白「おしめカバーと私」

サロン楽我記「第九十七回」

フォト「厳しき縄目に春をぞ覚えむ」

腕けど緩まぬ縄の痛さ悦しさ

初めての縛りデート

初恋の人、深田菊子さんへ

編集部皆様まいる

わが夫婦のSMP

髪吊りポーズを見て下さい

△短信往来△

SMづいた千鶴子の便り

前田真知子様へ「智性美と被虐美」

高村浩子様へ「円山の夜桜に想う」

高村浩子さんへ「貴女を縛った」

風流粹人さまへ「牝犬のおねがい」

南加津子様へ「デートへのお誘い」

私の売込み宣伝「高村浩子さんへ」

編集部だより

私の「ふんどし」物語

一愛読者の願望 尿愛飲の期待

映画通信 最近の緊縛映画

SM放談 関谷富佐子さんを恋うる唄

国分 俊二

石田 令子

赤井 尾越

道場 瑞夫

中津 秋浩

松尾 秋良

辻村 隆

福井 桃子

熱海 容子

黒田 奎男

寺岡 須美男

南 加津子

後藤 執生

鈴木 千鶴子

佐々木 覚星

東山 通夫

志羽 利也

北川 まりこ

博田 男士

ロマン 派生

編集 部

長井 道雄

乃美 対造

東山 映史

戸川 友彦

友彦

小説「拷問クラブ」『残酷シヨウ』……………鶴見 浩一 (84)

手記「エネマ・プレイ」の体験と憧憬……………中沢 完好 (95)

M男の天国「金魚と檻」……………芳野 眉美 (98)

SMカメラ・ハント△谷山久美子・渡部好美の巻△

『Mアニマルの華麗なる対決』……………辻村 隆 (106)

未熟者の遠吠え「臆病なサディスト」……………紫 右近 (138)

告白「アーススへの欲望と幻想」……………佐渡 黄門 (141)

連載時代S小説『紫蘭の門』(十二)……………風流極道軒 (144)

懸賞入選告白「鼻孔自虐の記録」……………中村葉奈男 (158)

カメラとペンのルポルタージュ△福竜(松本たえ)の巻△

『観世音菩薩の化身』……………塚本 鉄三 (164)

ヘンナハナシ「エスエムごっこ」……………堤崎 昭人 (190)

マダム美美代様「マゾ男の恍惚」……………瀬芽 欲人 (194)

芙美代の出産報告とSM報告……………福井 桃子 (200)

連載・S大河小説

『パロディ「花と蛇」』(八)……………山光 純 (206)

前田真知子に贈る「受難走り書き」……………亜紀 竜司 (217)

読者通信……………編集部選 (258)

イメージギャラリーII「苦悦の嬌声」須坂旭 (46)・「老人の戯れ」

岡たかし (87)・「渡部夫妻を想う」室井亜砂路 (90)・「次に来るもの」

須坂旭 (97)・「ゴールは遠し」春川ナミオ (100)・「奴隷歓迎」岡たかし

し (103)・「逆立ち責め」小川茂正 (148)・「山小屋の賓客」岡たかし

(152)・「華やかな連罪」志羽利也 (155)・「犬根性焼入れ」春川ナミオ

(195)・「SM教洗礼式」須坂旭 (211)

目次フォト「お気に召すまま」……………花坂道子

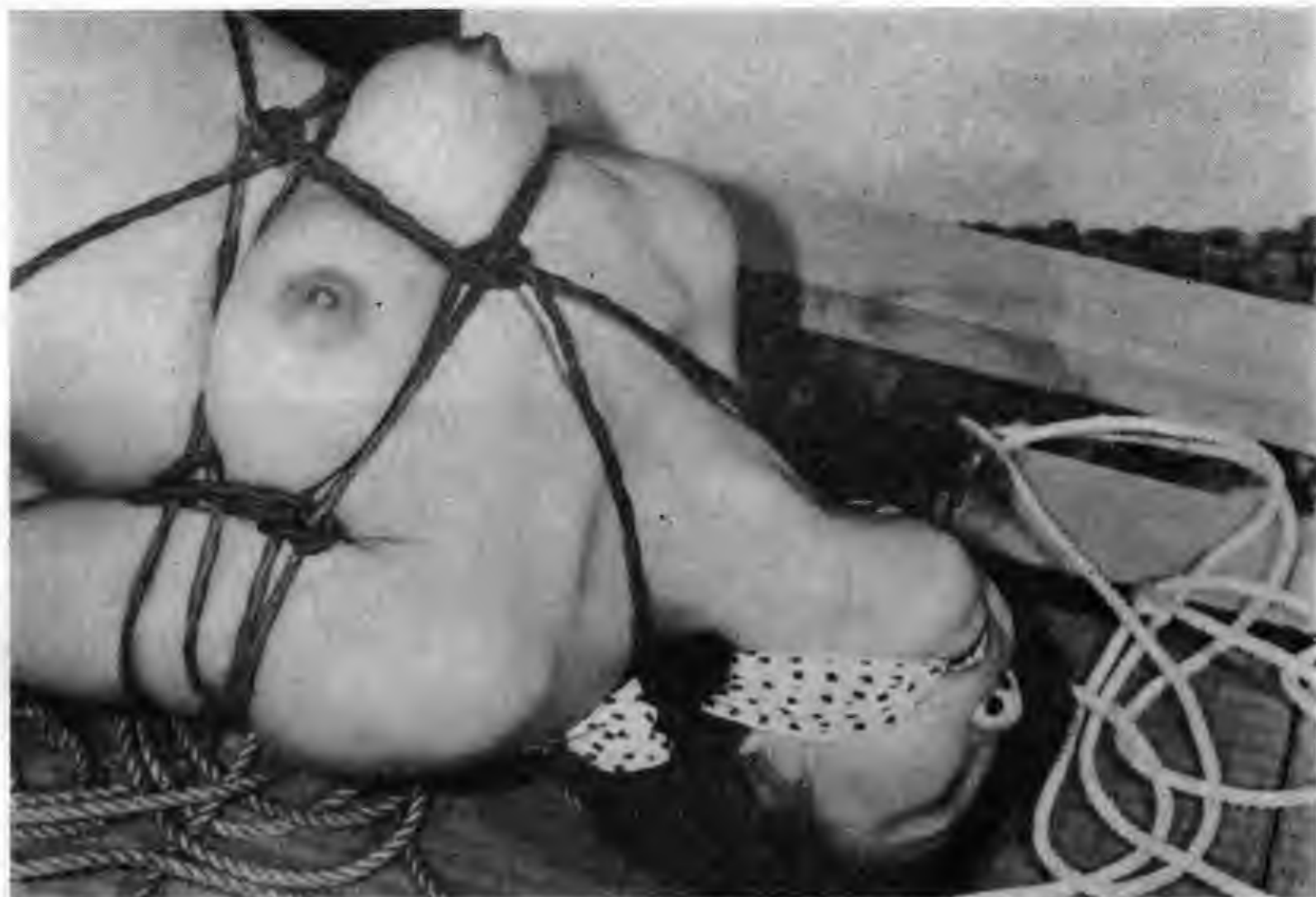


奈保子の日記帳より

笠井奈保子







「私の玉手箱」秘録



投げだされた女体

深 田 菊 子







『M女通信』に悶えるとき

高村浩子



「私を縛ってみない？」

深 田 菊 子





奇

譚

ク

ラ

ブ

1972年7月号

<第26巻第7号・通刊第293号>



……女があえぐとき……

豊かなボインの形が変わってしまうほど縄がきつく胸を締めつけられ、カールした長い黒髪を波打たせて、この若い女がアア、と軽いうめき声を洩らして、咽喉をのけぞらせ

……モデル・加茂芳子……

る。後手首はかっちり交叉させられて背後で厳しく縄掛けされているので、今のこの責めの境地から女は逃げだすことは出来ない。

(小池清一郎・記)

## 架空体験記

—— おれも責めたや高村浩子 ——

渚

責

め

の

構

想

城崎恭介



山陰の海の色は、独得の蒼さである。山側から陽光が降り注ぐ  
せいか、太平洋岸のように水面に照りがなく、あくまで澄みきっ  
ていて、抜けるような蒼さだ。

白砂が、またすばらしい。遠浅の海は一面の白砂らしく、それ  
がコバルトブルーを、ひきたてる。海底にちりばめた黒岩と海藻  
の紫が、神秘の宝石のような階調をなし、蒼海は限りなく伸びて  
天の涯に至る——。

わたしは、ボートをこぐ手を休めて、白い渚と深緑の松林の、  
みごとに調和した海岸線を眺めやった。

ぼちんと一つ、ビーチパラソルが見える。赤と緑と黄のだんだ  
ら縞のパラソルは、毒茸のように鮮かに映った。

(あの下に、浩子がいるんだ……)

とおもうと妖しく血が騒ぐ。夢にまで見た高村浩子とのSM旅  
行の実現した幸福感に、年甲斐もなく頬が紅らむ……。

(おれは、浩子の帝王。やつは奴隷だ)



六月の厚ぼったい雲の切れ目から、ひとときわ、まばゆい陽光が洩れて、海の蒼さに生氣を、もたらした。

○

もとはといえば、浩子が悪いのである。あいつが、おれの心を干々に狂わせた。あの「M女通信」のおかげで、おれは虚構の世界のSMなぞ、とんと信じられなくなってしまった。おれの小説の筆を折らせ、おれをSMプレイに走らせた高村浩子——まさに、事實は小説よりも奇なりである。

○

ビーチパラソルの下で、浩子の裸身が揺れていた。熊や小犬や象のマンガ入りのオレンジ色のゴムボートに浩子は両手を頭の下に組んで括りつけられ、ボートの縁から、にゅっと突き出た双足は、朽ちた棒杭に止められてすでに海面の下に没していた。

無人の渚にとり残された、何か、うら淋しげな二本の棒杭を発見した時、わたしは、とっさに、この責めを、おもいたった。

「手を頭の後ろに、やるんだ」

と、立ったまま浩子を縛り、多分こどもが遊ぶためのゴムボートだろう、オレンジ色のかわいいマンガ入りの小判形ボートをもち出

して、浩子の背面にあてがい、手と胸と腰をボートの縁についた把手を利用して、どうにかこうにか、括りつけた。

「歩け！ 海に入るんだ！」

わたしが命令すると、浩子は無言のまま、晩春の冷たさの残っている海へ、足を踏み入れた。ちょうど、腰のあたりまで海に浸ったのを見すまして、背後からゴムボートを強く手繰ると、激しい水音とともに仰向けざまになり、そのまま海に浮かんだ。

「どうだ。このままで、海の向こうに流してやろうか……？」

ゴムボートに身をゆだねて、怪魚マンボウのように、波のうねりに玩弄されている浩子を、のぞきこんだ。浩子は、ちらッと一瞥を投げかけたが、再び睫毛を閉じて、被虐の域に閉じこもった気配だ。

全く、浩子の無口なのは、手をやいた。

昨日、新大阪の駅で、おちあつて、友人の貸してくれた海浜の別荘まで、首尾よく彼女を「誘拐」してきたのだが、口をきくのは殆どわたしばかりで、浩子は幼い面影を頬の辺りに宿したまま、終始、伏し目がちだった。

かれこれ四十に手のとどきそうな、おじさまと、小島育ちの二十二才の浩子とでは所詮

こうなるのが、自然の成り行きだったかもしれないが、「M女通信」の大胆で流麗な筆致とは、似ても似つかぬ寡黙な小娘だった。

「あら、きれい！」

山陰の海をはじめて見た時、はじめて浩子の瞳の奥に生気がみなぎったが、それは海に向かつて抱いた親愛の情であって、わたしに對する、それではなかったようだ。

「どうだい、気に入った……？」

無人の寂漠とした浜辺を、浩子と二人きりで独占しているムードに酔って、そっと浩子の肩を抱いてやると、わたしの掌の下で、みるうちに小さな肩が、こちこちに、こわばって行くのを、わたしは知覚した。

(おれに心を、許していかないのだ……)

と、おもうと、奇妙に味気なく白けた。

「M女通信」に曰く——「私は、この方だったら、どんなに、ひどい羞恥責めを受けてもどんな責め折檻を受けても本望だ。いや、身も心も捧げて悔いがないという——理想像があります。ですから、こんなにマゾの炎に身を灼いていながらも、嫌だとなれば、途端に冷えきってしまったって、どう心の中で炎の火を燃え立たせようと思っても駄目なのです」

この可憐なM女の心を占めている理想像、

彼女の心を独占的に奪取してしまったサドの魔王は、どうやら塚本鉄三氏であるらしい。わたしの饒舌に対して、殆ど反応らしい反応も示さなかった浩子も、塚本氏のことが話題にのぼると、ぎらッと妖しく目を輝かせた。二十二の乙女心の、ありったけを曝けだした哀切きわまる艶な眼差しを、わたしは見のがさなかった。

わたしを含めて愛読者諸氏の切なる呼びかけに対して、殆ど反応せず、ひたすら「M女通信」を書き連ねて、誘拐してくれの、被虐の旅に連れて行ってくれのと、中年男たちのS心を悶えさせる、いじらしい告白をつづけたのは、ひとえに浩子のM性を開花させてくれた塚本氏への思慕の情であった。わたしは自分と浩子の間に敵として介在する、一面識もない塚本氏の存在を、これほど、うらめしくおもったことはない……。

浩子は、わたしの命ずるがままに服を脱ぎ捨て、従容として縛についた。素直ではあったが、どこか冷やかだった。ギャラを払ったヌードモデルのように事務的なのが、我慢ならなかった。「M女通信」を充たしている豊かな情感の翳もなかった。乳房や股間を締めつける縄目の快感に、きらりと恍惚の一瞥を

走らせることもあったが、かつての快樂の刻を、うっとり回想するような隔たりが、その表情にこもっていて、むしろ、わたしの心を冷え冷えとさせた。

「さあて、流し雛にしてやるか」

しかたなしに、独り言を呟くと、新しいロープを扱いて、ゴムボートの裾にまわった。平衡を保つためにボートの縁から、はみだした生白い足を蛙泳ぎのような恰好に縮め、自然に開股していた。すでに成熟しきった太腿部の豊かな肉づき——凝脂の膚に、はじかれた大粒の水滴が、奇妙に生々しく官能を刺激し、逞しい肉の狭間を覆ったピンクの水玉模様のビキニのパンティが場ちがいに映った。

浩子の魅力は、アンバランスの魅力だろうか？ まるで、十六、七の小娘のような、あどけない顔の浩子を、素裸に引き剥ぐと、量感豊かな豪快とでも形容すべきポインちゃんが無造作に溢れ出る。少女のような淡い思慕を秘めた胸に、中年女も持たないような妖しい官能の疼き、Mの狂血をたたえた浩子——このビキニの海水着も、発車時間を待つ間に、ステーションビルで慌てて買ってやったものだが、堂々たる肉の量感に圧倒されて、ピンクの水玉が、苦笑したくなるくらい可憐

で、幼稚だ。

（全く、わからない年頃だ……）

わたしは、濡れて、さばきにくいロープをわたしの掌に預けて、静閑としている浩子の足首に括りつけながら、おじさまらしい感慨をもらして、微笑した。

二本のロープで、別々に足首を縛り、波間に浮かんだ浩子を、ぐいと引っばると、水の抵抗をうけながらも、ゆるゆるとゴムボートごと、進みはじめた。

（ふっふ……囚われた人魚だな）

人影一つ見えない渚を、まばゆい六月の陽光と戯れながら、海上の引きまわしにふける気分は、何ともいえなかった。

あいかわらず長い睫毛を伏せて浩子は、かたくなに黙りこくったまま、打ちよせる波にゆらぐ黄色いゴムボートに、華麗な裸身を預けていたが、わたしは、むしろマイペースで被虐の城に閉じこもった彼女を責め苛んでやろうと、心に決めていた。どうせ、こういうプレイのチャンスには、何度めもぐまれやしない。自分の納得するまでSの血を燃えたぎらせなければ、はるばる海の涯まできた甲斐がないじゃないか——そうおもうと、急に心が軽くなって、浩子の寡黙に対する、こだわ



りも消えた。

(あいつが、どうおもったっていい。おれはおれの流儀で、たのしむまでだ!)

棒杭のところまできて、はたと困った。そこだけ砂地が黒くなっていたので、よくわからなかったのだが、浅い窪地になっていて、ゴムボートを引摺ったままでは、そばへ近づけない。

(えーい、ままよ……)

と、浩子の頭の側にまわって、さらさらと海面を掃く黒髪に、指をからませた。

「いち……ち……」

ゴムボートごと上半身が浮きあがるほどに黒髪を掴みあげると、浩子は上目づかいに目をあけて、眉間に皺を刻んだ。おもえば、はじめて浩子がみせた動きのある表情であり、わたしの行なった、はじめての残酷な仕打ちでもあった。

わたしは、浩子の苦悶を意に介さぬ冷酷さで、黒髪を引き摺って、ボートを浅い窪地のりあげさせ、そのまま渚めがけて移動させた。

二本の棒杭をつかったの開股晒し責め——それが、わたしの第一の構想だった。都合のよい事に、この窪地の水は太陽に温められて

生ぬるく、長時間、晒しておけそうだった。

わたしは、ゴムボートの半分を渚の砂にのりあげさせ、あらかじめ足首を括っておいたロープをつかんで、朽ちかけた棒杭に近づいた。フジツボのいっぱい、こびりついた杭も押してみると、かなり、しっかりしている。

わたしは、かなりの余裕をもって一方の足に連結したロープを杭にしばりつけ、そこから約十メートルほど離れた、もう一方の杭に、別のロープをからみつかせ、力まかせに引っ張った……。

生白い浩子の足が、確実に杭の方へ手繰りよせられる。はじめは渚の砂の抵抗があったが、次第にゴムボートは水面に浮きあがり、実にあっけなく、二本の杭をテコに浩子の双脚は、股裂きにされて行く。

若いだけあって、浩子の肢体は柔軟であった。見た目には、殆ど一直線に近く、股を裂かれても、わずかに苦痛の忍び声を洩らすだけで、やめてくれとは、いわなかった。

「浩子、痛いかな?……」

わたしのほうが心配になって、おもわず声をかけたが、浩子は苦痛の縦皺を深くしたただけで、ウンともスーとも、いわない。

「ゆるめてやろうか、少し……」

と、小心なわたしは、再び声をかけてしまったが、浩子はそういう心の弱さを、なじるように、固く瞑目したまま、顎を左右に、ゆすった。ノーのサインだ——さすがに、M女の真骨頂である!

(くそ、もっと苛めてやるぞ!)

わたしのSの狂血にも、どうやら火がついたらしい。浩子と出会ってから一昼夜たったずいぶん遅い火つきではあったけれど——。

○

SM道の家元とでもいうべき辻村隆氏が、「カメラ・ハント」のあくなき実践を通して開示されたSMプレイの真髄は、愛戯の極致ということであろうか。

縛り、責めにまつわる暴力、犯罪といった陰湿なイメージを払拭して、SMを、快楽の極致、愛の昇華にまで、たかめた辻村氏の功績は、風俗史上に特記すべき画期的なことだと、おもう。今日、奇ク誌上に堂々と夫婦プレイの実態が掲載され、にぎやかな話題を、ふりまいているのを見るにつけ、ひたすら隠蔽し、屈曲し、劣等感に苛まれつづけたSM人士の魂を、みごとに開放せしめた辻村氏の太陽の如き人徳をたたえずにはいられない。

わたしが、「M女通信」の高村浩子に、運

命的な愛を抱いたのは、その可憐で驕慢な浩子のM性に対してというよりも、ガラスのよう繊細で、もろく、純美で孤高な魂に、深く共鳴したからに他ならない。

本来、底抜けのフェミニストである、わたしは、俗なコトバでいえば——惚れた女にや弱いのである。いかに、狂暴な魔王として彼女の上に君臨しようと偽悪者をきめこんでも所詮、そうはいかない、もどかしさがあり、それが、彼女を寡黙に追いこんだのではあるまいか。

「M女通信」でも浩子は、いつている。「私を一旦、責めだしたら、決して遠慮や手加減は、なさらないで下さい。激しく責められれば責められるほど私は嬉しいのです。相手の方の年齢とか容貌やスタイルなんか全然問題にしません。只、男性的で攻撃的なS好みの方が好きなのです。逡巡や躊躇、ためらいなどをなさる方だったり、そういう素振りを私の繊細な神経が感づいたら、一遍に私のマゾ心理は冷却し萎縮してしまうのです」と。

愛する女を前にして、暴虐な帝王のようにふるまうのは意外に、むずかしい。Sは愛によってしか喚起されない深奥の心理であるがこのSを全うするのは、辻村氏や塚本氏ほど

の練達の名人なら、いざ知らず、凡夫のわたしには、日々修業の厳しさだ。

M女の浩子にとって責めは、そのまま愛である。多分、塚本氏や奇巧編集部練達した人々によって、存分に開花させられてしまった浩子のM性は、わたしの手に負えないほどに限りなく奥深い陰微で奔放なものになってしまっていたのだ。

M女の愛に応えるのは、責めである。この場合の責めは、より大きな愛である。責めは愛をもたらし、愛は、より苛烈な責めを求めM女とS男の、はてしない輪廻、愛のからみあい、苦痛と悦虐の中での愛の確認——これが、SMの運命的な、めぐり合いというものであろうか。

## ○

わたしは、股裂きの浩子を渚に放置したまま、小一時間も、ボートで沖を遊覧した。

ビーチパラソルを浩子の上に、さしかけておいたのは、日灼けを防ぐというよりも、だれかがパラソルに近づいたら、急いで漕ぎ帰るつもりが目印だった。

しかし、過疎にあえぐ僻村に、人影のあらわれる心配など、とんとなかった。沖からみると、パラソルのある辺りは、大きな岩に囲

まれていて、小さな湾のようになっていて陸上から見つかる心配は、まずなかった。

(存分に孤独を、たのしめ！)

渚を枕に、沖に向かって四肢を極限まで開伸した浩子の放縦な肢体を想像するだけで、わたしの嗜虐の血は、たぎった。あられもない秘奥を波の触手に晒して、彼女は今、何を、何を、何を考えているのだろうか——。

「ああ、いやあ……！」

渚に引き出して縛ってからも、ずっと脱がさずにおいたビキニのパンティに手をかけると、浩子は本能的に声をあげた。

「邪魔だよ、こんなもの」

棒杭による股裂きが完了するや、わたしは弁解がましく、浩子の腰から外さなかった、一片の薄布が、ひどく不自然にみえた。蒼海と白砂に抱かれた白い女身に、人工的な匂いのするパンティは、いかに不似合だった。

「だって、人がくるわ」

浩子は、頭をおこし加減にして、こちらをみた。はじめて見る深刻な眼差しだった。

「いいじゃないか、高村浩子のストリップをみせてやろうよ。特出し二千円！」

と、わざと卑猥な冗談をいいながら、時間をかけて、ゆっくりとパンティの腰紐を、ほ



どいた。こういうこともあるだろうと思って三角布が二つ、つながったような腰結びのパンティを選んだのである。

「そら、とれた！」

と、わざと蝶形の布片を浩子の鼻先で、ひらひらさせて、乳房の上に、ぽいと置くと、浩子は鼻孔を、ふくらませて深呼吸をし、観念したように堅く瞼を閉じた。すでに、じわじわと被虐の表情が顔一面を覆い、安堵したような安らぎが両頬に漂ってきたのには一驚した。彼女の待ち望んでいたのは、このように直截な羞恥責めだったのだ。

わたしが目をやるまでもなく、浩子の秘奥は、ワイドショットで、わたしの目を射た。

両肢は、つけ根まで二つの棒杭に割られ、ゴムボートの円い縁に尻朶がかかっていたので、ぐっと、せりあがり、これ以上は望めないくらいの開股図であった。磯波が打ちよせるたびに、こんもりとした春草が水藻のように揺れおののき、陰微な陰影をみせ、磯波の滴りを浴びて妖美に光った。胸も詰まる海辺の悦虐絵図である。

「どうだい、気分は……？」

心の昂ぶりを抑えて、わたしは訊ねた。

「……」

あいかわらず沈黙が、返ってきた。しかしそれは、甘美な陶酔のこもった沈黙だった。

「はッは、は……恥かしがって、おてんとさまの方が、雲ん中に逃げやがった……」

わたしは、コトバによる羞恥責めを開始した。浩子は、うっすらと白眼をのぞかせて天を仰いだ風だったが、再び瞑目して被虐の力に閉じこもろうとする……これでは、面白くない。

「ひとつ、ヤドカリでも遊ばせてやろうか。

もどもぞ這わせたら、気持がいいぞ」

一刷毛なぶると浩子は、たちまち、むずかるように眉根を、よせて……

「ううん……いやッ！」

と、呻いた――。

わたしは、渚にあがると、小さな松の枝を一本、折って引き返した。松葉で責めるといのが、かねてからの段取りだったのだ。

浩子は、じっと上目づかいで、ざぶざぶと水たまりを踏んでくる、わたしを、うかがった。手にしていたのが、松の小枝だとわかると、むしろ、責め手を甘受する風情をみせて淑かに目を閉じた。

「こらッ、目をあけろ！」

わたしは、遠慮なく松葉の針束で、少々、

はれぼったい、浩子の瞼を刺した。

「あッ！」

と声をあげて、浩子は瞠目した。

「自分ばかり、いい気分になるなッ！ ち

ゃんと目を、あけてるんだ！」

「ハイ」

「おれが、よしというまで、おてんとさまをみてろ！ 目をつぶったら、ヤドカリを拾ってきて……」

「わかりました！ 目をあけてます。ちゃんと、あけてますから……」

よほどヤドカリが辛かったとみえる。わたしが、みなまでいわないうちに浩子は鈴のよな目を張って、せきこんだ調子でいった。

「よしよし、いい子だ……」

わたしは、額から頬にへばりついていた黒髪を、優しく撫でつけてやった。こうして至近距離で、目と目を合わせていると、じわじわと瞼の裏に滲みわたって行く被虐の想いが読みとれて、いじらしさで胸が疼く……。

「こらッ、目をつむるなといったろ！」

うっとりとした瞼が重くなっているのを見ずまして、わたしは一束にまとめた黒髪を、ぎゅッと手繰った。

「あッ、あ、あ……ごめんなさい！」

たちまち、責めの世界、醒めた現実にはき戻されて浩子は、かッと目をあけた。

「ちょっと甘やかしてやると、すぐそれだ。その根性を、たたき直してやる！ 舌を出せ舌を……」

「え？……」

「ペロだ！ アッカンペーを、してみろ」

「ハイ」

浩子は、おそろおそろ舌尖をのぞかせた。

「もっと、ペーと、やるんだ。ペーッと！」

事の仔細もわからぬままに、花羞かしき乙女は、舌尖をべろッと出して、トンマな顔をしてみせた。

「ふっふ……親には見せられん顔だな」

と、わたしがからかうと、浩子も目尻に笑みをたたえて、悲しげに微笑した。

「いいか、おれがいいというまで、引っこめるなよ。そんまんまだぞ」

わたしは、ゴムボートの頭部の水たまりに胡坐をかいて、松葉の針束を、つくった。そして片手で、しっかりと黒髪をつかむと、ちろちろと、うごめく舌尖を、松葉で刺した。

「ええ……ううん……」

浩子は、喉で呻いた。しかし、だらりと露出した舌尖を引っこめようとはせず、むしろ

より強い加虐を望むように濃紅色の肉塊を、ひらめかせ、全身で呻いた。

潮風になぶられて、舌尖は白く乾いた。逆に口元を伝って溢れ落ちる流涎は、いよいよその量を増した。ツン、ツン……ツン、ツンと、青臭い自然の香りをのせて、松葉の尖先は可愛い肉片を、リズムカルに啄んだ。

「どうだ？ 辛いかな？」

「うう……うええ……」

「うれしいのか？」

「うう……ええん……」

いつの間にか、あれほど禁止しておいたのに、浩子は目を閉じていた。わたしは、ふと針束の跳梁を休ませると、一気に覆いかぶさって浩子の舌塊を口に含んだ……。

「うぐ……ああ！」

と、切なく鼻で息をもらして、わたしの口中の粘液を、むさぼりつくすような激しさで浩子の舌尖は蠢きつづけた。

長い長い接吻だった――。

わたしは、ゴムボートごと浩子を抱きかかえると、豊満な乳房から蕾のような乳頭にかけて、針束を突きたてる手を休めなかった。

遠く潮騒しおぞうの音がして、赤裸な浩子の腰部を洗う磯波だけが、寂とした白昼の渚で生きて

いた――。

○

「ちよっとばかり、腰がしびれてるみたい。だけど平気よ……」

杭につないでロープを切り、ようやくのことでゴムボートごと渚までおしあげ、縄目から解放してやると、浩子は案外ケロリとしていた。

ボートの散歩から帰って、うちよせる波間に、もまれる浩子のゴムボートを発見した時は、われながら度を失った。潮の干満を計算に入れておかなかったために、先刻までは、ほんの水たまりだった浩子の処刑場に、どつと波がおしよせて、腰よりも深くなっていたのだ。

ただでさえ開股しきったポーズをとらされていたところへ、水深が深くなったのでゴムボートは浮きあがり、開伸しきった両肢に繋留されて浩子の軀は垂直に近く立ちあがり波のいたずらで俯伏せにでもなろうものなら一命をおとすところだったのである。

「こわかったかい？」

タオルのビーチ・ウェアを羽織らせて、布を張った寝椅子にもたれさせ、ジャ―のコーヒ―をついでやると、浩子は、おいしそうに



飲んだ。

「うん……ちょっとね」

みるみるうちに血の色が甦ってきた浩子の頬に、純朴な微笑の小波が広がった。

「ちえッ、何だい、うれしそうな顔して。おれは泡くちまったんだぞ！」

と、てれかくしに、わざと、なじるような口調でいうと、

「あら、あたしだって、淋しかったのよ。あなたが帰ってきてくれなきゃ、どうなることかとおもって、あなたの名をよびつづけたのに……声がガラガラ！」

と、かわいいことをいう。どうやら、われらのSMカップルも、本調子がでてきたらしい。まずは、善哉、善哉！

浩子は、それきりおしだまってしまった。うっとり寝椅子の背にもたれて、はるか水平線の彼方を、呆けたように見やっていた。

「どうした？ 何を考えてるの？」

「ううん……あんまり海が、きれいなもんだから……」

「君の故郷の女木島は、どうだい？」

「うん、やっぱり、こんな色してる……」

あらためて、浩子は水の蒼さを、たしかめるように、遠くへ目をやった。梅雨の晴れ間

というのだろうか、灰色の雲がちりぢりに逃げて、蒼空が増して行くのが、手にとるようにはわかる。浩子の凝視する瞳にも、空の蒼さが滲みわたって、キラキラと黒曜石のように輝いた。

「君は、ロマンチストだね」

「あら、どうして？」

「今だって空想してるんだろ。山の彼方……じゃなかった。海の彼方の空遠くって……」

「おあいにくさま！ 今は、とってもエッチなこと、考えてたの……」

「エッチ？」

「ふ、ふ……浩子のことをロマンチストだなんて、おもってる城崎さんこそ、とんだロマンチストだわ」

「おい、エッチなことって何だよ。いってごらんよ」

「うふん、どうせ、いわされちゃうんだから正直に白状しようか。あの海の水を全部浣腸したら、あたしの軀も、あんなに蒼くなるかしら……って。ばかなことね！」

わたしは、「うーむ」と唸って、まじまじと浩子を見直した。恐るべき空想力、たぐいまれなるM性が、この愛くるしい稚女のどこに潜んでいるのだろうか……？

「縛ってあげるから、お立ち！」

わたしは、濡れていない新しいロープを、バッグの中から、とり出した。バッグの底には、五〇〇CCの大型シリンドー浣腸器も、エネマシリンジも、ちゃんと収めてある。

「浣腸……するの？」

浩子は、おとなしくビーチウェアを脱いで両腕を背中に回しながら、首を捻じって、わたしを、うかがった。

「奴隷は、王さまのすることを、いちいち、きくもんじゃない！」

と砂粒が、まだらについた尻朶に、ぱしッと平手うちをくらわせると、「あっ！」と声をあげて、黙ってしまった。

簡単な後手縛りにして、乳房の上下に二筋の縄をかけると、浩子をせきたてて、波打際に降りて行った。わたしの次なる構想は、塩水を、じかに浩子の体内に注入して、聖なる海へ還元する予定だった。

しかし、あいにく海は荒れだしていて、飛沫をあげて打ちよせる波のために、浩子を立たせておくことも、海水を直接、吸いあげることも困難だった。平たい岩場はないかと探してみたが、波のしぶきがはねあがって、のんびり浣腸もしていられない。

そのあたりを、ぐるりと引きまわしたあげく、もとの寝椅子のところへ戻ってきてしまった。

「そこへ、仰向けになるんだ」

わたしも介助して、椅子の背に足をかけ、通常、坐る部分に、浩子の上半身を仰向けにした。布張りの椅子だから、後手に縛っておいても、痛くないはずだ。

「こんなところで、浣腸するの？」

わたしが、椅子の背にかかった足を折り曲げて、椅子の手摺りに括りだすと、少々狼狽した面持で、浩子は訊ねた。

「つべこべ、いうんじゃない！」

わたしは、足を折り曲げられて、宙空に浮いた尻を、また、ぴしゃりと、やった。

「だって、汚れます、この椅子……」

「洗っとけばいい。あとで、きれいにするのは、お前の役目だ！」

精一杯、開股させて、両の手摺りに膝頭をとめると、魅惑的な顔を華やかに開花させて浩子の軀は海老に曲がった。

「さあ。たっぷり、海の水を注射してやるぞ。お前の軀が真青になるまでな……」

と引導を渡すと、股間から、のぞいた浩子の上気した顔に、ちらッと被虐の恍惚が走り

わずかに目を瞬かせただけで、昆虫のように蟠居した。

わたしは、ポリバケツで海水を汲みあげ、えっちらおっちら、運んできた。本当はエネマシリンジを使いたかったが、双臀が宙に浮いているので、五〇〇CCのガラス浣腸器を使うことにした。

わたしの狙う目標は、いかにも乙女らしい色香をただよわせて、白い稜線の一線となる辺りに、ひっそりと息づいていた。

コールドクリームを、たっぷり受けて、さすがの浩子も「はッ、はッ……」と息をはずませ、微妙に腰を、くねらせた。

しかし、冷たく光るガラスの尖先を、見せつけるように向けてやると、むしろ渴仰するが如き表情にかわった。

白昼の陽光を、ともに浴びて、巨鯨が潮を呑みこむような大量の注入にもめげず、浩子は寂として耐えた。バケツ一杯の海水を、ガラス浣腸器で注腸してしまうのは、かなりの重労働であったが、ようやく大部分の海水を送りこみ、プラスチック製のキャップで蓋をし、荷造用のガムテープで上から押えてしまふと、わたしの労働は終了した。

「どうだい、少しは効いたかね？」

わたしは、浩子の顔の側に回って、しゃがみこんだ。

「く、くるしいから……足の紐、ほどいて」  
浩子は、いやいやをするように、強く頭を振って、泪声を出した。なるほど、妊婦のように膨れあがった蛙腹が、ぼつてりと豊乳を圧迫して垂れ下がり、鼠蹊部から脾腹へかけて無数の括れが深い皺を、つくった。

「もうじき、ラクにしてやる。辛抱しろ！」  
「我慢しますから……おねがい！ 足だけはほどいてよう！」

浩子は血走った目をかッとひらき、目尻に涙滴を、ためて泣訴した。

わたしは、それに答える代りに、バッグからクリップや洗濯挟みを取り出した。そしてまず乳頭に洗濯挟みを、ぐっと、はさんだ。

「ぐう！ ひい！」

浩子は、喉を鳴らして吠えた。

「ほーら、ラクになっただろ」

わたしが、浩子の顔をのぞきこむと、うっすらと朧ろな目をあけて、苦痛と快楽の入り交じった被虐の極致の表情をみせた。

「い、痛い……あなた」

「もうじき、ラクにしてやるからな」

わたしは、もう一つの乳頭にも、洗濯挟み



を伸ばした。そして、突きあげる便意に、のけぞろうとしたはずみに、ぎゅっと、はさみつけた……。

「ううッ、い、痛ア……！」

浩子は、頬に悦楽の笑みを浮かべながら、どっと痛苦の涙を、したたらせた。唇を嗚咽に、わななかせながら、涙滴のたまった目尻で笑いかけた——倒錯した快楽、地獄の愉悦絵図である。

脾腹から鼠蹊部にかけて、点々とクリップの数は増えて行った。膨満した蛙腹に、小波のような痙攣が走り、噴出口を求めて狂奔する汚汁は、ガムテープのすき間を縫って、したたり落ちたが、わたしは、浩子の全身を針鼠にするまでは止めぬ覚悟で、機械的に新しいクリップを、つまみあげた。

どうっと波の音が高まって、しめっぽい六月の風が強くなった——。

○

……と、ここまでは、クソ真面目に書いてきたが、ほんとうは嘘八百の絵空ごと。高村浩子という実名のモデルをつかった戯作にすぎない。

SMプレイなどという優雅な快楽には、およそ、ほど遠いわたしである。日がな一日、

あくせくと働きづめでなければ、生きて行けない、わたしにとって、山陰の海も被虐の妖精高村浩子も所詮、高嶺の花……どうあがいたところで、美女とモーターに、しけこむホテル代も、遠路はるばる訪ねて行く汽車賃もプレイの悦楽に浸る時間的余裕も、とんと、恵まれておらぬのである。

しかし、「M女通信」の高村浩子に、ぞっこん参ってしまった、わたしの心情だけは、ほんものである。

私事にわたって恐縮ではあるが、昨年末より、「フラスト族の叛乱」「愛しの薔薇奴」「性奴記」等の創作を奇ク誌上に発表させていただき、わたしなりのSM世界を構築しよう、と、非力ながら、うんうんがんばってきたわたしであるが、今年の一月号以来、どっと溢れ出た告白、体験記の洪水に足もとをすくわれて、どうにも文筆のみのSM世界に自信喪失の態なのである。

ことに、高村浩子の「M女通信」には参った！ わたしが理想としてきたマゾの女性の完璧な表現を「M女通信」の中にみて、わたしは、ぶちのめされた様なショックを得た。これがある限り、わたしのSM小説など、なきに等しいではないか！ まさに事実小説

よりも奇なりの実感である。

つまり、綿々と書き連ねた「架空体験記」は、SM小説の執筆に別れを告げる、わたしの遺書である。高村浩子に恋いがれ、いそのあわびの片想いに殉じて、山陰の蒼海の涯に文筆上の死を遂げた、わたし自身の記録なのである。何だか無理心中を強要するみたいで、現実の高村浩子さんには、まことに申し訳けない気がするが、一介のSM狂の至情として、おゆるしねがいたい。

ともあれ、わたしのにらんだところでは、愛読者諸氏の切なる呼びかけに応えず、高村浩子は、多分、M性開花の恩人、塚本氏への思慕へ身を灼いて、孤独の城に閉じこもるだろうと推測する。

ならば、奇ク誌上を借りて、可憐で驕慢な被虐の魔女を、さんざんに、ぶちのめしてみても痛快なことではないか——と、たいへん無責任な煽動をする次第。妄言多謝。

終わりに本音を一言。ずばり申しあげると——やっぱり責めてみてえなあ、高村浩子を被虐の妖精を、天成のマゾの化神を……と、はなはだ締まりのない結語になるのである。

## 〔告白〕

## 猿轡とゴム汚臭責めについて

—＜殊に森中雨奇男様へ＞—

青 木 順

小生は奇く創刊時頃よりのオールドファンにて根っからのS性です。唯そのSなるものが、猿ぐつわを主眼とする責めで、強烈な猿ぐつわのもと、声ならぬ悲鳴をあげさせ、声になる言葉を強要しながら、種々の縛りで羞恥責めすることに生甲斐を感じているものです。古くは、古川裕子さんの大のファンでした。その猿ぐつわをみれば、その人のSの程度が分かるという言葉が、奇くにも書いてありました。小生こそ、全くの幼少の頃からの汚穢責め、羞恥責めの大好きなサルグツワ・マニアです。

小生はゴム責め（殊にゴムによる猿ぐつわ責め）の愛好者として、森中雨奇男氏の貴重な体験記を従来より一編も余さず、最大の興味を以て拝読していました。かねてより一度お呼びかけをしたいと存じていましたが、職業上、及び、その割に悪筆乱文をおそれて、つい控え控えになっておりました。

小生も貴方同様、ゴム引きレインコート、ゴムおむつカバー、黒ゴム長、婦人ゴム・レインシューズ、水泳用ゴム帽子、自家製ゴム全頭マスク、潜水用ゴム頭きん、漁師用の胴から胸まであるゴム長靴、それに本月マルゴより新発売されたゴム全頭マスク等々、洋服ダンス一杯に所持しております。

それに根っからの猿ぐつわマニアなので、上記のゴム製品による責めも猿ぐつわが主体

で、それも本格的の口中一杯にゴム手袋や、その他、臭気の強いゴム製品、又は臭気の強い皮革製品をつめ込み、その上から自転車のチューブ、又はゴム長、ゴムレインシューズで鼻孔を、きっちり被い、その上で縛り上げSEX責めをします。時には、お手伝さんが洗濯のとき使う、古びたレインシューズをかませて、汚臭、羞恥感にもだえさせ、声にならぬ声、うめき声を強要します。

こうした単なるゴム責めだけでは妻も刺戟が少なからうと考え、種々な縛りを施した上で、色々とSEX責めの刺戟を与えます。そんな羞かしい姿で本能のもだえに狂いまわる妻の声をテープに姿をカメラに納めたりします。こうしたフォトリックとテープは相当量に達しておりますが、なにしろ猿ぐつわを主体とした表情に重きをおいていますため、プライバシーの点で発表に、よう踏み切ることが出来ないでおります。

森中雨奇男様の試みられた街頭行進や小屋の中でのつるし責め、或は田圃の中での十円貨探しなどは、妻の体力を考えて、よう実行しないでおります。

この点、小生の如きはゴムスタイルによる緊縛（縛りはエビ縛り、アグラ縛りなど色々します）を伴った一般的な（ローソク責め、軽いムチ打ち、引き回し）責めとSEX責めを伴った汚臭、羞恥責め程度のものです。

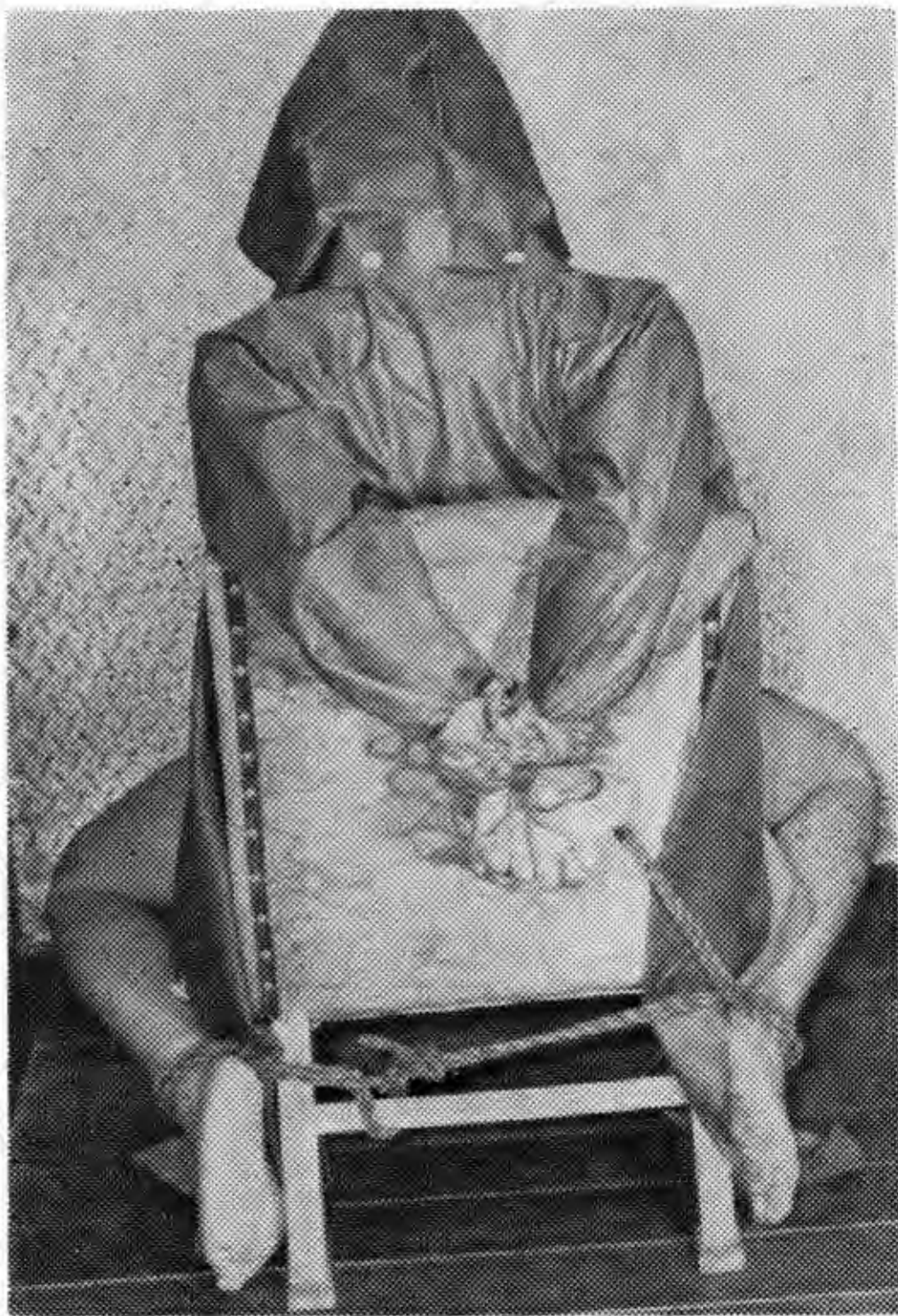


或は貴方にとりましては物足りなく感ずる程の未熟なものかも知れません。然し、こと猿ぐつわに関しては全くのマニアで、猿ぐつわなしの責めは考えられません。それも口中一杯に嫌がる汚臭に満ちたものを、つめ込んで、息苦しさを覚えるくらい発声をおさえた猿ぐつわでなければ満足できません。

申しおくれましたが、

小生は四十代後半の所謂知識人と言われる職業に従事している者で、妻は三十代の女子大出身の、小柄な容姿普通の女性です。妻は結婚以来、猿ぐつわなしの夫婦生活は殆ど経験なく、自分のSEX時の声が大きいかから、かくの如くされるものとばかり、始めは思い込んでいたようです。

途中で猿ぐつわが布からゴムになった時、はじめて異常を感じたそうで、今では自転車のゴムチューブで鼻口を、ぴっしりと被われると、もうそれだけで被虐感にうたれる程によく飼育されております。



さりとて平素、自ら求める程のMではなくその点、却って強く汚穢感を感じずらく羞恥責めにする値打ちを感じております。平素は奥様然としておりながら一旦、夜になると縛られた上で臭気に満ちた猿ぐつわをされ、奇妙な恰好でうめきもだえるのですから、本人にとっては羞かしき限りのようです。

最近はこの羞恥責めも次第にマンネリ化してきましたので、心の許せる親友を誘い

右の様な姿に縛り上げた妻にSEX責めにしてもらっています。妻は小生とは、また違った責めを受けて歓喜の悲鳴を挙げております。

その際、声にならぬ声を挙げて、みだらな事を言えと強制し、言わない時はムチで打たれております。その点、親友は巧みに手を変え品を変えて妻を責めている様です。

森中様。長々と下手な雑言を書いてしまいましたが、貴方様の御傾向との違いを知って頂いて、もしおよろしければ一度意見の交換、資料の見せ合い等、お互いにプライバシーを尊重の上、おつき合い願えたらと、厚顔にも思いついた次第です。

その上で気心も知れたならば、貴方さえよろしければ、貴方のゴム責めの祭壇に妻を捧げられたらと、そんな空想もしております。お気が向きましたら、その節は誌上でお呼びかけ頂けませんでしょうか。

青木順一  
森中雨奇男様

<M 女 通 信>

お便りに

お答えして

高 村 浩 子



五月号の「短信往来」で私にお呼びかけ下さいました奈良秀夫様。私のような者に対して、このようにご親切におっしゃって下さって、ほんとうにありがとうございます。

私と一緒に旅行に連れて行って下さるというお心づかいは涙の出るほどうれしいです。

貴方は私のことばかり思い続けておられるということですが、私は初対面の方には人見知りのする内気で無口な娘です。それでいて我ままで強情な性質もあります。決して、貴方の考えておられるような立派な女ではありません。もし会われたら失望され、そしてきっと私を取り扱うのに、お困りになると思います。ですから、「責めの旅行」で二日も三日も私と一緒にいられたとしたら、どうしてよいか必ず、お迷いになると思います。

塚本鉄三さまが私と一緒に旅をするのを、お断わりになるのも、また電話でのお誘いに対して色よいお返事をなさらないのも、お忙しいばかりでなく、私の我ままで無口な性質をお嫌いになっているのだと思います。写真をうつしても、すぐお帰りになり、少しも私のお相手をして下さいません。せめてドライヴでもと思って、「今日はゆっくりしてもいいんですけど」と控え目に言っても、「今日



は忙しいから」と、も寄りの駅で降ろされてしまいます。

こんな私でもよかったら、どこへでも連れて行ってほしいんですけど、私にてこずってお困りになる貴方が目に見えるようです。

私って、やはり空想したことをお手紙や文章に書いているのが性にあっているのでしょうネ。とても楽しいデート

をしたりするような柄ではないと思っています。

と、申しますのは、私は、一つの悪い癖があります。私はまだ奈良秀夫様に一度もお逢いしておりませんので、存じあげておりませんが、人見知りをし、無口で内気なせいか、好き嫌いが大変、激しいのです。一たん嫌だと思ったら、理くつではなしに、もう気持ちの方がついてゆけないのです。

M女のくせにとお叱りを受けるのは当然ですが、これはもう気持の上のことで



ですので、自分でもどうすることも出来ないのです。そのかわり、浩子の気持が一たん好きだと傾いたなら、身も心もすべてその方に捧げてMの奴隷として、奉仕させていただきます。いや、その方の手で凌辱されて、泥にまみれて呻吟するのが私にとって無上の喜びなのです。

どうか、こんな私を貴方の足下に泣き伏して、鞭や浣腸、或は海老責め、羞恥責めにししてほしいと願う女にして下さいませ。そうならしました以上は、私はどんな恥さらしな責めに対しても喜んでお受けいたします。それどころか、そんな境地になりたいと日夜、願っておるのでございます。

奈良秀夫様、私をこんな風に責めて下さいますでしょうか。ようかしら。お逢いしました途端、プレイをする気持ちもすっかり失せてしまった冷たく淋しいお別れをするのではないかと、あらぬ心配をしております。

私は女木島という人口数百の小さな島で生まれ育ち今から思いますと、貧乏な生活をしてきました。でもその頃から読書だけは大好きで、いつも大空を翼をひろげて飛んでいるような空想に夢をはせていました。白い馬にまたがった騎士にさらわれて御殿のようなお





城へ連れてゆかれることを夢みていました。自分は、ありとあらゆる羞恥責めに合わされながら、その場所は豪華なお城の中のお部屋だったのです。これはまた、なんと奇妙な、とりあわせだったことでしょう。

奈良秀夫様。もし私をお責め下さるのでしたら、どうかお願い致します。豪華な調度の

素晴らしいお部屋を選んで下さいませ。モデルになりました今までの経験では、お部屋が立派であればあるほど、私の被虐心は火のように燃え上がったのでございます。もし、この浩子を可愛いと思召すならば、たとえ、どのように高価であっても私の空想の夢を消さないように豪華なお部屋をお選び下さるよう

お願い申し上げます。

M女のくせに、大変不遜なお願いごとを申し上げて申し訳ございませんが、そのかわり私のマゾの心が、ひとたび燃え上がってしまいましたら、それこそ、火に油をそそいだよう、貴方さまの思いのままに、この浩子はどうのような汚辱にまみれたことでもしてみせますし、私の仕草をごらんになれば必ず貴方さまもハッスルなさることと思います。

平常は無口だった私も、そうした神がかりのような境地に立ち至りました以上は、自分でも考え及ばないような羞かしい言葉を、次から次へと口に出し、それこそ狂ったようにマゾの行為に走ってしまうのです。

普通の日常生活では至っておとなしいだけに、自分の口から、今ここへ書くのも恥かしいような言葉を呻きながら喋り、全身をエビの様に曲げのばしした、あの発作状態になつてみたくて仕方がないのです。今まで二度ばかり、そういうことがありました。塚本鉄三さまに連れられて、新築中の七階のホテルの特別室へ参ったときのことです。まだ一度もお客の入っていないという、その豪華な特別室へ一歩、足を踏み入れたときから、私は夢幻の境に、さそい込まれてしまいました。



浴槽が三つもあって、お湯が滝のように流れていました。二つは三人か四人ぐらい入れるほどの大きさでしたが、一つは泳げるほどの広さで、洗場は三段になっていて、隅の方には湯気で見通せぬくらいでした。大理石の等身大の裸女像が湯しぶきを浴びて浴室の中央に立っていました。「湯気がきつくて写真はうつせないな」と、塚本さまは不機嫌でしたが、私はご機嫌で人魚のように、はねまわって浴室で遊びました。

カギの手になった広い廊下を挟んで木戸のついた門があり、控えの間、洋室、和室の三つの部屋がありますが、そのいずれもが素晴らしい造りで、私の見た夢の中の御殿そっくりでした。その日、私は塚本さまも驚かれるくらい燃え上がり、そして自分自身もマゾ女として最高の悦びに、むせび泣いたのです。

女はムードに弱いと申します。といって、浩子はダンスも出来ませんし、ボーリングもしたことはありません。流行歌を唄うことも上手ではありませんし、社交は、まるっきり下手です。でも、こんな私でも、もしデートをしてやろうとおっしゃられるのでしたら、どうか私がマゾに燃えられるような下地をつくって下さるようお願い申し上げます。

奈良秀夫様、貴方さまのことが、もっと詳しくわかりますように、どうかお便りお寄せ下さいますよう、心からお待ちしています。浩子は、いつでも、どこへでも、羞恥責めにしていたいたために喜んで参ります。

数多く頂戴しましたお便りの中で、私の心を憎らしいばかりに掴んでしまった、お手紙

がありました。これは誌上にのったものではなく、私の手元へ転送されてきたものの中の一通でした。へお返事を出す出さないは貴女の御自由ですが御参考までにお届けしますという但し書きと共に編集部から送って下さったものです。カラーと白黒の二枚の写真が同封されていました。中々、立派な方です。





しっかりした男らしい文字が原稿用紙の上で躍っています。がちりと組まれたプロック塀のような、一分のすきもない文章です。第一、一字だって誤字のないのが、ステキ。浩子の内臓を、ぎゅっと握んでかきまわされているような生理的な衝動を受けました。

そのお手紙というのは次の通りです。

○

高村浩子様

奇譚クラブ五月号をよんで、あなたの写真と文章にひかれました。四月号は読んでないので、四月号に何をお書きになったのかわかりませんが、あなたの引っ越しの話は、ちょっとユーモラスで、へんな男につけまわされている若い女の困惑ぶりが、ちょっとおかしかったです。生活の実感が溢れている仲々いい文章でした。それより僕の気に入ったのは「プレイ以上に手出しをしない」と恰好いいことをいうエセ紳士たちをやっつけている言葉が痛快で吾が意を得たという感じでした。

あなたは、きつとかなり頭のいい女性なのだと思います。切れ味のいい文章をよんで、そう思います。僕は利口ぶっている女もいやですが、バカもきらいです。だから、あなたの文章をよんで、ちょっとお便りをしてみた

くなったのです。

奇譚クラブは前から読んでいましたが、こんな風に手紙を書いたりするのは始めてです。何しろ、もう初老といっいい年令の男ですから、若い男のようにマメではありません。でも、その僕が、こうして手紙を書きたくなったのだから、あなたは自分の魅力を誇るべきです。あなたの文章もよかったが、体つきも僕の目をひきました。顔は猿ぐつわをしているので分らないけど、たっぷりとした男心を、そその乳房がステキだ。乳ウンが色濃くて光っているのも、すごい。全体に、むだな肉がなく、それでいてやせてもない感じが何ともいえない美しさを湛えています。そんな若い魅力的なあなたが、汚辱にまみれたいといっている大胆さに、僕は興味を持ちました。







さア今度は僕が自分を紹介する番ですね。あなたは、おそらく僕のような男性に会ったことも交際したこともないと思う。僕は五十才の男性で東京の××で×××××を経営しています。頭はロマンスグレーといえれば体裁は

いいけど、ほとんど白髪。女房とは事情があって別れ、今は……（中略）……一緒に住んでいます。（そう、辻村隆先生ぐらいの年令です。彼は太男らしいが僕は小男）とにかく写真を一枚入れておきましょう。氣にいら

らないか分からないが

僕はS Mには興味をもっています、あまり実際にはプレイしたことはありません。あなたみたいなMタイプの恋人がいれば、その道に深入りしたかも知れませんが、不幸にして女の子とは随分遊んだけど、Mの子は、いなかったのです。でも今になって、とても興味をもちます。

あなたみたいな可愛い子を「汚辱にまみれさせ、暴風の様に通りすぎて」いったら面白いと思う。ただ、僕の友達には縛りの大家でS マニヤの

男がいるから、あなたがのぞむのだったら、その男も呼び三人でプレイしてみたい。僕はあまり残酷なプレイは好まないのです。むしろ心理的にいじめたり恥かしめたりした方がずっと感じるのだ。そのためにも相手の子があなたみたいな初々しい繊細な神経のもち主であって欲しいのです。（ぶってもたたいても平気な女では、つまらない）

血を流させたり、カンチョウしたりするのは嫌いです。あくまでセックスプレイの一つのバリエーションとしてのS Mでありたいというのが僕の願いです。

さて、——あなたは僕の手紙をよんで何を感ぜましたか。「こんなおじさまイヤだわ」と思いませんか。それとも少しは興味をもちましたか。もし後者だったら返事を下さい。

今は新幹線があるから名古屋あたりまでだったら大歓迎ですか……といっても僕は、あなたが、どこに住んでいるのかさえ知らないのです。この手紙が無事に手もとに、とどくことを、いのります。

もし、あなたとプレイできたら、手記を書いて奇クに、投稿しようネ。——文章はあまり上手ではないけど、生々しいルポルタージュができるでしょう。

封筒の差出人の名前は、男名前にして下さい。返事を待っています。

東京都×区×町一の二三

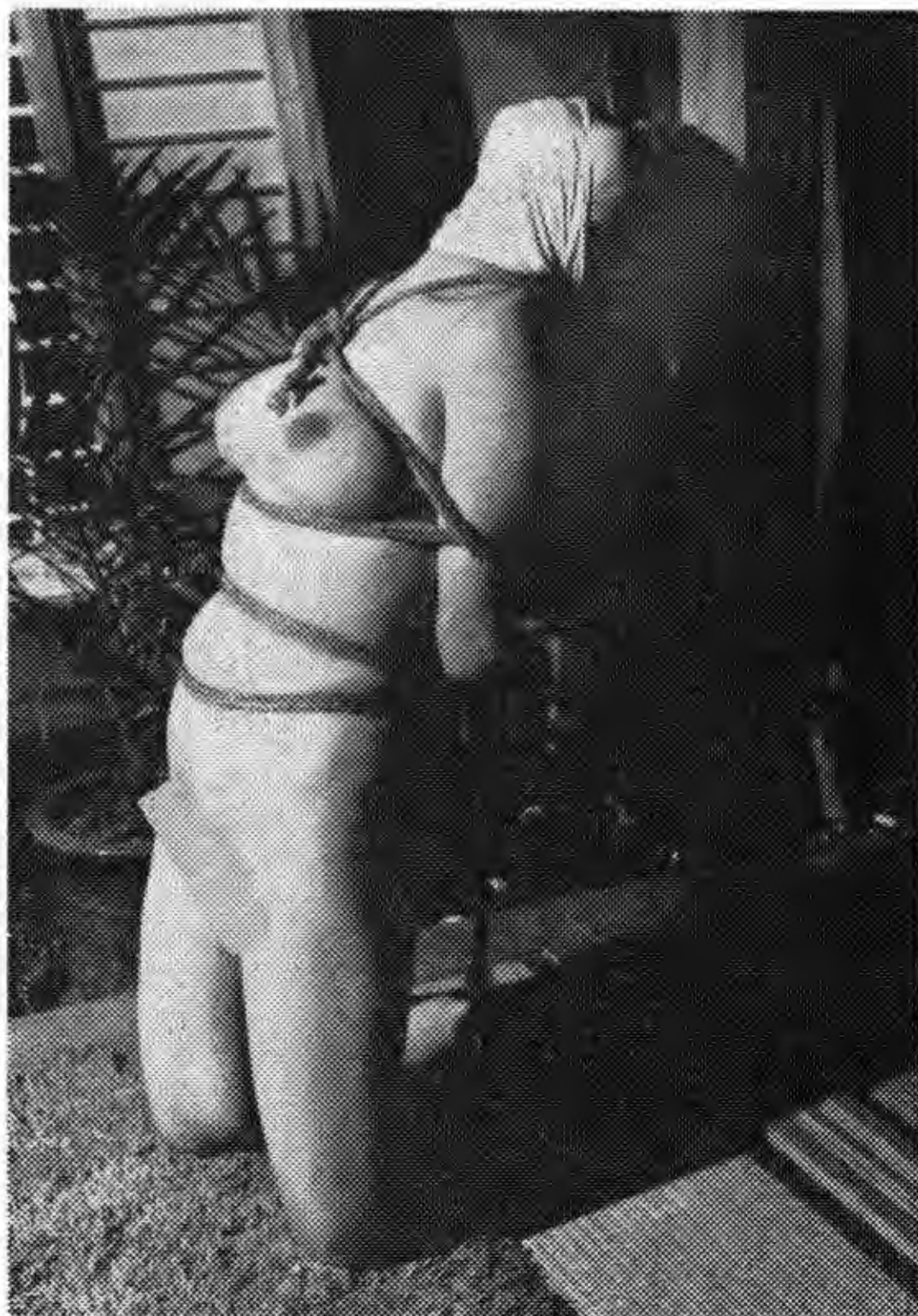
○田○夫○

浩子が今まで沢山いただいたお手紙のなかで、このお手紙が一番に心をゆさぶりましたので、失礼ですが、ここに書きうつさせていだきしました。封筒から用紙をとりだして、肉の太い書きなれた文字を見ただけで、はっとムチ打たれたような衝動を思わず受けてしまいました、ミゾオチのあたりが、きゅっと引きしまってゆくような気持でした。

文章を読んでゆくにつれて、浩子の心が益々この方のほうへひきつけられてゆくのを、どうすることも出来ませんでした。

こんな素晴らしい方がおられるのだと思うと私はこのお手紙を手にしただけで、目の前が急に明るくなったような気がしました。こんな方にだったら、思いっきり、いたぶられてみたい——という気持が強くなりました。

浩子は素裸にされて、そうです。必ず浩子を糸まとわぬ素裸にして下さいませね。まといっているのは縄だけ。その縄で、きつくきつく縛りあげて、あお向けにして下さい。ゆるい縛り方は、いやです。あお向けに寝かし



ておいてからは、もう貴方のお好きなようになさって下さいませ。浩子は、どのようなことをなさっても甘受いたします。

いや甘受するどころか、貴方の目で全身をじろじろと眺められたり、てのひらで撫でさすられたりするだけでも、浩子は最高のマゾのよろこびに身体をふるえさせます。

浩子の身体が、どのようによろこんでいるかは、貴方さまの目で、じかにおたしかめになられたらよいのです。浩子は、もう貴方さまの思いのままに操られるMの人形ですからどんなことをなっても、それがすべて悦びにつながるだろうと思っています。

ただ、お願いしたいことは、遠慮をなさ



たり、手加減をされたり、しゅんじゅんなさったりは決してしないで下さい。もし一瞬でも、そういうお気持ちを示されたりなされたら浩子の昂揚したマゾの気持が急に冷えきってしまうのです。どうか、思いのままに、浩子を凌辱してほしいのです。嵐のような暴力の前にうちふるえている浩子を、可愛いと思召すならば、最後の最後まで、手抜きをしないで責めぬいて下さいませ。

二葉のお写真を拝見していろいろと、みだらな空想をはせて、思わずひとりで頬を赤らめております。アパートの一室、ここには浩子以外、誰もおりません。夜もふけてきましたので至って静かです。今、ピーポーピーポーという音を立てて救急車が表の通りを走ってゆきました。そのあとはまた再び静寂がおそってきました。アパート全体に住む人たちの寝息が私の耳に聞こえてくるような静けさ

です。暖房がなくても、もう指の先が冷たくなる様な事はありません。チビタ短いエンピツで原稿用紙のマス目に一字一字を埋めていきます。私の空想がよそへ飛んでいってしまったといううちに書いておかねばなりません。正直いって、お写真は大変、親しみがもてました。浩子はお手紙の文字と文章に、すっ

かり惚れこんでしまつて、M女として、すべてを捧げつくしたいと思つて居るのですから年令とか容姿なんかは、どうでも、いいのです。でも、このお写真を手にしたとき、やはり、浩子が空想していたとおりの素晴らしい方だと直感してしまったのです。



浩子の魂が抜けだせるものだったら、今すぐにも、貴方さまのお手もとへ飛んでいって、責めていただきたい——と、そう思わずにはおれません。でもこれは私ひとりの身勝手というものでしょうね。それはよくわかつております。それはよくわかつておりますが

くわかつておりますが空想の中の浩子は、とてもつもないことを夢みております。それはとても、かなえられそうにありません。でも、空想であるだけに、すごく楽しいのです。貴方さまと、たった





二人きりで、三日も十日も遠くへ旅行をします。スゴク景色のよいところで昼は方々を見物してまわりますが、夜は激しくSMプレイにのたうちまわるといった生活を空想しました。浩子は昼は淑女でも、夜になるとマゾの妖女になります。貴方さまは、昼は紳士で夜はSの暴君です。

こんなことを考えている浩子って、変ですね。夜ひとりになると、どうして、こんなことばかりを考えてしまうのでしょうか。夜が明けて太陽が、さし込んできますと、空想の世界が淡雪のようにとけてしまっ、淋しい現実があるのです。

お恥かしい話ですが、浩子はまだ新幹線に

乗ったことはありません。いや、新幹線どころか、生まれてこの方、遠いところへは一度だって行ったことはありません。お手伝いをしていた数年間は、家と駅前のスーパーマーケットの間を往復するくらいで大阪市内の盛り場へさえ行ったことはありませんでした。

神戸へは、二度ばかり一人で行きましたが東の方は京都へも行ったことはありません。ですから、まったくの方向オンチで、人さまに連れて行っていただかないことには、恐ろしくて、とても遠くへは行けないのです。

貴方さまは五月号にのった「私はモデルになりたい」をお読みになっただけのようですね。私が昨年の五月号から、数回にわたってのせていただいた浩子の手記をお読み下さったら、私の生まれ故郷の女木島のことや、生年月日までも知っていただけましたのに。

今、浩子の手もとにあります奇クをひもといてみますと、次のようになります。

昭和四十六年五月号

「被虐こそ私の夢」

昭和四十六年六月号

告白「妄想の自画像」

昭和四十七年二月号

M女通信「プレイに徹したい」



昭和四十七年三月号

M女通信「私は誘拐されたい」

昭和四十七年四月号

M女通信「被虐の初夢」

昭和四十七年五月号

M女通信「私は縛りのモデルになりたい」

この外に昭和四十六年十二月号の『奇クサロン』に「M女通信」を写真入りで載せてもらっています。もしおよろしければ、ごらんになって、浩子が、いつ、どこで生まれ、どのような暮らしをしてきたか、生長の過程を見ていただければ、うれしいです。

貴方さまはお手紙のなかで、ご自分のことを自己紹介されておられますが、浩子のごことは過去六回にわたって書きました告白の文章をお読み下さったら、よくわかっていただけたらと思います。私が何一つ、かくすことなく気の向くままに書きつづけたものでございますから、つたない文章ですけれど、浩子のすべてを、わかっていただけたらと思います。

浩子は貴方さまのお手紙を拝見して、お逢いできたら、一体どのようなように責められるのかと思わず胸をこがしてしまいました。Sマニヤのお友達と三人で責めても、とおっしゃっていますが、私は是非二人きりで責めて



いただきたいのです。そして、浩子が貴方さまに十分に飼育されてから、貴方さまに羞恥責めにあっているところを、そのお友達に見てもらおうというのは、どうでしょうか。浩子はマゾの境地にひたって燃えあがっているときましたら、どんなに沢山の人々からプレイの場を眺められてもかまいません。それどこ

ろか、その方がうれしいのです。

でも、人見知りする性質ですから、初めのうちは貴方さまと二人きりでプレイしていただきたいと思います。こう書いておりますだけで、浩子の胸はあやしくときめいて、エンピツの運びも、どこおり勝ちです。

と申しまして、現実には、一体どうしたら





よいのでしょうか。大阪の街と  
いっても、新大阪駅は勿論、  
キタやミナミの盛り場へも行  
ったことのない私です。モデ  
ルになってからは方々へ連れ  
ていってもらいましたが、い  
つも車でしたから、私にとっ  
ては、どの方向へ行っている  
のか、さっぱり、わかりませ  
んでした。田舎出の東も西も  
わからない娘ですから、一人  
では、とても東京までは、お  
伺いできそうにありません。  
もし、貴方さまが浩子をさら  
って下さるのでしたら、どこ  
へでもついてゆくのですけれ  
ど、これは虫のよい話ですわ  
ね。

貴方さまは手紙の封筒の裏  
には男名前を書けとおっしゃ  
いましたね。今までも、そ  
ういう方は、よくございまし  
た。でも、浩子は女性ですも  
の、やはり女名前で出しとう  
ございます。いや、男前で

は、よう出さないのございます。どうか、  
こんなかたくなな女心を、さげすんで下さい  
ませ。

やはり貴方さまには、貴方さまとしてのご  
都合や世間体というものがございますことは  
じゅうじゅう存じあげております。でも、な  
んとなく淋しい気がしないわけでもありませ  
ん。あくまでもSMプレイというものは日か  
げに咲く八ひとりしずかVの花のようなもの  
ですわね。日なたへ出せばまぶしくて、すぐ  
にしぼんでしまいます。そのことは私もよく  
わかまえているつもりです。

でも、でも、浩子はやはり女名前で封筒の  
裏にサインしたいと思わずにはいられないの  
です。ごめんなさいね、こんなことを申し上  
げてしまつて。

ここまで書いて、原稿を置いていましたと  
ころが、今日六月号を受けとりました。いつ  
もインクの香も新しい新刊を受けとりますと  
自分の原稿が、のっていないかと気になりま  
す。ありました。こんなことを書いてのせて  
頂けるかしら？ と不安に思っていましたたが  
なかほどに「浩子の近況のことなど」がのっ  
ていて、ほっとしました。

真っ先に読みたいのですが、やはり自分の



写真が出ていたので面映おもはゆくて、ページをめくって次へと、いつてしまいます。

「奇クサロン」の個所へ目をうつしましたら久保省一さんからの私への呼びかけ、『M女通信の高村浩子様へ』へ僕のラブレターVがのっているのでハッとしました。

当然のように目が吸いつけられて、二回くりかえして読んでしまいました。

久保省一さん。ほんとうに貴方の言われる通りです。たしかに字がヘタな人や間違った字を書く人が皆、つまらない人間だということはありません。もし久保さんに、そうとられるような書き方になっているのでしたら、それは私の文章が、まずかったからです。その点は、じゅうじゅう、お詫びいたします。

きれいな字を書く人が、すべて善人でない事も、文のうまい人が、すべて良い人間でないことも、久保さん、貴方の言われる通りに違いありません。こんな片寄った狭い考えしか持ち合わせていない生意気な女である浩子を、とことんまで責めると——おっしゃられるのなら私は喜んで、その責めを受けます。

けれども、私の書いた気持は、そんなではなかったのです。弁解のようになりますけれど、せつかく私にお誘いのお手紙を下さっ

た二枚か三枚の便箋のなかに、五つも六つも間違った字が書いてあったり、なんと読んでいいのか判読できないような乱ぼうな字で書いてあったりすると、私の燃えようとする気持が冷えきってしまうのです。

私としては、その二枚か三枚の便箋だけが、相手の方を知る、よすがとなるのでして、大きな夢に胸をふくらませて読ませてい

ただくわけです。これは私の我ままかもしれない。こんなことではいけない——と自分でも反省しています。でも、この気持だけはどうすることも出来ないのです。

すくなくとも、手紙をお書き下さる相手の方、この便箋にご自分の思いを託して書いておられるのだと思います。それなのに、なぜ、正しい字を書かれないのでしょうか。私





は中学校しかでていませんが、文章を書くときは、いつも字引を横において書きます。

たとえば、紳士的というのを紳士的と二度も三度も書いておられる人があります。このような方は、紳士的という言葉の意味を、どのように解しておられるのかと、疑ってみたくなります。折角、この浩子をお誘い下さ

るのに、なぜ、このようなお気持ちでお誘い下さるのかと、失望してしまいます。期待が大きかっただけに、私の受けた失望も、また大きかったです。それで、つい、あんな文章を書いてしまったのです。

今、五月号の、その部分を読み返してみますと、△文は人なりと言いますが、文通して

みて、間違った文字を平気で使う人、アテ字を使う人なんかは逢ってみると、やはりつまらない人が多いようでした△とあります。

これは私の貧しい経験を語ったつもりですが、一般的に、間違った文字を使う人は、つまらない人だ——と、きめつけていると貴方に受けとられても仕方ないと思います。

私は、まだ二十才を少し出たばかりの小娘です。私の考えていることに至らぬ点が沢山あると思います。

自分でも、それを直したいと常々努力しております。

でも、こうした気持は急に、なかなか改めることが出来ないで困っています。

空想癖の強い私は、いつも空想の中では理想をえがきすぎているのでしょね。現実では、そんな夢のようなS男性はあるはずはないのでしょけれど、せめて、SMのラブレターの中だけでも、夢のようなお話をしたいものだと願っております。

久保省一さん、こんなはかない夢を追っている浩子を、おバカさんだと思われませんか。

——△終△——



一昨年、私はひどい「うつ病」にかかり、十一月から昨年の五月まで、さる神経科の病院に入院していた。

「うつ病」というのは、その名の示す通り、鬱々として楽しまないので、いっそのこと……と考えるこんでしまう病いである。今ではずいぶん快くなったから、こうして雑文の一つも書こうという気にもなれるが、一時は、新聞を読むのさえ億劫で、というよりは苦痛で、活字はもとよりテレビも見る気が起こらず、ただ眠ってばかりいたものである。

「三島事件」は、私が入院してから程なくして起こったのであるが、そんな状態で、私は同室のK君に聞かされるまで知らなかった。

K君は二十三才の青年だったが、ギターが上手で、とりわけ「禁じられた遊び」の曲が



得意でよく聞かされたものだった。

その「お返し」というわけではないが、私が小康を得てから、冗談半分にSMの話を持ち出し、私の思い出話しを聞かせてあげたこともあった。

○

それは入院する一月ほど前のこと。私は、ともするとふさぎこむ気分を晴らしに、川崎のN館へポルノ映画を観に入った。館内は細長い造りで狭く、何となく淫微な空気が漂っていて、不思議と私の気重な気分にあふさわしく感じられる雰囲気であった。

空席はだいたいあったようであったが、私はあえて一番後の立見席の壁にもたれた。他には一人も居ないので、そこを選んだのだったが、ものの五分もしない内に独占というわけ

△告

白▽

## 禁じられた遊び

木戸川 健

カット・志羽利也

にはゆかなくなかった。私に並ぶ様にして一人の女が、立ったのである。和服の中年といった感じだったが、上映されている映画が映画だけに女客は珍しく、きっと連れがいるのだろうと、私は横目で窺いながら思った。

ところが、時間が経っても連れのある様子が見えない。私は意を決して、さりげなく寄り添うようにしてみた。女は、気付かない筈はないのに動きもせず、じっと画面を見たままである。私は映画どころではなくなった。思い切って、そっと女の手に触れてみた。動かない。握ってみた。依然としてじっとしていた。「これは脈がある」と思うと、ふさぎ込み勝ちだった気分がどこかへ行った。私は女の後に廻り、抱きこむようにしてやった。だが女は知らん顔で画面を見続けている。

「たとえこの女がプロであろうとも」という  
 気持になったのは、俄然、積極的になった私  
 の掌が、その乳房や太腿の柔らかさを感じと  
 った時であった。

「出ようよ」と囁いた私に素直についてきた  
 女は、明るい所で見るとお世辞にも美人とは  
 いえないご面相であった。年も中年もいいと  
 ころで、私は少々失望させられた。ただ一見  
 してプロらしくないことが救いであった。

気持は失望しても、柔肌を毒見した掌を筆  
 頭にした神経の方は別だった。

旅館の一室で、私の中の悪魔が、思いの他  
 たるみのない女の裸身を前にして目醒めた。  
 「そんな……」とか「ひどいわ」とか云いな  
 がらも、さしたる反抗もせずに、女は私のす  
 るがままになって後手縛りを受けた。幸い女  
 が和服であったので、縛る紐にはさして不足  
 はなかった。

不美人であると思った女が、全裸の肌を紐  
 に噛まれて、幾つものくびれを作って転がっ  
 ているところは、人が変わったように美しく  
 見えたから不思議であった。

「思いきり責めてやろう」と私は、しばらく  
 ぶりに燃え始めた意欲に力を得て思った。相  
 手が、さほど美人ではなく、そうすることに  
 よって傷つくような年令でもない。まして、  
 明らかに男を求めている行動をとった女である  
 ということが、私を安心させていたようだ。

ぎゅっと締めあげた紐と紐との間に、ぶっ  
 くりと盛り上がった柔肌の大小様々な小山の  
 連続は、私を狂喜させてくれる様相と感触を  
 持っていた。

女は、年に似合わぬ甘い呻き声を洩らしな  
 がら、後手に縛り上げられた体を艶かしく悶  
 えさせた。少々肥り過ぎと思える豊かな裸  
 身がくねる毎に、深くくぼみを作って噛みこ  
 んでる紐が、肌山の動きに見え隠れして、尚  
 更に私のS心そそのめた。

この女が、SMプレイの味を知っていたの  
 かどうかは知らないが、いくらでも喰いこみ  
 そうな肉付きをよいことに、ぐいぐい絞り上  
 げた私の縛り方は、相当に厳しい苦痛を与え  
 る縄目であったと思うのであるが、女は縛ら  
 れた痛みを訴えることはせずに、私としては  
 さしてひどくしたと思わない乳房や乳首への  
 いたぶりに対して許しを乞うた。しかし、い  
 わゆる羞恥責めに対しては、私がたじろぐほ  
 どの悶えと嬌声を挙げて甘受した。

私はこの女に対して、いろいろな縛りかた  
 を試みてやった。解いては縛り、縛っては解  
 くことを、二時間足らずの間に五回ぐらゐも  
 繰り返したと思う。どれもこれも、あまり変  
 りばえはしなかったが、女は「またなの？」  
 といいながらも、反抗はしなかった。真白と  
 はいい難いが滑らかさと柔軟さに於ては、私  
 の妻に優るとも劣らない肌が、しまいには紐

の締め痕でザラザラの様相を呈していた。

最後には、じっくりと念を入れた菱縄にし  
 たのだったが、女はアグラのように足首を前  
 で組んだまま、私の、お世辞にも鮮かとはい  
 えない縄掛けぶりに身を預けて、伏目で我が  
 肌に喰い入って行く紐の行方を追っていた。

ようやく出来上った菱縄縛りは、繋ぎ合わ  
 した腰紐やしごきのせいで、余り見事な美観  
 とはいえなかったし、念を入れて等角にした  
 つもりの菱形も不揃いであった。それでも私  
 は、一応満足出来たような気になって、部屋  
 に備えつけの鏡台を利用して、女に自分の縛  
 られ姿を眺めさせた。

女は、うろたえたように目を外らしたり伏  
 目になったりしていたが、私が後から両頬を  
 挟みつけるようにして顔を正面に向けさせ  
 と、観念したような態度でしみじみと鏡の中  
 の菱縄女を見詰め、表現しにくいような呻き  
 声をノドの奥で鳴らした。それで私は始めて  
 気がつき、タオルで猿ぐつわをしたのだ。目  
 の下まで覆ってみて、うかつだったことを悔  
 いる思いだった。俄然、女の顔が美人の様相  
 を漂わしたからである。

私は、妻とのプレイの時に、猿ぐつわは  
 使用しなかった。べつに嫌いでもないのだが  
 折角の顔を覆うことは、声を殺す必要のない  
 以上、無いほうが夫婦プレイとしては便利で  
 あったからでもある。その習慣？ から気付



かなかったのだが、この不美人に対しては最初から嘯ますべきだったと思ったことであつた。それほどこの女にはよく似合い、見違えるほどの変貌ぶりを見せられたのだった。

私の、SMプレイによって積み上げられてきていた欲情は、この見事な変貌によって極端に上昇した。責めの手段が、メラメラと音たてんばかりに燃え上った欲情に支配されたような責め方に自然と変っていた。女の悶えかたも激しくなり、鏡の中と、私の腕の中で菱縄縛りの裸美女の狂乱が競演した。

もちろん、縛られた女の悶えはそれまでに幾度もあつた。縛り直すごとに、私はそれなりの奉仕？ をしてやってきたのだ。それが女の真に望む悦びであつたかどうかは定かではないが、一応は喜悅じみた喘ぎを見るまでの「お礼プレイ」は捧げていたのである。私なりに「奪い、与える」プレイ原則はふんまえていたつもりで、私もひたすらSの法悦に遊んでいたのだ。だが、第一印象によるこだわりの故か、もうひとつ男としての欲情発火に欠けるものが確かにあつた。それが、思いもかけぬ変貌に、ふっきれたようであつた。私は自らの激情にひきずり廻わされる形で、菱縄猿ぐつわ美女の柔肌に溺れた。

クルクル回りながら宙をとんでいるような幻覚から醒めてみると、後手菱縄はそのままだつたが、猿ぐつわのタオルをだらしなく首

に落とした不美人が、グッタリした状態で転がっていた。

「こんな遊びしたことはあるんだろ？」

私は、むやみに固く結んだ紐を、女の肌から掘り起こす感じで解きながら訊いた。

「はなしにだけは聞いてたけど、ピンク映画の中だけのことと思ってたわ」

女は後手の指を蠢かせながら答えた。

「はじめてかい？」

それには返事がなかった。

「SMプレイって、知らんことはなかったはずだと思ふがねえ」

「フッフフ……」

顔に似合わず、味な含み笑いをした。

「はじめて縛られたとは思えないねえ」

ようやく解き終った紐を投げ出して、私は

女の顔をのぞきこんでやった。

「しびれが切れちゃった。きついもの……」

女は胸を抱えるようにして、両腕を互いの

掌で揉みながら答をそらせた。

「こりたかい？」

「ン？ いえ、べつにこりはしないけど」

そういうしながら、手繰り寄せた肌襦袢で、

紐痕だらけの肌を隠す態度はどこかよそよ

しかったが、旅館を出て、いよいよ別れる間

際になってから、急に女が、思い詰めたよう

に囁いてきた。

「毎週火曜日の一時頃、あの映画館の前の喫

茶に居ますから……」

だが、どういふものか私は白々しい気分

に襲われていた。ついさっきまで忘れていたよ

うだった気重さが戻ってきた感じであつた。

女がいった次の火曜日になるまでに、私の

「うつ病」はだいぶ進んだようで、そのま

ずるずると入院まで無気力の連続となつた。

○

「そういう世界もあるってことさ」

私は、純情なK君の真剣そうな眸にとまど

って、冗談めかして話をしめくくった。

K君はまじまじと私を見詰めて呟いた。

「だからMさんは、ここへ入れられたんだろ

う？ ポクより重症だったんだナ」

私は苦笑を禁じ得なかった。肩を叩いて立

ち上がった私の背中に、彼の得意な「禁じら

れた遊び」の曲がギターに乗って流れた。

K君は「精神分裂症」患者だったのだが、

それからふた月ほどして、便所で縊死してし

まった。私はそのことを聞いた時、ベッドか

ら鉄格子越しに空を眺めながら、三島事件の

ことを教えてくれた時のK君を偲んでいた。

「切腹したんだそうだよ」と、独り言のよう

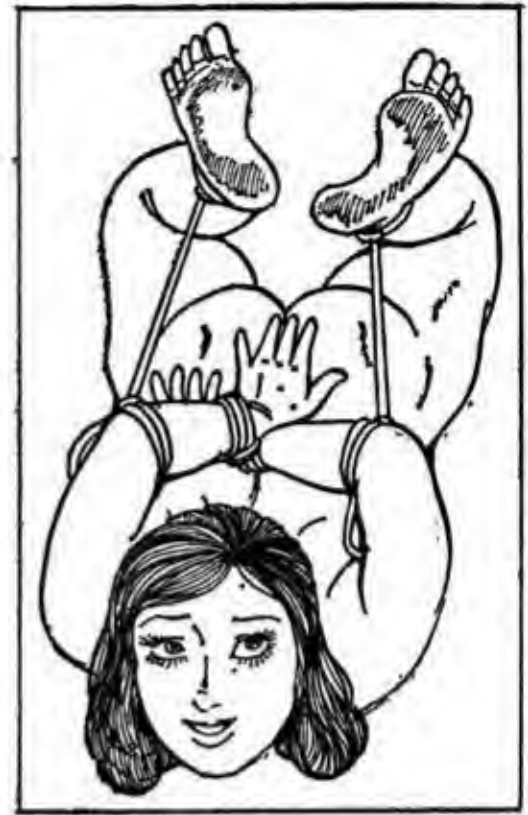
にいつて、彼は遠くを眺める目付でギターを

爪弾いていたつけ。曲は？ やはり「禁じら

れた遊び」だったのだろうか……と。

(おわり)

カット・岩波大介



懸賞入選創作

あ

の

女

花田 咲太郎

—— (一) ——

旅館の一室で二人だけになると春子は、いつものように洋服を脱ぎ始めた。だが花田はそれを止めた。

「どうして？ 気が乗らないの？」

不満の色を露わに浮かべて言う春子には答えず、彼は彼女の背後に回った。そして、背中のジッパーを下ろそうとしていたその両手を強く握ると、ぐいぐいと押し倒して馬乗りのような恰好になった。

「いじめてくれるのね」

俯伏になった春子は、体の力を抜いて呻くように言った。

「力を抜くな！ 抵抗するんだ！」

花田は怒鳴った。首をねじ曲げるようにして、彼の顔を見上げている春子の目に戸惑いの色が浮かんだ。だがすぐに、背中の彼を撥ねのけようと、腕きはじめた。

力を加える花田の脳裡に、あの苦い記憶がありありと甦ってきた。

「やめて！ 花田さん、やめてよ！」

と叫んだあの女の、透明な声と細い肩。

「くそっ！」

花田は、後ろにねじ曲げた春子の両腕を、なおも、曲げ続けた。

「痛いっ！ 腕が折れるわよ！」

春子は、今度は本気で花田を撥ねのけようとした。噛み殺したような呻き声。脂汗が、額に滲んでくるのが、わかった。

彼は右手で素早く外したネクタイで、春子の両手を、しっかりと縛った。

あの時はポケットに、あらかじめ忍ばせておいた紐で縛った。彼は青い細い紐を生ま生ましく思い出しながら周囲を見回した。

いつ頃からかは彼は、紐を持ち歩くことを止めた。その場にあるもので縛る方が、好きになった。

すぐに寝巻用の紐が見つかり、それで春子の足首を縛った。これで春子は、完全に自由を奪われたわけだ。あの時の、あの女の姿と同じだ。

（おれは、あの女を愛していたんだ）

それなのにあの女は、あの時、おれが一番聞きたくなかった言葉を投げつけてきた。



「あんたは変態なのね。私をその道具に使おうと思って、つき合っていたのね」

「違う！ 愛しているんだ。これが、ぼくの愛し方なんだよ」

「人の自由を奪っておいて、愛し方もないもんだわ。変態のお相手は、たくさんよ。早く放して！」

そしてあの女は、呻くように泣き始めた。おれは、何か裏切られたような気分だった。（そのうちに、きつと、わかってくれるさ。突然にやったのが、悪かったんだ）

と心の中で呟きながら、あの女の手足を自由にしたのを覚えている。

あの女は、解かれたばかりの紐を踏みつけて、何も言わずに部屋を出ていった。そしてそれ以来、二度とおれの前には、姿を現わさなかった。

（あれから五年か）

「ねえ、早く、いじめてよ」

と春子の、ささやくような声に、追想を破られた彼は、まじまじと春子を見つめた。

綺麗な女だ。いつ見ても、素晴らしい軀をしている。だが、おれが気に入っているのは、決しておれは、この女に溺れ込むことはないだろうと、わかっているからだ。

「何を考えているの？」

と春子。

「君の、いじめ方さ」

「うそ……」

彼は体をかがめて、春子と唇を合わせた。

強い香水の匂いが鼻を打つ。

「君の香水は、黒田さんが選んだんだな。そうだろう？」

春子の耳に唇を押しつけて、ささやいた。

彼女の、夫とも恋人ともいえそうな男、黒田は、ある化粧品会社に勤めている。

「いや……」

春子は顔を背けた。だが彼は、執拗にその耳に、ささやく。

「浮気な女め」

「……………」

「おまえは、牝犬だ。さあ、犬らしく尻尾を振ってみろ」

「いや……」

春子の目のまわりが、だんだんと赤らんでゆくを見て彼は、一度、春子の紐を解いた。

そして、凌辱的な言葉を、その耳に吹きこみながら、彼女の衣服を脱がしていった。シュミーズ、ブラジャー、そしてパンティ。

パンティを足首に、ずり落とした時、春子

の丸い尻の上の数本の赤い筋が、彼の目に映った。明らかにベルトのようなもので打たれた痕である。

「昨日あたり、デートしたらしいな」

「え？」

「黒田さんは、どんなことをした？」

「……………」

「尻を打っただろう。その外に、どんなことをしたんだ？」

俯伏になったまま、春子は答えない。

「言えっ！」

彼は、腰を抱えて、春子の体をひっくり返し、その大きな乳房を両手で鷺掴みにした。だんだん指に力をこめていく。

「ああ……」

春子は、首を左右に振りながら呻いた。

彼は、掌いっぱい快い抵抗感を味わいながら、春子の軀の上に視線を這わせた。

波打つ腹の広がり。臍のすぐ上のホクロ。

そして、その目がヒタと止まり細くなった。

「なるほど、そういうことか」

彼は大きく頷いた。

「ついにやったか」

ふっふふ、と含み笑いしながら、両手は、執拗にその大きな乳房を、いたぶり続けてい

る。

「いや、いや……」

春子は、なおいっそう激しく、首を左右に振った。

「童女の粧いをなせる浮気女、というところか。フッフフ、黒田さんも好きだなあ」

「……」

彼の片手が動き、掌が起伏に副って、激しく息づく艶肌を滑り降りた。

春子は身悶えしながら、呻いていた。目はしっかりと閉じられ、半ば開いた唇が、せつな気に、わなないている。

彼は不意に立ち上がり、ズボンのベルトを引き抜いた。

「おれの印も、つけてやろう」

最初の一撃は、太腿に小気味よい程の音をたて、たちまちに赤い条痕を、浮き上がらせた。春子の噛み殺したような呻き声が、悩ましく彼の嗜虐心を、かきみだす。

「もっと呻け！」

彼は、執拗にベルトを振り上げた。鋭い音が、狭い部屋中に大きく響き渡った。自分と春子との間に居る黒田の存在を意識したような、激しい鞭の嵐だった。

## (二)

「この部屋は、空気が悪いなあ。よく、いられるもんだ」

吉川は、部屋に入るなり、久し振りの再会であることには触れずに、そう言った。花田が、ここ一週間ばかり窓をあけたことがないと告げると、彼は呆れ顔になった。

「君の怠慢は昔からだだが、それで、よく一流会社の社員が勤まるなあ」

「怠慢というわけではないのだが……」

「君は、爪を一カ月に何回、切るんだね？」

と、吉川は生真面目な顔をして訊いた。

「爪？ フーム、月に二回ってとこかな」

「二回か。あまり伸びない方だな」

「うん、まあね」

「で、床屋へは何回、行く？」

「妙なことを訊くねえ。まあ、三、四回だ」

「ふうん、多い方だな」

「髪の毛は、よく伸びるよ」

「すると、やっぱり君は怠慢だよ」

「……？」

「苦勞している人ほど爪が伸び、怠慢な人ほど、髪の毛が伸びるんだそうだ」

「誰が言ったんだ？」

「おれの、おじいさんだ」

花田は苦笑いを浮かべて、仰向けに転がった。反撃する気にもならない。

「ところで、その後の、あの彼女のことは知ってるかい？」

吉川の口調には、何か真剣なものが秘められてるのが感じられた。

「あの彼女？……恵子のことか？」

と曖昧に答えて、花田は、昨日のことを思い浮かべた。

あの喫茶店を出てから、旅館に入るまでの彼女の態度は、いつもと違っていた。

原因は、あった。待ち合わせ場所で夕立ちに合い、雨宿り代わりに、とびこんだ喫茶店で、思いがけない女を、花田は発見したのだ。その店のウェイトレスだ。二人の顔を合わせた時の様子で、春子は何かを察したらしい。

歩きながら春子が訊ねてきた。

「ねえ。あのウェイトレスさんねえ……」

「ああ、あの女のことか」

「あのひと、どういう関係？」

「どういふって……」

春子の表情に嫉妬心は感じられず、単なる野次馬根性からだろう、と花田は思った。



だが、それがどっちにせよ、何か直感的に（もうこの女とは、長くないかも知れない）という気がしたのだった。それは、思春期の少年が、母親に自分の机の中を掻き回された時のような気持に似ている。

「何を考えこんでいる？」

吉川の声で、花田は現実に戻された。そこに、窺うような目つきの吉川の顔があった。

「いや、別に……」

ふっと吐いた、たばこの煙の向こうに現われた吉川の顔は無表情に戻っていた。

「本当に愛しているからこそ、その人をガラスの箱にでも入れて、そばに、置いておきたい。とても手を出す気にはなれない、という奴がいたぜ」

と吉川。

「ほう」

「誰だと思おう？」

「……………」

「君も知っていると思うけれど、前田という男だ」

「恵子と同棲した奴だな。すると前田は、恵子を本当には愛していなかったということになるのかな」

「それは分からんが、前田はそんなことを言っ、とにかく恵子には、手を出さなかったそうだ」

「信じられん。だが、だとすると前田という男は、相当なロマンチストじゃないか、それも小便くさい」

と花田は、投げ出すような口調で言った。

「いや、不能者だったらしいと彼女は言っていた。だから私は、まだ処女なのよともね」

「君は、恵子と会ったのか？」

「うん。四、五日前かな。喫茶店のウェイレスをしていた」

「そうか」

と花田は答えて、自分が冷静であるのに気づいた。そして、そんな自分に満足をした。

「前田とは別れたそうだ。君のことを聞いていたよ」

「……………」

「会ってみる気はないか？」

「……………」

花田は、昨日、偶然に会ったことを言いそびれてしまった。

### （三）

三日後の夕方、花田と春子は小さな食堂で

待ち合って、食事していた。

花田の目は、棚の上のテレビの画面に釘づけになっていた。女性歌手が映っている。その歌手は、あどけなさ可愛らしさを売物にしているらしく、真赤な大きな帽子をかぶり、ホットパンツを穿いている。

だが花田は、画面にその歌手の顔のアップや太腿が映るたびに、成熟した中年女のそれを感じ取り、踊るような身振りに、あやつり人形を連想していた。

「ねえったら」

という春子の声に、彼はやっと画面から目を離した。

「ゆうべ、黒田が、すごく荒れたのよ」

「え？」

「あなたの、せいよ。あんなに鞭痕をつけるんだもの。すごかったのよ、彼。あたし、殺されるかも知れないと思った」

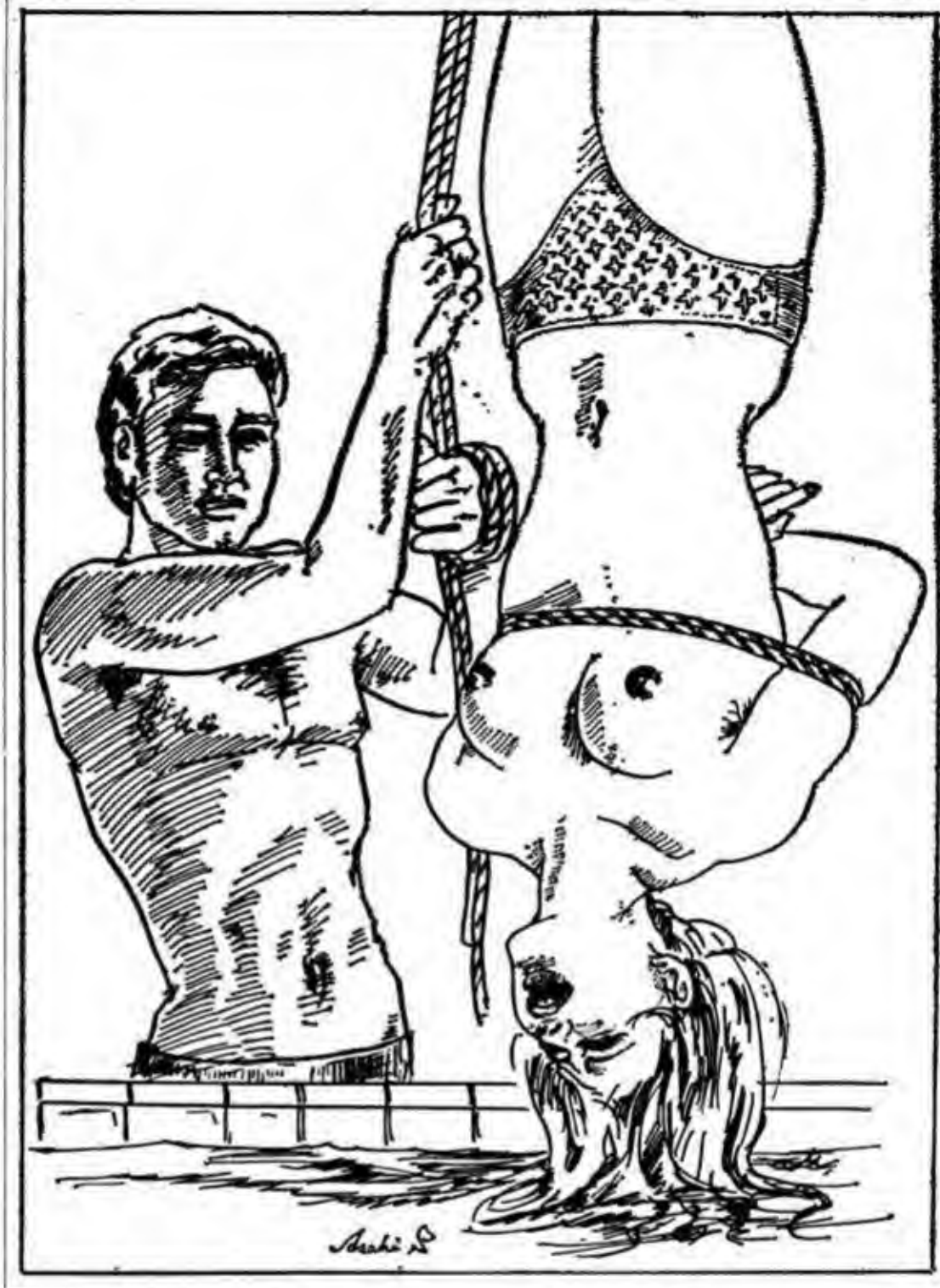
彼は、あの時に叩きつけた、春子の太腿の赤い筋を思い浮かべた。

「しかし、黒田さんは、おれの存在を知っているんだろう？」

「知っているわ。でも。……ねえ、見てよ」

と言って春子は、洋服の袖を少しまくり上げた。細い手首に青黒くなった紐の痕が、あ

—— イメージギャラリー —— 『苦悦の嬌声』 —— 須坂 旭 ——



りありと見える。

「手首を縛って吊るされたのよ」

と言った春子の目のまわりは、薄く赤らんでいるように見えた。

「つまりおれは、君と黒田さんの刺戟物にな

ったわけか」

「そ、そんな……」

と春子は、口ごもった。

「でも、私たち二人の側からすれば、黒田が刺戟物になってるんじゃないかって？」

なるほど、と彼は思った。まあ、そうしておこう。

不意に、春子が言い出した。

「ねえ。これから、あの喫茶店に行ってみないこと？」

彼は思わず身構える思いだった。そして、春子の表情を窺った。

その顔はケロリとしていた。

「いや？」

と春子。

「べ、べつに……」

と彼は、曖昧に答えた。

(何を恐れているんだ)

これも、おれと春子の刺戟物と考えればいいじゃないか、と彼は思った。

「よし、行こう！」

(四)

花田は、自分の居るのがどこだか、分からなかった。

赤い大きな帽子をかぶり、ホットパンツを穿いている、あのテレビ画面で見た歌手が出てきた。あやつり人形のような身振りは変わらなかったが、後手に縛られている。

露わな太腿がアップになった。そこには、



赤い筋が何本も浮かび上がっている。

「おや？」と思って見直すと、歌手の顔が、いつの間にか春子の顔に変わっていた。

「やあ」と手を上げて近づいていったが、春子は素知らぬ顔で、縛られたまま踊り続けている。「どうした？」語調を強めてみたが、返事はない。もどかしさを感じて、肩に両手を置こうとすると、春子はクルリと後ろを向いてしまった。彼女の襟足がバカに綺麗に見える。彼は曖昧な笑いを浮かべていた。

やがて春子はゆっくりと振り向き始めた。顔と顔が合う。ギョツとした。春子の顔は、今度は、あの女の顔に変わっている。

冷たい拒否するような目と向かい合った。何か言わなければならないと思ったが、言葉が出てこない。気まずい沈黙が続く。不意に、あの女が言った。

「コーヒー、二つですね？」

「そ、そうだ」

と、彼は咄嗟に答えた。あの女は礼をして立ち去って行った。縛られていたかどうか分からなかった。

注文したコーヒーは、なかなかやってこない。彼は小さな苛立ちを覚えた。

その時、後ろで何か、けたたましい音が、

し始めた。何の音なのか、思いつかない。それは断続的に聞こえてくる。

ふと、彼は目が醒めた。カーテン越しの明るい陽の光に、思わず目を細めた。意識が、はつきりしてゆくにしたがって、夢が曖昧になってゆく。彼は独りでニガ笑いをした。

けたたましい音だけが続いていった。電話のベルだった。

「おれだよ。ずいぶん待たすじゃないか」  
受話器から、聞き慣れた吉川の声が飛び込んできた。

「聞いているのか、花田？」

「ああ、聞いているよ。朝っぱらから、どうしたんだ？」

「花田、恵子が死んだぞ」

「なんだって?!」

彼は思わず声を上げた。だが、それを無視して、電話機の声は続く。

「ガス自殺をしたんだよ。それも自分で手足を縛ってな」

「……………」

「死んだのは、夕べの七時頃だそうさ。遺書はない。でも、自分で手足を縛っていた点がおもしろいじゃないか」

吉川は、ほのめかすように言った。

「それは考えすぎだぜ、吉川」

花田は、受話機を強く握り締めた。

「まあいい。ところで通夜は明日の晩やる。高校時代の同窓生として、おれは出席するが君は、どうする？」

「う、うむ……………」

と、花田は曖昧に答えた。あの女の死顔を見たいと、ふと思った。だが、億劫な気持ちもある。

「もし行くんだったら、一緒に行こう。明日の晩、七時まで待ってやるから」

そこで電話は切られた。

花田は寢床に腹這いになり、煙草に火をつけた。

(夕べの七時頃か……………)

その時刻なら、おれと春子が、あの店のボックスに腰を降ろした頃だ。

「あら。あのヒトは、いないようね」

と言った春子の、窺うような目つきを思い出した。あの目は、久しぶりに会った恋人同士がどうするか、成り行きを楽しんでいるような目だった、と彼は思った。

(だが、会っていても、どうにもならなかった。きつと春子は、期待外れに失望したような目つきになったに違いないぞ)

彼は、ふっと吐いた煙を見つめていた。

（五）

頭を少し動かすと、柱時計が見える。九時を少し回っていた。

（今頃、通夜は、どんな具合だろう？）

花田は何度も同じことを思い返していた。白い布切れを顔にのせた、あの女の亡骸の回りには、沈痛な面持ちの人々を取り囲むように坐っていることだろう。その中には、吉川の顔もある筈だ。

「恵子さんは、本当に明るくて、いいヒトだったのに……」

と、誰かが言う。囲りの人々がバネ仕掛けの人形のように、一斉に頷く。

「いいヒトほど早く死ぬと言うけれど、まったく、その通りだね」

「まったくだ。まだ二十四歳という若さで死ぬなんて……」

気まずい沈黙が、やってくる。時々洩れる忍び泣き以外は、何の音も聞こえない……。

「ねええ」

不意に、春子の声が、ヤケに大きく浴室からとんできて、花田の想像は中断された。

彼は、春子のお湯を弾き飛ばしている、み

ずみずしい軀を思い浮かべた。そして、（あの女の軀は、すぐに灰となり、やがて人々から忘れられてしまうのだ）

と思った。

開け放したままの浴室から、春子が出てきた。白い浴衣を、まとっている。

「約束の日は明日だったのに、どうして急にまた、今夜、呼び出したのよ？」

と、上気した頬を寄せてきた。

「あの女が死んだっていうんだよ。今夜、通夜だそうだよ」

と花田は、仰向けに転がったまま、ぞんざいに言った。

「まあっ、死んだって？……」

春子は一瞬、顔を歪めた。だが、すぐに無表情に戻った。

「だから今夜、私を縛ろうってわけね」

「えっ？」

「通夜に行かない理由を作るために……」

「そ、そんな……」

と彼は、曖昧に答えた。思いがけない春子の言葉に、ギョツとした。

いつの間にか指先を焦がしそうに短くなっていた煙草に気付いて、大急ぎで揉み消した。灰がパラパラと顔に降り掛かってきた。

熱かった。思わず彼は、『恵子の灰だ』と心の中で叫んで飛び起きた。

「あわて者ねえ」

と春子が、笑いながら花田の小鼻辺りに残っている灰を払おうとした。その手をギョツと握った花田は、そのまま背中になじ上げ、荒々しく春子の浴衣を剥ぎ取った。上気した薄桃色の艶肌が生々しく現われた。

「縛ってよ。ねえ、縛って」

自分から俯伏に倒れた春子は、残る片手を自ら背中曲げてきた。その手首には、黒田のつけた紐の痕が、まだ青黒く残っている。

彼は、視線を丸い尻の上に持っていた。そこにも、黒田のつけたベルトで打った痕が残っていた。

「黒田さんのつけた痕が、まだ消えないね」

「黒田はいつも、同じ場所を責めるの。だから、いつまでも消えないのよ」

彼は、浴衣用の紐を手にした。そして、

「黒田さんと同じ場所を責めてやろう」

と、春子の手首の痕の上に、その紐を合わせて巻きつけた。

紐を思い切り、引っ張りながら、この前、春子と会った時のことを思い出した。「おれの印もつけてやろう」と言っ、ベルトで春



子の太腿を打ったつけ。

(この変わりようは、どうだ)

あの時は、春子との間に黒田の存在を感じ取っていたけれど、それが、確かに春子のいう通り、刺戟物になっていた。だが今は、黒田の存在を消そうとしている。

それは春子の、せいだ。あの女の死を聞いた時、春子が失望の色を示さなかったからだと彼は思った。

「いじめてよ。うんと」

と春子の、ささやくような声。

「ああ、いじめてやるとも」

彼は、春子の弾力に満ちた軀を、仰向けにひっくり返した。

「おや、もうこんなになったのか」

「いや……」

「しかし、ざらざらだから痛いだろう？」

「……」

春子は無言で、花田を見つめていた。

花田は、優しくその頬を両手に挟んでキスしようとした。

「いや……」

春子は、いきなり弾みをつけて、後手縛りの上半身を起こした。

目と目が合う。

そこには、まわりが薄く赤らんでいる春子の目があった。

不意に彼は手を離した。

「いつもと、違うのね。なぜ、ざらざらだといいながらキスなんかするのよ！ なぜ責めてくれないのよ！ いつもなら強引に、やるくせに……」

「……」

「わかってるのよ」

「……」

「あのヒトの、お通夜だからでしょ？」

と窺う表情の春子。彼は答えず、その頬に平手打ちをとばし、突き倒すように押し戻した。春子は仰向けに倒れこみ、そのまま、じっと天井を見つめた。

彼は、片手を振り降ろすように乳房に叩きつけた。そして、そのまま執拗に責め続け始めた。

やがて春子の力が抜けてゆき、身悶えしながら呻きに似た声を挙げた。

彼は不意に立ち上がった。そして、続く責めを待ち受けるような春子の、大きく波打つ白い裸身を見下ろした。

彼女の太腿には、前に彼がベルトで打った痕は殆ど消えている。

彼は、蹴り転がすようにして、もう一度、春子を俯伏に、ひっくり返した。

丸い尻の上の、明らかにベルトで打ったと分かる痕が現われる。

それは、彼には覚えのない鞭痕である。黒田の、つけたものののだ。

彼はズボンのベルトを抜き取り、それを振りに上げた。

ベルトは尻の上に当たり、鋭い音がした。春子の尻が、撥じけるようにとび上がり、呻きが強くなる。

「あいつと、同じ場所を責めてやるぜ」

ベルトを執拗に勢いよく振り上げ、打ち下ろしながら、

(おれはもう、ヤツと春子の間の、刺戟物にされるのは、まっぴらだ！)

と、心の中で叫んでいた。

ベルトの音と春子の呻き声が、部屋中に大きく響く。

のけぞった白い体が、ガックリと伸びきった。

(もうこの女とは、長くないかも知れない) 打ち疲れた腕を撫しながら、彼は思った。

——(完)——

## ＜想いの譜＞

## 前田真知子恋唄

利根川五郎



前田真知子は、実に一年三カ月ぶりに、われわれの前に姿を現わした。  
やむにやまれず、再び手紙を送る。

ひと知れず想いを寄せ、そして、きつと叶うことのないだろう想いの哀しさを、友よ、知っているならば私のこの無分別な想いを笑うことはないだろう。

彼女は、彼女自身が語るように、確かに成熟した。もとより肉体的にもだが、多く精神的に成熟した。この理知的な婦人の、自己の内部の冥い情念を、じっと見つめている目はむしろ、すがすがしい。しかし、友よ、すがすがしいとみるのは、この冥い、凶いにおいのする情念を持たぬ、無縁のひとつとの評することばであろう。私は、むしろ前田真知子という女の辛酸を感じるのだ。

昨年一月、前田真知子は、おずおずと登場した。私は、そのときから彼女の熱心な読者であった。彼女の再度の登場を、鶴首して待っていた。彼女の心の迂余曲折を、

つまり、われわれが生きてゆく上で避けられない悲しみと、よろこびを、どのように通りぬけ、重い性への情念をひきずりながら、どうやって通りぬけてきたかを知りたかったのだ。

そして四月号で彼女は、おそろく、ほんとうのことを、かなり熱心に、正確に語った。京都が好きだという。古い伝統の世界を愛しているという。そのように、古典に対する彼女の造詣は深く、たしかなものである。大好きな京都へ行けるといふ誘惑が、第二回の緊縛モデル志願の大きな要因であると、彼女は「頬を真赤に染めながら、言いわけのことばを必死になつて」探した。

私は、そこに彼女の幸運と悲運を、視るのだ。重い性への情念を持ってしまった幸運と不運という意味であり、その重くて冥い、時には冥くて寒い海のようにであり、時には赫く燃えている火のようである情念を、古典への知識で美しい装いをこらし、自らの心に納得させようとする、業の深い女に生まれた幸運と不運という意味である。それは又、彼女の日常生活の如実な表徴でもある。われわれが共に持つ恥かしい情念のかげなど、みじんもみせず、一糸乱れぬ日常生活が彷彿されるのである。したがって彼女の公けの生活は、勤勉である、はずである。それ故に、彼女の心の秘匿の世界が、絢爛なのである。



想像世界の絢爛は、おのずから肉体の絢爛へと相渉る。

前田真知子という女を、きつく巻いている縄。縄にがんじがらめにいましめられた女、前田真知子。そして、緊縛されている前田真知子を見ている前田真知子という女。

友よ、彼女のこうした屈折した心のメカニズムを理解せずには、前田真知子の熱心な読者とはいえないのだ。

昨年一月号で、自分の裸身をさらした彼女は、おびただしい羞恥心と自己嫌悪にさいなまれたはずであり、それ故に彼女は住所も変えた。彼女が住所を替えたのは、奇譚クラブという雑誌をとりまいている情念世界への決別の決意体系であった、はずである。

しかし、自らを、再び忌みきらった世界にみちびきだした、彼女の心にひそむ魔性のもの、狂気の背理こそが、私が前田真知子恋慕に走る一本道なのである。

友よ、もし彼女のことを想いだしたならば四月号一八七ページを、ひらきたまえ。両腕と上半身をしばられたまま転がされた後姿である。彼女の下半身の美しさは抜群である。その中央に、彼女の心に吊るされた十字架がある。十字架の交じわった奥に、きつとある火の渦。渦をささえる逞しい足。足は植物のように健康である。

その健康な、無表情な太腿に、掌を触れ、

唇をふれてゆけば、彼女の肉体の奥処で渦まいて燃える火は、さらに青白く、あるいは真っ赤に燃え上がるだろう。

といえば、いかにも彼女の肉体の、性的な性能が、ことのほか、すばらしいというように思うかもしれないが、もちろん性的性能もすばらしいだろうが、むしろ彼女の本領は、緊縛され写真を撮られることにより、さらにその写真が公けにされ、数多のひとびとの目にさらされ、彼女の彼女自身が愛しむ肉体に男たちの淫らな想像を加えられる、と彼女が想像し、その想像力によって彼女の性的な興奮を昂めるといふ錯綜した心のメカニズムにあるのだ。だからこそ彼女は、無口な彼女を「更に無口に」させ「目だけは、すべてを観察しよう」と狙っているのだ。性的な、彼女はそれを生理的なのというが、興奮さえ、彼女は自分の冷静な目で確かめなければならぬ。性というものが、むしろ多く理智の領域にあるのだ。

それは、すなわち彼女の人生への、まだ青じろい不安だ、といってもよい。

現実と肉体は、青年がおもうより、ずっと形式的なものであろう。快感の形式ができあがれば、快感の手續が決まる。それは、おのずから、多く夫婦プレイヤーの嘆くマンネリズムへと陥ちこむ。マンネリズムは更に尖鋭な刺激を需めることによって回避されようと

する。しかし、それは所詮、無間地獄だ。

前田真知子は、そういった意味では、性の第一歩から、性の形式、無限地獄に陥ちこまないですむ緊張した精神と想像力を持つている。肉体に加えられる刺激が、まっすぐ生理的快感に達せず、一度、冷静な頭脳を通ることにより、一層、劇しい快感に達しうる高度なメカニズムを有しているからである。

性も、たとえば人生がそのように豊かな想像力によって、更に豊かになる。決して、性的な機能の優劣ではあるまい。前田真知子は我が「奇譚クラブ」に登場する女性のうちでもっとも想像力の豊かな女性であろう、と私は思っている。

前田真知子は、すでに快感の在り処を知った。やがて、歓喜菩薩に至る道は、一歩である。しかし、その一歩には、千里の径庭がある。だが彼女を歓喜菩薩にし、われわれ読者に合掌させるのだろうか。

最後に、これは前田真知子への「頼み」である。「私の裸身はクラゲのように柔らかくなり、麻縄でどのように厳しく縛られても、痛さを感じずどころか、身体のみずみずまでもカメラに晒す喜び」の、報告をしてもらいたい。

君の歓喜の肉体と容顔に、わたしは、合掌して再拝したいのだ。



## カテーテル

宮殿大奥の東側に、東館（ひがしのたて）と呼ばれる一区画があった。

ここは有明をはじめ、貴妃たちが時として地上的生活を楽しむために設けられたものである。といっても、洋式ではなくて、忠実に古典的な数寄屋造りだった。

したがって、わざわざ庭土を二十センチも盛りあげ、その上に、館に適合した樹々が植えられている。そして、格調正しく配置された大小の庭石とともに、古式に則った名園を

形成していた。一隅には、嚴重に施錠された水門を通して導き入れられた泉水が庭の中に入り組んで、江戸情緒を偲ぶ、よすがでもあるかのうように屋形舟が浮かぶ。必要とあれば水門から外の「海」へ出掛けることも出来るようになっていたのである。

東対では、年寄一名をかしらに上臈二、中臈四、お次四、お三（さん）五、小姓二の合計十八名の定員が独立して勤めていることは前に述べた通りである。独立して、とはいっても、奥の一種だから、お末以下、下賤の者は入ることが許されていない。

さらに、ここでは裸体の「正装」は夜だけ

前号まで「独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集した数千の美女に畜従隷従を強制している。彼女等は、その材質に応じ、五段七階級に分類され、巧妙な統制管理を受けている。原潜ネプチューン号による最近の作戦で、何といっても最大の収獲は政界の重鎮、山本万蔵の愛嬢、百合子を獲得したことだったといっている。彼女だけは一等扱いの赤札で、未だ汚辱を受けることなく、内城深く連れ込まれた。彼女を裸にし、責めあげるのは有明一人に委ねられている。



のこととし、日中は全員が和服で行儀よく暮すことを命じられている。それだけに、ここにいる美女たちは、特に和服映りのよい者が選ばれるのである。

とはいっても、いきなり、ここへ配属されることは稀で、夫々、様々な場所での国の教育を受け、次第に立身してきたのだから、いろいろな意味で全裸を日常とする習俗が身につけてしまっている。だから、全く奇妙なことだが、大部分の者がキチンと和服を着る生活を拷問のように感じているのも事実だった。習慣と環境が、価値感をガラリと変えてしまっているのだ。

山本百合子（第15、26回、参照）は、あれ以来、ずっと東の館の客人として扱われていた。悲しい諦めが、次第にこの生活に馴染んで行く手助けをしていた。

仕えてくれる女たちは、有明たちが臨御される場合を除いて、自主的に日課を定め、華道、茶道をはじめ管絃歌舞といった芸道修行に打ち込んでいたから、もともと日本趣味豊かな百合子は、それに参加することで淋しさを、まぎらすことが出来るのであった。何より孤独でなく、すべて同じく誘拐されてきた美しい女性たちが、様々なフラストレーションを、

を、いじらしくこらえて、その日その日を一生懸命に精進している姿は、理非善悪を超えて、百合子に強い影響を与えずには、いなかったのである。

また反面、何十万円もするであろう高価な和服を普段着としている桁外れな生活は、囚れの憂さをフト忘れさせる程の楽しみを百合子に与えてくれる。

ただ、どうしても馴れることの出来ないことがあった。それは睡眠時間だった。

寝る前に入浴し美容マッサージを受ける。それは、まあいいとして、ここでは寝衣をつけることを許されなかった。その上、蒲団の四隅に両手、両足首を大の字なりに練絹で結えられてしまうのである。もちろん、掛け布団もない。こうして、彼女は囚れの身であることを毎晩、イヤという程、思い出さされるわけだ。如何に百合子だからといって、未決の女囚である以上、拘束を免れることは出来ないのである。

夜中、身の回りの世話は、お三が交替で不寝番に着くという物々しさだった。前述のように、皆が「いそいそ」と全裸になるのだった。裸にされることを屈辱と感じる百合子にとって、そのことは驚き以外の何ものでも

なかった。

羞恥と憤怒が交錯して、今も寐つかれない夜の連続なのだけれども、やがて、どうしようもない時間の経過が、力づくで百合子を、それに馴らさせて行くであろう。

百合子が東の館に来てから殆ど一カ月近く経過したというのに、有明はまだ一度も姿を見せなかった。このことは極めて異例のことだと、お年寄の柏木の局が語ってくれた。第四三年次、つまり、百合子が攫われてきたネプチューン号のオペレーション終了の直後だけにマスターは大変にお忙しいのだろうとも言った。

ここに来て、マスターと敬称される有明の大きさ、重さというものが、百合子の胸の中で日を追って巨大さを増して行った。だからこそ、彼が来ないということが、何ともいえない不安と怖れを募らせていた。ネプチューンを下船するとき、エミー司令が「マスターが、お待ちかねですよ」と言ってくれたときから、百合子は、まだ見ぬマスター、有明に対する畏怖と期待（そうと彼女は意識していなかったけれども）そして出来ることなら逃避してしまいたい、というネガチブな

感情が交々と入り組んできて、内心、苦しみ抜いてきたのである。

だから明晩、マスターが東の館にお泊まりになるという報せが届いた日、最も動揺したのは山本百合子だったといっている。そうはいっても、お年寄を始めとして、大なり小なり、ソワソワして準備に大わらわだったのである。二品の中藤以上は、平素から長髪を後ろでまとめて、いわゆるオスベラカシという髪形をしているから、そのままで済む。しかし、三品以下は髪を高髷に結って、矢絛を着て、例の奥女中スタイルに統一しなければならぬ。

とに角、平素は、どちらかといえばノンビリしたところのある柏木の局さえ、目を血ばしらせて走り廻るのだから、中藤以下、腰を落ちつける暇もないのだ。

百合子は、その日一日、居間に使っている八畳の部屋に閉じ籠っているように命じられた。そこは母屋から独立した、いくつかの離れ家の一つで、未決の「一等級扱い」（赤札ともいい、通常のレセプションを経ないで直行させられる）を泊めるために使われる。それだけに、特別な設備が、つけ加えられている

のだが、それは追いつ追いつに述べる。

ここへ来て百合子は、鍵のある部屋に押し



込められるといったことはなくなったのだけれど、とにかく、四六時中、女中が一人ずつつきそっているの、監視されているのも同様だった。

行動を制限された理由は、お召しのない囚女を、マスターの目に触れさせてはならないという配慮からだ。

したがって、いつ「お成り」があったのか百合子には知るよすがもなかったのだけれど夕方になって、小走りに行き交う女中たちのただならぬ動きから、きつと、お成りがあったのだらうと推察したに、すぎない。

お三の女中とは、必要最小限度の会話しか許されなかった。百合子が何をたずねても、召し使いたちは困ったような微笑を見せるだけだったが、思わず、

「お成りがあったのですか」と聞いてしまう。

「……」

可愛らしいお三が、高髷に結った頭を振って、人差し指を唇にあてた。

もう殆ど諦めているとはいっても、胸がつかえるような気持になる。

食事を済ませて小一時間もすると、入浴を



するように、さしずがであった。すべて、こうした指示通りに動かなければならない。さもなければ力づくでも命令を実行するという意思表示が背後にアリアリとしていた。無駄と知った百合子は、一度も反抗を示さなかった。よく拭きこんだ廊下を隔てて浴室があり、長四畳の脱衣所に、木の香も新しい総検造りの湯殿が続いていた。

いつも、当番のお三が裸になって入ってきて、流してくれる。洗い場の羽目に等身大の鏡があつて、流すときは、その鏡に直面して立つように言いつけられている。百合子にはそれがマジックミラーだということを知る由もなかったし、だれの心にも、ある一種のナルシズムから、美しい自分の裸身を鏡に映すことは、それほど、嫌でなかったのである。しかし、今日だけは、処女の本能から、何かに見られているような視線を肌感じて、無意識に胸と下半身に手をやってしまうのだった。お三が、さりげなく、その手をとって、石鹸を一ぱいにつけたヘチマで、洗ひにかかった。

マジックミラー一枚の向こうに立つ有明はしきりに感心していた。五千の美女に囲まれている有明でさえ、山本百合子が持つ天性の

麗質には舌を巻く思いだった。

「素晴らしい材質だ。ゆっくりと可愛いがってやろう」

誰にいうともなく呟きながら、喰い入るように、鏡の向こうで動く百合子の裸身を見つめていた。

湯殿を出るときは、入った戸口と反対側の板戸から出なければならぬ。そこは、もう一糸も、まとうことを許されない、寝室だった。何の調度もない八畳間で、一隅に一間ずつの押入れと床の間がある以外は、三尺の出入口を除いて、すべて砂壁だった。

柔らかな蒲団を二枚、重ねて、絹のシートでキッチリと被ってある。その上に仰臥して手足を大の字に開き、両手首、両足首を、畳の間から出ている環に、白い練絹で、くくりつけられる。

いつもの通りのことである。いつもの通りなのに、何で胸が騒ぐのか——と百合子は思う。ここでも生娘の本能が、狼の襲来を予知して慄えているのである。

いつもの通りといっても、何かが違っている。有明が訪れてきたというだけなのに、すべてがワーンと、うなりを立てて廻り始めた

ように百合子は思った。

その不安は、お年寄が寝室に入ってきたことで、いよいよ、つのってきた。これは今までなかったことだったからである。

たしかに柏木の局も平素の落着きを喪っているように思われた。いくら裸になる夜の時間だからといって、ここでの作法は全く日本式なのだから、突っ立ったままでいる筈がないのである。しかも、何も言わないまま、露わな百合子の全身を、舐めるようにジロジロと見廻している。

たまらない羞恥に、百合子は全身が火照ってくるように感じた。

「ど、どうなさったのですか」

とうとう待ちきれなくて百合子の方から問にかけてしまう。

「お覚悟は、おできになっていらっしゃるでしょうね」

おしつぶすような柏木の声が、いっそう百合子をおびえさせる。

不意に衝きあげてくる尿意を感じた。恐怖が刺戟したのである。

「今晚、お成りがあつたのは貴女を、ごらん下さるためです」

「いつ、いつお目にかかるのですか」

きっと明日の朝かも知れない。それならそれで、心の用意もある——と思って、たずねた百合子の問いは、ものの見事にハネ返されてしまった。

「わかりません。それは、マスターの思召し次第です。この国には、マスターのお成りを拒むことの出来る部屋はありませんのよ。こうしているうちにも、今、ここへお見えになるかも知れませんわ」

「えっ」

百合子は絶句してしまう。みるみる全身から血の気が退いて行った。すーっと気が遠くなるように感じた瞬間、ナマ温い液体が流れ落ちるのを意識する。

もう、どうにもならない。たまらない恥かしさに、全身が火のように燃えた。

「アッ、大変。早く蒲団をかえて……」

大げさな声で、柏木の局が叫んだ。詰めのお三が飛び上がった。それを追いかける様に「待って。その前にカテーテルを持ってきて頂戴。粗相があったら大変だから」

生まれて始めて知ったカテーテルのショックで、今度こそ、百合子は本当に気を失ってしまった。

## 駒 上 布

朝の運動を済ませ、湯上がりのサッパリした身体に、高価な薩摩を無造作に着こんだ有明が、床の間を脊にして悠然と坐っている。

十五畳ばかり、光りものは一切、使っていない、茶室風の渋いインテリアだった。それだけに、磨き抜かれた素材が、如何なる貴金屬にも増して、落着いた豪華さを、みせている。銘木の一つ一つを有明自身がえらんで集めてきた。その記憶の故に、よけいに愛着がまさるのであろう。いくつもある素晴らしい日本間を、さて置いて、彼はこの素朴な部屋を好んで、くつろぎの場所にしていた。

「お召しによりまして、F―七五八号を召し連れましてございます」

奥の外で、打掛け姿で平伏した柏木の局が申し上げた。F―七五八号と呼ばれた山本百合子も外廊下に平伏している。

「待っていた。入っておいで」  
やさしく有明が声をかける。

「失礼いたします」

お局にうながされて山本百合子が、おずおずと膝を、ずらせながら入ってきた。

「もっと近くへ」

柏木の局に押されるようにして山本百合子は有明の前に畳二枚ほどの距離で平伏する。

彼女は他の女官たちのような「制服」つまり、矢絰や打掛けのような古典衣裳を着ていない。あらかじめ、有明から渡されていた、白地に赤とグリーンの細い十字絰で織った絹の駒上布のお召しに、黒地に大きな鷲をあらわした紗の名古屋帯をキリリと締めている。その清楚な姿は、さながら白鷺が舞い降りたかのように、渋い色彩の室内が、パッと明るくなったように見えた。

目を細めた有明が、

「どうだね。いくらかでも、この生活に馴れてきたかい」

静かな声音の中に、いくらか揶揄するような調子を感じられた。

「……」

だまっているのが、百合子にとって、せめてもの反抗だった。だが、そうしたところでどうなるものでもないということを、痛い程覚らされている百合子でもあった。

本当のところ、百合子が抵抗すればする程有明の楽しみが増してくる性質のものだった



のである。

有明は、捕えた鼠を、いたぶる猫のような眼つきになった。百合子は、その視線をハネ返すことが出来なくなつて、とうとう目を伏せてしまった。それは、彼女が一步、退いたことを意味する。その間合いを有明はスグ詰めて行くにちがいない。事実、百合子は全身に有明の視線を感じていた。裸にされて行くような気がして、縮みあがっていた。自分の裸身を、先刻、のぞき見されていたとは夢にも知らない百合子だった。

彼女は、何かひどく疲れ切っていた。昨夜いつ有明が入ってくるか分からないという怖れで、まんじりとも、出来なかったからである。おどかさだけ、おどかしておいて、有明は大の字に縛られた裸の寝姿を見に来ようともしなかった。鼠は全く猫の手中にあった。ご馳走は逃げ出す心配がない。今はユックリ時間をかけて喰べて行けばよい。

「茶を、たててくれるか」

といわれて、思わず

「はい」

と承知してしまった自分を、百合子は腹立たしく思っていた。折角、沈黙の抵抗をして

いたのに、不意に弱いところを突かれたような感じだった。

彼女は茶道を氣違いじみて愛していた。だからこそ、点前を諸う羽目になつてしまったのであろう。これには不思議と抵抗する氣になれなかったのである。

膝をつき合わせる程に狭い小間、四畳半の茶室が庭の一隅にあった。

余人を交じえないで、二人は静かに対面した。茶の作法が、百合子に深い安心感をあたえた。それが逆に、彼女の抵抗力を弱めていくのだということを自ら意識するには、未だ老獪さが身についていなかった。有明は確実に間合を詰めていたのである。

行儀よく茶を喫し終わり、手を膝において「結構でした」

と一礼する有明の姿を、百合子は好ましいものに感じた。

「もう一服……」

「いただきます」

茶筌が前よりも軽く動いた。

人格を無視され、暴力で踏みこじられるとばかり覚悟していた百合子には、何か物足りないような有明の態度だった。個人としての有明も、又、この国の絶対主としての彼とし

ても、百合子を屈服させることぐらい朝飯前のことであつた。この国に来てから、百合子は紅涙を吞んで、みすみす散つて行った美花の数々を何度も見聞してきた。それだけに自分だけが特別扱いされる筈はないし、そのときが長引けば長引くほど、怖しさが募ってくる。それは、もはや百合子にとっては、形を変えた一種の拷問以外の何物でもなかった。そのような百合子の苦悩をよそに、有明は悠々と二服目の緑茶を吞み干してしまった。

百合子は、自分の必死の抵抗が軽くイナされて行くのを感じた。その反対に、自分が次第々々に有明のペースに、はまり込んで行くのを、どうしようもないと思ひ始めた。誰でも魅入られてしまった有明のパーソナリティが、ここでも魔力を示しつつある。

再び、もとの居間に戻ったとき、百合子にも、又、有明自身にとつてすら、意外な出来事が待ち受けていた。その事が百合子を、より一層、有明に屈服させることになる。

お年寄の柏木が不時のお目通りを願い出てあまつさえ、お人払い、ここでは百合子を指すのだが、つまり有明と二人だけで個人的なお願いを聞いていただきたと言つたのであ

る。

有明は、どのように秘密の願いがあったとしても、今日は折角、百合子という初花の美しさを愛でているのだから、百合子を下げるわけには行かない。強いて会いたいのなら、今ここで、百合子のいる前で言ったらよからう——と、答えた。

これ一つをとっても、不馴れな百合子にはどうしてよいか分からない程の、とまどいであった。高い身分の方が、特に百合子を遠ざけて話したいと願っていることを、百合子は耳にしたくないと思った。そして、このことが有明の百合子に対する寵愛の深さを示すものだとすれば、それが、かえって、お年寄の不興を買ってしまうのではないかと危惧したくなる。

有明の命令は、絶対だった。柏木は百合子を追いつことが出来ないまま、お

そるおそる、居間に入ってきた。

「……」

思わず、息を呑む思いの百合子。なんと、柏木の局は一切の衣類を脱ぎ棄て一糸まとわぬ全裸になっていたのである。平伏する白い脊中に、オスベラカシに束ね

た豊かな黒髪が鮮明なコントラストを作っている。百合子には驚きだったとしても、この国では、むしろ異とするに足りないことだったと言えよう。何故なら、ここでは「裸体こそ正装」だったから、柏木が何事かを改まって願ひ出る場合、このような姿で、お目通りへ出るのが当然だったのである。有明にとってみれば柏木が、このような恰好で出て来た以上、彼女が何を乞おうとしているか、大方、察しがつくことであった。

そこで彼は、いきなり言った。

「柏木、死ぬことは許さないぞ」

ハッとしたように柏木は顔をあげた。みるみる美しい両目が泪で一ぱいになった。

肉体番号A—九三号、一九六二年、すでに二十八才で誘拐されてきた彼女は、もう三十五才になろうとしていた。有明の寵を受けた年増盛りの美しさも、ようやく爛熟期を





過ぎて、蔽いかくすべくもない疲れが目尻に小ジワを刻んでいた。大体、この国では女の花を最大限に咲かされるので、個人差はあるけれども、早く萎んでしまう例が少なくなかったのである。柏木も若く凋落して行く花群の一人だったらしい。人事担当のサラ・ロスタンから、予備役編入の内意を電話されたのが、有明の来るツイ一日前のことであった。

前にも述べた通りパレス・エリアを構成するものは有明に奉仕する数千の美女たちで、五段七階級にわかれて、上は貴和を頂点とする貴妃グループから下は最下級の家畜・家具人間にいたる管理社会をガッチリと築きあげている。これらは現役要員であるが、蔭にあって現役員にサービスしたり、監視したりする部門がある。夫々、管理部・監察部と呼ばれるマスターに直属している。これらの部門に従事する要員として予備役に編入された人々が、あてられるのである。勿論、専門家、たとえば懲治檻のカウンセラーなどの場合は、必ずしも現役からリタイアした者ばかりでなく、直接、命課される事例も少なくない。いずれにしても女性ばかりであるが、年輩者が殆どである。特に監察部では、国内のあらゆる

場所に張り巡らされている盗聴、盗視システムを軸とする摘発事務を管掌するという性質上、高官から隠退する女性が要員に任命されるのが通例となっている。したがって、柏木の局が予備役に編入された場合、この監察部に命課されることは先ず間違いないことであった。

ところが、熱狂的に有明に仕えてきた柏木にとって、隠退生活に入るなどということ自体、屈辱としか言い様のないことであった。そんなことになる位なら、いっそ死んでしまいたいと真剣に願う、そんな雰囲気、この国には、あった。事実、その例は決して少ないものではない。安楽死を許された女は、喜んで死につき、その遺体は永遠に不老の剝製となつて、メモリアル・ホールに安置されるのである。

柏木の局は、必死の願いを瞋にあらわしてむせぶように訴えた。

「何卒、何卒、柏木の最後のお願いを、お聞きとだけ下さいまし。現役を離れて、わたくしは、もうマスターに、お仕え出来るという氣力がございません。わがままではございますが、どうか、どうか、お許し願います」

あとは、畳に額をスリつけて、動哭するばかりである。

いつか百合子も貰い泣きをしていた。それはドグマだった。狂信としか言いようのない生命軽視だった。それなのに、喰い去ることのない真剣さが、みなぎっている。悲愴感にあふれている。

いつも明決な判断を下す有明でさえ、ジッと黙ったまま、石のように身動きもしない。柏木の心を汲めば、彼女の死を認めてやらなければならぬのだ。

死なせたくなはない。さりとて命令を撤回することも出来ぬ。

二人の美女は明暗をわけて有明の傍に坐っていた。

二人の境涯は今日を限りとして懸絶して行くであろう。

百合子には輝かしい未来があったけれど、柏木に残された最後の光耀は現役のままのユースネディア（安楽死）だけだったからである。

奈保子の自由日記帳より

私

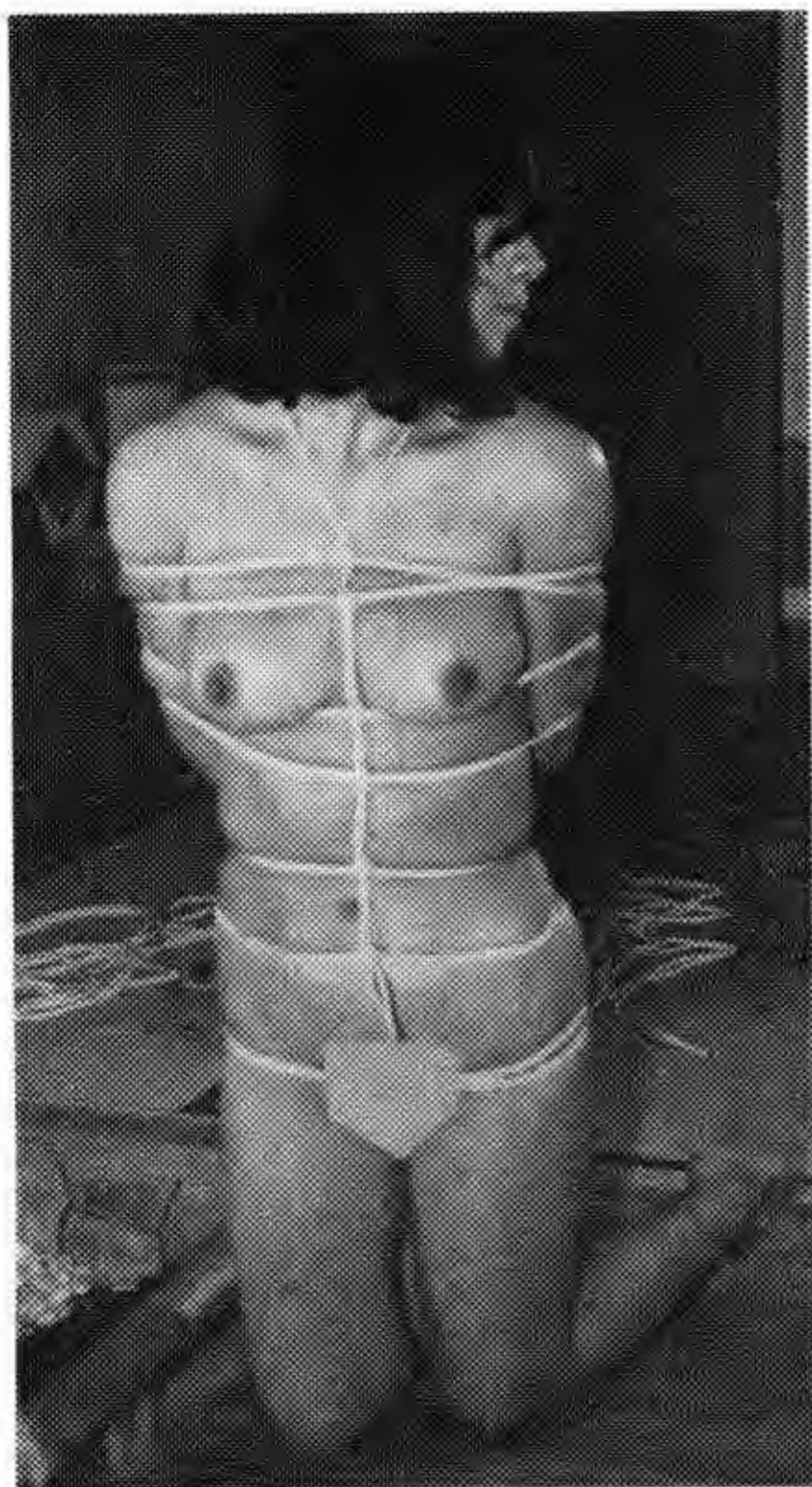
の

玉

手

箱

笠井奈保子



△編集部註▽

六月号のカメラ・ルポで誌上に初めて姿を現わした笠井奈保子さんの書いていた自由日記を見せて欲しいと塚本鉄三氏を通じて、かねてから依頼していましたが、この程やっと承諾を得て一見することが出来ました。

この日記は、彼女が高校卒業という多感な思春期に、母の死、引続いて新しい義母の登場、父の事業の失敗、両親の別居という、あわただしい運命の激変にもめげず、素直に明るく生きてきた青春の、ひとときを刻明に書き記してありました。

その上、昭和四十六年末からは△縄によって縛られた女の写真▽に対する異常なまでの



執着が書かれていて、今年二十才になり、また近く二十一才を迎える、笠井奈保子という一女性の心情の変化を見る上に大変、参考になりました。若き女性のM心理を研究するためにも是非、その一部を誌上に発表させてほしいと思いましたが、なにしろ自分の思ったことを、ありのまま心覚えとして書きなぐった自由日記ですので、発表の諒解を求めることさえ、躊躇されました。

幸い、塚本鉄三氏が再三、説得してくれた結果、二、三の条件つきで、やっとOKを得ることが出来ました。日記であるため、筆者のプライベートに関することでSMに縁のうすいところは極力、削除して誤字脱字を訂正の上、発表の体裁を整えました。日付は打っているのですが、彼女の希望によって故意に伏せました。原文は大学ノートに鉛筆で、びっしりと書き埋めてありましたので、改行、前後の入れ替え、句読点などは編集部に於いて読み易いように体裁を整えました。

尚、挿入しました写真は、塚本鉄三氏撮影によるもので、笠井奈保子の第二回目と第三回目の緊縛フォトの中の一部です。

# 〔笠井奈保子の自由日記〕抜粋

昭和四十六年

十一月××日

エイコより電話あり。この前の土曜、日曜に二人で行った小豆島しょうじまの一日旅行の楽しかったことを話しあう。思わず長ばなしをしてしまったで一時間近くも電話にかじりついてしまったため、姉から「ナオちゃん、いい加減にしときなさいよ」と叱られる。

「でも、私からかけたんじゃないのよ。向こうからかかってきたんだもん」と言ったら、「だったら、早く切ればいいのに」って、凄い目で、にらまれた。

エイコは高校時代からの親友、それに卒業してすぐ勤めた会社も一緒、私は半年ばかりでやめたけど、エイコは今でも勤めている。だから、よく電話がかかってくる。

本当は藤木英子ひでこというんだけど、高校時代からヒデ子の（英）が英語の英だから、誰いうとはなしに皆で「エイコ」と呼ぶようになってしまった。

エイコと一緒に勤めたところが従業員三百人ばかりの食料品製造会社。その中で三分の二が若い女性なので賑やかなこと、賑やかなこと。寮は今まで広い部屋に十人位ずつだったのが、先輩の人たちが抗議したとかで、私

たちが入った頃は、ベニヤ板で仕切って三帖の部屋に一人ずつ、住むようになっていた。

でも、夜、寝るときになると、親しい友達がコソコソとおフトンの中へもぐり込んできて、結局二人で寝たり、なかには三人、四人で、ぎゅうぎゅう詰めで寝る子もあった。

私のおフトンにもぐり込んでくるのは、いつもエイコ。股の間へ足を押し込んできて、寝巻きの前をはだけて、胸と胸、お腹とお腹をびったりとくっつけて寝たこともあった。どちらからともなく、口を合わせて初めてキッスしたときは、とてもテレクさかった。

十一月××日

今日は、よいお天気。裏の広場で洗濯物を干していたら、工場の若い男達がブロックの上に腰を下ろして、ミニスカートの私の脚をじろじろと見て、冷やかす。

「白い足やなあ」「もっと腕あげてみ」なんて言っても黙って干していたら、「もう毛はえてんやろ」と、大きな声で言って、みんなでゲラゲラ笑う。私は洗濯物をバケツに入れたまま、庭へ戻ったら姉さんがいたので、「あの人ら、あたいを冷やかすんねん。姉さん、怒ってエナ」と告げ口したら、姉は足早やに、つかつかと出て行って、



「あんたら、何してんねん。油うらんと、せつせと働かんかいな」と、どなりつけた。

昼からは義母のところへ手伝いに行く。

十二月になったら忙しくなるので、きつと手伝いに来てネと約束させられる。

姉は私が義母のところへ行くと、とても機嫌が悪い。「本当のお母さんじゃあるまいしそんなに行かんでも、いいやんか」と言う。

それでも、時々電話したりするけど、一番上の東京の姉なんかは手紙も出さないらしい。

十二月×日

ゆうべは、ぐっすり眠れた。朝九時ごろ目がさめたけど、このあたりは朝おそいので私も寢床の中でラジオを聞く。東大阪市の姉の家だったら、もうとくに朝御飯もすんで、工場も動いて、てんてこまいの頃だ。

廊下を拭き掃除する。ストッキングをぬいで板の上に素足をおろすと、べっとり吸いつくようで、足がたが残る。私って、脂足なんだろうかしら。ストッキングのままだったら滑るし、スリッパをはいてたら、やりにくいので、ハダシでペタペタと歩く。

お正月は彦根の父のところへ遊びに行くことにきめているので、十二月は寿亭の方のお手伝いをしようと思う。

義母から「貴女のお嫁入りの準備に」といって、五万円をもらう。今までたまった郵便貯金は八十六万七千円になった。これが私の唯一の財産である。百万円になるのは、いつのことかしら。

十二月×日

昨夜、使った小部屋のあと片づけをしていたら妙な本が出てきた。おザブトンの下に敷いたようにして置いてあったから、きつとお客さんが忘れていったのだろう。週刊誌なんかは、忘れるというより置き捨てにしてゆかれるお客さんが多いので、そのまま屑かごへ投げ入れたりしているけど、これは月刊雑誌なので、忘れていったのに違いない。

黒い表紙で奇譚クラブという誌名が書いてある。パラパラとページをめくって、びっく



りした。今までに見たこともないような内容なので思わず知らず拾い読みしてしまった。

縛られた女の人のシャシンが、先ず私の目にとびこんできて、釘づけにしてしまった。

こんなことってあるのかしら？———と思わず自分の目をうたがったけれど、たしかに、この雑誌には、それが載っているのだ。

若い女の人がハダカで縛られているシャシンを見たとき、まるで自分がそうされてるみたいに、胸の内が、きゅうとなった。乳房全体が、しめつけられるみたいで、かたくなった乳首がシャツにふれて、痛い。

黒い表紙に赤い字で1と書いてある、なんの変わりばえのない雑誌なんだけど、私にとっては胸をドキドキさせるものを持っているのは、私にはなんのことかわからない。

何気なく、ぱっとひらいた四十頁のところに、ハダカの女の人が縛られて床の上にころがされ、両方の足をひらいているシャシンと次のページのタタミの上で身体をねじったようにして素ッパダカで縛られている女の人のシャシンが、わけもわからず、私に今まで感じたことのないような気持ちを起こさせた。

私はあたりを見まわしてからボタンと雑誌をふたして、新聞紙で包んで帳場へ持ってい

った。私はお座敷へ出ないので、そこにどんなお客さんがいたのか知らないけど、もし忘れ物で受けとりに来られたときのことを考えて帳場へあずけておいた。

あの雑誌を、もっともって見たいという気持ちが強い。あのハダカで縛られている女の人のシャシンが見たい。でも、あのシャシンを見たときの、なんだか身体中がきゅっとしてそして、身体を中心を熱いものが走ってゆくような気持ちが、なんだか私は悪いことをしているようで、あわててページをとじ、新聞紙で包んでしまったのだ。もう一度、ゆっくりと見てみたい。夜になったら、そっと取り出してみようかな。

十二月××日

あの日から六日もたつけれど、あの雑誌を受けとりにくる人がいないので、帳場からもらってきて、自分の部屋で包みを開ける。

毎日毎日、見たくて仕方がなかったんだけど今日まで辛抱していた。帳場の茶ダンスの違ひ棚をチラッチラッと、その前を通るたびに眺めながら、見たい、読みたいという気持ちをおさえてくるのは大変だった。

奇譚クラブの1月号を手にして、もう一度はじめから、ゆっくりページをひらいて眺め

てゆく。今度は二度目だから、最初のようなショックはないけど、やはりそれでも、胸がきゅっと引きしめられるようになり、思わず両膝をすり合わせて、オシッコをこらえているときのような気持ちになる。

やはり、最初にみた四十頁のシャシンを見るために、そこを開く。塚本鉄三さんの『全日空機で来た女』という題の文章である。

シャシンが何枚ものっていて、縛られて、うっとりとした表情の女の人の顔が、とても魅力的に見えてくる。口の間に手拭いをくわえさせられているのも、よい。

私って、なぜ、こんなに縛られた女の人のシャシンにひかれるのだろうか。シャシンだったら、自分に関係がないので安心して見ていられるというのだろうか。四十二頁のうっとりとした顔付きは、これはなんのためか、私にも、うすうすわかるような気がする。文章の方は、むつかしくって私には、なかなかよくわからないんだけど、シャシンの方だったら、文句なしに好きになれる。

この雑誌は私のものにもらっておこうと。デパートの包紙できれいにカバーしてセロテープでとめておく。これで、時々とり出してはシャシンを眺める楽しみが出来た。

晩は忙しくって、てんてこまい。後始末もせずに、ぐっすり眠る。

十二月××日

毎日、忙しい日が続く。三十日には彦根の父の所へ帰るから——と義母に言う。やはりお正月は父の面倒を見て、親孝行しなくっちゃいけないと思う。たった一人の父だもん。

姉からも、たまにはおいでよって、電話がかかってきたけれど、私にはなんだか、こちらの方がショウに合ってるみたい。第一、食物はこちらの方がダンゼンよろしい。

エイコ、遊びにくる。夕方ちょっとだけ。

近くの喫茶店でダべったけれど、エイコが時間がないというので、残念だったけれど、二十分ばかりで解放したげる。洋服、返してもらう。

十二月××日

いよいよ、あしたは彦根へ行く日。交通公社へ切符を買いに行ったついでに、奇譚クラブの二月号をさがしに行く。三軒まわったけれど、みな置いてなさそうなので駅前の硝子戸をしめた書店をのぞいてみる。一月号の末尾に八次号（二月号）は十二月二十五日に発売いたしますと書いてあるので、あるんだったら、きっとあるわ——と思って、端から

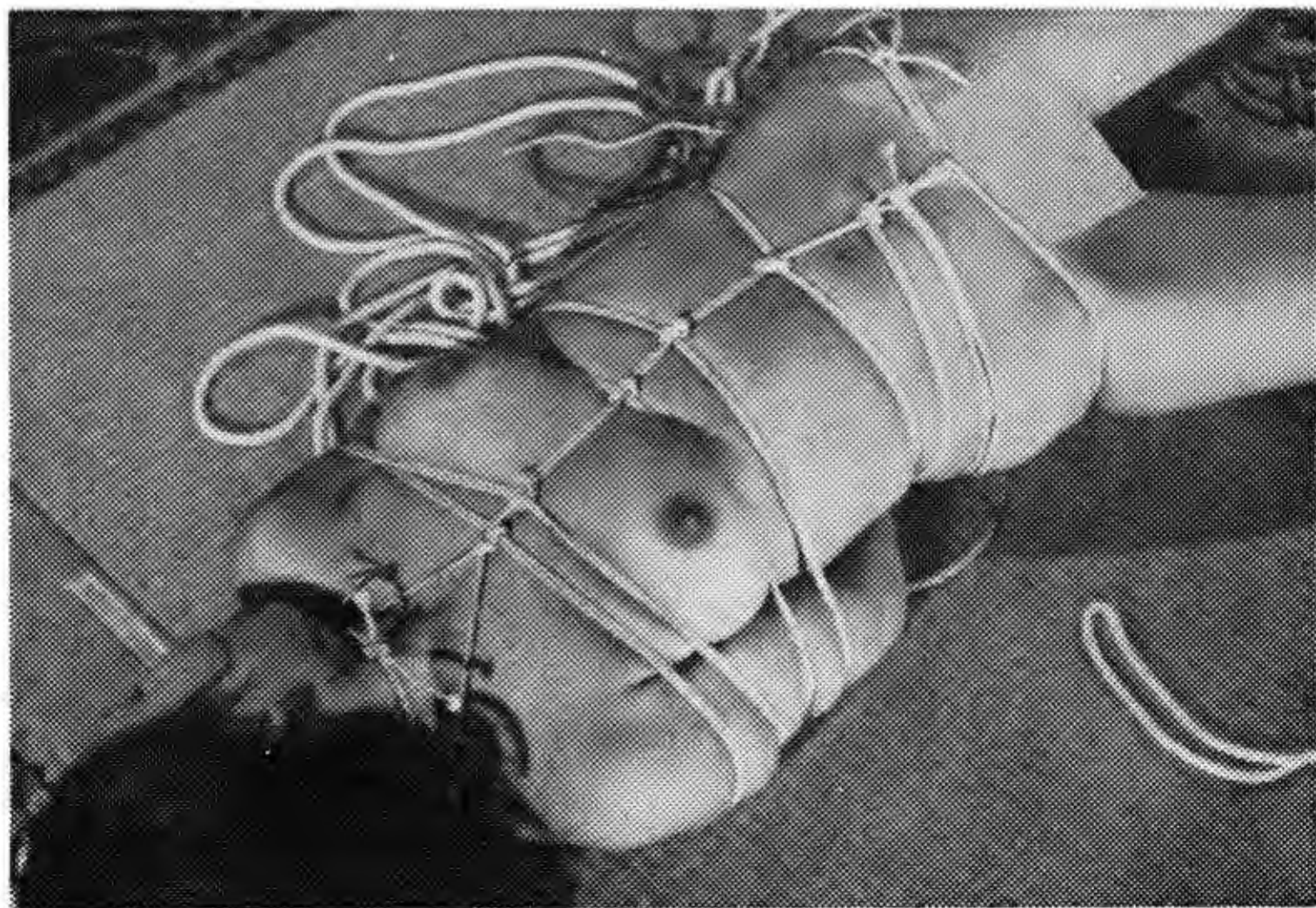
たんねんに見てゆく。

あった、あった。今度は、赤い表紙。青で2と書いてある。ちょっとぴり恥かしかったけれど、思いきって三百五十円、出して買う。

宝物のように胸にかかえて帰る。

やっぱりあった塚本鉄三さまの「縄に恋した女」。すばらしいシャシンに思わずみとれてしまう。うしろ手が背中であぐらで首すじ近くまで縛られてあがっているのには、ぞくぞくしてしまふ。両方の握りこぶしの力をこめている様子がわかって、うらやましいような気持ち。自分でも、しらずしらず、両手をうしろへまわしてこぶしを固く握っていた。

タタミから離れて柱にういて縛られているのなんかも、とても凄い。印刷ではなしに本当のシャシンが見たいものだと思う。





夜は寝床の中でゆっくりと二月号を読む。

十二月××日

彦根に着く。父は元気。私が久しぶりに帰ってきたので大変、喜んでくれる。

水がきれい。父が今まで趣味で飼っていた錦鯉が今では結構、高く売れるそう。ビワ湖の水が通っているとかで、都会では、とても考えられないような、のどかさである。

父は事業に失敗したとき、一時やつれてい

たけど、この頃は血色もよくなって元気になっている。父は私には言わなかったけれど、義母の言葉によると、寿亭は義母の名義にな

ってるけど、本当は買うとき全部、父がお金を出したのだそう。

くわしいことは私にはわからないけど、父

が借金をたくさん残して事業に失敗したとき

義母名義の寿亭も債権者にとられてしまうの

を防ぐため、それを誰にも言わないとのことだった。私には何のことかわからない。でもせっかく一緒になった父と義母が別居しているのも、そのせいかしら。

ああ、私には何も、わからない。

「みんな元気にしてるかい？」

父が私に、そう聞いた。それは私自身のことと言ってるのか、姉の家族のことを言ってるのか、それはわからなかったけれど、

「ええ、みんな元気よ」と返事してから、

「お義母<sup>かあ</sup>さんも元気に働いているわ」

と言ったら、父が

「あれのことをお母さんと言ってくれるのはお前だけだなあ」と、しみじみ言って、あとは何か考え込むような風だった。

夜、持ってきた奇譚クラブの一月号と二月号を読む。最初ページを開いたときのような感激はないけれど、文句なしに縛られた女の人のシャシンを見るのは好き。思わずゾクゾクとしてしまう。

夜は至って静か。水鳥の鳴くような声がしたけれど、私のソラ耳かしら。

エイコに手紙を書く。

十二月××日



昨日から考えていたことを、今日はどうしてもやりたいと思った。一晩中、迷った上で今朝になって、とうとう決心がついた。

それは、奇譚クラブに、あの私の大好きなシャシンをのせていた塚本鉄三さまに手紙を出すことである。一枚でもいいから、あのシャシンを見せて下さい——と。

朝は大変なモヤだった。

窓を開けても、まるで牛乳のなかにつかっているみたいで、庭の梅の木もぼんやりとしか見えない。都会とちがって、スモッグではないと思うんだけど、なんだか変なぐあい。窓を開けていても少しも寒くはないけれど湯気のようなモヤが室内へ流れこんでくるので硝子戸をしめる。

机の前で便箋をおいてボールペンを持ったけれど、なにから書いていいのやら、一字も書けない。ペンをほり投げて、タタミの上にごろりと横になって雑誌を手にする。これなんべん、この雑誌を手にしたことだろう。

高村浩子さんのM女通信「プレイに徹したい」のシャシンが気に入ったので文章をひろい読みしてみる。私もこんなに上手に文章が書けたらなあ、うらやましくなる。口を手拭いでおおったシャシン、それに口の間に手



拭いをかましたシャシンが目に入る。これは声を立てさせないためにするものだろうか。息ぐるしいのではないかと思う。

父は朝早くから錦鯉を見まわりに行くからと池へ出かけた。一匹何万円もするのがあるとかで大変、大事にしている。おヒル前に、やっと手紙が書けた。住所が

わからないので暁出版株式会社編集部宛で塚本鉄三様として出す。

昭和四十七年

一月×日

彦根の父の所にいたのは十日少しだったけれど、娘の私がそばにいてあげたので父も非常によろこんでくれた。十二月は寿亭の手印



いをしたので、一月は姉さんの所へ厄介になることにしている。

大阪駅から地下鉄に乗り替える。彦根の父



の家では、のんびりとした田舎の空気にひたっておれたけれど、これから又、ごみごみとした町工場の中へ帰ってゆかなければならぬ

のかと思うと、うんざりする。でも、落ちついておれる自分の家<sup>うち</sup>というものがないので仕方がない。

エイコと姉と義母に電話する。ミナミで買物をしながら時間をつぶし、エイコと待ち合わせて夕食を一緒にする。エイコは寮を出てアパートに住みたいと言う。それだったら、二人でマンションを借りない？ と意見が一致する。さしあたり、私が部屋探しの役を引き受ける。

午後八時半、帰宅。夜すこし、雨。

一月××日

塚本鉄三さまのお手紙姉の家にて受けとる。お

返事は、きっと下さらないと思っていたのにこんなに早く下さるとは、なんだか夢の様。シャシンは沢山あるから見せてあげよう——と書いてあった。

見ず知らずの人に、こんなことをお願いして、私って、厚かましい女だわ。と、そう思っている、いろいろのシャシンを見たいという気持は、とても強い。でも、なんとなく恥かしいのも事実。

こんなシャシンをうつす人って、どんな人かしら？ ちょっと怖いみたい。でも、お返事の手紙を出すくらいなら、いいでしょう。

一月××日

また、お手紙をもらった。

逢うのだったら、場所はどこがいいか？

って書いてあったので、近鉄の長瀬駅の前だったら、と返事する。SMという言葉やプレイとか緊縛とかいう言葉を少しずつ覚える。

二月×日

速達のお手紙を、もらう。

場所は私の希望したところ。車で迎えにきてくれるというので、車の色とナンバーを書いてくれてあった。あと二日、なんだか嬉しいような怖いような変な気持。別に私が縛られるってわけでもないのに、なんでだろう。

奇クの三月号を、やっと買う。表紙をあけたら、すぐ目に入った中河恵子さんのシャシンは非常に気に入った。顔は縄でかくれてわからないけど、大変、脚のきれいな人だと思った。このように女の人は縛られていると、なぜ美しく見えるのだろうか。

塚本鉄三さまのカメラ・ルポルタージュの「水車小屋緊縛記」がのっているので、先ずページをめくる。深田菊子さんの美しい縛られたヌードに目を奪われる。なんだか、この深田菊子さんが、うらやましいような気持。

二月×日

午後二時、少し前に長瀬駅に着く。

駅前へ出て、うろうろしていると、ポンと肩を叩かれた。

「笠井さんでしょうか？」と言って微笑む。

「よく私ってわかりましたわね」と尋ねたら「だって、若い女の人って、貴女だけでしょう。お手紙からして直ぐわかりましたよ」

自信ありげに言って、車の方へ案内してくれる。三月号にのっていた深田菊子さんのことを話そうと思っていたのに、なんだか言いそびれてしまって、とうとう言えなかった。

車は生駒山の方へ走っているのはわかったが、私には一度も通ったことのない道なの

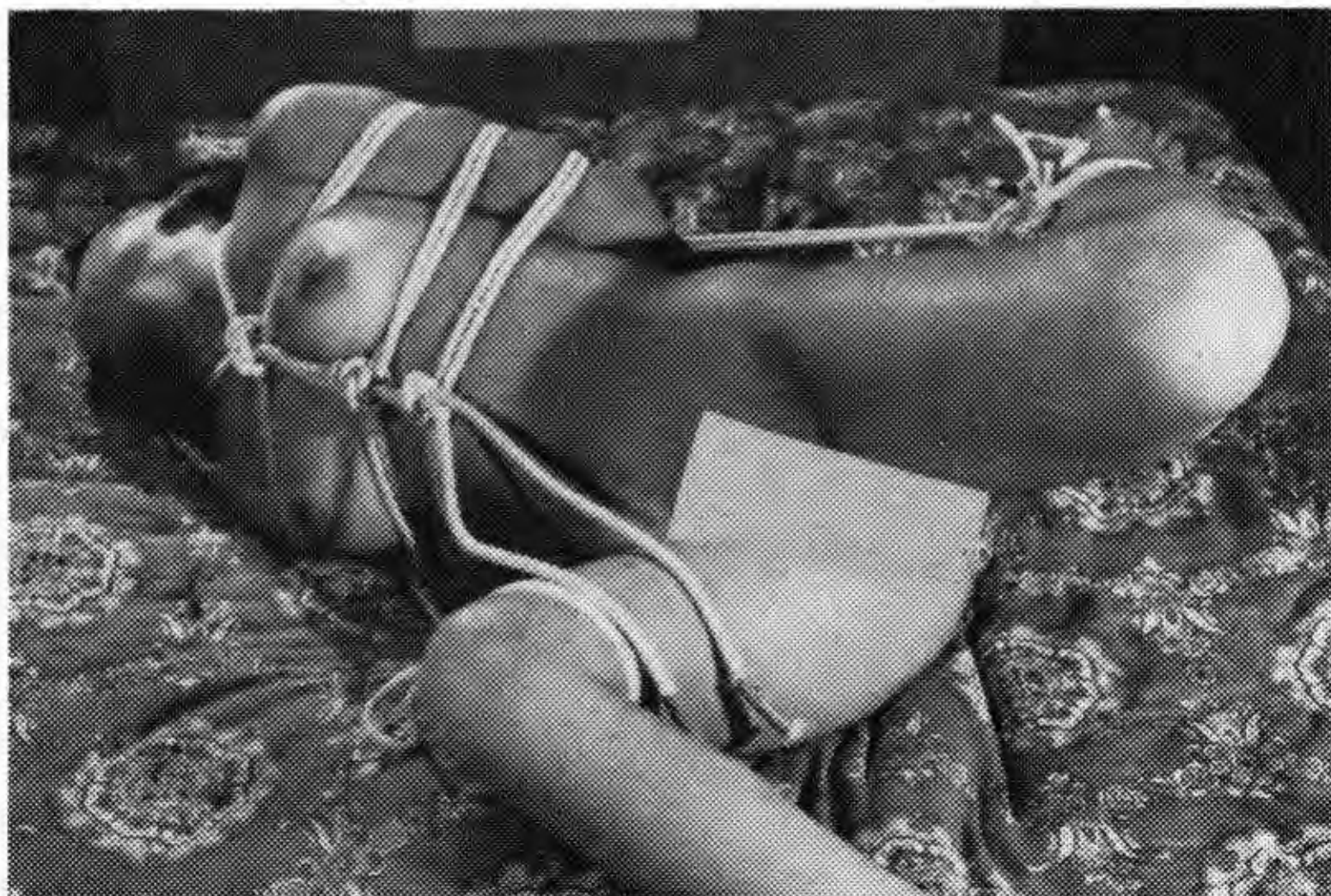
で、どこであるのか、さっぱりわからない。

一軒のレストランに車をとめて入る。

すいていたけど、一番奥のテーブルの壁を背にして塚本さまと並んで腰かける。

飲物を注文して待っている間、大型の封筒からシャシンをとり出して私の目の前に、ぱらっとひろげて見せられたとき、私は思わずハッとしてそのシャシンを反射的に両手で受けていた。

それは大きなシャシンだったので、私は目の前に、その女の人がハダカで縛られたのかと錯覚して思わず頬が真赤になった。それに注文した品物を持って、いつウエイトレスであられるかもしれないと思うと、私は自分の心が、すべての人に見すかされたようにで狼狽しないではいられなかった。







シャシンを持つ自分の指が、押さえようと  
しても押さえようとしても、がくがくとする  
のを止めることは出来なかった。結局、私は  
そのシャシンに、よう目をうつさないまま  
膝の上で、かくすようにしてしまった。

ドキドキと早鐘のような胸の高まりが、や  
みそうになく、私は早くおさまるのを神に祈

るような気持で、じっと待っていた。幸い、  
あたりに人がいなかったで、こんな私の様  
子を見ている人はなかったけれど、人に見ら  
れたのではないかと考えただけで、いたたま  
れない気持になった。

気持が落ちついてくると、さっきチラッと  
眺めたカラーの大型のシャシンが見たくて仕

方がない。ジュースを飲むのもそこそこ外  
へ出て、再び車の人となる。

「車の中で、ゆっくり見なさいよ」

とわれて、しっかりと胸にだきしめてい  
た封筒からシャシンを、とりだす。塚本さま  
には自分の心の中が、すっかり見すかされて  
いるようで、恥かしい。膝の上で一枚一枚、  
ゆっくりと見てゆく。さっきは、レストラン  
だったので、本当にびっくりさせられてしま  
ったけれど、車の中だから安心して見れる。

全部、見終わったところで三枚あるカラー  
シャシンをもう一度、見る。縄の喰い込んだ  
ピンク色の肌が美しい。見ているうちに手を  
にぎりしめたので掌の中が汗ばんでくる。私  
がカラーシャシンばかりを、じっと見ている  
ので、

「よかったらカラーのスライドも見せてあげ  
てもいいよ。千枚以上はあるから」

「スライドっていうと？」

「プロジェクターという幻灯器のようなもの  
で白い幕に映すんだけど、凄く大きくなるし  
鮮明で色もきれいだよ。ただ映画館のように  
室内を暗くする必要はあるがね」

「是非、見せていただきたいわ」

もっともっと、いろんな変わった美しいシ



ヤシンを見せてほしいと思った。このシャシンも一枚でも二枚でもほしいと思った。でもそんな厚かましいことは言えないので、袋に

ヤシンが三枚も入っている。この間、見せてもらったのよりは小型で角封筒にぴったりと入る大きさである。

おさめてお返しする。わざわざ、私のために見せて下さっただけでも有難いの、これ以上の無理は、お願いできない。

もっと、縛られた女の人のシャシンのことで、お話をききたいと思ったけれど、いつの間にやら今里駅の近くまで来たので、車から降りしてもらって、お別れする。

夜は日記を書いてから今日、よう言わなかったことなど、手紙に書く。今日、見せてもらったシャシンは、ほんとうは欲しかったのだけれど、欲しいとは、よう言わなかったと書いた。

二月××日

早速、返事を貰う。シ

手も足も縛られて極端におし曲げられたような格好で二つ折りになっている女の人の顔の表情が、よく出ていた。そりかえったように力のこもった足の指を見ていると、この女の人が、いかに苦しさを一生けん命にこらえているかが、わかる。まるくつき出たお尻のふくらみも、曲げられているので、はちきれそうに張りきっている。乱れた髪の毛が額にぱらりとかかっているのも美しい。

自分の部屋なので、ゆっくりと何度もくりかえし眺めることができるので楽しい。

シャシンを見た感想と共に礼状を書く。モデルになってほしいという申し出には、きっぱりと、お断わりする。だって私のようなブスがモデルになったって、よいシャシンができる筈がないもの。第一、フィルムがもったいないと思う。身体の線だってゼンゼン自信がないし、それに恥かしいわ。私のような者がモデルになるなんて。これだけは、なんとしてもお断わりしなければいけないわ。

二月××日

私がモデルになることをお断わりしたことについて、決して貴女は自分で思っておられるように不美人ではないと、考えなおすようにと、折り返し手紙がきた。初めてあったと



きの私の印象を非常に好意的に書いてあるのを読むと、やはり内心は、うれしい。

でも、シャシンを見るのは楽しいけれど、自分がモデルになるなんて夢にも考えたことはなかった。シャシンの人達を、うらやましいと思ったことがあっても、自分がシャシンにとられるなんて思っただけでも恥かしい。

今日のシャシンは五枚、入っていた。深田菊子さんという方のらしい。若くて柔らかそうな肌に縄が、きっちりと掛かっていて、全体に清潔な感じがして顔も可愛い。私と違って美人とか、可愛いちゃんと呼ばれてもいい人である。カラーではないけれど、いかにも肌の色が白そう。

なぜ、このように縛られた女の人のシャシンに引かれるのだろうか、と、自分ながら不思議に思う。でも、自分にも、それはなぜだか、わからない。なんだか、あやしい魅力がこのシャシンの中に秘められているのかもしれないと考えたりする。

シャシンをアルバムに、はる。計八枚。

二月××日

奇ク四月号を手に入れる。

これで私の持っている雑誌は四冊になる。表紙にカバーをかぶせてセロテープでとめ

1234と、番号をうっておく。いろんな言葉をおぼえるため日記の末尾にメモしておく。

S M、緊縛、浣腸、プレイ猿ぐつわ、高手小手しぼり、後手しぼり、股間しぼり、エビ責め、ローソク責め。

四月号で気に入ったのは、やはり表紙を開いた第一頁に出てきた、佐々木真弓さんの「高手小手」というシャシン。後手が一分のすきもないほどきっちり縛られていて、しかも、この女の方の筋肉が柔らかいのか、よく手首が上がっている。お乳も上と下を、ぴったりと縄でしめつけられているので、とびだすように盛りあがっているのが、見事だ。何度、眺めても、見あきない美しいシャシンである。

塚本さまの文章がのっていないので、ちょっと淋しい。

四月号の感想と、そのことを



書いた簡単な手紙を出す。モデルのことについて、わざと書かなかった。あのことは、どうぞ忘れて下さるように――。

三月×日

今日のお便りを受けとったとき、ずしりと手ごたえがあると思ったら十二枚のシャシンが入っていた。うれしい。

貴女のように緊縛シャシンの好きな人は今までに知らない――と感心した上で十二枚の沢山のシャシンをプレゼントして下さった。

やはり四月号の第一頁の「高手小手」のシャシンは、塚本さまがおとりになったのね。そう確かに書いてあった。

「もし貴女がモデルになって下さるのなら、腕によりをかけて、素晴らしい緊縛フォトを撮影してみせますよ」と言われてみると、なんだか、お尻がもじもじしてくるみたい。私のような女でも、きれいなシャシンがとれるかしら？ いや、ダメダメ、私のような者に美しいシャシンが、とれるわけがないもの。

やっぱり、はっきりとお断わりしよう。塚本さまが私のような者をアテにされると、お気の毒なもの。私は平凡で美しくない女。

シャシンが、だんだん集まってくると、もっと沢山はしくなる。私って欲ばりね。アル

バムに、はってあるシャシンを時々とりだして眺めるのは、とっても楽しい。

こんなに、つまらないお便りを何度も出して、ご迷惑かしら――と思うけど、つい書いてしまう。ごめんなさいね。

三月×日

私のお手紙が、さいそくになってしまったのかしら。またまた沢山のシャシンを頂く。

今度は、いろんなモデルの方の、いろんなポーズがまじっていて思わず頬ずりしてしまう。なにはさておいてもアルバムに順を追って、はってゆく。シャシンの裏にモデルの方の名前を書いてくれてあったのでアルバムにはってから、シャシンの下に名を書く。

荒尾慶子、高村浩子、深田菊子、佐々木真弓、福井桃子、中河恵子、前田真知子、松本たえ、江口淑子などの名前がある。

相変わらずモデルになってくれるようにというお誘いの文面が、私には恐ろしいもののように迫ってくる。プスだからイヤという、お断わりの理由も、それを否定されてしまう理由で、今度はモデルになるのが恥かしいというようにシャシンを沢山、頂いてしまうとムゲにお断わりするのも悪いような気がしてくる。

一枚か二枚だったら、なんとか恥かしさをその間だけ辛抱できるかもしれない。そんなことを考えたりする。バカな私。

素裸にならないんだったら、恥かしさも大分ましかもしれない。でも、送って頂いたシャシンは全部にもつけてないものばかりだったわ。どうしよう？ 今度の手紙は、ほんとうに無茶苦茶な書きぶりになってしまい、ポストに入れようか、どうしようかと大分、迷ったけれど、決心して投函する。

三月××日

いよいよ私の、おそれていた手紙がきた。一、二枚だけなら私になってみようかしら、と、つい書いてしまったお便りを、もうモデルになるのを承知してしまったような書きぶりです。日と時間と場所を指定してきていた。

もうこうなったら、仕方がないわ。覚悟をきめて撮ってもらおうかしら。でもシャシンが出来上がってから、こんな筈じゃなかったって悔んでも、私、知らないわよ。

このごろの私の自由日記帳、こんなことばかり書いてしまって、ちょっと変ね。

シャシンは、私がハダカにこだわっていたみたいなので、着物を着たのと、洋服を着たのと、三枚ずつ、まざっていた。やはり、な



んといってもハダカのものが多い。見るといふ点では私も、やっぱりハダカで縛られている方が美しいと思う。同性のハダカって、なんとなく見たいもの。それに縄で、ぎゅうぎゅう縛ってあったら、最高。

アルバム、一冊目が、いっぱいになったので、二冊目にうつる。

「いずれ貴女のシャシンでアルバムを飾るようになるでしょう」って書いてあったけど、ほんとうに、そんなことになるかしら。

それと、もう一つ。私が前に日記を、ずっと続けて書いているって言ったら、ぜひ見せてほしいだって。私のお友達のなかにも、日記を書いている人は、ちょいちょいあるけど、日記を見せるなんて、とても恥かしくって、そんなことイヤだわ。またなんで、人の日記なんて見たいって言うんだらう。

三月××日



待ち合わせ場所は、やはり長瀬駅前。次はどこか適当な喫茶店でも探しておこう——と言われる。今日は朝起きたときから、なんとなくドキドキしていたんだけど、車に乗せられてみると、口がねばねばして物も言えないくらい乾いてくる。なにかと聞かれることに受け答えるのが、やっとである。

どうしよう、どうしよう？　と思っていると自然に頬が熱くなってきて仕方がない。

今日は縛られてシャシンをとられてもいいと決心してきたのに、やはりいざとなると、恥かしくって仕方がない。どこをどう通って部屋へ入ったのか私には、さっぱり記憶がない。気がついてみたら、今まで見たこともない珍しい造りの部屋に来ていた。

日記を書きながら、道順や部屋の造りを必死に思いだそうとするのだが、なんだか、ぼんやりとしていてはつきり思い出せない。私って、一体どうしたんだらう。

お風呂へ入って、背中を見せて立っているところを、うつされたことを覚えている。そのとき、カメラの方を向くように、さんざん言われたけれど、恥かしくって、タオルで顔と胸をかくして叱られたっけ。



さんざん手こずらせて、恥かしさに身体中を真赤にしたけれど、シャシンをうつし終わってしまつと、今までの騒ぎが、なにかしら快いもの思えて、あんなだったら、もっと、うつしてくれて、と思った。

部屋へ戻ってからのこと、私はまるで赤ん坊のように、なにからなにまで面倒をかけて

しまつたらしい。縄で後手に縛られるって、思ったほど痛くはなかった。でも、両手の自由がきかなくなつて、自分の前をかくすことが出来ないのが、とても恥かしかった。

何枚とられたのか、どんなポーズをしたのか、夢中だったので覚えていない。私のような者でも、縄で縛られることによって、少し

でも美しく見えただろうか。どうか、きれいにとれていきますように祈りたい気持ち。生まれて初めて縛られた今日の経験は、もっともっと、詳しく書いておきたいと思うけど、今、こうして文字にしていると、なかなかペンが進まない。それだけに私にとっては未知のものに対する激しい驚きの連続だったのだわ。

「目を開けてカメラの方を見て」って、何度も言われたけど、私はよう目を開けてなくていつも目をつぶっていたように思う。慣れたら、もう少しうまくポーズもとれるだろう。もっと、長い間、いろんなことをされるのかと思つたけど、案外、早く終わつて、少し物足りなく思つたほどだ。そのことを、こまごまと書いて、手紙を出す。

三月××日

シャシンを送ってもらう。封を切つてチラッと見て、思わず机の上へウラにして置く。自分のヌードシャシンの白い肌が、まぶしいように見えて、とても見ていられない。

それでも、とても見たいので、またソツとめくつて見る。そんなことをくりかえして、とうとう全部見てしまふ。私の縛られたハダカで、こんなにかしら？ とてもステキ。



でもアルバムに、はっておくなんて、恥かしくって出来ない。袋へ入れて大事に玉手箱の中へしまっておこうと。

すぐ礼状を出したいんだけど、自分のシャシンを見たこと、なんて書いたらいいのか、とてもペンが前に進みそうにない。

次にシャシンをうつされる日が楽しみだ。なんとなく、なにかに期待するような、待ち遠しい気持である。

三月××日

「貴女の手紙を見て、安心しました。今日はゆっくり時間をかけて本格的に責めてみましょう。覚悟は出来ていますね」

と、改めて真面目に言われると、なんだかそろそろ恐ろしい気もしたが、でも、それも冗談であるかもしれない。そうあってほしい。

ハダカになるのは、やはり恥かしい。しかし、この前ほどでもない。バスタオルをパリりととられるときは、思わず頬が赤くなるけど、そのスリルとショックは、たのしい。

今日は市中のホテルで大きい部屋だ。鞆の中から、いろんな縄が次から次へと出てくるのには驚いた。こんなに縄の種類って、あるのかしら。そんな縄が、私の後手にも、胸にも、お腹にも、首にも、太股にも、ぐっと喰

い込むように掛かってくる。

私はもうじつとして、塚本さまのなさるがままに身体をまかしている。縄が生きた蛇のように、私の身体中にまつわりついてくるけど、不快な気持は少しもない。私も大分、縛られることに慣れてきたのかしら。

「痛くありませんか、痛かったら言って下さいよ。ゆるめますから」と、時々尋ねてくれ

るが、辛抱できないほどの痛さはない。ただ身体が、ぎゅっと締まってくるみたい。なんだか、もっともっと、きつく締めつけてほしいような気もするけど、そんなことは、とても口には出して言えない。

縄やポーズが次々と変わってゆく。私はただ言われるがままに縛られポーズをとってあればいいけど場所が変わるたびに道具の位置





を変えられる塚本さまは大変である。うまく希望されているポーズが出来たかどうか不安である。言われる通りしているのだけれど。

今まで私が楽しみにして眺めていた、あのシャシンにしても、このようにしてうつされたのかと思うと、苦勞してるんだなあと考えさせられる。カメラが三台に、それに、なんというのか私には名前はわからないがピカッと光る道具やなんか沢山。私は力があるので道具の入ったカバンや三脚を持ってあげたけれど、これだけの重い道具を一人で、あつかわれるのは中々大変だと思う。

トイレへ行けと行って休けいになる。私は別に行きたくなかったけれど、折角、言っ下さったので洗面所にて顔をナオス。

部屋へ戻ってきたらシャシンを、ぴしり貼ってあるスクラップブック帳一冊を見せて下さる。ずしりとするその手ごたえを感じ



ずると、私は拇指と人差指で無意識のうちにページを、めくっていた。パッと目に、とび込んできた、光沢のある黒い輝きが目を射た途端、私は、くらくらと目まいがするようなショックを全身に受けていた。

それは今までに私が見たこともなかったシャシンであった。パラパラとページを、めく

って見ているうち、私は自分の身体の力が全身から、すうっと抜けてゆくのを感じた。

なにか、しっかりしたものに、すがりつきたい感じと、温かくゆったりしたものに抱きしめられたいという思いが、しきりにした。腕にも肘にも、力が一つも入らないのだ。シャシンを見たいという気持が強くしているのに、指先がいうことをきかないのだ。自分から積極的に、なにも出来ない状態でありながら、もし他から積極的に力を加えられたとしたら、他愛もなく

されるがままになってしまいたいという精神状態であった。

そんな自分の心の動揺を、おしかくそうとして、あわてて思わず顔が赤くなってしまいその顔を両手でおおって彼の膝の上で、うつ伏してしまった。自分でも自分の心がわからない自分の仕草であった。もうこうなっ



まうと、これ以上、シャシンのページをめくってゆくと、どうなることかと思うと、そろそろしくさえる。

縛りとシャシン撮影が再開されたけれど、私はもう夢遊病者のようにふらふらしていてあとのことは、はっきり覚えていない。

三月××日

もう四月の声をきくのもすぐである。暑くもなく寒くもなく、一年中で一番よい気候である。朝、洗面のとき、濡れたタオルで首筋を拭いたら、とても気持ちがよかった。

夕方、市場へ買物に行つたついでに書店へ寄った。もう奇クの五月号が出ているじぶんだと思っていたがやはりあった。さっそく買い求めて買物籠に入れる。早く読みたいと思うけど、道端でひらけるわけにもいかず、大急ぎで帰る。

やはり第一頁の梨花悠紀



子さんの縛られたシャシンは美しい。たしか私の頂いたもののなかにも、この方のシャシンがあった。私もこの方のように、きれいに撮れていたなら、うれしいのだけれど……。

塚本さまの「東京の踊子緊縛記」を、まっさきに見る。鈴木千鶴子さんが、うらやましい様な、ねたましい様な複雑な気持ちがする。

さすがに踊子だけあって、のびのびとポーズをとっているのが美しく感じられる。私は鈴木千鶴子さんのように、身体がやわらかくないので、とてもこのように美しいポーズはとれそうにないと思うと、なんだか悲しい。これで奇クは五冊たまった。時々とり出して眺めたり読んだりするのは楽しい。シャシンのアルバムと日記帳は、大事に私の玉手箱にしまっておこうと。

私のシャシンは、まだ送ってもらえない。まだ出来ないのかしら。

四月×日

カラーのシャシン十二枚送って頂く。

自分の肌が、こんなに美しいものだとは思わなかった。胸のところで結び目をつくった麻縄が、ほんとうに目の前に実物を見るように、生々しく心に迫ってくる。やはりカラーはいいのネ——と思う。部屋のなかの背景も、私が見たのより



は、きれいに写っている。シャシンって、ほんとうに不思議なものなのね。

カラーでない写真は、今度、持ってきて下さるそうである。そのとき見て、好きなものだけあげると言われてるけど、私って、そのとき落ち着いて、ゆっくり自分の縛られたハダカのシャシンを見る勇氣があるかしら。出

来れば全部ほしいんだけど、欲ばりかな。

四月×日

ステーションビルの中二階の喫茶店で待合わす。今日で三回目になるのだから、もう慣れてもいい筈なのに、待合わせのため椅子に腰かけているだけでも、緊張で膝が、がくがくしてくるようだ。エイコとボウルへ行くと



め待合わせているときは、こんなことは少しもないのに、私って、どうかしているわ。

人のたて混んでいるフルーツパーラーで、私のハダカで縛られているシャシンをひろげられないかとハラハラする。そんなことになったら、どうしよう——と胸が高鳴る。思っただけでもトイレへ行きなくなる気持。

でも、心の片隅で、一方ではそんな場面を秘かに期待している面もあるかもしれない。

そんな私の心配もいらないほど、客が次から次へと入ってきて、結局、私達は押しだされるようにして、ろくな話を交さないで、そこを出た。ラジオの気象通報では下り坂ということだったが、白一色に雲が低くたれこめた空からは薄日が、わずかにさしていた。

塚本さまは今日は五時頃までしか身体が歩いていないとかで、市内のホテルへ向かう。私には、ここがなんという街かわからない。お寺の塀越しに桜の花がチラホラと咲いているのが妙に、はなやいで見えるが、町通りは至って静かで眠ってるみたいだ。

例によってお風呂へ入るように言われる。ゆうべ晩かったので朝寝坊し、朝昼兼用の食事をすましてから、朝風呂に入り、下着をすっかり取替えてきたのであるが、もう一度、



入浴することにする。ざっとお湯を浴びてから、お化粧を直していると、

「シャシンが出来てるよ」と言っ角封筒をポンと私の膝の上に投げてくれた。

やれ有難や。ここであつたら、ゆっくり見ることが出来ると、もどかしいように封筒を開けてシャシンを出す。怖いものを見るような気持である。よく撮れているのでホッとす。目をつぶっているのが多い。あのとき、こんなに沢山うつしたのかしら——と余りにも、いろんなシャシンがあるので、自分ながら、びっくりする。思わず顔が赤くなるようなものまで混じっている。

くりかえし、くりかえし丹念に眺めていると、「準備が出来たから、こちらへいらっしゃい」と言われる。あわててシャシンを封筒に入れて、バスタオルで胸から下をかくして中の部屋へ姿をあらわす。今日はどんな責めをされるのかと、ちょっと不安。それに、なにかされると、すぐ顔が赤くなってしまうので、それが恥かしくって不安でもある。

一番はじめは心配したような、きついポーズではなく、両手首を縛られて頭の上にあげて縛られるものだった。前の方が、かくすものもなく恥かしかつたが、じっと辛抱した。

そんな顔をねらってカメラを向けられたが、顔をそむけるわけにもいかず、上げた腕に埋めるようにしているばかりだった。カメラが私の身体のまわりをなめるように動いてゆくのが、くすぐったいような感じだった。

次にやられた後手に縛られて胸から胴にかけて縄でしめつけられる責め方は好きなもの一つだった。畳の上のところがされ、お尻をつきだしたような格好で、うつ伏せになっていると、なんだか背中からお尻の方にかけてもぞもぞとするような感じがしてくる。

ころりころりと裏がえしになったり、横になったりして、ころがされて、まるで板の上で料理される魚のようだ。でも、道具を荷造りされたように括られているので、どこもかも、かくしようがなくて、ハダカの姿を、そのまま、カメラの前にさらしている。

初めて足首にも縄をかけられて、身体が二つになるように締めつけられる。イヤイヤと脚に力をいれて重ね餅になるまいと抵抗するが、背中に膝を当てておさえつけられると、いやでも胸が、乳房が押しつぶれるように圧迫されて苦しい。座机の上にほうりあげられて仰向けにされたり、横にされたりする。

私は身体が余りやわらかくないので、こん

なポーズをさせられると、うまくやれないしその上、太股のつけ根や膝が痛くて、ぼきぼき音がするような気がする。もっと美容体操をやらなくっちゃ駄目だと思う。

もっともっと、いろいろに縛られてシャシンをとられるのかと思っていたが、時間がなというので早い目に切り上げる。なんだか物足りないような気がする。それだけ、私が縛られることに慣れたのかしら。

シャシンは十五枚だけ、頂く。自分で気に入ったのばかり選ぶ。

外へ出ると小雨が、ぼろついている。地下鉄の駅まで送ってもらう。

姉の家へ帰ると父から手紙が来ていた。今度、錦鯉の品評会が大阪であるので、久しぶりに訪ねると書いてあった。

姉にそのことを言う

「フン、結構な、ご身分だわ」

と気乗り薄の返事しか、かえってこない。夜になって雨が激しく、なかなか寝つかれなかった。

今日、頂いたシャシンを、ゆっくりと見てから、私の玉手箱にしまう。

×

×

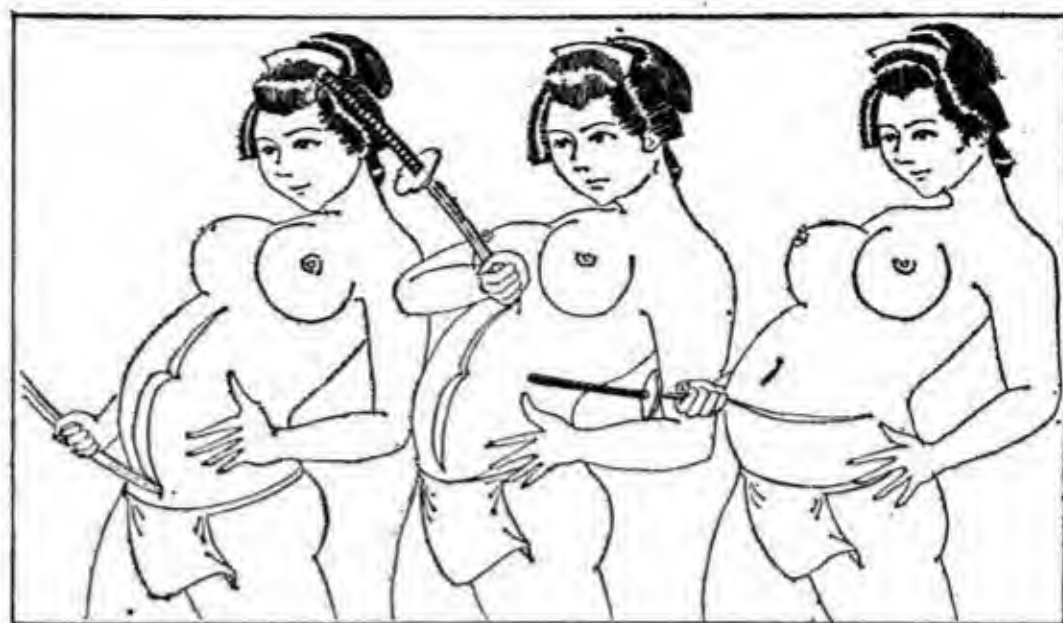
×

×

×

×

カット・桐原紫門



元田芳男がG県D郡の山間に疎開したのは昭和二十年春の東京大空襲に遭ってからである。

一夜で死者十万といわれる大空襲のなかで辛うじて生命を保った芳男は、父の勤め先が東京なので離京出来ない両親と別れて、その

### ＜女性切腹史＞

## 花の墓碑銘

— (二) —

中 康 弘 通

村の遠い縁者を頼って来たのであった。

十七才で、しかも少し右手の不自由な少年が、その村ではじめて話の合う相手を見つけ出したのは、やはり福井から一と月ほどおくられて疎開して来た、平尾多喜子を知ったからである。多喜子は両親と三人ぐらして、やは

り遠い縁辺になるらしい農家の隠居を借りて移り住んでいた。

畑仕事も碌に出来ない芳男は、せいぜい自由な左手で苗代作りや麦刈り、田植えと忙しい縁者のために、昼食の湯をわかつて運んだり、収穫した麦の穂を束ねる手伝いをするくらいで、田植えだの、すき返しだのは出来なかった。

そこへ行くと多喜子は、背丈が一六〇センチはあり、体つきも引きしまってガッシリと筋肉質に見えた。都会の女の子なのに、あんなに働けるんだなあ、と思うと、芳男は我ながら恥かしかった。

色こそ浅ぐろいが目鼻立ちのクッキリした美貌で、しかも農事も、不馴れは別として、一応、農家の人々に負けぬよう努力もし、事実そこそこの仕事をしていた。たまたま家は少し離れていても、働く田畑が近いので、往き帰りに出会って、芳男は多喜子と知り合ったのである。

朝は「早うから精が出ますのう」と挨拶を交わすのが、農家のしきたりであり、夕ぐれて帰るときは、「お晩でやす」といい交わして、すれ違うのが、ならわしでもあった。

都会からの疎開者が当時、農村に入って、



うまく融和することは、大変むづかしく、疎開者同士が、いわばよ、そ、者、同士の親近感を持ったのは当然の成り行きでもあった。

芳男と多喜子も朝晩の挨拶から進んで、互いに東京と福井の思い出を、立ち話のわずかなひまにも打明け合う様になったのも、そうした自然な成行きでもあっただろう。互いに都会育ちの生い立ちが共通の基盤となり、それがまた連帯感にもなったのかも知れない。

「恥かしいわ」

ある日、ふと多喜子が言った。それは身につけている野良着の、ひどい傷み様からであった。野良着に継ぎを当てている、というよりも、継ぎが野良着になっていような、すさまじさであった。

芳男は、二人で話すときだけ使う彼女の東京弁がいじらしくも思え、

「いいじゃないか、仕事着だもの」

と、なぐさめた。

「あたし、辛い。戦争がすんだら、何もかもよくなると思っただけ……」

彼女は少し涙ぐんでいるようであった。芳男は、彼女がどうやら本当の両親ではないらしい、と噂を聞いていたので、一層、気の毒であった。

手が不自由でも、独りぼっちで疎開していても、戦争がすめば本当の親のところへ帰れる自分が、まだしも幸せと芳男には思えた。

「そうだ、戦争がすめば、よくなるよ」

「もし、すむにしても負け戦だったら、あたしは生きてはいないわ」

彼女は、なおも沈んだ声音で言った。

「また、それをいうんだね。いいっこなし」

「だって、あたし幸せだったことないんですもの」

鋤を肩から下ろして彼女は立ちどまった。

「勝つさ。ぼくは、そう思ってる。君より、ぼくの方が不幸なところだってあるよ。手を見てごらんよ」

「そうね、ごめんなさい」

すなおに言って、多喜子は鋤をまた、肩にして歩き出した。七月の夕映えは長かった。そして農道に伸びた二人の影もまた、長いのであった。

八月十五日、ポツダム宣言受諾の放送は、よく聞きとれなかったが、どうやら敗けたのだということは理解出来た。

東京で惨烈な大空襲を経験した芳男には、少なくともG県の山村にのみ暮らしている人々よりも、はつきり理解出来た。そしてすぐ

胸にわいたのは、もし負けたら生きてはいないと言った多喜子が、早まったことをしてはいないか、という不安であった。

芳男は夕食もそこに家を出た。多喜子の身に交事があれば、その附近まで行っても判る。何ごともなければ帰って安心して眠れる。そう思ったからである。すると、途中で多喜子に出会った。

「ああ、芳男さん、いま訪ねて行くところだったの」

多喜子は、そういつて近づいて来た。灯火管制が解けたので少し家の集まった一角に外灯がともっている。そこまで二人は歩いた。

「ね、芳男さん、お願いがあるの。聞いて下さる？」

「そりゃ、ぼくの出来ることなら……」

「あなたにお願いしたいの……あたし、もうせんからいつてたように、自決したい。自決するから見届けて下さってね。お願いよ」

「多喜ちゃん、バカな……ぼくは、いやだ。多喜ちゃんが死ぬなんて、それを見ていろ、なんて……」

昂奮して、声が少し高くなりかけた。

「ね、しずかにして」

多喜子が落ちついて言った。

「あたしは、あなたと境遇が違うのよ。どうせ、この先、生きていても今まで以上に、いじめられるわ。アメリカの占領下で、まともな暮らしは出来ないわ」

芳男は彼女を働かせて、ぶらぶらしている彼女の両親を思った。

「いっそのことね、今、こうして仲のいいあなたに見届けて貰って立派に死にたいのよ」  
 そこまで気丈に言うとは急に彼女は涙が込みあげて来たのか、ううっと嗚咽をこらえた。  
 「それとも、あなたは東京へ帰ってしまったら、それであと、あたしが独り淋しく自決する方がいいって言うの？ そんな人なの、あなだって」

涙声で彼女は、芳男に告げた。

「多喜ちゃん、しかし、考え直してくれよ」  
 「ううん、もうずいぶん前から考えて来たのよ。いつ自決するか、その時機を……ね、お願い。あたしの一生の、お願い。見届けてやって。立派に死なせて……」

芳男は、どうしていいか判らなかった。しかし、十七才の分別は「死を見ること帰するがごとし」という戦時下の教育とも、かみ合って、どこまでも彼女の決心を変えさせるほどの強さには、ならなかった。

「きいてくれるのね。じゃ、怪しまれるから帰るわ。明後日の午前三時よ。きつとね。ここで落ち合いましょう」

くるりと背を向けて彼女は、いま来た道を戻って行った。

十七日の未明、落ち合った二人は、多喜子の希望どおり、二キロ近く離れた山林に向かった。小一時間かかるところで歩いて行った。途中は狐の出るような山道とて、人に見つかって妨げられる恐れはない。みちみち多喜子は歩きながらも、

「あたし、死ぬからには切腹しますからね、決してとめないでね。苦しんでも手を添えては、いやよ。きつと立派に、死んでみせますわ。息が絶えたらすぐ、人に見られないように戻って下さいね」

同じことを何度も念を押すように言うのだった。

やがて山林に分け入り、少し小高いところに来ると、山の夜あけとて、もう薄明るくなって来ている。その明るみに多喜子は草を敷くようにして正座した。

着ていた破れは、んてんをぬぎすてると、膝までの野良着を下着もろとも押し下げ、臍の

二寸ばかり下まで、あらわにした。

紙にくるんで持ち出して来ていた、細身の出刃包丁を、引きちぎったは、んてんの袖で柄だけ包み、右手にかまえて目をとじた。

左の腹へ突き立てようとするのだが、さすがに手が震えて突き傷が二たところ、三ところ出来たばかりである。

四度めに、両手に力をこめると、グサッと一寸足らず突き刺し、声も立てず、ゆっくり右へ一と息に、多喜子は臍の一寸くらいを引き廻した。

真一文字の見事さに、芳男が息を呑んで多喜子の手もとを見守るうち、さすがに苦しげに顔をしかめて傷を眺め、

「まだ、浅い」

とハッキリ言いさま、刃をくるりと左に向け返し、五寸ほどある刃を力一杯、斜めに突込んで、声も立てず臍の下あたりまでギリギリと引戻した。そこで始めてウームと呻くと両手を膝について、体を捻って苦痛にたえていたが、血が急に噴き出し、見る間に血の気の引いた顔で、もう一度、呻いて俯伏した。

刃ものは柄まで腹中に入り、背骨の左に切先が突き抜けて多喜子は絶命した。享年十七才。



同じ年の少女の悲痛きわまる切腹を見守った芳男は、永く忘れず、十年目に、はじめてX氏に、この話を報じた。

X氏も、その後に本誌に短く触れておられたように、この少女が一度、腹一文字に、かき切ったのち「まだ、浅い」と刃を返して切り戻した姿は、あたかも堺事件で切腹した土佐藩士の一人、西村隊長の最期を偲ばせ、その壮烈な心事には、ただただ嗟嘆する外はない。

それにしても、この十七才の少女、今日流に言えば満十六才というところだが、多喜子のこの壮烈なる自殺には二つのファクターが見られる。

明治・大正・昭和の常時における女性の切腹例が、先に本誌に連載した「切腹百年史」にも記したように約二百例以上あるが、その中で戦前は、継母と不仲、あるいは養母に虐待されるなどの理由から、思いつめた十代、二十代の娘が切腹してしまった例が案外あつ

たのである。

平常からそういうファクターを持つ多喜子が敗戦で絶望して、せめて最期を飾ろうと、切腹を選ぶ気持は、戦前戦時の武士道教育を少しでも受けたことのある世代なら、ある程度、理解出来ると思われる。

もっとも、今日の若い女性には、腹部が時と場合によっては、吾れとわが手で、かき切ってしまうためにあるのだ、とは夢にも想像出来ないことなのだが――。

なお、今から約二十年前、筆者が本誌に切腹の歴史と文芸についての考察を寄稿しはじめてもまもなく、X氏が終戦当時の女性切腹例についての論考を寄せられた。その後、編集部を通じてX氏と連絡することの出来た某研究家の線で、筆者もX氏と直接にも間接にもX氏の手もとに集まった書信を借覧することができた。

研究家のあいだではX資料として貴重視されているものである。

その後、X氏とは、何人も連絡が杜絶えたが、ここにその資料の伝える実話を、引き続き連載したいと思っている。

△この稿おわり▽

## 新発足 懸賞入告白、手記、体験▽原稿募集

### ☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	三万円
秀作	一篇につき	二万円
佳作	一篇につき	一万円
可作	一篇につき	五千元

### ☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するたと「告白懸賞」とお書き下さい。

## 小説「拷問クラブ」シリーズ = 7 =

## 残酷シヨウ

一 浩 見 鶴

カット・志羽利也

1

薄暗い地下室に、異様な静寂が張り詰めていた。

拷問シヨウが開始される直前の、いつもの雰囲気は、独特な緊張を観客の周辺に、かもし出している。観客にとっては、一カ月間、待ちに待った快楽の開始である。

この地下室で、秘めやかに演じられる拷問シヨウは、観客達を骨抜きにする麻薬と同性質であった。一度でも、その味を楽しめば、その誘惑から脱出する事は不可能に近い。それ程、拷問シヨウから受ける刺激と倒錯性欲の喜楽は強烈であった。

すでに、女体拷問シヨウは、プレイを超え犯罪と言える性質を持つ、すさまじい責め場の連続にエスカレートしている。しかも、月のシヨウは、回を重ねるたびに確実に、その残酷性を増していた。

——今日は、どのような拷問か……。

観客の楽しい想像は、時間が経つにつれて高まっていた。

『待つ』という心理的效果を読んだ、松山老人の心憎い演出である。

その松山老人が、後方からドラを一つ、鳴らした。時代的な音響を伝えるその音は、秘密めいた儀式を、観客達に連想させる。

「お待ちせしました。只今より拷問シヨウの開始です」

松山老人の声に合わせて、いつものように信次が、若い娘を連れてきた。

ほう、と観客の一人が身を乗り出した。明るいライトに照らされた美佐の裸身の美しさに、感心したからである。

小刻みに震えている美佐の白い身体には、一切れの布すら与えられてなかった。ただ、白い顔に、黒くなめらかに光るゴムの覆面が異物のように附着していた。それが、奇妙な妖しい美しさを作り出している。

後手に縛られた美佐は、全裸の前を隠すように、伸び切った四肢を、くの字に曲げて、信次の腕に、ささえられていた。覆面から覗く、つぶらな目は、恐怖のためにカッと見開かれていた。

松山老人が手で合図すると、信次は美佐の両手首を天井から下がった鎖に縛りつけた。白い裸身がユラリと吊り下げられ、両足も左右に大きく開かれて、鉄の鎖が足首に固定される。





——お父さんッ、助けてッ。やめてえ！

美佐は、おこりのように肉体の深部から湧き上がってくる恐怖に、精一杯の絶叫をあげた。が、もちろん、口枷のために声とはならず、松山老人も、目の前の獲物が自分の娘とは知るよしもない。

美佐の、可憐な慄えを見せる見事な両太腿は大きく広げられ、明るいライトの中に無残に照らし出された首を突き出すようにして、観客達の視線が集中する。

「ウウ……」

耐え難き屈辱に、美佐は両膝に力を入れたが、鎖に固定された足首は、ピクリともしな

おります」

「と言うと？」

観客の一人が問うた。

松山老人は、すぐには答えず、ニヤリと笑うと、信次に合図した。

信次が引っ張ってきた責め具は、自転車である。特殊なサドルが付けられたその奇態な自転車は、銀色に光る車体を、ライトの中に誇らし気に、あらわした。

「自転車……？」

観客達は、首をかしげた。

「そうです。が、普通の自転車ではない」

松山老人は、楽しそうにサドルの部分を指

い。

「さて……」

と松山老人はおごそかな声で響かせた。

「この娘は、処女ではありません。ですから今日は、男を知った女にふさわしい責め方を執行しようと考えて

さした。

「自転車に跨がる全裸の女性……。そう考えただけで、皆さんには楽しい企画がでてくる筈です……」

再び、松山老人が合図すると、信次はサドルを外して、観客に見せて回った。

「ほう！」

観客達は、満足そうな声をあげた。サドルの真中に、棒状の長い突起物が、天を向いて固定されているのである。

「この上に、あの女性を……」

ふむ、と松山老人は頷いて、薄く口を歪めた。

「楽しい仕掛けは、これだけでは、ありません。よく、サドルを見て下さい」

「他に、まだ何か？……」

と、覗き込んだ観客の一人が、大きく嬉声をあげた。

「ここについてるのは歯ブラシですなッ」

何という意地悪い仕掛けか。棒状の突起物の根本から上部にかけて、固い毛を持つ歯ブラシが固定してあった。この自転車に乗る者は、当然、鋭いブラシの洗礼を受けることになるのである。

観客達の嬉しそうな表情を見て、松山老人

は叫んだ。

「どうです、皆さん。楽しい責めでしょう」

「面白い」

観客は、一同に感心している。

「実はですな、もう一つの強烈な仕掛けがあるのです……」

松山老人は、子供みtainな得意そうな表情になると、信次にサドルを渡した。

「あの突起物が、ペダルを踏む度に、ぐるぐる回るとしたら……」

サドルを固定した信次は、松山老人の合図で、ペダルを手で回した。

「ほう！」

観客達の目が、輝々と光った。信次の動かすペダルに応じて、サドルの突起物が、大きく輪を、かき始めたのである。

根元を起点として、それは、かなりの大きさの円を描いた。観客達の想像は、その大きな円が、どのような働きをしながら軌道を描くのかという様子を、はつきりと見つめる事ができる。

「ふう……」

誰からとはなしに、興奮を押し殺した溜息が洩れた。

「それでは皆さん、この楽しいショウを楽し

みましよう……。信次、始めなさい」

松山老人のその声で、信次は自転車を、美佐の真下に設置した。動かないように固定すると、サドルから突き出ている、固いゴムの棒に、ドロリとした液体を、丹念に塗つけり始めた。

「あれは？」

と、観客の一人が聞いた。

「シャンプです」

「シャンプ……」

「なに、深い意味はありません。滑り易いように塗るだけです。バターでも油でもよいがシャンプの方が泡がでる……」

「成る程、効果のほどが、泡によって分かるという仕掛けですな」

信次は、美佐を吊り下げている鎖を下げ始めた。大きく両足を張り広げられたまま、美佐の裸身は、自転車を目指して下りていく。

「ああッ、やめてえッ。助けてえ！」

美佐は、下を見て、火のような悲鳴を口の中に転がした。

「やめてえッ、お願い！」

男達が何を考えているか、美佐には、よく分ってきた。

「ああ、お父さん！」

が、その父は、忙しく合図を信次に送っている。その目は、異様なまでに、キラキラと澄んでいた。

美佐の両足は、水平近くまで広げられ、その空間を縦に割る位置に、自転車が横たわっている。

「アッ……ウウッ……」

美佐は、また呻いた。

観客達の目は熱っぽく、その美佐の降下ぶりに吸いつけられている。

「よし、足をペダルへ……」

松山老人の指示で、信次の手が動き、美佐の足首に巻かれていた鎖が外された。

屈辱の姿勢から、僅かながら解放された美佐は、急いで開かれていた両足を閉じた。

その瞬間、美佐は悲鳴をあげた。素早い信次の動きによって、両足首がペダルに固定されたのである。

「アッ……」

美佐は、激しく身悶えした。が、その行為は、逆効果であった。

「ああ！ やめて頂戴！ お願い！」

美佐は、耐えられない不安と、発狂する程の羞恥で、全身の毛が逆立つ悪感を憶えた。

その恥かしい姿を男達がギラギラした目で見



## イメージギャラリー『老人の戯れ』岡 かし



つめているのだ!

「皆さん、これで準備完了です。自転車シヨウを開演します」

美佐にとって地獄の使者のような父の言葉が、地下室に充満した。

「さあ、お嬢さん。その足にかかっているペダルを力強く漕いで下さい」

「嫌! 嫌! もう許してえ!」

と美佐は、心の底から絶叫した。

その声が、口から外へは出ないと分かって

いても、美佐は力一杯、叫んだ。形容し難い不安と恐怖が、激しい嵐となって神経を逆撫でするのだ。その上に襲いかかってくる、たとえようのない戦慄と異和感――。

美佐は、はかない抵抗と分かっているにもかかわらず、狂ったように拒否の姿勢を示した。しかし、その動作は、観客達を喜ばせるだけに終わった。美女が顔を歪めて悶え苦しむ絵は、彼等にとって、実に楽しい眺めなのである。

「グッ……」

突然、悶えていた美佐の咽喉が悲鳴をあげた。サドルの意地悪い仕掛け――植えられている歯ブラシの固い毛が、強烈な責め効果をもたらしただけである。上体を前に倒したので鋭く突き刺さったのらしい。

「ウッ……ウアッ……」

美佐は、青くなつて上体を起こした。

「グアッ……」

とたんに、ペダルを踏みつけてしまっていたのである。

美佐は激痛の中で、先刻の父の言葉の意味を知った。何故、ペダルを力一杯、踏み、と言ったのかを知った。そして、その言葉の意地悪さが理解できた。

――この人達は狂人だわッ……。

その狂人に責められている自分こそ、最大の不幸である。美佐はそう考えて、自分の方が発狂しそうな絶望感に襲われた。

「お嬢さん、再び命令します。ペダルを強く踏み続けなさい」

——嫌！ 許してッ。許してえ！

そう叫びながら、もちろん、美佐は拒否の態度を崩さない。

固く抵抗している美佐の目を見て、松山老人は薄く笑った。

「よろしい。私の命令が聞けるようにしてあげましょう……」

ゾツとする程、冷たい松山老人の声が、震えている美佐の耳を、くすぐる。

「信次、アレを使いなさい」

「電気ですか……」

「ふむ……」

美佐は、カッと目を見開いた。コードのついた洗濯バサミのような金属を、信次が二本引っ張ってきたのである。コードの先には、変圧器がついていて、明らかに電気の器具と分かる。

——電気！

美佐は、恐怖で緊張した。白い裸体に、無数の粟が立つ。

信次の指先が、美佐の乳首を捕えた。

「アア……」

意志に反して、美佐の肉体は敏感に反応を示す。

——やめてッ、信次！

美佐は、精一杯の哀願を、覆面の中の双眼で語りかけるが、信次の指は無情に動いた。

「ア……アアッ……」

女体の生理は、乳首の突起を促した。

信次は、得たり、とニヤリとすると、固くどがった双の乳首に、電気の接点を挟み込んだ。美佐は必死で抵抗するのだが、上体を動かす訳にはいかない。悪魔の化身のようなサドルと歯ブラシが、彼女の動くのを待っているのだ……。

電気のセットは、難なく完了した。美佐の乳首から、ギラギラと光る裸のコードが二本信次の手元まで伸びている。

松山老人が、満足そうに口を開いた。

「さあ、お嬢さん。ペダルを踏んで貰えますかな。もし、嫌だと言われると……」

松山老人の合図で、信次は電気を流した。

「ギャッ……」

美佐の身体は驚く程、硬直し、次の瞬間には、ガクンガクンと裸体が波打った。

双の乳首から流れた電気は、美佐の肉体を突き抜け、心臓を強打し、骨を刺激して、強烈な衝激を全身に残して去った。

「ウウ……」

電気が止められても、美佐の肌は、小さなケイレンを繰り返している。

苦痛と恐怖におののく美佐の耳に、冷たい父の言葉が飛び込んできた。

「これで分かったでしょう。貴女は私の命令を拒否する事はできないのです……。さあ、ペダルを踏み続けるのです。力強く……」

発狂してしまいそうな絶望感に襲われながらも、美佐は電気の恐怖から逃げるべく、ペダルを踏み始めた。

「アッ……アア！」

美佐は踏みながら呻き、身悶えした。

「ウウ……ウアッ……」

美佐は涙を流し、大きく喘ぎながら、骨の中まで、カッと火照ってくる地獄の苦痛に翻弄された。

——ああッ、もう駄目！

せつなく身悶えして、美佐は長い溜息をつくと、動作をやめた。これ以上、続けると、自分自身と理性を失いそうになってくる。

「どうしたのです」



鋭い松山老人の声が、動かなくなった美佐に飛んだ。

「続けるのです。まだ二、三分しか経ってませんぞ。……そうですね、最低、一時間は踏み続けて貰いましょう」

——嫌！ 嫌！ ああッ、もう嫌！

必死の哀願を含んだ目を、美佐は父に向けた。が、その返事は、電気の洗礼であった。

「グッ——」

再び、強烈な電気が乳首に通じた。

——やめて！ 死ぬわ！ やめてえ！——

美佐の裸身が、撥けるように飛び上がる。白い肉体は引きつけを起こし、キラキラと光る脂汗が、ドッと噴き出している。心臓が飛び出し、乳房がねじ切られるかと思われる苦痛に、美佐の長い髪が逆立った。

電流が止められてもなお、肩で息をしている美佐に、松山老人は低く囁いた。

「さあ、始めて下さい。今度は上体を前に倒して。この歯ブラシをわざわざ取付けたのに無駄にしてもらっては困るのです」

「……………」

美佐には、すでに抵抗の声もない。それ程電流が恐ろしかった。

——あの地獄の様なショックを受ける程なら

何をしてもいい。何をされてもいい……。

美佐は、意志を失した人形のようにペダルを踏み始めた。

混乱しきった神経が、なお更にかき乱され屈辱と責苦のすさまじい、襲来に晒されている内に、苦痛の正体を感じ出来なくなって来て、いつしか、美佐の目は濡れ、血走り、悶え、呻き、のたうち回りながら、狂ったように踏み続けていた。

不気味な静寂が覆う地下室の中で、シウルシウルというペダルを回す音と、スポットライトの中で妖しく動く白い肉体だけが、別個の生物のように蠢いていた。

美佐の意識が薄れ、ペダルの動きが止まると、情無用に高圧電流が乳首に流された。それが、ほぼ一時間、過ぎた時、サドルはシャンプの泡と、真赤な血で汚されていた。

「まだまだですぞ……」

「アウ——ッ」

地獄の底から聞こえてくるような父の言葉に、美佐は絶望の悲鳴を地下室に響かせた。

## 2

自転車ショウから解放され、失神から覚め

た美佐を待っていたものは、またもや恐るべき地獄の責めであったのだ。

「次は、どういう企画です？」

観客の一人が、特殊ベッドに縛りつけられている美佐を眺めて、松山老人に聞いた。

「今の責めは遊びみたいなものです。これからが本格的な拷問です。恐らく、女性にとって最高の苦しみであろう責めです」

そう言っ、松山老人はニヤリとした。

「女が男に抱かれれば、どうなるか……」

松山老人は観客を苛立たせて喜んでいる。

「正常であれば、妊娠しますな。そして、出産……。何でも、出産の苦痛は、女性にとって大変なものらしいです」

「……」

観客は、黙って聞いている。松山老人のアイデアには、とてもついていけないからだ。

「そこで、この美しい女性に、出産の苦痛を味わって貰おう、と企画しました」

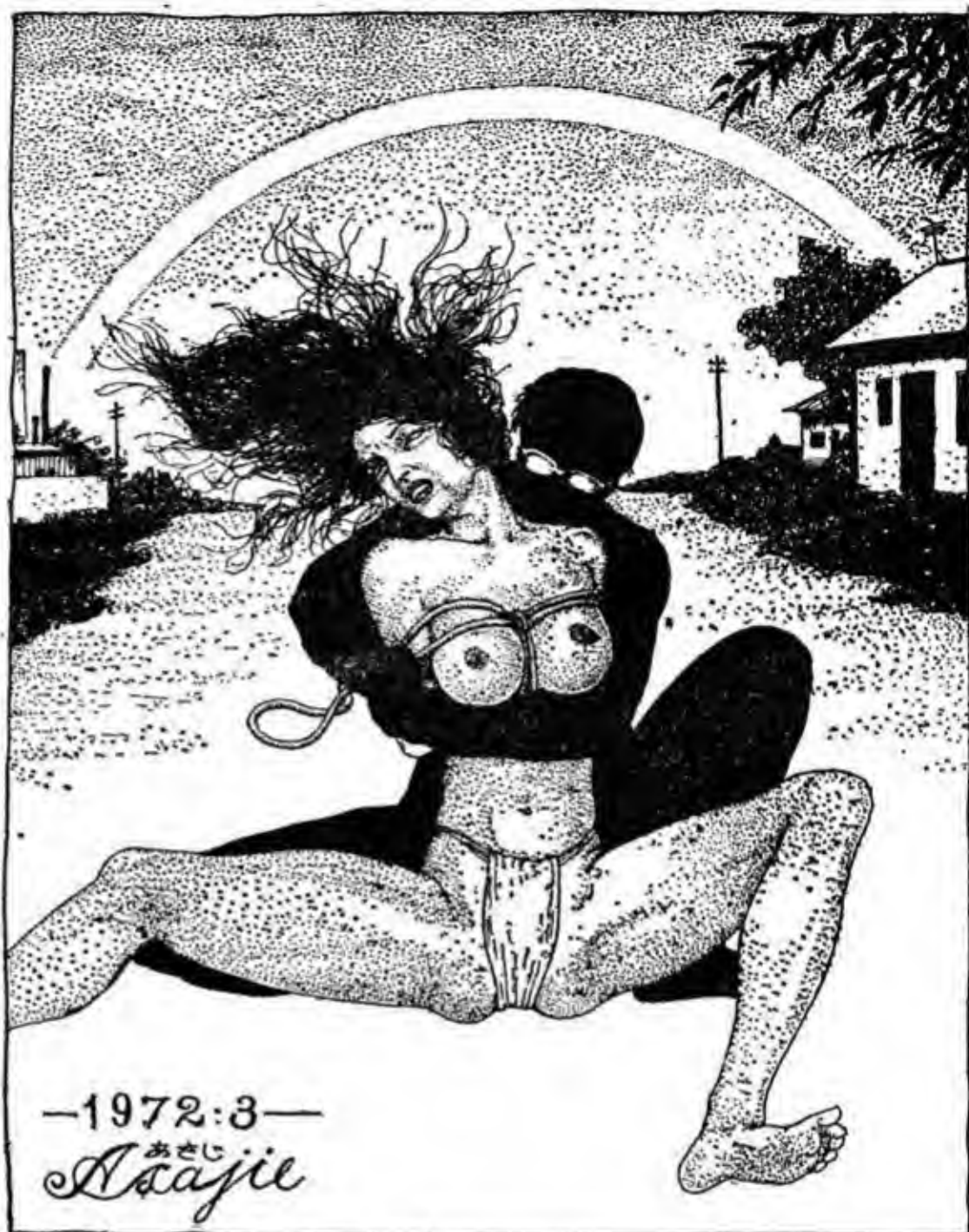
「出産の苦痛？ どういう意味ですか」

観客の疑問に、松山老人は笑顔で答えた。

「なに、簡単な事です。十月十日の妊娠、出産という課程を、これから二時間程度で、やってみようという次第です」

松山老人は、信次に合図した。

僕のイメージ画集 『渡部夫妻を想う』 室 井 亜砂路



頷いて、信次は責め道具を、持ってきた。  
固いゴムの袋と空気入れである。ゴムの袋は  
コーラのビン程の大きさをしていた。

「……………」

興味深い表情で覗き込む観客の目の前で、

信次はゴムの袋に、空気を注入し始めた。円  
筒状のものがグングンと大きくなり、フット  
ボール大に脹らんだ。

「ほほう………」

それを見て、観客は始めて納得した。

「このゴム袋を、あの女性に……」

「そうです」

と松山老人は、満足そうに頷いた。

「妊娠三カ月で、つわりというものがありま  
すな。あれも苦しいらしい。胃や腸を胎児で  
圧迫されるからです。二、三カ月かかっても  
それ程、苦しいのなら、一時間そこで、胎  
児が急激に大きくなったら……」

そう言って、松山老人は薄く笑った。

「成る程！」

観客達も、すさまじい苦痛を与えるであろ  
う、この拷問に、キラキラと目を輝かせた。

「ウウッ………」

失神から覚めたものの、ぐったりとなって  
いた美佐は、悪魔のような父の言葉に、顔色  
を変えた。

——妊娠！ 出産！

責められる方法は分らないが、恐ろしく  
苦しい拷問に違いない。

——あッ、やめて！ もう許してえ！

美佐は、大きく揺らめられた四肢を、力一杯  
動かした。僅かに足首が揺れ、鎖が鈍い音を  
立てて鳴った。

が、その行為は、男達の残忍さを誘うだけ  
の意味に終わった。



「信次、始めなさい……」

美佐にとって、死刑執行宣言に等しい言葉が、松山老人の口から洩れた。

美佐に近づいた信次の手が、忙しく働き始めた。

「アッ……」

美佐は悲鳴をあげて、容赦なく攻めこもうとする不気味な異物と、戦わねばならなかった。所詮は無駄な戦いではあったけれど……

「ウッ……ウウッ」

美佐は歯を、くいしばった。

——やめてえ！ お願ひ！

美佐は全身の骨が凍る恐怖に、激しく身悶えした。

が、信次は、冷静な手付きで作業を続けていったのだった。美佐の防戦意識などは、ひとたまりもなく撃破された。

信治の作業が終わるのを待ち兼ねていたように、松山老人が、やや興奮した声で怒鳴った。

「妊娠、始めッ」

空気入れの動作音が、シュッシュッと地下室に響き渡っていく。

「アウッ……ウアアッ……」

美佐は、つぶらな目を見開いて、全身を激

しく突張った。

——お腹が脹らんでいく！

その感覚は形容し難い恐怖と不安である。

五分程、経った。

美佐の下腹が、心持ち突き出てきた。十分——。

白い肌が、下腹を中心に異様に脹らむ。

「グウッ……」

美佐の裸身には汗が光り、可愛い口唇は苦痛に歪んだ。吐気が、激しく胃を責める。

経験したことのない、不快きまわるおぞましさ、鉛を詰められたように重苦しく下腹を責め始め、火のように熱をもってきた。

——苦しいッ。お父さん！ やめてえ！

が、騒ごうと身悶えしようと、ショウが中止される事は、あり得ない。

「今、何カ月程度ですか」

と観客の一人が、興奮した声で聞いた。

「四カ月ですな。まだまだ、これからが苦しくなる……。信次、どんどん空気を……」

シュシュという音が、不気味に地下室を覆い、ゴム袋への空気の注入は続けられる。

二十分——。

「グアッ……グアッ……」

獣の咆哮に似た呻きが、美佐の全身から発

せられた。鎖に縛られたままの美佐の裸体は激しくケイレンし、口からは黄色いものが溢れ出して流れた。

——死ぬ！

激苦のために遠くなる意識の底で、美佐は絶望を感じた。

胃が腸が、全ての内臓が破壊される、すさまじい苦痛に、美佐の感覚は血の海で、のたうっている。

白い腹部が、ふっくらと脹らんだ時、美佐は呻き声も出ないまま、失神してしまった。その顔は覆面の中で、異常に歪んでいる。

無理もなかった。月日をかけて脹らんでいく妊娠課程を、二、三十分で終了しようというのだ。十月十日の苦しみを、一時間足らずに凝縮して責めようとするのである。

強心剤と精神安定剤が打たれ、現実の地獄へ引き戻された美佐に、再び、非情な空気の注入が続けられた。

空気入れの音と美佐の異様な絶叫が、交互に地下室を充滿した。

そして一時間——。

美佐の柔らかな腹は、可能な限りに引き伸ばされ、可能な限りに脹らんだ。可愛らしいヘソは大きく突き出し、内部の肉は無残に割

れて露出した。

ゴム袋の根元に信次の手が動き、栓が締められて、十月の妊娠は完了したのである。

「……………」

美佐には、声もなかった。すでに仮死状態であった。ただ、圧迫された内臓が伝える激痛に、白い肉体が小刻みなケイレンを繰り返すのみである。

美佐の感覚は、想像を絶する責苦に、地獄と現実の間をズタズタになりながら彷徨していた。数本に及ぶ非情な注射が、そうさせているのである。

「皆さん」

松山老人が、観客に声をかけた。

観客達は全員、すさまじい拷問シヨウに気を吞まれ、自己の快楽に恍惚となっていた。

「これで妊娠は完了しました。いよいよ、出産です」

松山老人の口調も、自分のアイデアと、獲物の苦痛の表情に酔っていた。

「出産……………？ 出産という……………」

観客の一人が、首をかしげた。

「今の腹の中のゴム袋を……………」

「そう、取り出すのです。大きくなったままの状態で」

「……………！」

松山老人の責めには、限界というものはない。プレイではないので、犠牲者の破壊は構わないのだ。

さすがに、新しい観客の一人が、それは酷いッ、と言いかけた。

が、松山老人は気にもかけない表情で、興奮している。拷問シヨウは、観客のためばかりでなく、自己の快楽のためでもあった。

「もの凄く苦痛の筈です。胎児と同じ大きさのゴム袋を、羊水もなく産み落とさせようというのですから……………」

松山老人は、碧く、キラキラと澄んだ瞳で肩で息をしている美佐を見詰めた。

「では、出産を始めましょう」

松山老人の言葉で、信次は特殊ベッド上に蛙のような白い腹を突き出して喘いでいる美佐の両腿に手を掛けた。

チューブの一端が生き物のように伸びて、信次の手に絡みついている。

「ウ……………ウウ……………」

美佐は、弱々しく呻いた。

目も開けられない苦しみの中で、抵抗する術を持たない美佐に本能的な恐怖が襲う。

——殺して……………。一思いに殺してッ。

美佐は、すでに「生」をあきらめていた。

死んでもいい……………。この苦しみから解放されるのなら死んでもいい！

圧迫され、押し潰された内臓が、死にも等しい絶苦を伝え続けているのだ。

「アッ……………」

ふと、朦朧としていた美佐の意識が、急速に、はっきりとしてきた。多量の強心剤が、一度に注入されたのである。これから行使される地獄の拷問を、正常な意識で受けさせるための、非情な注射であった。

「ウッ……………ウウ……………」

美佐は、恐怖と苦痛と、不気味な不安で、双の目をカッと見開いた。

その耳に、押し殺した松山老人の声が、冷たく聞こえてきた。

「お嬢さん。覚悟は、よろしいかな。これから貴女は出産するのですぞ……………」

と、盛り上がった腹部を、愛しそうに撫で回した。

信次の手によって、美佐の両膝は、皮バンドで左右に引っ張られて固定された。出産の準備は、全て完了した。

ギラギラした観客の目が、恐怖に歪む美佐の顔に吸いつけられた。



「やれッ」

松山老人の宣言で、地獄のシヨウは開始された。

「グウッ……」

## 毎月確実に入手されるために

## 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	四〇〇〇円(送32円)
三月分	3冊	一二〇〇〇円(送共)
半年分	6冊	二四〇〇〇円(送共)
一年分	12冊	四八〇〇〇円(送共)

郵便番号 558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとか、こういう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、「現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

美佐は、鋭い悲鳴をあげた。激苦の原因であるゴムのチューブを、信次が軽く引っ張ったのである。

信次は軽い試験の効果にニヤリとすると、

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法ですから、必ず「現金書留」にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料四三二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

本格的な責めに移るべく、チューブの根元をしっかりと握んだ。これを引っ張りさえすれば、シヨウは進行するのである。

信次は息を止めると、力一杯、それを引き下ろした。

「グエーッ」

この世のものとは思えない叫びが、美佐の口枷の中から洩れた。

白い四肢が激しく突っ張り、鎖と鉄のベッドが、ガタガタと音を立てた。

あまりにも強烈な苦痛に、美佐の両眼は飛び出す程に見開かれ、多量の汗が水の如く、したたり落ちた。

「死ぬ！」

美佐は、そう思った。全身の感覚が、そう思った。

腹の中の全ての臓物が引っ張り出されるに似た激苦が、間断なく襲う。

「……………」

強烈な衝撃に、美佐の本能は失神を誘ったが、多量の強心剤は、それを許さない。美佐の裸身は、地獄の苦痛に呻き、叫び、のたうち回った。

が——それは、まだ悪魔の狂宴としての序の口であった。

信次は、引っ張り続けた。力を入れると、美佐の裸身が鎖ごと動く。

信次は、身体の位置を変えた。ベッドの隅に片足をかけ、両手でゴム袋の根元を引っ張った。

「ギイッ……ギアッ……ギア！」

兎が締め殺されるような異様な呻きが、地下室の中に充満した。ベッドが揺れ、鎖が鳴り、美佐は血を吐いた。

阿鼻地獄に似た残酷な責め絵は、冷酷に続いた。

数十分が過ぎて、固いゴム袋が産まれ出た時、美佐の責苦と観客達の興奮は、最高潮に達していた。

眼球が飛び出し、口からは泡と血を噴き、絶叫をあげて、のたうち回る美佐に向かって観客達は襲いかかった。

「……………」

美佐は、ひとときわ高く、怪鳥のような鋭い呻きを發した。

3

松山老人は、気が抜けたように、ソファに腰を下ろしていた。

凄惨な拷問シヨウに満足して、観客達が帰った後の、空白の時間である。

「老人……」

美佐への手当てが終わった信次が、声をかけてきた。

「何だ……。今は何も話しようない」

「しかし、私は話したいのです……」

「何？」

何時もと違う信次の口調に、松山老人は振り向いた。

その目の前に――

刃物が光っている。

「信次……。何の真似だ？」

驚いた表情の松山老人に、信次はニヤリと口を歪めると、静かに口を開いた。

「両手を後ろに回して下さい」

「……………」

「早くッ！」

意味が分からぬまま、言われた通りにした松山老人に、責めに使用する手錠が、音を立てて固定された。

「信次、悪い冗談だ……」

「本気だ、と言えば、どうします」

信次は、松山老人をソファに縛りつけ、意識を失っている美佐の覆面に手をかけた。

「自分の手で責め抜いた、この娘が、誰だか分かりませんか？」

「……………」

信次は、満足そうな笑みを浮かべると、美佐の覆面を外した。

「美佐？……美佐！ 美佐ではないか！」

松山老人の顔が、愕然と歪んだ。信じ難い表情で、双の目が飛び出した。

「美佐！ 美佐がどうして、ここに！」

「分かりましたか。フッフフ、そうです。この女は、まぎれもなく、貴方の可愛い一人娘の美佐さんです」

「信次！ こ、これは一体！」

松山老人は絶句した。身体が、悪魔を見たように震えている。

信次は笑った。心の底から楽しそうに笑った。

――復讐だ……。復讐だ！

えもいわれない快感が、身体の奥から湧き上がってくる。

愕然と目を見開いている松山老人の目の前で、信次は心の底から笑い転げた。

――これから復讐の拷問だ！

――（次号完結）――



## 一読者の手記

## 「エネマ・プレイ」の体験と憧憬

中 沢 完 好

カット・黄泉鳥



表紙は白く、黒い字で「奇譚クラブ」と書いてあり、他のどぎついヌード雑誌の隣で異様な感じがしました。何気なくページをくったところ『王室の流腸室』と書いた表題が目に入り、これは奇妙な本だなと、驚きました。そして売場のバアさんになけなしの金を払って買ったのが浪人時代でした。

それから10年余り、K誌は今では堂々と書店の店頭飾られ表紙も色付のものに変わりました。いつも雑誌を買うときは気に入った記事の載っているものを、あれこれと買いこむ習慣で定期購読はしないのですがK誌だけは自分の気に入った記事があるうと

なからうと中味も見ずに買ってしまいます。そして家で、こっそりページを開くのですが気に入った記事のない時は、大いにガッカリします。

このSM（特に流腸）は自分で例えばガールフレンド等に行ってみるよりカメラハントを読む方が、はるかに面白いと思います。そういう訳で「奇ク」中のカメラルポ等は他人のプレイを密かに覗き見る気持がして、未知の女性の動作が、ルポの見事な文章の行間に浮き上がり、空想が現実のプレイ以上に興奮を誘います。私がK誌を買って心をときめかせながら最初に見るのが辻村氏の「カメラハント」です。他には入選作品に時々、これはと思われるものが見られる以外は、なんだか読んでいても現実味が薄く文章も難解で目を通すのが億劫です。これは、ちょうど増量剤のようなものでありましょうか。

辻村氏の文章の他に興味深いのは写真入りの女性の告白記です。写真入りのものは、なかなか迫力も実感もあって良いと思います。それから、読者通信欄の女性から寄せられた一文は、内に秘められたものが悶々のうちに流露したという感じで、こんな女性もいるのかと改めてSMの魅力を認めます。

K誌を愛読し始めて10年余りになる一読者です。初めてK誌を手にしたのは神田の古本屋でした。神田の古本街をぶらぶら歩いて、ひょいに入った店の片隅にK誌は並べてあったのです。

男性から寄せられる文は、俺はこんなことをやって女性を喜ばせるのだという文章がいかに生々しく、S的エネルギーを溢れさせて面白いと思います。ただ余りいただけなのは、プレイの相手を求むといった内容のもので、男性から寄せられたものです。文章も哀願する如く弱々しいものは、こんな手紙でうまい話がころがり込むのを待っているのだろうかとかと苦笑を禁じえません。

最近、余り載らないのが、巷の風俗を窺視するように描いた文章です。これは誰もが持つ出歯亀的欲望を擦る思いで、奇クならでは味わえない記事でしたが、このところ全く見かけず、淋しい感じです。是非、再登場を願いたいものです。

ここで私の趣向を申しますと、エネマ記事です。エネマは私にとって非常に興味深いプレイであり、幸か不幸か、これ以外のSMプレイには全く興味が湧きません。そして、極く親しいガールフレンドに、むりやり下着をおろさせ、エネマをかけるような事もしました。初めは、たいてい、いやがったりするのですが、そのうちに慣れてくると快感を覚えるものです。特に便秘勝ちの女性は、注入後の排泄が何とも言えないでしょう。喫茶店

でプレイの話をすると、もじもじして顔を赤らめたりします。彼女はエネマプレイが好きになってしまったのです。

恐らく50%以上の女性は、愛情を持った男性にくり返しされるうちに興味を示してくるのではないのでしょうか。このエネマプレイに関しては、それが愛情を前提としたものであるなら、相当高い確率で女性を引っ張りこむことができるのではないかというのが、私の考えです。幼い頃からエネマに引かれるという女性も少数いるでしょうが、たいていは、男性の訓練次第です。

私にとってエネマは女性の誰にでもしたいと思う訳ではなく、性的興味はあるがエネマの興味は湧かない女性が大部分です。

エネマの対象となる女性は、若くて愛くるしい顔立の女性（そしてグラマラスな肢体を持った）でなければなりません。要するに、エネマの第一の目的は相手の羞恥心をかき立てることにあるのです。

私はS子という女性と親しくなったことがあります。S子も私に好意を持っているようで、私は彼女と喫茶店で数度あった後、どちらから誘うともなく、ホテルで休むことになってしまいました。ここに来る当初はエネマ

のことなど、念頭になかったのですが、S子の適度に隆起した乳房や腰を見たとき、ムラムラとエネマのことが重く心に響いてきたのです。しかし、器具は全く何も用意してきておりません。

ふと風呂場を覗くと、シャワーが長い管をつけて、つり下げられてあります。このシャワーを見た時、この管を利用できるのではないかという考えがうかびました。シャワーの取手の部分を良く見ると、管と取手は口金によって連結されているのです。そして口金を回して外すと取手から管は簡単に取れて、口から温水が勢いよく、ほとばしり出しました。

管の大きさは直径1cm位でエネマに好都合です。私はこの管をS子に試みることにしたのです。水温は冷と湯の二つのコックで体温程に調整できるようになっています。

ここで私の好きなエネマの方法について述べますと、グリセリンや刺激性のある石けんを使用するのではなく、何も混じらない温水を大量に体内へ注入することです。

大型のイルリガートルで、どんどん液を注入していった、はち切れんばかりに腹がふくれ、入り切らない液が排泄物と共にふき出て来ます。この時は、もちろん不快な気持など



## イメージギャラリー『次に来るもの』須坂 旭



全くしません。例え、手がそまってしまっても、一向に気になりません。

最初は液が注入されるときに刺戟を感じるようですが、ある量が入ってしまうと体が麻痺してしまい、温度が、ほぼ体温近くにして

あるので、どれだけ入れられたか、わからないようです。ただ注入量がリミット近くになると、便意が急激に襲ってくるようで、S子は盛んに体を動かして管を抜こうとします。このままの姿勢で排泄させるには、彼女の

手の自由を奪っておく必要があります。縛ったりするのは余り好まないのですが、この時ばかりは、そうせざるを得ません。

やがてリミットに達したのか、S子は「ウーッ」という、ため息と共に激しく液を放出しました。かなりの時間、これが続いていると、彼女の体内のものは全て出切ってしまう透明な湯だけが、ほとぼしり続けるという光景になり、私達のエネマプレイは終わりを告げます。私はS子の簡単に縛った手首を離してやり、かなりふくらんだ腹部をやさしくマッサージして体内のものが全て出つくすまで手をかします。エネマプレイ後のS子の顔色は、つやつやとして、いかにも20才の若々しいエネルギーに満ち満ちているようでした。

このS子とのプレイは以前、私が体験したことを、そのまま記したものです。セックスだけでなく、このようなエネマプレイも気持ちが通い合う仲であれば、また楽しいものといえます。ここで、私のお願いですが、私の方法に興味を持たれた女性の方、またK誌4月号の通信欄にありました東京の安部文子様。よろしかったら、お便り下さい。たとえ、プレイまで発展できなくても、お会いできれば幸いです。



カット・岡たかし

M 男の天国

## 金 魚 と 檻

芳 野 眉 美

A

駅をはなれると、タクシーは、雑木林の中に鳥が点在するような、片田舎の道を走り、栗林の前で止まった。

その林の奥に、新築の彼の家があった。玄関の呼鈴をおすと、前掛けをした彼が手をふきながら出て来て、

「お待ちしていましたよ。今、あなたのために、御馳走をつくっているところです」と、にこにこしながら、いった。

「妻には何もさせません。食事の支度も、妻や娘の洗濯も、家の掃除も、みんな私が、やります」

といていた彼の言葉は、どうやら本当のようであった。

娘といっても、実の子ではなく、宝物のように大切にしている彼の夫人の、連れ子であり、彼は義父にあたるわけであった。

ゆうゆうと自適している彼の商売は、よくわからない。大地主のようでもあるが、そればかりではないだろう。

座敷に通されて、私は立派な床の間を背に

して坐ったが、どうも落ちつかない。

お茶をだすと、当家の主人は、また、もそもそと、料理をつくり台所に、もどってしまった。

新築の家のまわりに、別に塀があるわけではないが、孟宗竹の大きな竹林やら、栗林やらで、道路との視野は完全に、さえぎられているように見受けられた。

廊下を、紺のセーラー服の女学生が、私に軽く会釈して、足早に通り返した。

ふっくらと盛り上がった胸に、赤いリボンが花のようで、思わず目を、しばたいた。



主人がいうところの、弥生とかいう義理の娘さんらしかった。

美少女といっても過言ではない。

それにしても、静かな家であった。

都会では聞くことのできない鳥のさえずりが、のどかな春を満喫させていた。

廊下が、座敷や居間を囲んで庭に面しているという、新築だが昔風のつくりであった。

さっきから気になっていたが、鳥のさえずりに交じって、かすかに、湯の流れる音が聞こえてくるのである。

家人の誰かが湯に入っているのかもしれないと思ったが、台所にいるこの家の主人でもなければ、学校から帰ったばかりの娘でもない。とすると、湯をあふれさせているのは、当家の夫人ということになる。

そう思うと、湯の流れる音が、何か悩ましく感じたから不思議であった。

廊下に足音がして、主人かと思った私は、声をたてそうになった。

一糸もまとっていない夫人が、座敷の前の廊下を横ぎろうとしたのである。

「あらっ」

夫人は一瞬、驚いたように棒立ちになり、両手で胸をかくしたが、あとにもどろうとも

せず、そのまま、ゆっくりと廊下を歩いていった。

まろやかな肩と、なだらかな背中を見せてまっ白な裸身が、ずっと私の目の前を通りすぎたのである。湯をはじめてしまいそうな、輝くような人妻の裸身に私は呆然となって、言葉をなくしていた。

夫人は乳房をかくして、陽炎の様な、ふわっとした翳りは、かくそうとはしなかった。

美しい乳房に羞恥があったのかなとか、主人は、もしかしたら、今日の来客のことを、夫人には話していないのかもしれないな、とか、思った。

湯上がりの夫人は、まさか座敷に見も知らぬ若い男が坐っているとは思ってもいなかったのに違いない。

が、夫人は落ち着いていた。あわてることなく、湯上がりの裸身を、見知らぬ来客に見せて、居間に消えている。

あわてて裸身が乱れたら、かえって猥褻な心を持ってしまったかもしれない。

深い嘆息が、ひとりでに出た。ようやく主人が姿を現わし、

「妻の居間のほうに用意をしました。そのほうが、くつろげて、いいでしょう」

と私に、いった。

母屋とはなれて、離れのような恰好になって、夫人の居間があった。

妻の居間、と、わざわざ断わることからして、主人の居間も別にあるのだろう。

主人の心づくしの手料理が並んで、銚子と盃が添えてあった。

「ウイスキーのほうが、よかったかな」

銚子をとり酒を勧めながら主人がいった。「いえ、このほうが」

気分がでる、といいかけて私は、やめた。隣室の襖があいて、化粧をおえた着物の夫人が、伏目がちに入ってきたのである。

あけた襖の奥に、目も緩な華麗な夜具が敷かれてあるのが、ちらっと見え、私は妖しい雰囲気胸がさわいだのであった。

隣室は夫人の寝室なのだろう。

「いらっしゃいませ」

と夫人は挨拶したが、来客に裸体を見せたことなど、おくびにも、ださなかった。

主人が、もっぱら酒を勧め、夫人は盃を重ねた。この家では、妻と夫の立場が、どうやら逆のようであった。

湯上がりの、人妻の甘い香りが漂って、酒のせいではなく、私の顔は、ほてっていた。

ナミオM画廊 『ゴールは遠し』 春川 ナミオ



夫人の居間は、トイレもついていて、離れが、そのまま独立した家のように、つくられていた。

「失礼します」

と私が、そのトイレに立とうとすると、

「あっ、そこは妻だけが使用するの」と主人が、あわてて私を、とめた。

「殿方用には、こしらえてないのです」

と夫人と顔を見合わせて笑い、

「お見せしましょうか」

と、やおら主人は立ち上がった。

個室の踏み板がタイルではなく、素通しのガラスで、その下が池になっていて、金魚が泳いでいたのである。

白い便器がなければ、トイレとは絶体に思えない。

人の気配を感じて金魚は、ときどき、ぽっかりと水面に口を開いた。

夫人の落としたものを、この金魚がたべてしまうのだろうかと思うと、なんともいえない、おかしい妖しい気持になり、全身が、ぞくぞくと鳥肌が立つのであった。

貴夫人の個室らしい優雅な風景であった。

「奥様は、いつも、ここで？」

と唸るように私が主人にいうと、

「そうですよ」

と主人は、夫人を振り向いて楽しそうに笑った。

B

廊下に、がらがらと音をさせて、車のついた檻を主人が運んで来たのは、酒がかなり、はずんでからであった。

背の低い檻で、ここに押し込まれるとする



と、かなり窮屈な恰好でないと入れそうになかった。

「妻がこんなものをつくれといひましてね」と楽しそうに主人がいった。

「なんとか、ごまかして、知り合いの大工にこしらえてもらったのですよ」

「どうぞ」

と夫人が酒をすすめ、悩ましい流し目を檻に向けていた。

「まさか私が檻にいれられて、妻に責められるなんていえませんかねえ」

主人は立ち上がり、裸になった。

夫人が、檻の中から、縄を取り、あぐらをかいた夫の両手を背中にまわして、ねじりあげ、器用に後手に縛った。

あぐらをかいている足首を、まとめて縛ると、その縄尻を夫の肩から背中に回して上体を前に、こごませた。

縄の長さを、じりじりと縮めていく。

「いたい」

と主人が叫んだ。いきなり、夫人が夫の背中を踏んづけ、あぐらと顔が、すれすれになるまで縄を、しぼりあげたのだった。

「なによ、これくらい」

静かに酒をくみかわしていた湯上がりの夫

人が、いきなりサディスティンに変身した。

「助けてくれ」

「甘えるんじゃないよ」

言葉が乱暴になり、きらきらと目が輝いた夫人の足の裏が、ぐいぐいと夫の背中を踏みつける。

「ひい」

と主人は悲鳴をあげ、みしみしと骨が鳴った。

檻の戸をあけ、夫人はエビ責めにした主人を見下ろして艶然と笑った。

「お前の好きな檻だよ」

夫人は夫を足で蹴った。

「ひい」

と主人は、また悲鳴をあげた。

夫人は、夫をだるまころがしで痛めつけながら、檻の中に夫を押し込んだ。

夫人は寢室の襖をあけた。

華麗な夜具に、枕が二つ、ぞっとするような悩ましい夫婦の寢室であった。

夫人は静かに帯を解いた。

天女のような豊饒な女体が、檻の中の夫を見下ろしながら近づいた。

足の指で、夫の唇を、ちよつ、ちよつと触れると、檻に腰を下ろした。

じっと私を見つめた。

化石のように身体が、こわばっている若い男が、おかしかったのかもしれない。

やさしい微笑みが、夫人の頬に浮かんだ。夫人は、私を手まねきした。私は手繰り寄せられるように、にじり寄った。

夫人が、のびやかな足を、私の顔に向かって差し出した。

私は、思わず夫人の素足を両手で、おしいただいて、夫の背中を踏みつけた夫人の、やわらかい足の裏に、唇をつけた。

「フフ」

と夫人が笑ったのと同時に、私の首が、夫人のふくよかな太腿で挟みつけられていた。檻の中から、うらめしように、私を見つめている主人の顔が、すぐ下にあった。

「フフ」

と夫人は、また笑い、人妻のあたたかい太腿が、やわらかく私の顔を締めつけてきた。

夫人の、しなやかな指が、私の頭を抱き、髪を、まさぐっていた。

私は夢中になった。

悲鳴に似た、断続的な夫人の声が私を、ますます狂わしていった。

「立って」

と夫人が私にいった。

「脱いで」

主人が閉じ込められている檻の前で、私は服を脱いだ。

しなやかな夫人の手が、のびてきた。

「若いわ」

感嘆するように、夫人はいった。

檻に腰掛けたまま、夫人は私に顔を近づけ唇を突き出してきた。

「あっ」

私の全身が弓なりに、そり返った。

夫人の頬が激しく、けいれんした。

夫人の、のどが、ごくりと鳴った。

C

エビ責めというより、あぐら縛りといった

ほうが、いいかもしれない。

あぐらをかいた私は、夫人に縄で足首を縛られ、両手を背中にまわされて、後手に縄で縛られた。

あぐらと首に縄が結ばれて、腰が曲がるほど縄の長さを縮められた。息がつまって、これほど苦しいとは思わなかった。

檻から出された主人にかわって、今度は私

が押し込められてしまったのである。

更に、私の口は、横一文字に縄がかまされていった。縄は、私の口を横断し、耳の上から後頭部で結ばれていたのである。

「あわわわ」

檻の中で私は呻いていた。息がつまって、

よだれが、あとからあとから湧いていた。

口を閉じようにも、縄がじゃまで、あごがはずれそうであった。

「あわわわ」

夫婦の寝室では、エビ責めから解放された主人が、夫人と共に華麗な夜具に埋もれていた。

夫人の真っ白な、しなやかな足が、主人の首をはさむようにして、逆に天井に伸び、足の裏を見せていた。

夫人は仰向けに、腹のところで真二つに折りたたまれ、ひろげた足を主人の肩にかつぎあげられた恰好であるらしく、切迫したあえぎが、夫人の口から洩れていた。

天井をむいて高く突き出した夫人の足の裏は、激しくゆすぶられていた。

夫人の呻きが激しくなった。

私は、その時、はっとして、あぐら縛りの身体をねじって、檻の外を見た。

足音を忍ばせて、一つの黒い影が、ずっと夫婦の寝室に忍び寄ったからであった。

紺のセーラー服の弥生であった。

いきなり、主人と夫人が離れて、弥生は身体を、ちぢめたようであった。気づかれたと思ったのに違いなかった。

が、そうではなかったらしく、夫人が、夜具の上に四つ這いになったのであった。

この羞恥にみちた格好は、夫人を興奮させるようであった。

弥生が、檻の中の私に気がついたようであった。一瞬びくっとしたようだが、すぐに私だとわかったようで、隣室を覗きながら、檻の前に近寄った。

境の襖は、わずかしき、あいてはいず、寝室の両親から弥生が、みつかると心配はない。

弥生は、紺のスカートをまくると、白いパンティを脱いだのである。そして、私の目の前で少しずつ、足をひろげていった。

「あわわ」

と私は呻いた。

童女のような、すべすべした白い肌には、弥生の指が、あてがわれていた。

弥生は、立ち上がってスカートをまくった、しゃがんで、ちらちらとスカートを、め



## イメージギャラリー 『奴 隷 歓 迎』 岡 た か し



くっつけてみせたり、くるりと背中を向け、可愛  
いお尻を見せたりした。

「あわ、あわ」

縄の猿ぐつわをかまされて、私は言葉を失

っていた。

弥生は、まるでトイレで坐っているような

恰好をして、うずくまった。

檻に閉じ込められた男なら、弥生は、何を

しても平気だと思っていたらしかった。

弥生が去ってから、しばらくして私は、よ  
うやく檻から解放され、あぐら縛りを解かれ  
たが、荒い息を吐いて、長々と畳に横たわっ  
ていた。

夫妻のSMプレイに参加するだけならとも  
かく、女学生の弥生の特別参加は意外であっ  
た。夫妻が、弥生のとった行動を知っている  
のかどうかは、わからない。

寝室を覗きに來たのは、今夜がはじめてで  
はないだろう。弥生は、ずっと以前から、母  
の居間に何度か忍び寄り、両親の夫婦生活、  
それも異常な戯れを見ていたのに違いない。

「私は自分の布団で寝ます」

と主人が私にいった。

「あなたは、妻の布団で寝て下さい」

「そ、そんな」

がくがくしている足を、ようやく動かして

私は、いった。

「奥様となんて」

「いいんですよ」

と主人は私を見下ろしていった。

掛布団に、すっぽりと埋まった夫人は、二  
人の男に背を向けていた。

「では、おやすみなさい」

主人は、そそくさと妻の居間から、でていった。

夫婦は、寝室を別々にしていて、必要な時だけ、夫人の寝室を使うようであった。

私は、ぼんやりと天井を見つめていた。

妻の布団を客にあげていく主人の気持が、よく分らない。

そこまで徹底できるものなのだろうか。

夫人の軽い寝息が、聞こえてきた。

一瞬、私は、あることに気がついて、はね

起き、足音を忍ばせて、廊下に出た。

主人の居間に人の気配はない。

私の予感が、あたりそうであった。

私は弥生の部屋に、そろそろと近づいた。

「いけないな、弥生」

という主人の声がした。

「覗いたりしては」

弥生の声は聞こえない。

近づいて、弥生の部屋の様子をうかがって

あっとなった。

まだ紺のセーラー服を着替えていない弥生

が、椅子に腰掛けたまま、スカートをまくっ

て膝を立てていたのである。

その前に、主人が坐っていた。

「だって」

と弥生がいった。

「面白いのですもの」

「困った子だ」

「あの若い男のお客様と、お母様が、いっし

よに寝ているの？」

と弥生が義父にいった。

主人が、うなずいたようであった。

「お義父さまは、弥生と寝ようと思ってね」

と主人が義理の娘にいった。

「いいわよ」

主人の顔が、膝を立てた足もとに、そっと

近づいた。

「好きね、お義父さま」

と弥生がいった。

「弥生と、こうして遊ぶのが……」

主人の顔が、スカートの蔭にかくれた。

「くすぐったい」

と弥生が笑った。

紺のスカートの裾が、ゆらめいた。

「だめよ」

と弥生が、スカートを、たたいた。

「弥生のオシッコを飲んでもいいの？ お義

父様」

と弥生が叫んだ。

その瞬間、

「あっ」

と主人が叫び声を、あげていた。

と義理の娘は、紺のスカートの義父の頭を

包みこんでいた。

主人ののどが、ごくごく鳴っていた。かな

りの量であつたらしい。

主人は、弥生のベッドで寝るのだろう。

私は急いで夫人の布団に、もぐりこんだ。

ふわっとした、やわらかな暖かさが、から

みついてきた。

D

胸を圧迫されて、私は目をさました。

夫人が、私を上から圧し潰していたのであ

った。

「おめざめ？」

と夫人は、私の唇に、繰り返し唇を触れな

がら、いった。

「とても、やわらかい唇ね」

「うっ」

下唇を噛まれて、私は呻いた。

いつの間に入って来たのか、主人が布団の

隅のほうで声をかけた。



「奥様、廁の用意を、いたしましょうか」

私は、びくっとして顔を、かくした。夜はいいが、朝はなんとなくテレくさかった。

「ああ、そうしておくれ」

夫人は、私を抱いたままで、女主人のような口をきいた。

しばらくして、個室のほうから、

「奥様、よろしうございます」

という主人の声があった。

夫人が、そっと私から離れて、昨夜と同じことが繰り返された。

緋の長襦袢を素肌に着ると、夫人はトイレに立った。

「ねえ」

と私は追いかけていった。

「見てもいいでしょう」

「馬鹿ねえ」

「と夫人が私に、いった。

「そんなところ、見るものじゃないわ」

「見ます」

と私はいつて、とび起きた。

夫人の与える朝食を、美しい金魚が口をあけて、たべるところが見たかった。

こんなに優雅なトイレはない。

トイレの戸をあけると、白い便器をまたい

でいる夫人が振り返って、

「いやな子」

と笑って、いった。

まくった緋の長襦袢の下から、まるまっちい、まっ白な夫人のお尻が見えていた。

出ていけとはいわずに、夫人が息ばった。

どうやら小用のほうではなさそうであった。

しかし、主人が、なぜ廁の用意をするといったのだろうか、と私は、いぶかった。

素通しのガラスが、いやに暗く、中の金魚がよく見えない。おかしいと思ったら、誰か

中に、いるようであった。

白い便器の下に誰かが、いるのである。

目が慣れるにつれて、ようやくガラスの下が、わかりかけた。

「あっ」

声をたてて私は驚いた。

金魚といっしょに、夫人の廁の中にいるのは、主人であった。

「こ、これは」

私は絶句した。

「驚いたでしょう」

と夫人が私にいった。

「いつもこうして、金魚といっしょになって

夫は、たべているのよ」

信じられないという思いで、私は首を横に振った。

「うん」

と夫人が可愛いく、息ばった。

白い便器の下で、水の中にとっぷり、ひたった主人が、金魚と一緒にになって口をあけていた。

「いいわね」

と夫人が夫を見下ろして、いった。

大きな塊りが、ゆったりと主人の顔に向かって落ちた。

「まだよ」

と夫人は、夫にいった。

主人の顔に、やわらかそうな小山が、盛り上がった。

「いかが」

と夫人が、私にいった。

「あなたも、この中に入ってみたら」

「――」

「とても、おいしいそうよ」

母親の居間の前を、紺のセーラー服の弥生が、カバンを持って通り過ぎた。



映画『性倒錯の世界』で始めて顔を合わせ  
その強烈なSMシーンで、世人を唖然といわ  
せたマゾヒスチックアニマル、谷山久美子と  
被虐性抜群の進歩の渡部好美との、あの日の  
ことは、既に御承知の通りである。

毀誉褒貶は世の慣いで、その迫真力に圧倒

されたと讃辞を惜しまぬ人。もう少し若い女  
性でピチピチした美人を使ったら、もっとよ  
かったという人など、さまざまであるが、十  
数人のスタッフの中で全裸を曝し、被虐の悦  
楽に酔って、演技でないナマのM感情を出せ  
る女性など、カネの草鞋を履いて探しても、

そうそう見つかるものではない。誰が何とい  
おうと私は、谷山、渡部の超M女性ならは  
あれだけのプレイは出来なかったと、今もっ  
て、その確信は変わらない。

あの日、東映京都撮影所、オープンセット  
の片隅で、SMプレイの終わったあと、泥ま

SMカメラ・ハント

M  
ア  
ニ  
マ  
ル  
の

華  
麗  
な  
る  
対  
決

谷山久美子  
渡部好美  
の巻

辻村隆



みれの体を撮影所の浴場で仲良く洗いあい、二人はすっかり意気投合したようであった。

シンが強いというか、全身の針傷、擦過傷を、ものともせず、尚も余韻を愉しみたいような風情であった。強烈な衆人環視のSMプレイで、火と燃えさかった悦虐の感情を鎮めようもなく、二人は私達男共の、優しい抱擁のかいなを期待していたようであった。

強靱な女達に較べて、その点、男共はどうもダラシがない。プレイのすべてを任されてスタッフの数多の視線の中で行なったSMプレイだけに、相当に緊張もし、ハッスルしていたらしい。終わったあと、私もダンナの渡部光雄も、一時に疲労がドツと出て、もう何をすることも億劫な虚脱状態であった。

その足でモーターにでも転がり込めば、Mアニマル達は、燃えに燃えたであろうに、みすみす、そのチャンスを放擲して、寡言になった私は、京都駅へ車を急がせていた。

疲労もあったが、もう一つは、映画の方にはずっと手をとられ、本職の方が、すっかり、なおざり勝ちになっていたので、心せいでいたことも否めなかった。谷山、渡部のコンビなら、気が向けば、いつでもプレイ出来るという安易さも手伝っていたようである。

赤裸々な自己を、お互いに、相手に知りつくされた気安さが、急速な親しみを覚えたのか、人見知りのしない谷山久美子は、しきりに好美夫人に、Wプレイを誘っていた。口数の、めっきり少なくなった私への、聞こえよがしの牽制であったが、SMプレイに満腹状態だったその時、私の食指は、さして動かず渡部のダンナも、糖尿病の体を無理した極度の疲労に声もなく、いつときも早く体を休めたがっているようであった。

私達は京都駅前で、銘々四方に別れた。

渡部氏のその後の連絡によると、事実、谷山久美子から頻繁に便りが届き、渡部好美夫人も返事を出して、お互いの昇進するM感情を、ぶちまけているとのことであった。

映画で、強烈の「きわみ」をやり尽しただけに、彼女達に対する私の嗜虐性は、かなり満足していた。

いずれ折あらば、再び激しいWプレイをやるうと話し合っていたが、夏の不摂生が祟ったのか、渡部光雄は持病の糖尿を悪化させ、最も恐れる眼底に、失明寸前の症状をみて、私も同病相憐れむ糖尿だけに、他人事ならず心配したが、秋から冬にかけて徐々に体調も戻り、ホッと好美夫人ともども愁眉を開いた

のである。

意馬心猿の欲望にかられながらも、体の方がいうことをきかぬ状態になって、渡部光雄は、かなり焦燥していたようであった。

彼の体調を考えて、私の返事も、涉々しく判つきりせぬままに、何となく、Wプレイの約束は果たせずに、日が経過していったのである。いつでもプレイ出来るといふ相手には反って、なかなか機会が掴めないもので、こうしたSMプレイには、やはり一寸した、きっかけが必要であった。

夫婦プレイをしたいから、是非一緒にと請われ、久し振りに好美夫人の顔も見たさに京都へ出かけたが、結果は、彼のエスカレートしてゆく、蠅責め、針責めと、卑語を口走りつつ自虐して、自ら陶醉してゆく、彼女の羞恥責めに終始してしまった。

プレイした次の週の日曜日、あの時のプレイフォトを持って、彼は早速、私宅を訪れたのであった。

あの日、京都駅で別れてから、急に野村信子と会いたくなり、木屋町にノンコを訪ね、夜を徹して、激しいSMプレイに耽溺したことを告げると、彼は私のタフさに驚いたり、半ばあきれ顔しながら、そのくせ、そんなこ

となら一緒におともするのだったのにと、さも残念そうな口吻になっていた。気の合う仲間との、よもやまのSM談は尽きない。

癒りかけては、プレイにハッスルして、彼の症状は一進一退を、くり返している。

正月頃、体のいうことをきかぬ、もどかしさに、奇クを通じて知った同好者に好美夫人を紹介し、プレイに耽溺する二人をみて嗜虐の血を燃やし、交換条件として、同好者の妻とプレイする約束が、その後、梨の磔だと、裏切られた怒りを、ぶちまける。

最近私の紹介した、村上喜美との、プレイの状況など、愉しげに語った。

村上喜美と渡部好美なら、正にジャンボ夫人とミニ夫人の、面白い対照である。

村上喜美の熱心な求めに断わりきれず、渡部夫妻を紹介したのであるが、夫人同志ウマが合うのか、まるでレズめいたプレイを展開して、如何にも愉しそうであると、彼は非常に飲んでいた。小柄、瘦身の好美夫人にくらべ、肥満タイプの喜美夫人は、まったくの異質であるが、彼は、妻にないものを喜美夫人に発見して、興味は津々であるといった。

「是非、ジャンボとミニの対決に、辻村さんの御出馬を願いたいですよ。村上夫人は、会

いたがっておられましたよ」

「対照の妙があって、面白いかも知れませんがね。私も是非、撮ってみたいですね」

「村上夫人も相当、M気が強くなりました。私好みの針責めをしてあげたら、凄く喜びましたよ。二人の女を御せない、私の体が、つくづく情けなくなりました。ところで近頃、谷山さんは、どうしているんでしょうか。この処、音沙汰がないんですよ」

「私にも梨の磔だが、噂によると、奇クの同好者、風奇の同好者などと、しきりにプレイしているらしいよ。笛吹けど踊らぬ私達に、あきらめたのかも知れないね。何しろ彼女は一週間も虐められないと体がナマって、仕事にハリがないというくらいマゾヒスティックアニマルだから、相手さえいたら、毎日でも虐められていたいのだろう」

「映画では随分、派手にやりましたが、やはりスタッフの多い眼が気になって、それで、あの日は飽和状態の気持でしたが、日が経つにつれて、もう一度、二人をトコトンまで苛めてみたい思いにかられてくるのです。どうでしょう、やってみませんか？ 好美も内心期待しているようですよ」

「あの時は少々食傷気味だったけど、近頃、

あの映画の、二人の逆吊りシーンのフォトがSM雑誌のあちこちに利用されているのを見て、もう一度、あつというようなプレイをしたい思いにかられるね。群小のピンク映画では、一寸、真似の出来ないSMの極致だったからね、あれは……」

「ドキュメントだっただけに、確かに圧巻でしたよ。好美にしても、あれ程、強烈な被虐は始めてのことでしたからね。もう無我夢中だったそうです。それだけに、今度は私達だけで傍観者を混じえず、四人きりで今一度、再現したい気持で一杯ですよ。いろいろと奇抜なアイデアも考えているのです」

「あんたの話をきいているうちに、何だかやりたくなってきた。プレイするからと言ってやれば、千里の道も遠しとせず駆けつけてくるよ。唯、以前に被虐への限界に挑んで、彼女に対し、殆ど可能性のあるものは試みてしまったからね。それ以上となると、多分に危険につながるようにも思われるんですよ」

谷山久美子は悦虐の昂進と、快楽のパロメーターをパーセンテージで現わす。SMプレイの終わったあと、

（今日のプレイは五〇パーセントよ）とか、（今日は、すごくよかったわ。八〇パーセン



トぐらい」といった案配で、彼女にいわせると、東映でのプレイはM感覚九〇パーセントでも、快楽指数は、いたって低かった様である。嘗て、カメラ・ハント『マゾヒスチック・アニマル』で書いた通り、可能性の限界に挑戦して、ドクターの援けを借りて、ありとあらゆる、吊り責めを行ない、Mアニマルに對する、徹底的な嗜虐をふるった私である。しかし、私一人のSの思考には、やはり私好みの限度もあって、渡部光雄を一枚加えようと、私にない、新たな嗜虐のルートが拓けてゆけそうに思えた。

谷山久美子に比して、渡部好美の被虐の感受性は、どの程度であろうか——彼は謂う。

「辻村さんは、谷山久美子をマゾヒスチックアニマルと名づけられ、最高の被虐甘受者のように仰有っています、今の好美なら、彼女に負けないくらいの、被虐性をもっているように思うのです。ここ一年の間に、すごくエスカレートしましたからね。針責め、蠟責め、大量浣腸、何でもこいで、長い間、拒否していた鞭打ちにも欲びを見出すようになり高所恐怖症も、かなり克服して、逆吊りにも耐えられるようになりました。近頃じゃ寝物語に、虐められ辱かしめを受け、羞恥にまみ



れて犯されている時が、人生一番の生甲斐だななんていってますからね。果たして、どちら

の被虐性が強いのか、二人を対決させてみたいのですよ。逆吊りでは懼らく谷山さんに一步、譲ると思いますが、高圧浣腸の忍耐性と、その限界——蠟燭針による責めなど、対等に責めて、責めつくしてみたい。想像するだけで、楽しいことは、もっともって残っているように思うのです。今の好美なら、並大抵の嗜虐で音を挙げないシンの強さがあります。勿論、私の飼育の成果と自負しているのですが、それを辻村さんに判定してもらいたいのですよ」

「対決のプレイは面白いネ。是非やりましょう。唯、私という人間は感情の起伏が激しくてネ。相手次第で、嗜虐オンリーのサド人間になるかと思うときつく縛るのさえ気の毒になって手加減するフェミニストになってしまう。

所詮は感情の動物なんでしょうね。谷山久美子を相手にする時なんか、これでもか、これでもかと虐めたくなり、サジストの私をむき出しにして、徹底したSのプレイヤーとして相対してしまふんだよ。それが、好美さんとのプレイになると不思議に、いとおしさや可憐さが先に

立ってしまった、フェミニストになり、縛りひとつにしても手加減してしまうんだな。ダシナのアナタを前にして、こんなことを言うのも可笑しいが、あなたの奥さんには愛情を抱いているのかも知れない。ヌケヌケと、こんなことをいえるのも、SMの道で結ばれた同好者なればこそだが……」

「分かってますよ、辻村さんのその気持——好美は、辻村さんとプレイすると、いつもそのことを感じるといってますからね。しかし今では、その手加減さが、むしろ物足りないらしいですよ。もっと外の人と同じように、思い切って虐めて欲しいそうです。好美は、それを望んでいるようです」

「谷山久美子には、どの様な激しいプレイをしても、それに忍耐出来る強靱なマゾ性を感ずるが、奥さんの場合、何か、なよやかな弱々しい感覚が、つき纏い、激しく痛めつけられ、ぶっ倒れるか、気を失いそうな手弱女たおやめ的なものを感じるのですよ。ああした体質は如何にも被虐的で、本心は虐めたくなるタイプなんですがね。つい、いつも手が鈍ってしまふけれど、案外シンは強く、マゾ性も強いのかも知れませんね」

「仰有る通り、遠慮や斟酌は一切、無用です

よ。好美は、男の嗜虐のいけにえになるため生まれてきたのかと思われるくらいに、著しい変貌を遂げています。辻村さんの思いやりは、むしろ今の好美にとっては、有難迷惑なくらいなんです。それとも、好美に惚れた弱味でしょうかね」

渡部光雄は、チラリと、皮肉めいた笑みをこぼした。

「かも知れない」

心を見透かされた思いで苦笑し、確かに、好美夫人には、単なるM女性以上のものを抱えている事を、私は認めていた。

「だから映画のときも、私はあなたの奥さんを縛らなかつた。つい手加減してしまうと思つたからだ。その癖、谷山なら、むしろ苛めたくなるんだ。非道いと思われる程の無茶をやってしまうんだ。谷山久美子はよくよく男達から虐められる女にできているんだね」

「それなんです。好美は、いってましたよ。

辻村さんは、どうして谷山さんのように私にも激しくプレイしてくれないのかって……」  
「それが出来ないんだ。不思議な感情だ」  
ハントや楽我記には書いていないが、私は渡部好美を相手に、もう四、五回も、一対一

のプレイをしている。

出会うのは、いつも夕方からであった。プレイの日は彼が早めに帰宅して、子供達の面倒をみて入れ換わりに好美夫人が出てくる。彼の命令で、いつの折にもスカートの下にパンティはつけておらず、私の心を急速に疼かせてゆくのであった。

窃窕の琴線に触れると、SMプレイに心走らせながらも縄握る手は、つい鈍り、嗜虐の緊縛や、いたぶりはホンのお添えもの程度になつて、抱擁と愛撫、果てはセックスに過ぎず時間に、刻の経つのも忘れてしまふのであった。夜更けた京の街を、彼女の家近くまで送り届けるのも日課になっていた。

その夜の経過報告が妻の口から語られ、惑溺の一部始終が、逐一、洩らさず彼の耳に入っていた。

私とのすべてを夫に告白する人妻に、背信の行為や逸脱のプレイはどうしても出来にくかつた。私とのプレイの逐一を聞き訊し、それが妻を責める格好の材料となつて、彼の嗜虐の血は、弥が上にも燃え上がってゆく。夫なればこそ、妻を奴隷にも、アニマルのようにでも扱えるのであった。

私と出會つて戻つた夜は、朝まで殆ど眠ら



せず、奴隷妻として嗜虐の限りを尽すのが、彼の予定の行動であった。私をも含めて、友人や同好者と妻をプレイさせ、そのプレイのさまを告白させることによって、内心、激しいジェラシーにかき立てられ、好美夫人に加えられる嗜虐の行為は、激しさを増してゆく一方であった。

内訌していたマゾ性が、そうさせるのであろうか。夫に強要される俚に妻は、見知らぬ異性とのプレイを繰返し、その都度、夫から受ける激しい責めを甘受して、内潜する被虐の願望をみたと共に、そのマゾ性は回を追う毎に昂揚の一途を辿って行く。その結果今の渡部好美は、谷山久美子に勝るとも劣らない、素晴らしいマゾヒスチックアニマルに成長していったのである。

「私が谷山さんとプレイしますから、辻村さんは好美を欲ばせてやって下さい。私に遠慮なさっているようですが、そんな斟酌は無用ですよ。激しく徹底して虐めてやれば喜ぶことでしょう。それを傍でみることで、私は尚更、エキサイトします。どうか手加減しないで、思いきりやって下さいよ」

渡部光雄は、私のハラを見抜いているかのよう、くどいほど、妻を虐めてほしいと頼



むのであった。

話は纏まる——。私は早速、彼の目前で谷

けて、  
一路、走り続けた。大津市内へ入って、ドラ

山久美子宛の手紙を書いた。

渡部夫妻とのWプレイの要請を簡潔に記し、万一、都合の悪い時は電話する様に連絡して、返事がなければ四月八日の土曜日に、京都駅八条口の新幹線出口で、夕方五時頃、出会うよう書き綴り、彼はその連絡を一読して莞爾と快心の笑みを洩らすのであった。

東映での撮影以来、既に八カ月有余を経過し、思い切った刺激のほしい頃でもあったし、私達の、かねての懸案であった。

話が纏まったあと、彼は異常に眼を輝かせ喋る言葉は熱を帯び、それから尚も数時間というものの、その日のプレイの計画について、あれこれと熱心に語るのであった。

× × ×

多人数で出掛ける場合、モーターが最も都合がよい。

約束を違えず、時間前に駅頭に姿をみせた谷山久美子と、渡部夫妻をのせた私の車は、夕暮れ迫る京都市内を抜琵琶湖畔のモーター「K」に向かって

イブイン・レストランへ立ち寄り、夕食を摂る。

数カ月振りにみる谷山久美子は、又一際、濃化粧になっていた。年令と共に反って段々と若返り、服装も華美になってゆく。しかし荒淫のかげは蔽うすもなく、どことなしに肌に、すさみを感じさせる。彼女の住む福山の市内で、独り暮しの気楽さで水商売に勤め始めたのも、華美の原因かも知れないが、悦虐の深淵で、サドの男性を求めて、気随気尽に遊弋する、放埒のなりわいが、妖しい深海魚に似た、爛れた匂いを宿していた。

一月号の風俗奇譚を何気なくみた時、読者某が、衝撃のルポとして、彼女を福山でハントし、そのプレイの有態を掲載されていたのには驚いた。勿論、その男性は、風奇の読者通信を通じて知り合ったのであろうが、その名は谷山久美子でなくとも、遥々中国地方まで取材したその一文とフォトは、まぎれもなく彼女のものではあった。

食事しながら、その事情をきくと、媚を含んだ眦し眼が、猥らに笑い、彼女はあっさりと、その事実を告白し、むしろ挑発するかのように、ヌケヌケとプレイの模様を、さも愉しげに語るのであった。



「どの人も皆、その人の持ち味で私を悦ばせてくれるけれど、辻村さんは唯、虐めるだけ」

で、ちっとも私を可愛がってくれないのネ。私が嫌いなんでしょう」

恨みがましい口調で久美子は、私をにらむ。

「思い切り虐めることが、可愛がることになるのじゃない？ あんたの場合——」

「でも、思いやりがないわ。近頃はプレイメイトがスゴく殖えちゃって一週間に一度ぐらいはプレイしているわ。どの人も、激しいS性はあっても、プレイの終わったあとは親切よ。辻村さんみたいに、素ッ気なく突っぱねてしまう人は、いないわ。ほかのハント女性には、フェミニストで優しく親切なくせに、どうして私には、いつも冷たいのよう」

突っかかるような口吻であった。私は黙ってナイフとフォークを動かしていた。言いたい言葉もあるが、今それを口にしたとて何になろう。S男性を求めるに急の余り、手当たり次第に、誰とでもプレイするその不見転のマゾ性に、彼女とプレイする相手は長続きしない。激しいプレイをし終え、



数回、経てば、いつしか遠ざかってしまう。それは或は彼女の罪ではないかも知れない。余りにも欲求激しいマゾ性が、男性の嗜虐を求めてやまないであろう。

事実、私は過去数度のプレイにおいて、彼女との情事めいた時間は少ない。人それぞれの好悪の感情にもよることであろうが、殆どが強烈なプレイだけで終始していた。男性遍歴の多さに辟易し、セックスに対し、本能的な危惧と荒淫を感じ、ついためらってしまう挙句、彼女の欲情に乱れた淫蕩の表情をみると、反動的に無茶苦茶に虐めたくなってしまうのであった。少なくとも彼女に関する限りフェミニストの私は影を潜め、冷酷なサジストぶりを発揮してしまう。

「あんたみたいな、超マゾ女性でも、やはり人並みに可愛がってほしいの？」

つい皮肉めいた言葉が、口をついてでる。「そりゃ女ですもの、プレイのあとは優しく抱いてほしいわ。それだけで、どんな辱かしめも羞かしいことも、苦しさも、すっかり忘れてしまえるのです」

「純粹のマゾだと思っていただけ、それじゃやはり人並みなんだなあ。あんたの場合も、前戯ってこと？」

「誰だってそうじゃないかしら。虐められていても、快感につながるプレイなんて、苦痛だけに過ぎませんわ」

「おいおい、それは私の持論だよ。あんたが余りにも被虐を求めるものだから、純粹のマゾヒストだと思っていた。確か始めてプレイした頃、君はセックスは余り好きじゃないといったし、私の要求にも拒んだことさえあったじゃないか」

「あの頃は、夫がいましたもの。何も知らない彼に罪悪感を感じたから……今は自由よ。だから私は求めますわ、私自身のセックスの欲びをみたすために——」

「辻村さん。谷山さんのいうことも、もっともですよ。昔は昔、今は今。——やはりプレイのあとは、いたわってあげなくちゃあ」

渡部光雄が傍から口を挟む。私は苦笑いを浮かべ、もうそれ以上、反撥しなかった。過去にこだわっても今更、仕方もあるまいし、今更いってみても始まらないように思えたからである。私の度々の忠告をも無視して夫と別れ、女をクイモノにした卑劣な男「M」に走った、直情単純な谷山久美子は、本当は可愛い女なのかも知れなかった。

渡部好美夫人は、いつも乍ら控えめで無口

であった。私と久美子のやりとりを、微笑みを浮かべて聞き乍ら、静かに料理を口に運んでいた。映画で衝撃の羞恥を曝した仲間という気易さで、恬淡とした態度であった。

谷山久美子にしてみても、同好で結ばれた同じ穴のムジナといった親しみを覚えて、その点、人見知りせず、彼女は好美夫人にも快く振舞っていた。

フトいみじくも、川路むら子と好美の二人を連れて、域崎温泉に出掛けた時の一夜を、ゆくりなくも思い出す。

好意的に仲良くしようとする好美夫人に引き替え、当て馬と知った川路むら子は、表面は、さり気なくしていたものの、内心、大いにふくれ、激しい抵抗をみせ、遂に別れる間際まで、ぎこちない態度をみせていた事を。

好美のダンナは、如才なく久美子の気嫌をとるように、

「今日は好美とマゾの対決をして、谷山さんを百パーセント欲ばせてあげますよ。及ばず乍ら、この私が、あなたを虐めて差し上げますからね」

と、相好を崩してハッスルしている。

私達は再び車中の人となった。目指すモーター「K」は、もう一走りである。



土曜日の宵だけに、満員ではないかと不安であったが、運よく奥まった一室のシャッタ

うなずいて、二人は二階へ消える。  
「私は谷山さんにかかりますから、辻村さん

ーが開放されていた。

私達が、わざわざ京都からビワ湖畔まで車を飛ばせて来た原因は、このモーターの部屋が広く、階下がフロアで洋風になっており、階上がバス、トイレ、和室の閨房という、しつらえで、階上踊り場の手摺から、階下へ、高々と吊り下げられるので逆吊りなどにはお逃えむきに出来ていたからであった。

既に過去数度、ここを利用していただけに勝手知ったるボタンを押すとシャッターがガラガラと下がってガレージは真暗になる。ドアを開くと、すぐ階下のフロアが展開する。帰り際、電話するまでは、誰も入って来る気遣いはなく、多人数でも気が楽であった。

私達は心ゆくまで、あらゆる激しいプレイに没頭することが出来る。階下のソファにくつろぐと、二人にバスへ入ることを奨める。いつものコースである。

は、好美を欲ばせてやって下さい。それじゃ一寸、二人の様子をみてきますから」

言い終わって、彼はソソクサと階上へ消えた。今日のプレイの主導権は彼に任す気であった。その方がプレイも新鮮だし、又違ったサジスチックな雰囲気醸し出されるかも知れないと判断したからである。

私はカメラやプレイ道具をボツボツとり出して準備にかかった。

既に幾度となく撮りつくした二人である。正直いって新鮮味には些か欠けるが、その代り、他のどの女性も追従することの出来ない強烈そのもののSMプレイが展開出来る愉しさがあった。

かつて、久美子に被虐の可能性の限界を求めたが、この超Mアニマルに配するに、今や進境著しい好美夫人を対決させて、彼は果たしてどのような手腕をふるうだろうか——それが今の私の興味の焦点であった。

私の考えでプレイすれば、兎角、構成が似たりよったりで、そうでなくても、最近、手ぬるいといわれているだけに、ここは一番、彼の新鮮な嗜虐の思考をとり入れて、久々のクリーンヒットのフォートを提供して、流石といわれてみたい気も、しきりであった。



言い換えれば、既に八年にんなんとする私のカメラ・ハントのフォトは、私自らも認めているように、確かにマンネリ化していたからである。

彼は自分の妻を存分に虐めてくれと、私に提供している。容赦なくやらないと、久美子と配して、些かアンバランスにもなろう。

久美子は先天性淫奔のマゾヒストであるし好美は飼育によって成長した、後天的な被虐のマニアである。これから始まろうとする華麗なる対決を、東映の映画以上に迫力あるものにしたい欲望が、次第に私の胸中に渦を巻き始めてきた。

「辻村さん、どうぞ上がってきて頂けませんか——」

私の思考を破って階上のバス・トイレに通じる廊下から首だけ覗かせて彼が呼ぶ。

既に何らかのかたちで、プレイは始まっているらしかった。

うなずいて、ストロボを装填したカメラを握って立ち上がると、徐々に階段を昇ってゆく。

ダブルベッドのおかれた和室に気配を感じて襖戸を開く。

予想に違わずプレイは始まっていた。

風呂から上がった二人が、ろくろく体も拭わないうち、待てしほもなく縛ったのである。女人達の裸身は、未だしっとりと濡れそぼっていた。

久美子は簡単に後手にだけ縛られてベッドに転がり、大きく足を開いている。その久美子の顔一杯にふさいで、胸縄をかけられた後手の好美が跨がっていた。

彼の手には、ホテル備え付けの軽便安全剃刀が握られ、剃毛の儀式が始まる。熱っぽい眸で、それを見守る好美。

垂直にくっきりと区切りをつけて左半分が残る。ハーフの剃毛儀式はむしろ全部の場合より遥かにエロティックであった。ニヤリと笑って彼は剃刀を私に手渡そうとする。

急に好美の体が前こごみになり、その俛、久美子に折り重なって俯伏してしまった。

その体を彼は無難作に、久美子に並べて寝かせ直す。

「どうぞ、あれのも剃ってやって下さい、半分だけ」



好色の思いにかられ、言われる俛に、手渡された剃刀を持ち直す。気をきかして、彼は

ハンカチを敷いてくれた。

久美子が左半分を残しているのなら、好美は右半分を残してやろうと、剃刀の刃を当てる。度々剃毛されているので、余り長くもないのが、ハンカチの上に散らばってゆく。好美の眸が、熱っぽく私の剃刀さばきをみつめ、夫は私の傍で、妻の心の変化を、じっと観察していた。

馴れている好美は、ハーフの剃毛儀式にもさして痛痒を感じることはないだろう。夫の公認なのだから――。

しかし、次々とS男性を遍歴する久美子は困りはしないだろうか。

フトそんな困惑さを考えたものの、マゾに徹したフランクな彼女のことだから、案外、在りの俣を見せつけて、むしろ、プレイ相手の好き心を、いやが上にも、そそり立てるかも知れなかった。

久美子と好美の密着によって、一つが形成され、位置を変えることによって、すべやかな丘を、かたちづくる。そんな愉しい幻想が私の脳裡を、よぎり過ぎていった。

「さあ、好美。この上に逆さに乗るんだ」

妻の体を抱き起こすと、シックスティナインに、久美子の仰向けの体の上へ、好美を俯

伏せに乗せた彼は更にその上から、ぐいぐい押えつけた。

二人のMアニマルは、熱い吐息を洩らし始めた。



手提鞆から手製の「女悦相愛」の小道具をとり出してきた彼は、私にそれをかざしてみせる。簡単なシロモノであるが、苦心の作だという。

SMプレイは始まったばかりであるのに？ と、私は訝ったが、この順序一見、逆のようにみえても、これは充分、計算された上での彼のプランらしいのである。兎も角、歓びを与えてリラックスさせた上で、強烈なプレイにかかろうという腹づもりらしかった。糖尿の彼が、小道具の力を借りて、懸命に奉仕する姿は、嗜虐の行為とみるより、むしろ滑稽なピエロめいた悲しさが、ただよっていた。私は彼に任して、衣服を脱ぎ捨てると、湯舟へと向かう。

微かにその湯舟にまで、久美子の人もなげな動物めいた声が流れてきた。

× × ×

さっぱりして部屋に戻ってくると、今やWプレイの真最中である。壁に添って、腰を高々と屹立させた二人が、



屈曲して手足を連縛され、左右に引き裂かれて、柱や丸窓の棧に引っ張られている。

二匹のMアニマルを眼下にして、暴君と化した渡部光雄は、両手に一束ずつの注射針を握って、すべやかな肌に、チクチクと針を立てていた。針先は臍下を刺し、乳房に迫ってさながら巧みな鍼灸師の手練を思わせる。

常日頃の針責めに慣れた好美は、陶醉に似た快感の呻きを洩らして鼻をならし、久美子は悲鳴に近い嬌声を挙げて身悶えていた。快感につながる前に、痛みが走り、肌を刺す瞬間の苦痛が先行しているようであった。

私は、じっと見守る。針の手加減が分からなくて、この針責めは、どうも苦手である。見た目には地味な責め方であるが、針束の扱いによって、激しい歓喜を、もたらすものらしかった。

階上に閨房のあるせいか、春さきの暖房の温気が上昇して、部屋は暑いくらいで、彼はひたひたに玉の汗を浮かべての熱演を続けている。

親指と中指で針束をつまみ、人差指で、針を束ねた頭を、ごく軽く、トントントンと叩くようにして刺してゆく、たくみさは、熟練しきった手付きであった。

女体の敏感な神経に針先の洗礼をし終わって彼は、やっと針束をおく。

朱を一刷毛はいたような、上気した顔を上げて、私に視線を送ると、

「かなり燃え上がらせておきました。交替して湯につかって参りますから、あとは辻村さん、よろしく」

と、意味ありげな目配せをして、部屋を出てゆく。

試みに確かめると、久美子に比して好美の方が激しく、判っきり針責めによる悦虐のパロメーターを示していた。

手足の縄を解き放ち、体を起こしてやっても、二人は放心したように、その場にうずくまっていた。それは、激しい激しいプレイを求め、被虐の悦楽を期待する、赤裸々な姿のように思えた。

先ず谷山久美子から手早く縛り上げ、臍窩に結びめをつくり、股縄にして後手の縄に繋ぎ、一丁上がり。

好美も手早く一本の縄で縛って、同様に股縄にする。

緊縛に恍惚の表情を浮かべて、女達は易々として、私の為すが尽であった。

さてという名案もない尽、二人を坐らせて

押し倒すと、私は太い白蠟に火を点じた。

臀部から腰にかけて、かなりの至近距離で蠟涙を垂らしてゆく。

右に左に蠟燭はゆきかい、蠟骸の白い斑点が、二人の肌を埋めていった。

蠟責めに対しては、好美の方が遥かに強かった。彼女は、ぐっと歯を喰いしばって微かに呻くだけであったが、久美子は、

「あッ、熱いッ。もうよして。あッ、あッ」

と大袈裟に声を立て、しきりに悶えた。その癖、甘い悦楽の鼻声が、神経を掻き立てるように混じるのであった。

微かの苦悶を滲ませ乍らも、好美の表情には陶醉の色が流れていた。

渡部光雄が、いつの間にか戻ってきて、私の行動を、そっと背後から見守っていた。

気配に気付いて振り返ると、彼はタオルで流れる顔の汗を拭きながら、

「ああ、辻村さん。手ぬるい、手ぬるい。その様な蠟責めなどで、音を上げる二人じゃありませんよ。一寸、貸して御覧なさい」

と、自信ありげに私の差し出すローソクを受け取り、好美をパッと足蹴にして仰向かせると片脚を肩にかつぎ上げるや否や、蠟芯を逆さにして、激しく蠟涙を流していった。

好美の唇をついて、始めて高い悲鳴があがった。身をよじり、果敢ない抵抗を続ける女体を、ぐいと押えつけ、彼は炎を、すれすれに近づけて、さっと振り上げて離れた。

一瞬、明らかに何かが焼け焦げる匂いが鼻につき、思わずドキリとする。それは瞬間の素早い行動であった。

ついで彼は久美子にも同様の炎の祭典を敢行する。

しめつけられそうに絶叫する久美子。なめらかな皮膚に近々と接近した炎と蠟涙に、よくよくの熱さを、彼女の神経が、感じとったことである。

「勝負は、これからですよ」

渡部光雄は、柔和なおとなしげな顔に似ずふてぶてしく呟いて、ポイと久美子の片脚を投げ出すと、蠟燭の火を吹き消した。

すっかり、お株を奪われて私は、ただポカんと、彼の思い切った動作を見守るだけであ



った。

タタミにこぼれ落ちた蠟骸を拾い集めながら、彼は私に向かって、

「ここでは、思い切った蠟責めは出来ませんよ。今、ベッドの横へ、ビニール・シーツを敷きますから、おしりが上を向くよう、屈曲させて縛り上げてくれませんか」

と、主導権を握った調子でいう。両腕を深く重ねて前手縛りにし、両脚をそ

れに密着させて縛り、ベッドの枠に、臀部を持ち上げて凭れさせれば、蠟責めには最も、ふさわしいポーズになると、彼は手真似で説明し、この恰好で、度々好美に試みたことも忘れず付け加えるのであった。

「思いきり、きつく縛ってやって下さいね」

と、目が好美を指し、彼は、せかせかとビニール・シーツをとり、階下へと降りていった。

久美子の縄を、その俥にして、先ず好美から解くため、彼の構成したような緊縛を始める。

「ダンナが思いきり、きつく縛れというんだよ。構わないね」

「ハイ、御遠慮いりませんわ。お好きなように……」

眼尻に微かな淫蕩のかげりをみせて、彼女は、うるんだ眼差しでヒソと微笑んだ。

その笑みに誘われて、カッと俄に激しい嗜虐心が湧き上がってきた。ヒソとした笑いに



挑発されたのであろうか。

眠っていたような今までの私に、ハイド氏が活をいれる。恐らく私の眼は、いきいきと輝きだしたに違いない。

両腕を深々と組ませ、荒々しいまでの勢いで、私は縛っていった。仰向いた好美の両足を、ぐいと頭につくまで彎曲させて、膝と腕を連絡させる。背と肌をしめつけ、ぐいぐい縄を強める私に、好美は、うっとり眼を細めていた。

久美子は彼に縛らせるつもりだから、先程縛った俵で放ってあった。

縛り終わって、久美子を抱き起こすと、好美目掛けて突き転がせ、頭を、ぐっと押えつけてやる。

甘い刺激が、好美の全身をつらぬいて走ったに違いない。

私は、昂ぶる好美の顔面に腰を降ろしてやった。

呼吸を塞がれて好美はムウウと息詰まり、狼狽して、夢中で顔を振った。

渡部光雄が戻ってきた。チラリと私に眼をやり、独り肯くと、我が意を得たかのように皓い歯を覗かせただけで、ビニール・シートを拡げて場所をつくり始めた。



シートを敷き終わると彼は荒々しく久美子を引き起こし、私の縛った縄をとくと、好美

の緊縛を見ながら、きびしく縛り上げていった。

用意よしとみて、私は立ち上がる。

彼の合図で、好美、久美子と、次々に二人で抱えて、ベッドの枠に腰高に据えろと、尚も姿勢の崩れないように彼は二人の足と足をきつく縛り合わせた。

まったく同様の、放恣なポーズが並ぶ。

螺旋状の赤と銀の二本のローソクが点火され、匂いの園に灯台が立つ。

螺旋が滑り止めになって、二基の灯台の火は、みじろぎもせぬアニマル達の肌に、傾斜に溜まった熱いしずくをこぼしてゆく。

正に渡部光雄の独壇場であった。カッと見開いた両眼は、嗜虐の感激と興奮に頼らみ、ベッドにかけ上がった彼の全身は微かに震えていた。

二基の蠟燭をとり上げると、同時に傾け始める。

赤と銀の斑点が、忽ちにして、二人の双丘を、腿を染め上げてゆく。

蠟滴は尾を曳いて走る。

恍惚として、歓びの呻きの中で陶醉する好美の腿に、必死に熱蠟の苦痛をこらえているらしい、久美子の五指が爪を立てる。久美子の呻吟は高まり、形相は、ひきつって歪んでいた。それでいて尚、彼女は、この苦界の蠟責めの中に、悦虐を見出しているようであった。

果ては嗜虐の火の手に号泣する久美子——悦楽に酔い痴れて忘我の境にある好美——蠟責めは、完全に好美に軍配が上がったが流石に久美子は、激しく啼泣をつづけながらも、やめてくれとはいわなかった。

下半身を蠟骸に蔽われて、肌は熱に仄赤く染まっている。

見守る私の嗜虐の血は猛りに猛り、思わず縄束のムチが、滅多矢鱈に、二匹のアニマルの臀部に炸裂していった。

好美は激しく悲鳴し、久美子は、鍛えに鍛えられた強靱な臀部の皮膚に快く突きささるのか、号泣はやんで、甘い悦びの呻きが、間断なく吐き出されていた。

鞭打ちに強い久美子——

蠟責めに強い好美——

総合的にみて、この勝負、どうやら引分けに終わりそうであった。

× × ×

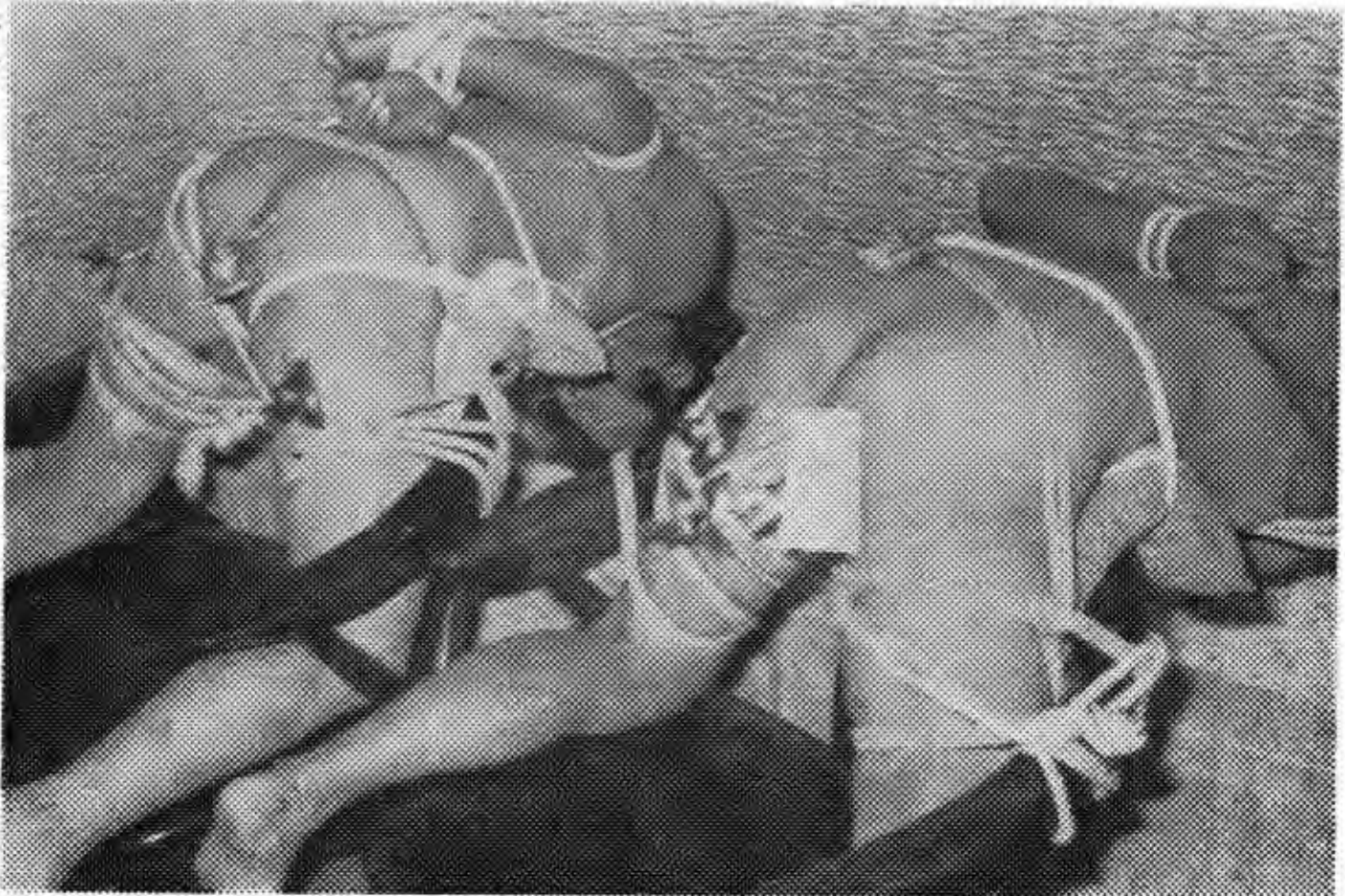
西欧のポルノ映画が溜々として流れ込み、世人はポルノに対して、そろそろ麻痺しかけている。そんな折日活映画のピンク映画がワイセツの烙印をおされて映倫パスが検挙されたのは、やはりショックであった。

今、こうして書いているカメラ・ハントの掲載フォトが、サド、マゾのものとはいえ、蠟責めのシーンなど、確かに我乍ら強烈に思えるのであるが、いよいよエスカレートしてゆく、SMプレイにも、一寸、暗い影が、さす感なきにしもあらずである。

プレイの許容範囲——それがむづかしい。日頃の私の撮る程度の緊縛フォトなら、近頃の市場に、ザラに転がっているが、渡部光雄のWプレイは、そうした観点からみて、確かに強烈そのものであった。

既に、一休みする間もなく精力的に次のSMプレイは始まっていた。

和室の閨房を出た階上の踊り場に、椅子に両腿を縛りつけられ、臀部をこれみよがしに



むき出しにした、二匹のアニマルの緊縛の姿が、そっくりのポーズで並んでいる。



互いに相手の縛り方を見乍ら、その通りに縛ってゆくから、厳密に言えば幾分の違いはあっても、殆ど異なるところがなかった。

向かって右が渡部好美、左が谷山久美子と並んで、椅子の背凭れから、上半身を乗り出して、頭の下がった姿勢は、かなり苦しいらしかった。

映画「性倒錯の世界」での責めに、始めて作った羽根針が二十本、プラスチックのケースに五彩とりどりに、華やかな、いろどりを添えて納まっている。

羽子板の追羽根に、注射針をとりつけた、彼独特の責め針で、遠くから投げると、キリキリと羽根が廻って、狙いあやまたず、かなり深く突きささる。

私達は、互いに十本宛の羽根針を振り、軽い賭けを試みていた。

私は好美を狙い、彼は久美子を狙うことになっていた。

標的に見立てる目標は論



を要さない。金的と銀的とは勿ちにして決まり、若し彼が金的を射た時は、私の愛用する中型パイプを彼に進呈し、私が仕止めたら、この羽根針を、そっくり貰うことになっていた。

人間標的になった二匹のアニマルは、胸部を圧迫されて苦しげにウンウン呻いている。

委細構わず、約三米ばかり離れて私達は羽根針を投げる。これは、又とない愉しい嗜虐の

ゲームであった。

私の投げた針は、かなりいい線を狙ったがすべて左に片寄り、辛うじてその一本が、銀的のふちに立ったに過ぎなかった。

針が皮膚に突きささった瞬間、痙攣が走って、まるで軟体動物のような銀的は、収縮する。敏感な連鎖神経が危機を感じて、防ぐように働くもののなのであろうか。

彼の針は散逸して、高く腰に集中し、腿に流れた。

もう一度、試そうと、どちらからともなく言い出して針を抜くと、突きささった皮膚から、滲み出た鮮血が、静かに細々と尾を曳いて流れ出していた。

確かに、危険な遊びである。人体にツボがあるとかで、標的周辺には散在してないので幸いだ、まかり間違って、下手に飛ばすと何処につきささるか知れたものではない。

ドキュメント映画では、唯もう、無闇やたらに投げ



たものであるが、今はプレイとして愉しめるだけ、私達には余裕があった。

ごく小さい金的に、ズバツと射立てることは、まぐれ当たりでない限り、至難である。

再び狙っては放ち、又狙って飛ばす私達はすっかりこの、誰にも出来えぬプレイに、とり憑かれていたようである。狙いは、彼より私の方が幾分、正確であった。

結局、金的も銀的も射止めぬ俤、この賭けは、お流れになった。

彼の「えいッ」「えいッ」と、投げる度に放つ、弾みのついた掛声が力をこめている証拠であり、私の針に比して、久美子に突き立った羽根針は深く、殆ど針が没しているものすらある激しさであった。

「まあ、苦しい。もう我慢、出来ないわ。起こしてえ」

谷山久美子が先に音をあげる。乗り出した



体の折れかがみに、椅子の凭れが、じかに当たる苦痛をさけ、枕をあてがっておいたが、それでも尚且、息苦しさに負けて、久美子は叫んだ。

体を起こして、逆に後手の縄を両足首にかけて背後に引き絞り、私達は執拗にも、三度目の針を女達の背に向けて、ヒュン、ヒュンと投げつづけた。

チクリと針が、柔肌に突きささるとき、二

人のアニマルは一瞬、ビクツと身をこわばらせる。斑々と背や臀部が血に染まってゆく――。

これは渡部光雄の、嗜虐の智恵であった。私はこの奇抜な智恵に酔い、珍しく血をみたサド的行為に、Sの感情は昂まってゆく一方であった。

針を立てた俤、彼は好美に近寄ると、

「どうだ、いい気持か？」と冷たく、きく。

「ハイ」

微かに応えて、好美は軽く口をあけ、眉根をよせて、悦虐に疼く肌の痛みを、じっと噛みしめていた。

「ハイではダメだ。いい気持です、といえ」彼の好んで用いる言葉のプレイが始まっている。口籠る彼女に、追打ちをかけて、

「針責めされて、とてもいい気持です。辻村さん、もっともっと虐めて下さい――と、いうのだ。早くいえッ」

彼は言い終わるなり、羽根針の一本を颯ッ



と引き抜いて、ブスブスと、皮膚の薄い乳房に突き立てた。

「呀ッ、あーッ。針責められていい……」

反射的に好美の口から、途切れとぎれに、復誦が洩れる。おそろべき被虐性を身につけた彼女は、如何なるハント女性も到底、辛抱出来ないような、強烈な針責めに、尚且、悦楽を見出して、喘ぎ喘ぎ応えるのであった。

「これから、まだ逆吊りと流腸だぞ。嬉しいだろう、好美——」

「……」

「嬉しいか？」

「ハイ、嬉しいです」

羞恥にまみれて答える妻に、彼はやっと満足したらしく、

「この通りです辻村さん。」

もっともっと愉しませてやって下さい。さあて、あなたの仰有るマゾアニマルの谷山さんは、どうかな」

と、あとは独り言になって、彼女の前へ回り、手にした針で、チクリと乳頭を刺すと、何かいおうとする

前に、忽ち、

「あッ、痛いーッ。よして……」

と、久美子は眉をしかめ如何にも痛そうに喚き立てる。彼の眼尻は、さっと吊り上がった。

「痛い？　これが痛いのか」

いきなり彼は、その羽根針で、胸や腹を、

チクチク刺しつづけていった。

大仰な悲鳴があがり、椅子をゆるがせて久

美子は泣き喚く。緊縛、鞭打ちには格段に強い久美子だが、先刻の蜚責めや、この針責め

には、かなり弱かった。マゾ女性、みなそれぞれ、泣きドコロがあることを私は見た。

それは、久美子の経験の乏しさから、蜚責め、針責めが、琴線をゆすぶるエクスタシーにつながるからに外ならない。

私は黙って、彼のいきり立った行動を制止して、交替する。

谷山久美子には、こうすればいいのだという見本をみせてやるために――。

「彼女の脱いだパンティをとってきて下さい。猿轡のつめものにしますから」

「イヤよ、イヤよ。パンティはイヤ……」

ピツタリ身につける下穿をみられる羞恥にかられるらしく、久美子は懸命に拒否する。

「イヤもクソもあるか」

不思議に彼女には、サジストの本能を発揮する私である。いきなり小気味よい





音を立てて、往復ビンタを喰らわせる。

「ヒイー」とうなって、久美子は黙ってしまった。叫べば、立ちどころに、又しても私の手が飛ぶことを彼女は酸いほど知っていた。

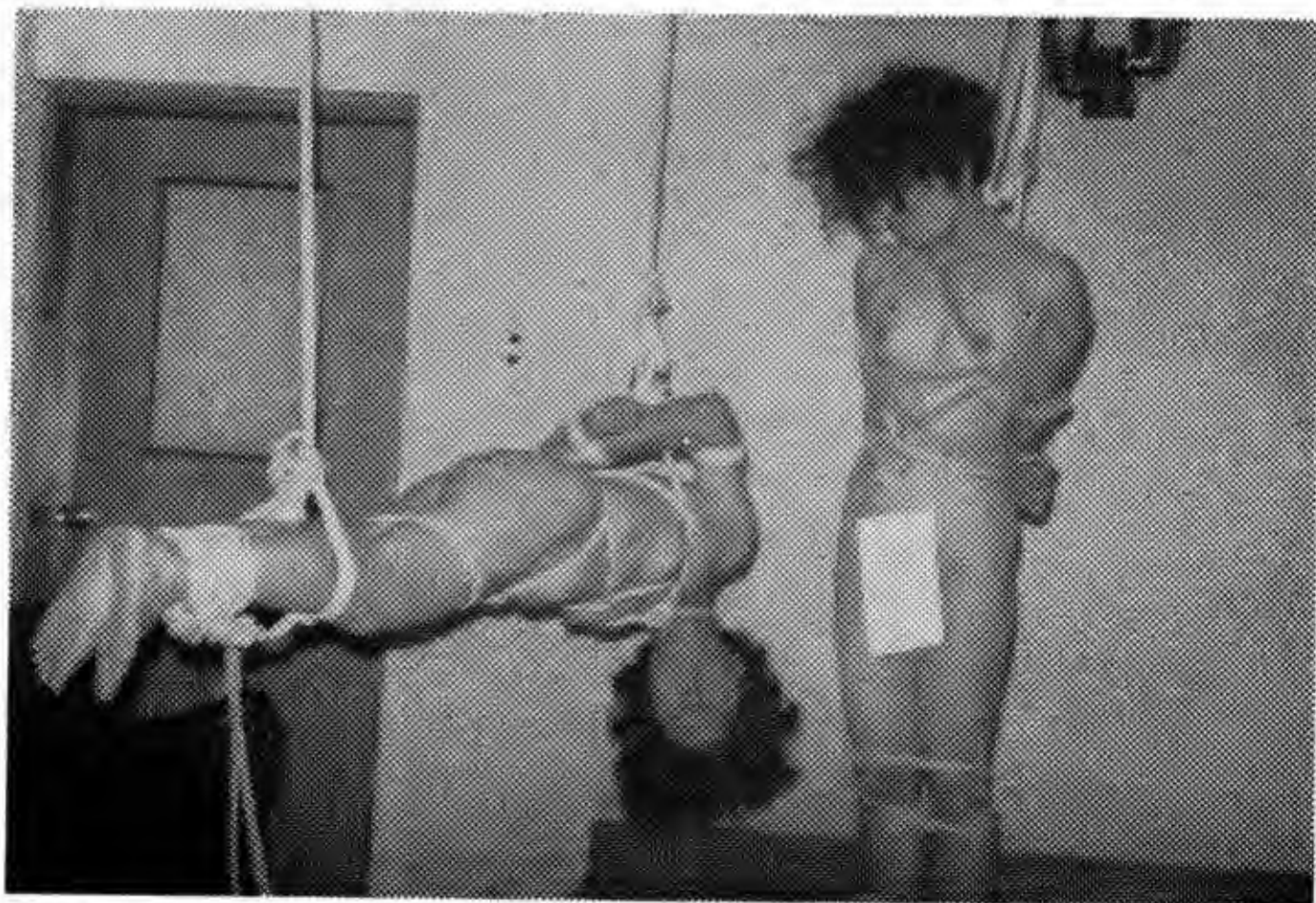
相手次第では、わざと拒否して甘える癖がある。トコトンやってやって、やり尽さないと、プレイが終われば、又ぞろ悦虐度、五〇%とか四〇%とか、ぬけぬけという彼女に、こうした、有無をいわせぬサジスチック行為も一つの方法であった。

透け透けの、薄いピンクのパンティをさげて、彼は部屋から出てくる。

頑強に口を閉ざして開かないのを鼻をつまんで無理矢理、開かせ、彼女の眼前で、そのパンティをすかして汚染度を確かめてみる。

今日のプレイのために新品を穿いてきたのか、汚穢度は少なく、微かに匂う程度であった。イヤ、イヤと激しく拒否する程の汚れもなく、内心ガッカリしながら、私はフト悪魔めいた発想にかられて、鼻を摘まんでいる彼にやめるようにいうとトイレへ出掛けた。

たっぷりと私のハルンを吸ったパンティを絞って、手を洗って戻ってくると、絞ってちっぽけになったパンティを、口腔の奥深く押し込み、浴衣の腰紐でその上から、しっかり



と締めつけて猿轡をはめる。

既に彼によって、背の羽根針は抜きとられ

点々と血が滲んでいた。

自動車製造工場の近くで暮して、連日の騒音に、少し耳の遠くなった彼女であったが、私は煙草のフィルターを千切って、女の両耳に栓をする。山本一章と会って、始めてプレイした頃、五感の感覚を奪われてのプレイに狂おしいまでに乱れた彼女は、それ以後はずっと一章と出会う時、自らゴム粘土の耳栓を持参した程である。今、私はそれを行なおうとしている。

持参した長い晒布で、耳を蔽って眼隠しをし、更にその上から、縄で顔面をぐるぐる巻きにして、みざる、きかざる、いわざる、にし終わって、先ず平手で思い切り強く背を叩いた。微かな、くぐもり声が洩れる。

渡部夫妻は、私の行為を、じっと見守っていた。軽い驚きが、彼の顔に泛かんでいる。後手の、両足首につないだ縄を外すと、首縄をかけて前に倒し椅子の脚に結びつけ、俯伏せに身動き出来ぬようにすると、私はズボンのバンドを引き抜いて手に巻いて構えた。

股縄のかかった双臀に、革バンドの鞭は、



鋭く喰りを生じて炸裂する。

身悶えて椅子が揺れきしむ。くぐもり声が大きくなる。

委細構わず、私は打ち続ける。みるみる臀肉に、太いみみず腫れが数条、浮き上がり、微かに鬱血して紫に変わる筋もあった。

好美が、さも痛かろうというように眉をかめて、みつめる。

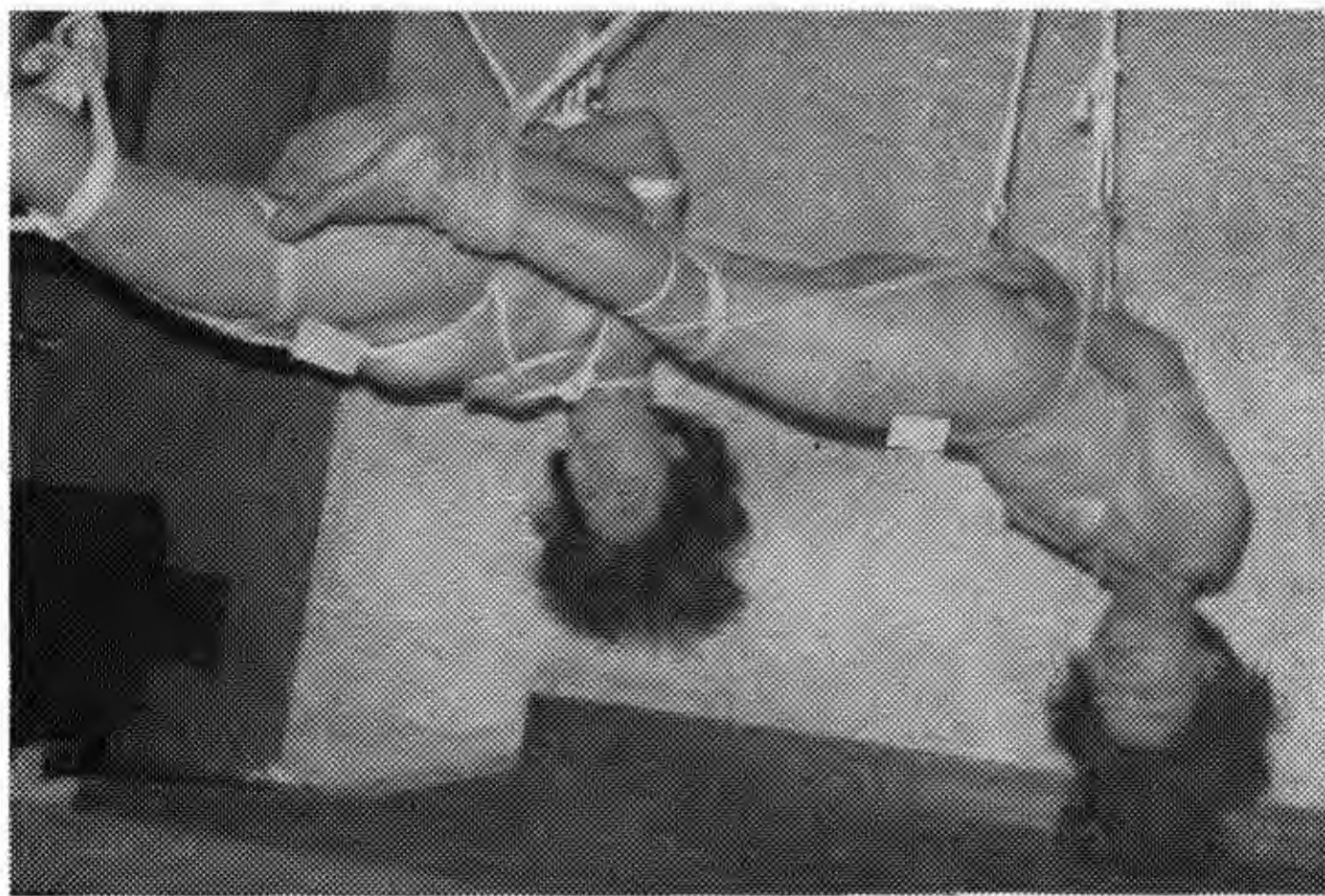
バンドを投げ出すと、真赤になった双臀へ彼を手伝わせて、平手打ちを集中させ、私と彼の掌が双丘で交錯する。

数あるS男性に打ちつくされ、堅く鍛えられた臀部なればこそ、力限りの鞭打ちにも耐えられるのであった。かぼそく柔らかい好美の臀に、到底それは望めそうもない激しさであった。

首縄をといて体を起こし、後手はその俣に椅子から開き放して冷たいフロアに転がす。

Mアニマルは、生ける屍のように無惨に仰臥して、激しく胸が鼓動していた。

傷つき、凄惨に打ちひしがれた女体を見下ろし、私は尚も心癒えぬ俣に、両足を握ってズルズルと風呂場まで引き摺ってゆく。廊下や浴場の入口で、ゴツゴツ頭をぶつけ、久美子は後手に縛られた両のかいなを振じらせて



抵抗のすべてを失って、辛うじて息づいてい

る。熱湯のカランをひねり、人体に耐え得る程度の熱い湯を、湯桶に汲んで、真赤に腫れ上がった臀部に流してゆく。

傷にしみ込んで、久美子は生き返ったように転々反側する。

二本の縄が湯に濡れるのを承知で、私は尚も、顔面へ、ザブザブと湯を注ぎかけていった。

肅とした面持で渡部光雄が凝視している。

サジスト振りを遺憾なく発揮した私は、やるときびしい顔から、いつもの表情に還元して、彼に微笑を送った。

「驚いているの？」

「ええ。彼女大丈夫なんですか？」

「これでも彼女の謂う一〇〇パーセントには程遠いよ。所詮は、あんたと私のS的感覚の違いなんでしょうね。久美子なればこそ出来るのであって、あんたの奥さんや、他の女性には絶対、出来っこない、私の複雑な感情なんだよ」

愛憎の絡み合いの断層に、私のSは存在する。日頃のフェミニストが一変すれば、こうもなる私であった。

x x x

時計は夜の九時半を指していた。

SMプレイは、いよいよ佳境へ入りつつあった。興奮の連続と疲労で、流石にこたえるのか、渡部光雄の血色は悪く、幾分、蒼褪めていた。そのくせ、意馬心猿の嗜虐の雄叫びは増強して激しく、彼の心をハイドへと、かり立ててゆくかのようであった。

私はビールを一本、のんでいた。軽い酔い心地が、一層、嗜虐の血を疼かせて行く。

階上の手摺の真下に、二人掛かりで縛り上げた二匹のMアニマルがヒタと身を寄せて、吊り責めの開始を待っていた。

もう私は斟酌はしない。私の縛った久美子の二の腕は高手小手に、高々と上がり、好美の後手は腰に垂れていた。そこに緊縛の違いがある。久美子に対する権幕に恐れたのか、吊り責めの縛りは彼は我が妻を選んでいた。



後手の背後の縄に吊縄を結びつけ、階上の手摺に固定する。

久美子も好美も、何か物言いたげなのに気がつき、縄の猿轡を外してやる。

「どうしたの？」

久美子に問いかける私。

「二の腕が強く締まって痛い。両手で吊られたら、腕が折れてしまうわ」

「大丈夫、吊縄は、胸の縄にかけてある。直

接、両腕に力が、かからないよ」

「長い時間、もつかしら……余り非道くしないで」

「心配するな」

私は平手でピシヤリと久美子の尻こぶたを叩いてやる。愛撫は、久美子の場合叩くことであった。

「あたし、怖い……」

好美が囁いた声で、つぶやいた。途方もなく久美子に折檻を加える私が、怖くなったのであろうか。それとも高所恐怖症が蘇ったというのか。

「どうして？」

優しく肩を抱いてやり、そっと唇を近づけると、この人妻は、夫の手前も憚らず、私の舌を吸った。

「大丈夫、ひどくはないから……それとも吊られるのがイヤなの？」

いいえと首を振る。

「体が持たなければ、すぐ降ろすよ。彼女とあなたは所詮責め方が違うのですよ。彼女は



吊りには強いからね。まあ頑張ってみるさ」

私の言葉に、好美は少し安堵したのか、薄く微笑んで、その笑いは許容していた。

この段で、足首に縄をかけて引揚げると、宙吊りになる。一人でも吊れる、一番手とり早い安易な方法であった。

既に夫は階上へ上って、足首につなぐ縄を垂らしている。

先ず、久美子に、つなぐ。合図をすると共

に久美子の体を抱え、彼は一気に引き上げてゆく。体が地上を離れ、水平になったところで手を振る。

宙吊りになった久美子の体は、両手を離すと、空間にゆらゆらとゆらめいた。

さして苦痛の表情もなく下がった頭の上眼使いに私をみつめる。

縄の一端が両腕にもかかっている、二の腕が、かなり持ち上げられていて肩の骨が、精一杯、久美子の全身を支えていた。

同様のことを好美に繰り返す。

返す。抱え上げた裸身が微かに震えている。

軽い好美の体は、難なく宙に浮き、上体がやや下がりにめになった。足の方を上げ過ぎたのであろう。

彼は階上で、この壮観をながめ、私は階下で、この宙吊りの連縛をみつめる。ショウにしても、ドキュメントの映画に出しても、価値のある嗜虐の光景であった。

二分、三分と経過してゆき、好美は歯を喰

い縛って、必死に頑張っていた。

静止のポーズにあきたらず、二人の腰に手を当てがって揺すり立てる。

微かな呻きが、二人の口から洩れ、好美の腹の縄は、吊縄にじかにかかっていて、深くくびれ、久美子の二の腕は、痛々しいまでに直角になっていた。

「ああ、もうダメです、降りして下さい」

好美が先に音をあげた。かっきり四分――

階上に合図すると、足首の縄がゆるみ、両脚が地上につく。

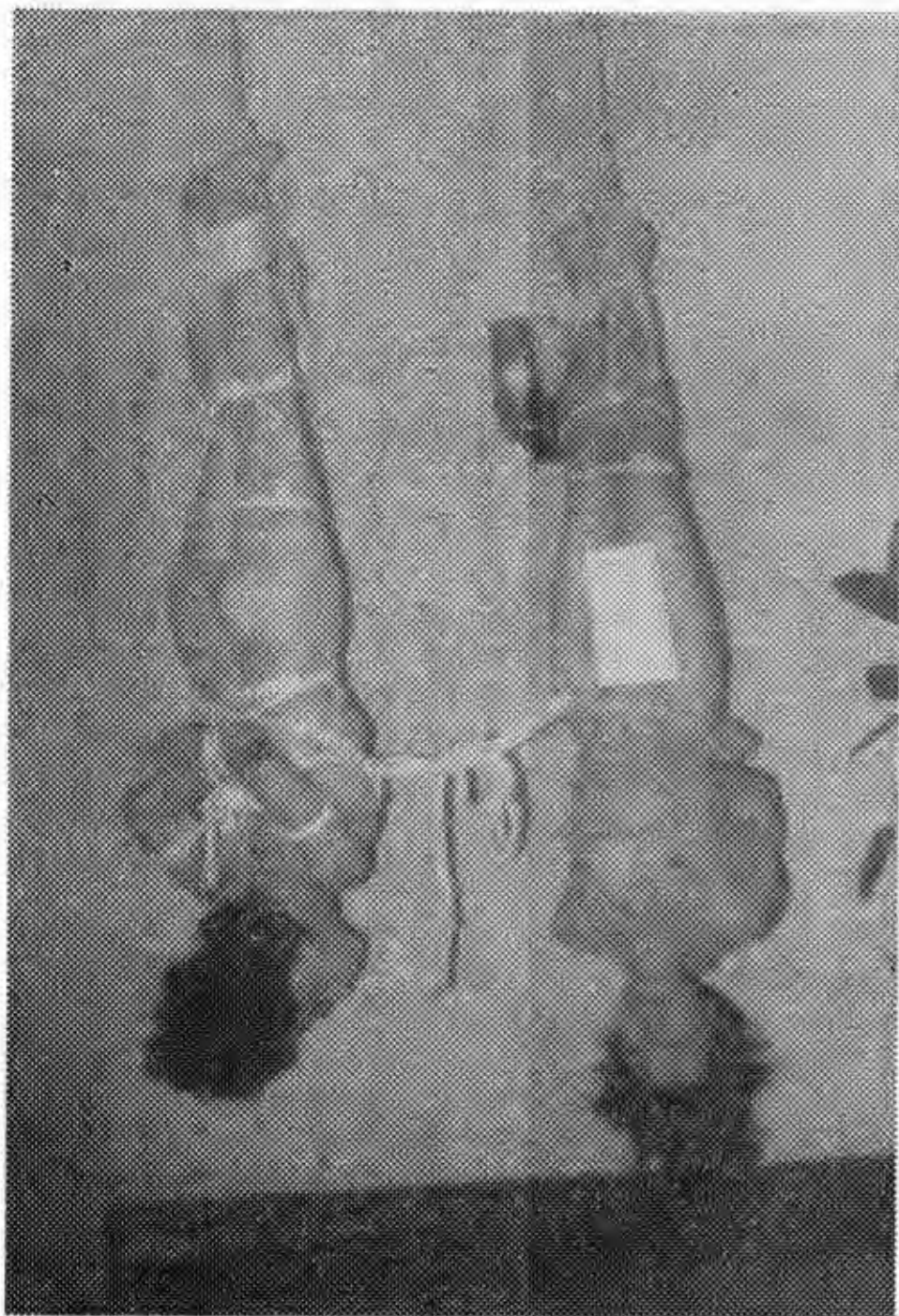
介添えして立ち上がらせると、深い吐息が好美の唇から洩れた。

依然として、谷山久美子は、二の腕の痛みを、必死にこらえて吊り下がっていた。

感嘆の瞳で、彼女の宙吊りをみつめる好美は、久美子に、そっと声をかけていた。

「大丈夫ですよ、まだ？」

「ええ、もう少し、いける」





わ。辻村さんが降ろしてくれるまで頑張るわよ」

「肩の骨が痛いでしょ」

「折れそうよ。体を動かされると、ギシギシ骨が、きしんでいるのよ」

驚異に近い頑張りが、つづく。久美子の、ひたいに脂汗が、じっとりとしにじんでいる。正に、おそるべき忍耐力であった。

好美夫人にしては、よく頑張った方であっ

たが、久美子にくらべるととても足許へもよれない。

譬えようもない苦役の中に、被虐の歓びをじっと噛みしめている久美子は、もう根っからのMアニマルの旗手に違いなかった。

そんな彼女を、いとおしいと思う反面、もっともつと苦しめてやりたい気持が湧いてくるのは、どういう心理なのであろうか。

遂に限界がきた。降ろしてくれといわず、久美子の顔面は蒼白となり、瞳孔が弛緩していった。あわてて

降ろすと、抱きかかえた私によろけて、パッタリとその場に倒れてしまった。

眩暈するのか、眼を閉じて、しきりに頭を振り、やがて頬に赤味が帯びてくる。

失神寸前に至って尚、我慢する久美子にフト私は恐ろしいものを感じた。

「腕が吊り上がったものだから、肩の骨が折れそうだったの。縛り方さえよかったら、もっと我慢出来ましたのに——」

ケロリという久美子に、呆れ顔で好美は彼女をマジマジみつめる。

確かに、そういう女である。東映のオープンセットの逆吊りのSMプレイの時でも、死にそうな声を立てながら、降ろせば、ものの五分もしないうちにケロリとして、よく喋りスタッフを啞然とさせた久美子である。被虐に鍛えられた女体は、正に不死身という外はなかった。

「逆吊りするつもりだけれど、大丈夫？」

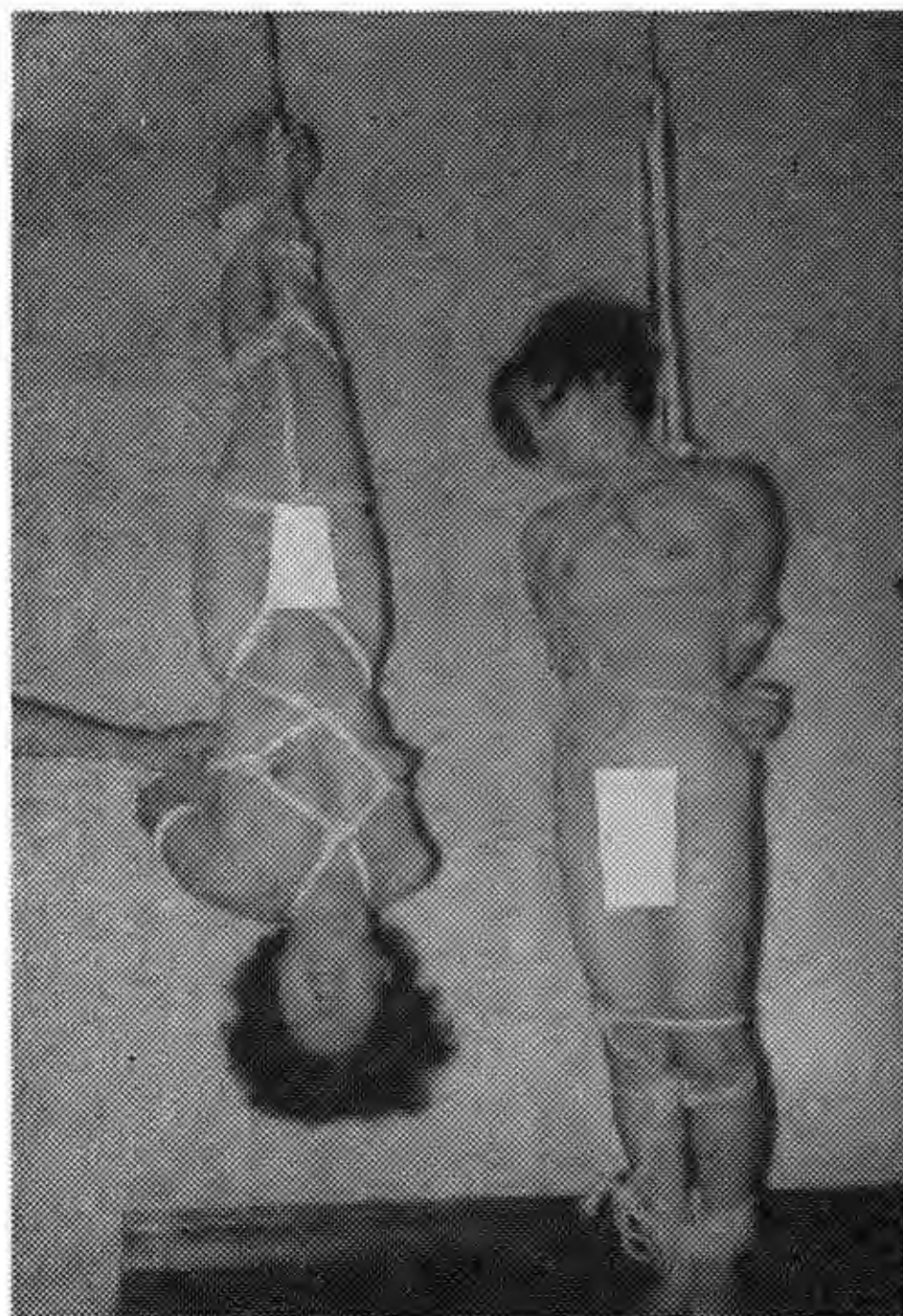
ときくと、

「ええ、もう少し休んでいたら大丈夫よ。でも好美さんが、もつかしら」

と振り向いて、人のことを気遣っている。

「東映では、五分以上、逆吊りしていたからね。既に二人とも経験済みだから、大丈夫だろう。連縛、逆吊りの再現だね」

「あの時は、夢中だったもの。あとで、随分こたえたのよ。私は一週間以上も、





体のふしぶしが痛むし、好美さんも、かなり擦り傷、つくったのよ。泥だらけの地べたで無茶苦茶に踏んづけるもんだから」

「つい、ハッスルしたらしい」

「でも、今となつては、嬉しい思い出だねえ？」

と、好美に呼びかける。

「ええ」

微かにうなずいて、好美は、かげりのある笑みをつくった。

渡部光雄は、念願の、針責め、蠟責めと仕遂げて、吊りは私の分野だといわんばかりにこのプレイには寡黙になって、私に任していた。

「さあ一丁やるか。もう午後十時だからね。早いとこ、吊ろうよ」

何となく、だらけてきた雰囲気に入れるように、私は勢いよく立ち上がると、縛った俣の谷山久美子と渡部好美を抱き起こして立たせてやった。

好美夫人は、も一つ気の進まぬ顔付で冴えない。

確かに彼女は、吊りが苦手であった。

始めて吊った時、高所恐怖症の様相を、ありありと呈して、顔面蒼白、ワナワナ慄えて

いたのを思い出します。

私が吊り好きなのを知った夫は、吊りに対して、かなり飼育してくれた、その結果、東映の、あの逆吊りにも耐え得るようになつて進歩していたのである。

その点、谷山久美子は吊り百般、既に数多経験済で、人並勝れて忍耐力も強い。

逆吊りの対決は、既に吊らぬうちから久美子に軍配の上がることは分かりきっていた。

見上げる階上の手摺は、かなり頑丈で、二人の吊りに充分、耐えられそうであった。

アベックホテルの鴨居なら、女二人の逆吊りなど、とてもじゃなく、ひ弱い感じで、悪くすると折れる恐れは充分にある。選んだモニターの目的は、これにあつたのである。

宙吊りもそうであるが、逆吊りの場合も、足にかかる縄の、巧拙如何によつて、かなり忍耐の度合が違ふのは必定で、いかなる谷山久美子も、縛り方によつては、そう持ちこたえられるものではない。

足首に縄を掛け終わって、再び彼は階上へと昇り、私は彼をめぐらして縄を放り上げた。

「どちらを先に吊るのですか？」

と、彼はきく。

久美子がチラッと私を眺め、マゾの先輩の

余裕たっぷりさをみせて軽く笑みすら泛かべ

「私からで、いいわ」

と、自ら名乗り出る。好美に対する思いやりが生きていた。

「さすが——」

と彼女に近付き、体を抱きかかえて、

「いいよ、縄を引っ張って」

階上へかけた声に應えて、スルスルと足縄が、たぐり上げられてゆく。

忽ち久美子の体重が私の両腕にズシリとかかり、縛られた体が反転して、両足が徐々に上向いてゆく。

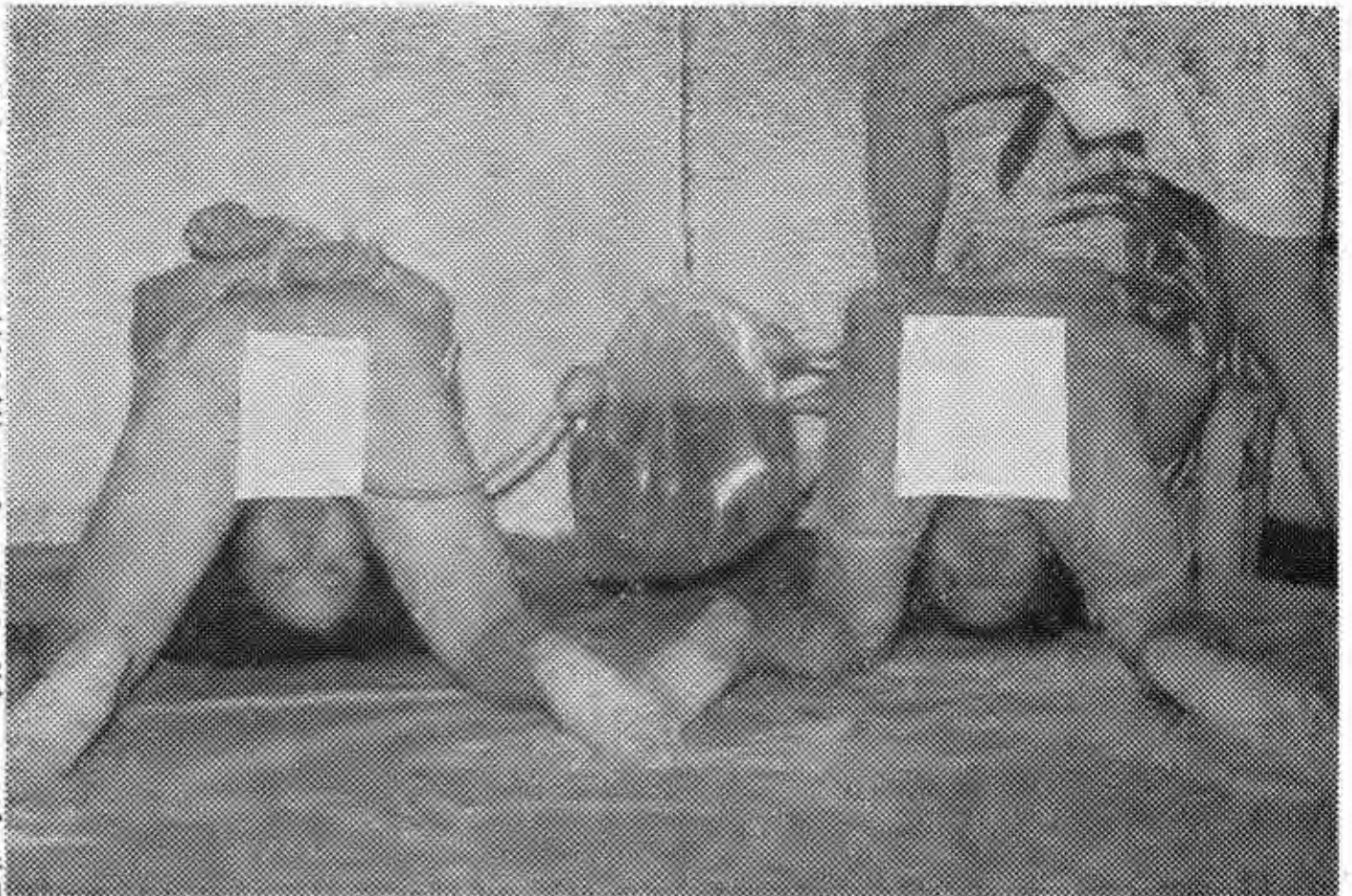
押し上げるようにして、渾身の力を両腕にこめて、久美子を差し上げていった。

縄が手摺に巻きつき、しっかり結び止めたのを確かめて、そつと体を離してゆくと、見事な逆吊りが、そこに現出する。

空間に女体はゆらめき、頭髪を逆立てて、逆吊りにぶら下がった彼女の、やや苦しげな表情の奥に、悦びに陶酔する、快楽の様相が早くも浮かび上がっていた。

ついで渡部好美の順番である。久美子に比して、抱き上げた体重は軽く扱い易かった。

彼は遠慮なく、吊縄を引上げてゆく。久美子と同様に手摺へ結び終わって、感に堪えぬ



さまで、手摺から上体を突出し、ものの見事に吊り下がった、二匹のMアニマルの壮観さ

に、暫し魂を奪われたかのように、またたきもせず、凝っと見下ろしていた。

確かに見事であった。サジストが夢想する極致のシーンが、今現実となって眼前に展開している。すべての自由を奪われた二匹の牝獣は一本の縄に全身の体重を托して、ゆっくりと回転しながら、苦悶の声を殺して、垂直に逆吊られていた。

私は二人のゆるやかに回転する動きを止めて、交互に、かなりの力をこめて、臀部に打撃の平手打ちを、くらわす。

パシリ、パシリと、小気味よい音が、夜のしじまに響き渡り、渡部光雄もかけよって、針の洗礼を全身に与えていた。

私達男共は、嗜虐の悦楽に酔ってまるでブランコを押すように、弾みをつけて、二人の裸身を前後に大きく押し放つ。

手摺が微かにきしみ、二つの女体は、半円を描いて、大時計の振子のように、互い違いに、大きく規則正しく、空間をき

て揺れていた。

私が縄を束にして手に一卷きして振りしめると、彼も私にならって縄束を手にとった。

目前をゆるやかに横切る好美を、はずみをつけて、ぐーんと押し放ち、体が戻ってきた刹那、発止と臀部に縄鞭を叩きつけた。

けたたましい悲鳴がよぎり過ぎて流れ、須臾にして、緊縛の裸身が再び眼前に迫る。

腰を落として縄鞭を構え、容赦なく一撃、肉に炸裂する。

私に負けじとばかり、渡部光雄も、高々と縄束振りかざして、強靱で逞しい久美子の臀部に、横なぐりに鞭打ちを繰り返していた。

絶叫と悲鳴が交錯して、めくるめくようなSMのプレイが続く――。

既に二つの女体の、臀から腰、更に背にかけて、あかあかと鞭痕が烙印され、縦横に、無惨に肌を染めていた。

もう逆吊りして、五分以上は経過したであろう。頑張りつづけ、悦虐にのたうつ女体に男共の嗜虐の血は一入、狂奔沸騰してゆく。

私が手を休めたのをシオに、彼は二つの女体を静止させ、体が回転しないよう、女体を縄で繋いだ。

「頑張るんだぞ、好美」



妻に声をかけて、私の憩っているソファへ並んで坐ると、煙草をとり出す。

荒々しい息づかいが、ここまで聞こえ、静止した逆吊りの女体は、苦悶に表情をこわばらせて、必死に耐えていた。

「よく、頑張ってるネ、奥さん」

傍の彼に、ボソリと呟くようにいうと、

「ええ、谷山さんに負けまいとして、辛抱しているのですが、もうそろそろ限界でしょう」

と、眼は妻の表情を追い求めている。

「ああ、もう気が遠くなりそうです。下ろして下さい……ああ」

先に弱音を吐いたのは、やはり好美夫人の方であった。

さっと立ち上がると、二つの女体を繋いだ縄を外し、体を抱えあげてやる。

夫は慌しく二階へ駆け上がり、手摺に結んだ吊縄を、ゆるめた。

彼女の体重が両手に、ぐんとしかかる。

上体を反転させて、そっとフロアに立たせて手を放すと、バランスを失った体は、ゆらめいて、危うく倒れそうになり、慌てて背後から、かかえる。

「やはりあの人、お強いんですね」

微かな愧らいを泛かべて好美は、うなじをめぐらせて私をみつめ、感嘆の声を放った。

不屈の斗志をみせて、あぶら汗をひたいに滲ませ、依然として吊り下がっている谷山久美子は、充血した瞳孔を開いて、私達にニヤリと笑ったかにみえた。

逆さ吊りの彼女をみつめて、感心したように立ちすくむ好美――。

苦悶の中に、まぎれもなく恍惚を漂わせて吐息も荒く、久美子は尚も吊り下がっている。

逆吊りの限界の、終結を急いで、苛酷な縄鞭が、私の手許から彼女の臀部へ、力任せに走った。

ひえーッと断末魔の悲鳴をほとばしらせ、五体をのけぞらす久美子に容赦なく打撃を続ける私――。

空間に身をくねらせ、宙にのたうち廻って吐く息もすさまじく、

「あッ、痛ッ。ああ、もう、ゆるしてえ」

と、甘美に泣き喚く久美子。

「辻村さん、もう降ろしましょうか限界ですよ」

手摺から軀を乗り出した彼が、みかねたように声をかける。





好美にくらべ、久美子に与えた打撃は、確かに強烈で激しかったにもかかわらず、激痛

を悦虐におきかえて必死にこらえ、未だに降ろしてくれとは叫ばなかった。

この不死身のMアニマルは、本領を遺憾なく発揮して、苦痛の限界に挑戦しているかのようであった。

私は黙って久美子の頭を抱えてやって、体を起こして双手一杯に抱きかかえると、階上に合図する。

待ち兼ねたように縄がゆるむ。ズルズルと上体が、双手に重い体重を押し込ませて、危うく倒れそうになるのを、辛うじて踏んばって、そっと上体を起こして立たせる。

苦悶と快楽のないまざった不屈の表情で、久美子は私に体を預けていた。

× × ×  
浣腸競べ——。これも夢を現実にする一つのテーマである。

それを行なうために、渡部光雄はかなり厄介な準備をしてきたのであった。

フロアに大きく拡げるビニール・シート。浣腸液をみたま、大きなビニール袋。

二本のエネマシリンジ。  
見た眼を楽しませる、液を赤く染めるマキユーロ液。

彼は、それらの準備に大童である。

厚いビニール袋に、湯を七分目ぐらい入れそれに赤チンを溶かして、ピンクに染め上げている。優に三リットルは、入っているだろう。私も手伝って、そのビニール袋を、階上の手摺から吊り下げる。

後手開股ポーズで、私は手早く二人を縛り上げる。緊縛の方はどうでもよく、目的は大量浣腸にあった。

両膝をついて、大きく開いた太腿の間から二人の顔が覗く。

二本のエネマシリンジが用意された。彼の計画によると、左右の手にシリンジの球を握って、液の等量を同時に注入してゆく予定であった。

想像と現実とは、どこかで齟齬を来たものである。

彼の第一球の注入と同時に、水勢の圧力で嘴管がとび出し、赤い溶液は、空しく二人の大腿部を濡らしていった。

なかなか、絵にかいたようには、うまくゆかないのが実際であった。



私はカメラを構いて協力する。

手を伸ばして脱落せぬよう握ってしようと思うが、二人の距離が離れ過ぎていて、両手一杯にのぼして、やっと届く程度である。

あれこれするうち、頭でバランスを保っていた彼女達の上体が崩れ、ドサリと横倒しになってしまう。

結局、同時浣腸は、私達がそれぞれの女性を受け持ち、五回宛、球を握って注入ののちに、交替したのであった。

階上から吊り下げたビニール袋に、シリンジの一方を沈ませるため、この作業は、やり難く、こんなことなら、湯桶に溶液を等量に入れて、それぞれ手近においた方が遥かに楽であったが、折角の彼の奇抜な案にクレームをつけるのも気の毒と、ビニール袋を中心に私達は悪戦苦闘する。

洩れこぼれた赤い溶液がビニール・シートのあちこちに水溜りをつくり、その

上で実施する私達は、すっかりパンティを赤く濡らしてベトつかせていた。

彼なればこそ、こんな手のこんだプレイもするのであって、予想通りコトは運ばなかったにしろ、この構図は面白かった。

久美子にも好美にも、それぞれ一リットル近い溶液が注入された筈である。

ビニール袋の赤い液を少し残して、大量浣腸は終わる。

こぼれた溶液に濡れそぼった肌を拭いて、二人を起ち上がらせる。

女人の腹はポックリと盛り上がり、液の充実を如実に示している。

「ああ、もう我慢出来ないわ。早くトイレへ行かせて……」

久美子は眉をひそめて地団太を踏む。

好美は、じっとしゃがみ込んで、間歇的に痛む腹部を押え込むようにしている。

立ち上がって、地団太踏めば、尚更に腸液は下降して忍耐出来なくなる。

私達は互いに真剣なまなざしで顔を見合せ、まだまだというように、どちらから口を切らず、階上へ通じる階段に立ちはだかっていた。

生憎と、トイレは一つしかない。どちらか一方が、じっと我慢して、先客の終わるのを待つより仕方なかった。

一人用便器を二人同時に使う方法もない。



「あッ、もう駄目よう。早くしてえ。ねえっ  
たら」

久美子は苦しげに肩を振り、これ以上、行かせねば、或は、その場に排出しかねまじき必死の形相であった。

「負けたな」

「ああ。負けた、負けた。負けたから先に行かせて」

恥も外聞もなく、久美子は狂おしげに階段を駆け上ると、足先でトイレの扉を開こうとして、蹴りつけている。もう待て暫しもないのであろう。

好美は姿勢を崩さず、しゃがみ込んで、尚もじっと、持ちこたえていた。

「さあ、よく見えるように、ぐんと腰をあげるのだ」

命じるまでもなく、久美子は腰高になり、かがみ込むとみるや、忽ち、どっと吐き出していた。勢い余って、それは白い陶磁器に撥ね返り、便器をこして辺りを汚していった。

奔流となって、怒濤のように、どっどっど排出されてゆく音——。独特の臭気が鼻をついた。

そこには、すべての羞恥を剔抉された、Mアニマルのなまの姿が、汚辱にまみれて唸っ

ている。

眼をそむけて私は立ち去ると、好美のことが気になり、階下へ降りていった。

撒きちらした汚物の残骸に、風呂の湯を汲み上げて、ザブザブかけている渡部光雄の気配を耳のあとに残し、私はやさしく好美を立たせた。

「よく我慢、出来たね」

「ああ、苦しい……もうこれ以上、辛抱出来ないんです」

羞かしげにうつむいて、そっと呟く。そこに好美の、女らしい羞恥が光っていた。

縛った体を抱えるようにして階上へ——。久美子は彼の命ずる俛に、風呂場へ消え、湯を流す音が聞こえる。

「見られていては、出来ませんわ」

羞恥に頬を染めて拒否したが、私は黙って突っ立っている。あきらめたのか、羞かしげに顔を伏せて便器に近づく。

浣腸プレイを夫から聞かされて、あらかじめ排便をすませてきてあるのか、好美の場合は、ガラガラと赤く透明に光って、濁ってはいない。注入前の溶液そのままのようであった。

こらえ性もなく、辺りにまきちらした久美

子——。懸命に制御しながら、しずしずと排出する好美——。

そこに、久美子と好美の違いがある。

同じプレイをして、同じ行為をしても、女の羞恥をすべて放棄した女と、どこまでも女らしい羞恥にくるまる女との相違が、プレイにも現われてくるのではなからうか——。

「もういいの？」

優しく訊ねて、微かにうなずいたのをみて私はトイレットペーパーを長々と切って折りたたんでいった。

×

×

×

「彼女、どうしても好美と一緒に縛ってくれ  
といってきかないんです。向かい合わせでもいいし、六九スタイルに縛り合わせてもいい  
と、自分から注文を出すので、おそれ入り  
ますよ」

「それで縛ってきたの？」

「好美が、イヤがるのです。それで背中合わせに縛ってきてやりました」

「谷山久美子は、今夜のプレイで相当、燃えているからね」

「好美は辻村さんと寝たがっていますよ。だから谷山さんの、レズじみたのを避けているのですよ。私に遠慮はいりませんから、どう



ぞ好美を存分に可愛がってやって下さい」

この寛大無辺の夫は、私に妻を提供するつもりであった。確かに私も燃えている。乱交めいた一幕を想像し、熱い血が騒ぐが、渡部光雄は、かなり体調をこわしていて、到底、谷山久美子の相手は勤まりそうにもなかった。

結果は、谷山久美子にみせつけるだけになりそうで、又ぞろ恨まれそうである。

といって、谷山久美子を相手にする気も起こらない。

口に出せず、心秘かに恨めしく思う好美の感情が、痛く突きささるからであつた。

時間は既に夜の十一時過ぎ――。

私は、やっと決心をきめた。

「悪いけど帰るよ。あんたは、女二人に挟まれて、ゆっくり、愉しんだらどう？」

「どうして……何か気に触ったのですか」

彼は驚いた様に、マジマジと私を、みつめた。当然この尽、泊まり込むものと頭から、



きめてかかっていた様子であつた。

「明日の朝、来客があるのでね。それでどう

しても……。決して気にしないで下さいよ。この支払いは済ましておきますから、ごゆっくり」

「どうしてもですか？　じゃあ、私達夫婦も帰りますよ」

「谷山さんが一人きりになるよ。放っておくのか？」

「それも気の毒ですね。辻村さんが泊まれば一番いいんだがな」

「あのベッドで、四人寝れると思う？　誰かがハミ出すじゃないか。三人なら押せ押せで何とか寝られぬこともない。谷山を縛り上げておいて、あんた達の濃厚なシーンをみせるもよし、二人を縛って、愉しませてやるもよし。いわば男冥利に尽きるのじゃないかな。

私のことは気にしなくていいんだよ。車で飛ばせば二時間もかからないからね」

一抹の未練を残し乍らも、二人の女に、等分の愛情を注ぐには、自信がなかった。私は相当、疲れていた。

小川宏シヨウへ出た時の前夜、野村信子と森川美紗の二人と一緒に泊まって、結局、何も為し得なかった苦い経験もあり、知らぬ人は乱交を愉しく思うかも知れぬが、こまやかな情事は、所詮一対一でないと、全身の愛情

は注げない。

関心を持つ好美と二人ならいざ知らず、そこに彼女の愛する夫が存在し、淫らごとに目のない久美子が介在しては、結果は目に見えるようである。

「これっきりというわけでもないんですからねえ」

「仕方ないですね、残念だけど……」

渡部光雄は、最後の土壇場で、肩すかしをくった思いにかられたらしいが、私の気持ちを快く諒承してくれた。

「奥さんによろしく伝えて下さいよ。いずれ又、日を改めて」

「そう、必ず日を改めて飲ばせてやって下さい。でないとアレは辻村さんを恨みますよ、きつと」

「ええ、きつと——そうだ、どうしているか一度みてこよう、彼女達を」

気になって、私は彼と一緒に部屋へ、とってかえした。

背中合わせに、何か喋り合っていたらしい二人は、私達の姿をみて、安堵めいた表情を泛かべる。

縛られた俤で、放置される時間は、長かったらしい。

首と胸と足首を、背中合わせにぎゅうぎゅう縛り合わされた二人の手首を手錠が、つないでいる。

敬意を表して、私は谷山久美子に軽く、くちづけした。

今夜、始めてみせる優しい、いたわりの態度であったかも知れない。

思いがけない態度に、とまどった様子ながら久美子は私の舌を捉えて、なかなか離さなかった。

そこに燃えさかる彼女の思いが端的に表われていた。

次に、私は、好美にキスを求める。

控えめな彼女はここでも久美子との違いを私にしみじみ感じさせてくれた。

別れを言うのは残酷に思え、さりげなく部屋を出る。

激しいプレイに耽溺した一夜のうたげ果て、渡部光雄のプロファイルは憔悴し、心労の影が濃かった。

「無理をしない方がいいよ」

今は最も身近な、若き同好者の肩を叩いて私は彼の健康に気をつかった。

「おとなしく寝ますよ」

「ハハハ……、どうだか。まあ、とにかく御

身大切にね」

冗談にまぎらわせ、受話器をとると、私一人、帰ることを告げる。

密室のシャッターが開き、車を出すと、流石に湖畔の風は冷たかった。

月は中天に高く、冴々と輝き、モーターより垣間みる琵琶湖の水に、金波、銀波を投げかけている。

車の影もない国道に出て、振返ったモーターの建物に、ポツリと一つ窓明るく灯影が洩れるのは、渡部光雄と二人の女性が、それぞれの感情の渦巻の中で語り合っている一室であらう。

谷山久美子よ、渡部好美よと、奇クの同好者で、彼女達を求める声は高い。

その二人を意の俤にあやつり終わって、私は今、国道を走る。

余りにも強烈なフォトは、果たして掲載し得るかどうか。

そんな危惧にかられ乍ら、けだるい心に鞭打って、私の愛車は一路、わが家へと急いでいった。

(註、フォトが、カラーネガからの焼付ですので一部不明瞭の点、お諒承下さい)



## 作 鬼 団



## 決 定 版

● 睽目のサディズム小説総集篇遂に成る！  
 昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中ではありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

● 睽目のサディズム小説総集篇遂に成る！  
 昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中ではありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

△ 内容主要見出し一覧▽

第一章 発端 第二章 人を探し 第三章 美人の 第四章 華麗な 第五章 救済の 第六章 救済の 第七章 悪魔の 第八章 恐怖の 第九章 淫靡の 第十章 美少女の 第十一章 色事 第十二章 美少女の 第十三章 美少女の 第十四章 美少女の 第十五章 美少女の 第十六章 美少女の 第十七章 美少女の 第十八章 美少女の 第十九章 美少女の 第二十章 美少女の 第二十一章 美少女の 第二十二章 美少女の 第二十三章 美少女の 第二十四章 美少女の 第二十五章 美少女の 第二十六章 美少女の 第二十七章 美少女の 第二十八章 美少女の 第二十九章 美少女の 第三十章 美少女の 第三十一章 美少女の 第三十二章 美少女の 第三十三章 美少女の 第三十四章 美少女の 第三十五章 美少女の 第三十六章 美少女の 第三十七章 美少女の 第三十八章 美少女の 第三十九章 美少女の 第四十章 美少女の 第四十一章 美少女の 第四十二章 美少女の 第四十三章 美少女の

第二十二章 身代金奪取の失敗 第二十三章 涙の宣誓 第二十四章 連命の逆転 第二十五章 奇妙な三々九度 第二十六章 飼育される白い動物 第二十七章 悪魔と悪女の悪業 第二十八章 屈辱の地獄図 第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末 第三十章 悪鬼達の残忍な所業 第三十一章 落花無残の修羅場 第三十二章 淫らな美女の調教 第三十三章 すさまじいショーの展開 第三十四章 汚水にまみれた宝石 第三十五章 華々しき美女の屈伏 第三十六章 対峙する美女と美女 第三十七章 あくどい陥穽 第三十八章 羞恥図絵の展開 第三十九章 清純な令嬢の屈辱 第四十章 人身御供の令夫人 第四十一章 深窓の美少女とズベ公 第四十二章 小夜子への執拗な調教 第四十三章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇ショー 第五十三章 華々しきショーの展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の泣き 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責め続く 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい機嫌の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなく汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。  
 〒558 暁出版株式会社宛

カット・柏木真佐男



女が呻く。女が叫ぶ。女が泣きわめく。女は踊る。ムチの伴奏に合わせて、汗をまき散らし、その不自由な身を、くねらせくねらせて苦痛というリズムに合わせて舞い続ける。しかし、いつ頃からか、その中に何か判断しかねるリズムが混じってきたようである。女はハッキリと、そのリズムに合わせた踊りを踊るようになっていく。

女は困惑しているようである。女は、しきりに何かを訴えている。別に何も手を加えていっているのではない。どうやら女は自分で自分を責めているようである。くり返すが、絶対に手出しは、していない。しかし、女は何か苦

~~~~~未熟者の遠ぼえ~~~~~

## 臆病なサディスト

~~~~~紫~~~~~

右 近

痛を感じているらしく、さっきより更に激しく何かを訴えてくる。そういえば、やけに下腹のあたりが張っているようだが……。

女の裸身が宙に浮いている。女の裸身が宙に舞っている。女の裸身はマリオネット。数本の糸に自由自在に操られる悲しきマリオネット。操り糸に操られ、どんな格好をも、とらなければならぬ羞かしきマリオネット。

涙を流し、必死になって何かを叫び、哀願しているが、何のことか一向に、わからない。

女の裸身が、くねる。女の裸身が汗を飛び散らして床の上を駆け回る。その口から悲鳴とも快楽の声ともつかぬ声を、断続的に発して駆け回っている。その中に、何か音が響いている。鈍い音だ。単調なリズムだ。どうや

ら、そのリズムに合わせて、女は歌い続け、踊り続けているらしい。

泣け！ わめけ！ 叫べ！ 踊り続けろ！ 恥かしがれ。駆け回れ。このムチから逃げてみる。その苦痛から逃がれてみる。この操り糸から逃げてみる。その声が、その顔が、その姿が俺をとられて、はなさないのだ。

○

正幸は、ごく一般的な人間である。どこにでもいるような、サラリーマンである。友達づきあいも、いい方だし、上司の受けも悪くない。この、一見、何でもないような男でもその心中では、

(女を思いきり、いじめてやりたい。泣かせてみたい。ムチで死ぬ程までに叩きのめして



みたい。ウンと羞かしがらせてやりたい」

と、そんな欲望が渦をまいていた。

だから、某誌上を騒がすT氏や同誌に登場する夫婦プレイヤー？ 等に、嫉妬すると同時に、あやかりたいと、いつも思っている。

誰でもいいから、無理矢理にでも欲望の対象にしてやろうかと、計画を練ったことも数回ではない。しかし実際には、思うだけで実行できない性質<sup>たち</sup>であった。

「俺って、つくづくダメな男だなア」

そのたびに、正幸の口について洩れてしまう歎息ではあった。

○

「今度こそは……」

正幸は固く心に誓うのだった。

正幸の憧れの存在である野沢久美子が、相談したいことがあるとかで、正幸のアパートを訪ねてくるというのである。

正幸ならずとも小躍りするであろう。今度こそやれる。そう思った。正に据え膳。これを喰わんで何とする。そんな気持であった。

早速、準備にかかった。適当な場所に釘を打ち、ロープも数本用意し、その他の必要と思われる小道具も、色々と整え、そろえた。その時の久美子の表情を想像するだけで楽

しかった。その時、どんな声で泣くのか、それを思っただけで胸がワクワクして、落ち着かなかった。

「今度こそは大丈夫だ。今度こそは……今度こそは……」

正幸は同じ言葉を、まるで念仏でも唱えるかのように口の中で、くり返し、くり返し、つぶやくのだった。

「今度こそ……今度こそ……」

○

「ごめん下さい。正幸さん、いらっしゃいますか？」

久美子は普段と変わらぬ、物静かな態度でやってきた。これから数分後の、運命の急変など夢想だにしない様子で……。

もっとも、知ってたら、来るはずがないけどネ。正幸は、そう思う。

「どうぞ、坐って下さい」

つとめて平静に、普段と同じ調子で座布団をすすめる正幸だった。久美子は素直に、それに従った。

「それで、御相談というのは？」

はやる心を押えながら、正幸は話題を切り出してゆく。とにかく、何かの、きっかけが欲しかった。

綺麗だ……美しい。

正幸は意中の女を前にして、その想いは、早くも久美子の、のたうち回っている羞恥地獄の世界へと走ってゆくのだった。今すぐにも裸にしたいという衝動に、かられている正幸だった。

イヤ待てよ。いきなりやったら、抵抗するだろうな。抵抗されたら面倒だナ。どうしようかな。イヤ、迷うことはないじゃないか。それこそ、俺の求めていた風景じゃないか。なんでためらう。千載一遇、絶好のチャンスだ。早く、やってしまえ。そうだ、今すぐに。何をモタモタと、ためらってるんだ。

○

久美子の相談というのは、別に大したことではなかった。しかし、久美子本人にすれば大変な事件なのだろう。それで相談しに来たのかも知れない。

正幸としては、慎重に考えて返事すべきであり、それをできないような人間でもなかった。だが今は、別のことで頭が、いっぱいであつたので、ろくな返事のできる状態ではないようである。

正幸には、相談に乗るなどというのは、口実と同じようなものであった。ただ、久美子

を自分の部屋に、とじこめれば、いいのである。

だから、やるなら「今」であった。

○

やれ！ いまだ！ 襲いかかれ！ 縄をかけろ！ 服を剥げ！

久美子の思い余ったような話ぶりを聞きながら、正幸は、ずっとこの調子だった。

まず組み敷いて、後ろ手に縛ったら、服は脱がしくくなるナ。それじゃあ、先に脱がそうか？ 脱がしたら、吊るしてムチで打ちのめしてやるか。それとも、全身くまなく筆で、なぞってやろうか。いっそ、塩水でも、たらふく飲まして、しばらく、ほっといてやるか。

そうしたら、どういふことになるかな。彼女、驚くだろうなあ。泣くかな？ わめくかな？ ヤメテって叫ぶかな？

善は急げだ。早い方が、いい。早いところやってしまおう。さて、この細い身体に、どんな具合に縄をかけてやろうか……。

何を、ためらっている。ためらうことは、ないはずじゃないか。やっと、めぐって来たチャンスじゃないか。これを逃がしたら、こんな絶好のチャンスは、いつまた、めぐって

くるか、わからないんだぞ。

そうだ。縄の束を、つかめ！ そしたら、それを彼女にかける！ 抵抗したら二、三発頬を、はりとばしてやれ。脱がすんだ！ その服を脱がすんだ。

見ろ！ この恐怖に、ゆがんだ顔。羞恥に悶える顔。この姿態。この声。これこそ、求めてやまなかったものじゃないのか？

その通りだ。これこそ求め続けたものだ。待ち望んだ表情だ、声だ、姿態だ。よし、泣かせてやる。もっと、ほえさせてやる。もっともっと、叫ばせてやる。もっともっと、羞かしがらせてやる。

これで、どうだ。これじゃあ、どうだ。どんな気分だ？ いい気分だろう。よし、もっと味あわせてやる。充分に……。

いやか！ いやなら、逃げてみる。俺の攻撃を、かわしてみろ。なんて恰好だ。いい恰好だぞ。それが俺を満足させてくれるんだ。そら！ もっと転び回れ！ もっと泣け！ もっとわめけ！ 叫んでみる。この俺を、ののしってみろ。

○

「こんな、つまらない相談をしてしまって、すみませんでした」

「いや、そんなことは、ないですよ」

「どうもありがとうございます。少しは気が楽になりました」

「そりゃあ、よかった。少しでも役に立てれば嬉しいよ」

「どうも、おじゃましました」

「気をつけて、お帰りなさい」

「それじゃあ、失礼します」

あーあ、帰っちゃった。

○

バカ！ ドジ！ マヌケ！ 臆病！ ウスノロ！ 見ろ！ 帰っちゃったじゃないか！ この大バカ者めが！

どうするんだ？ こんな絶好のチャンスは二度と来ないかも知れないんだぜ。まったく残念なことをしちゃったな。ドジだなあ。

正幸の心の中に、自分を、ののしる声が猛烈に反響した。

「どうして俺って、こうドジなんだろな。全部ムダになっちゃったじゃないか」

またもや、計画倒れになってしまった正幸の口グセ。

「俺って本当にダメなヤツだなあ」

「まあ、いいさ。この次があるさ」

「そう。今度にそ……。今度こそ……」



カット・伊達 忍



私は白濁した液体で満たされたガラス器を携えて戻って来た。薄暗い部屋の中央部に、博美の姿態が仄白く浮かんでいる。

私は呆然と、しかし、かろうじて冷静さを保ちながら、喰い込むように、その白い輪郭を見つめる。博美の豊満な白い臀部が今、確かに私の前に、あられもない姿態で開かれて

告

白

アースへの

欲望と幻想

佐 渡 黄 門

いるのだ。しかし、その豊かな丸みを帯びた尻は、私の目に、まるで博美自身とは全く別個の独立した生き物のように映り、この密閉された空間の中に存在していることすら素直に信じられないくらい、非現実的なもの思われた。

闇の中に白く浮かび上がっているその姿態

は、これから始まろうとする狂宴の主役にし  
ては、あまりにも現実感を欠いていた。それ  
は闇に浮かぶ白い妖美な蜃気楼であった……  
私の心に、ある不安と焦燥が湧き起こる。私  
は夢を見ているのか？ 私は幻を相手に何が  
できるというのか？

しかし、しばしの忘我の後、右手に、しっ  
かりと握りしめている太いガラス器の冷やか  
な触感が私を現実の世界に引き戻した。ひそ  
やかに息づき、蜃気楼のごとく、ゆらめくそ  
の白い臀部を、今こそ私自身の手で、しっか  
りと現実のものにしなければならぬのだ。  
博美の純真性を、この際、徹底的に汚し、汚  
しつくして、彼女の私への憎悪を決定的なも  
のにすることが、私たちに残された唯一の方  
法なのだから……。

私は、ゆっくりと大きく息を吸い込み、闇  
がつくり出す幻覚を追い払うべく、電灯のス  
イッチを入れた。パツと部屋全体が明るくな  
ると同時に、先ほどの蜃気楼は、あられもな  
い姿で四つばいになっている女という生き物  
の体の一部として、にわかに生臭い現実感を  
帯び始めた。

文明が幻を消してくれた。そうだ。これで  
こそ、私の支配下にある、現実そのものなの

だ。私は、この女に対して絶対的な支配力を持ち、この女奴隷を従属させる権利を持つ男となったのだ。

私は博美の前に片膝をついて、その俯伏した頭を持ち上げた。縄で後ろ手に縛り上げられ、猿轡をされている博美は一瞬、私を強い非難と哀願の眼差しで見上げた。

次に私は右手に握りしめていた、おぞましくも鈍い光を放っているガラス器を、涙のしずくで妖しく光っている黒い大きな瞳の前に突き出すようにかざして、その恥かしさで充血した耳元に、小さく囁いてやる。

「さあ、これから君を、思いっきり可愛がってあげるからね。覚悟は、いいね……」

「ウッウッウ——。フガア、フガ……」

私は、博美の臀部を前にする。こんもりと重量感のある白い双丘が艶やかに色づいている。美しい。しかし、これは現実そこにある、女の尻たぶなのだ。美に、まどわされてはならない。美しいもの、聖なるものを汚すことが、私の今の目的なのだから……。

一瞬の躊躇の後、私の左手は、その美しい双丘に伸びた。私の眼前に、その奥深い秘境が、あきらかになった。電燈の明かるい灯の下で、再び、私の脳裏は、先程の蜃気楼のよ

うな幻覚に占領されそうになった。どうやらあまりに現実的な生臭い感覚といったものも幻覚を生じさせるらしい。だが、その秘境は確かに、博美自身とは別個の小さな生き物であるといえた。ひ弱な小動物のように微かにおのき震えながら息づいているのだ……。

私は目をつぶり、右手に握っていた太いガラス製の浣腸器に力をこめる。

「ウッ」

小さな、しかし鋭い呻きが博美の口から洩れる。

浣腸器を握った掌に伝わってくる微妙な抵抗感！ この感覚だ！ これこそ私が長年、求めて来たものだったのだ！ 私は強烈な、めくるめくような感動に身慄いした。

「ウ——ン——」

苦痛とも歓喜ともつかぬ、低く甘えるような呻き声が博美の口から長く尾を引いた。しばらくの間、私は意識朦朧とする想いで、悶える白い双丘に見入っていた。

「ウッウッ、ウ——ン——」

やがて博美の悶えが激しさを増してくる。その当然、生じるべき筈の現象が、私をつつと現実の世界に甦らせ、同時に狂おしいばかりの恍惚境に私を引き込んでくれる。ふと、

握りしめたままに空になったガラス器に気付き、あわてて側の卓上に置く。

哀れにも美しい聖女の苦悶の表情。脚下に見下ろす、その苦悶は、やがて明らかに妖しげな被虐、享楽の様相に変化し始めた。私は思いついて、電燈のスイッチを切った。再び闇が支配する。目が暗がり慣れしてくると同時に、闇の中にも、うねりを見せる白い輪郭が浮かび上がって来た。それは、まるでこの世のものは思われぬ別世界の生き物のように妖しいまでの美しさを、たたえている。

私は夢見る想いで、その、ゆらめく白い妖精に魅せられていた。

一きわ高い呻きが暗い空気をふるわせた。その時、私の脳裏を、予期しない、ある悲しみにも似た感情が、かすめた。いや、小さな心の痛みとも、いふべきものだったろうか。

私は思わず、自己嫌悪にも似た、ためらいに襲われた。だが、それは、ほんの一瞬に過ぎず、続いて聞こえた呻きは悦楽のものと感じられ、深い歓喜の、るつぼの中に跡形もなく融け去ってしまった。闇に映える妖美な蜃気楼。妖しげなスネークダンスと甘美な呻き声は、私の心を奪いとして宙に浮遊せしめたのだ。



再び電燈のスイッチを入れると同時に、屈気楼は消え去り、生々しい、狂乱の姿態が再現された。

「アアー、ウーッ、ウー」

その黒い大きな瞳が、とめどなく、大粒のしずくを溢れさせながら、哀願するように私を見上げる。しかし、そのあられもない姿態は、もはや、理性の枠を越えて、官能の世界にのみ生きる、女の媚態という以外になかった。私の内部に、ますます嗜虐の炎が燃え狂い、私の頭に、アナルコイタスという言葉が浮かんできた。もう五分近くたったから、博美の忍耐にも限界がくる、はずだった。私はカッと燃え上がる残忍への衝動に、身慄いし

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御了承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

た。

「ウググエッ！」

獣じみた咆哮が、博美の口から洩れた。

「博美！ おまえは、もはや俺の奴隷だ！」

私は、夢見る想いで、そう叫んでいた。

われにかえった私の視界に、俯伏した臀部と、その周囲にわたる、おびただしい変貌ぶりが明らかにされていた。汚濁にまみれた博美は、死んだように横たわっていたが、その体の小さきみに震えているのが、いい知れぬ可憐さを湛えて私の胸を、かき乱した。

私は知っていた。私が得たもの、それは、私の愛する女の醜悪なる排泄物だけであったであろうことを……。博美は、私への愛を憎悪に、すり替えるであろうことを……。そして、それでも私の心は後悔することなど、あり得ないことをも……。

× × × × ×

以上のようなことを、毎日毎日、想像しながら、私の中に燃えたつ嗜虐の炎を必死になつて静めようとする努力は、正直いって苦痛以外の何ものでもありません。現在、私の恋人である博美を想う度に、そんな残酷な幻想に浸ってしまう私は、鬼畜生にも比せられる卑劣漢であるかも知れません。ですが、博美

の、あの可憐な可愛い姿を思い浮かべ、その清純さを思うと、なおさらに私の中に荒れ狂う、どす黒い欲望が浪立ち、願望が業火の如く燃え上がるのです。

私はそんな自分の性向を悲しく思います。恥ずかしくも思います。しかしながら、この破戒的ともいえる、私の女性の肛門に対する欲望は、どうしようもない種のもののように今や、このため、いささかノイローゼぎみともいえる、かんばしくない精神状態にまでなってきました。私は、あれこれ自己分析を試みます。例えば、これは一種の破壊本能であり、幼児期における肛門愛が、そのまま現在にいたっていて、糞便愛好の気もあるようだ……等。

しかし、それだけのことで、だからといって、どうしようもありません。そして最後には、きまって、いったい肛門に対する愛着があつては、いけないことだろうか？ いけないとしたらなぜ？ という疑問が残るだけなのです。正常な性？ 倒錯の性？ とは、いったい、どういう基準があるのか？ しかし、ともあれ、私は博美と別れねばなりません……。

## 連載・時代S小説

## 紫 蘭 の 門

(11)

## 風 流 極 道 軒

桃源あり 訪れなば  
桃源境裡 ただ 満喫  
夢忘るるな 酒酌むことを

カット・岡 たかし

## 黒胡椒とバナナ

真紅の垂幕のまえに、奇妙なかたちの黒塗りの脚立がひとつ、おかれている。

二十畳はあろう江戸は小梅にある札差・利倉屋庄右衛門の別宅の広間では、菊亭貴子へ



の責折檻が、いまや、たけなわであった。

追剥の美女衛門の「三つ黒髪」の縄目から解放されたあと、蹲まっている貴子を、青江散位、善兵衛・清兵衛が、舞台の上で、威丈高にとりかこんでいた。

「御開帳、御開帳！」

と、善兵衛が、豊かな乳房を抱きしめてい



る貴子の前に回り、押し倒すと、清兵衛が、  
「おっとと……」

背後から受けとめ、手とり足とり、脚立の上に仰向けにのけぞらせる。つぎにその手足を青江が、針金で、それぞれ、脚立の足に縛りつけてしまう。

手足「大」の字、惨めな裸身を、老中領田下野をはじめ十数人の客たちのまえに晒しながら貴子は、こみあげてくる屈辱感が、もと用人の青江や、下男であった清兵衛たちへの憎しみとなって、こみあげてくる。

「お、おまえたち、よくも、よくも妾に、このような恥知らずなことが！」

「恥知らずはどちらでしょうな、奥方さま」

朝夕、仕えていた高嶺の花であった押小路中納言高明前夫人を思うがままに罵ることのできる快感に清兵衛は、うきうきしていた。

そして、眼の前に、なにおおうものもなくむきだしになっている艶めく美肌を、しげしげと覗きこむ。

この広間に連れこまれてもう二刻になろうか——。女谷流緊縛術の達者・逆剥の美女衛門、美男の槍助、陰間の架助たちに責められたうえに、思いもかけぬ、かつての下男や用人風情に罵られつづけた貴子の胸は、悔しさ

おぞましきで、はりさけるようであった。

が、貴子も女。男たちを憎悪しつづける意志とは、うらはらに、成熟した女体が微妙な反応を示してくるのはどうしようもない。

「な、なにを、なにをするのです！」

突然に、激しい衝撃をうけて貴子の裸身が跳ね、躍った。

客席のあちこちから洩れる淫らな吐息のなかで、青鬼のように蒼白い顔の青江が、

「ぼつぼつ料理にとりかかるぞ、清兵衛」

と、なおも指先でチョツ、チョツと、たわむれている二人をおしのけ、たもとから取り出したのは、ギヤマンの小壘と、奇妙なかたちの果物であった。

くだものの名を、彼は客たちに、バナナと紹介した。この南国産の果物は、この時代、一般庶民には頗る珍しいものであったが、長崎の和蘭商館から毎年、將軍家に特別仕立ての早駕籠で献上されており、老中たちにもお裾分けされて、元禄屋たちには、さして珍貴なものではなかったが、領田下野が、なかなく大きな一房を今宵のために用意してくれたのである。

その、まだ青味の残っている一本を、とりあげた散位は、

前号まで——徳川十一代將軍家齊の末世天保初年、幕府神宝方探秘職の折戸から豊臣秀吉が一子秀頼のために埋蔵した遺宝の謎を秘める五夜のロザリオの秘密をきかされた元禄屋は、その探索に乗り出す。一方、怪盗徳夜叉一味も大坂の大塩平八郎と連絡をとりその秘宝を手に入れようとする。渦中に巻きこまれた、豊香、千登世、小紫のお景たちは、元禄屋たちの拷問に裸身を悶えさせ、菊亭貴子と久我雅子の裸身にも執念深い嗜虐の淫手が加えられ続ける。

「このバナナというくだものはな、南蛮紅毛人たちのあいだでは、もっぱら責めの道具として珍重されておるといふ。値段も安いと云われるが、はるばる海を渡ってきたこの江戸では一本が一両。とてもじゃあないが、身どもたちの手には入らない貴重な品、折っちゃあならない。そこで、奥方さまが、暴れちゃあこまる。清兵衛、お前、上のほうを、うごけないように押えつけている。善兵衛は下だフッフッフ」

青江の言葉にニヤリッと笑った清兵衛が上にまわると、善兵衛は、掌に唾はきかけて、左右の人さし指と親指をはずませ、

——チョツ、チョツ

と、舌打ちをして、同時に×××、そこをぐうーっと左右に××る。

「アッ、アッ！ アアア……」

大きく喘ぐ貴子の口のなかで舌がもつれ、それとともに、熱いやるせない息が押し出され、弓なりになった裸身が、<sup>けいれん</sup>痙攣をおこしたように、ひきつる。

「奥方さま、もすこしじゃ！」

左手の二本の指でひっぱりながら、右手の親指と人さし指は、××に沿って、柔らかに時に強く、つまみあげつまみおろしていく。

女として、素裸で縛られた身を眺められるだけで、云いようのない恥辱感をうけるであろうものを、その上、こんなに執念ぶかく責めなぶられては、どんな女でも屈服する外はない。まして、貴子の場合、頭を、こともあらうに清兵衛の膝ではさまれたうえに、たかくそびえている豊かな胸の双つの隆起を、ごしごしもみしだかれたり、紅真珠のような乳首を弾かれたりして上半身を、いたぶられ続けていたのである。

貴子の脇腹や太腿が、その心とは逆に、次第に、媚態を示すかのようにうごめきはじめたとしても、やむを得ないことであろう。

「フッフッフ……」

その蠢きを見てとった散位は、善兵衛の肩越しに、バナナを構えた手を差し伸ばしてきただけであった。

「キャアアッ！」

と云う悲鳴を楽しむように、ゆっくりと、責め上げ始める。

「ア、アッアウ——ッ！」

針金で縛られている華奢な手首や足首が、いまにも千切れるかと思われるほど力をこめた貴子は、根かぎりの抵抗の姿勢をしだしたが、結局は、無駄な努力におわってしまう。

狂ったような貴子の絶叫！

「ヒヒヒヒヒ……どうでえ、ご気分は。」

ええ、奥方さま、御台さま。<sup>みだい</sup>ウンとかスンとか云って見たらどうでえ」

清兵衛が、しっかり押さえこんだ顔をのぞきこんで、からかったが、貴子は襲ってくる疼痛に耐えるのが、せいっぱい。

「フッフッフ、まだ頑張るつもりなのか。」

それじゃ、もう一本。それにこいつもな」

より大きなバナナとともに、ギヤマンの小塚を手に散位は、善兵衛を押しつけて、すわりこむと、塚のふたをとり、そのなかの黒灰色の粉を、サッ、サッとふりかける。

「じっくりと効いてくるさ。そのうち必ずお

願い、散位さま！ と云うに違いないさな、のう善兵衛よ」

いったいどうなることかと、ぽかんと口をあけている善兵衛の目のまえで散位は、二本目のバナナを取り上げた。

散位のつかったのは胡椒であった。

この東印度諸島原産の香辛料は、十七世紀始め和蘭人によって日本にもたらされたが、日本料理にはあまり応用しないのか、一般に使用されることはなかった。それを、誰がいったいこのように女責めに試みはじめたのかは知るよしもない。ただ、元禄屋は、それが女責めには、もってこいの逸品であることを知って、これまで五指にあまる妾たちに、ときおり、用いてきたのであった。

ちなみに、胡椒には、黒白の二種がある。

黒胡椒は豌豆（えんどう）大の漿果が、まだ十分に成熟しきらないうちに採って乾燥したもの。白のそれは、成熟してのちに乾燥・粉末にしたもので効果は前者が強烈である。

いま散位が試みているのは、もちろん黒胡椒のほうであり、使用する男の側にとってはこの上ないものである。が、ふりかけられた女にとってはこの上ない地獄と云える。

貴子が腰を、くねらせはじめる。



いままでの全身をふりしぼっての悶えとはちがひ、下腹から内股をあたりを微妙に顫動させはじめた。

その悶えの変化は、固唾をのんで見つめている領田下野以下には、はっきりとわかる。

「ククククククク……」

押し殺したような笑ひは羅卒の鞭兵衛のものであった。話にはきいていたが、実際に目にみるのは始めて――。

「種彦先生、どうです。ひとつ市村座の本舞台でつかってみては」

鞭兵衛の耳打ちにも振向こうとせず種彦は貴子の苦悶の変化を歌舞伎の台本作者らしく熱心に凝視している。

真紅の垂幕のまえで、貴子の白い裸身は、いよいよ、はげしい蠢きをくり返す。散位たちも二、三歩さがったところで、客たちとともに、これを見まもる。

十数人の男たちの灼けるような視線のなかで、貴子は、生まれてこのかた、まだ味わったことのない不思議な苦しみと斗っていた。

苦痛であれば、耐えることもできよう。

木馬責め、吊り、十露盤責め……拷問であれば、失心してもなお屈伏しないで、公卿の女としての誇りを保ち抜くことができる。

ところが、これは、単なる苦痛ではなかった。しびれがきれた時の感じ。いや、違う。くすぐり責めをうける感じ。いやそれとも違う。数十匹の蛇が肌身にまつわりつく感じ。いや、そんなものでもない――ともかく、胡椒、この女責めの秘薬の犠牲となった女でなければわからないしびれが、彼女を次第に狂乱状態のなかに誘い入れていったのである。

「アッ、アア……」

舌をだしてもどかしげに唇をなめ廻し、細く整った鼻をふくらませ手の指をいぎたないばかりに開いたり屈めたりしながら、貴子はほとばしろうとする言葉を必死で押し殺す。

（あ、あ、もう、駄目。妾、これ以上、我慢できません。早く拭きとって下さいませえ。お願いいたします。どうか、早く！）

「はやく。ああ、早くう！」

押しころしかねて、思わず声となる。

（妾、いま、叫んだわ、確かに。いけない。そんなはしたないことを。我慢するのよう。貴子、耐えるのよう！ ククククク……）

何度も云いきかせながら、

「ウ、ウウッ！」

なおも、こみあげてくる呻き。

「どうしたい、貴子」

意地悪そうに、散位が、顔をのぞきこむ。  
「遠慮なく云いなよ、はっきりとな」

と、ひときわ甲高い悲鳴があがったが、その余韻の消えぬうちに、ポトツという音がして、バナナが床におちた。

「おやおや、これはこれは」

散位がひろいあげようと身をかがめるよこから、善兵衛が手をのばし、

「おさきに！ ご用人さま」

と、拾いあげて、も一度、もとの場所へ。

ところが、ほとんど同時に、もう一本のバナナがポトリ。

「イヤだというのか！」

散位は、二本のバナナの皮を剥ぐと、たっぷりと黒胡椒をふりかけた。

一瞬後に、鋭い悲鳴があがった。

「ヒイイイッ！ キャアッ！」

経験したものでなければわからない激烈な痛みが、貴子に襲いかかったのであった。

焼火箸――まっかに焼かれた火箸、或は、竹槍を想わすような激痛！

「や、やめてええ！ お、お願いします！

な、なんでも、どのようなことでもいたしますから。ヒイイイ……お願い！ 善兵衛！

元、元禄屋さま。お、お許しを！」

——イメージギャラリー—— 『逆立ち責め』 —— 小川 茂 正 ——



江戸で捕われの身となって、もう一カ月をこえる。いまはじめて元禄屋重右衛門は、菊亭貴子の心からの訴えの言葉を耳にすることができたのであった。  
「ハッハッハハ……」

満悦の笑みをうかべた元禄屋は、ゆっくりと腰をあげて舞台にすすみでる。逆剝の美女衛門と四人の子分が、これにつづいた。  
この場合、女をどのように縛れば一番効果的かは、女谷流の達人であるこの男たちは、

よく知っていた。釣り責めに、つかう釣台のような道具が、はこびこまれ、貴子の四肢を縛っている針金が、はずされる。

自由な身になった貴子がついた最初の動作は、右膝をたてて蹲り、右手で、責め抜かれた痛みを、かばう。当然、うらみ深いバナナには背を向ける。

「これはまた、すごいことよのう」

遠慮会釈ない笠倉屋の高笑いに、ハッとなつて貴子は、きれながな血走った眸をあげて声のするほうに柳眉を逆立てた。

そこには、淫らに唇をゆがめ、いまにも襲いかかってくるような男たちの顔、顔、顔が十五、十六、十七……。

言葉は、でなかった。ただ、頬が炎のように燃える。

（恥かしい姿を、この男たちに見られてしまったのだわ、妾……）怒ることも忘れた貴子は、奈落の底におちこむように、ぐったりとさしうつむくはかばかかった。

が、それも一瞬——。

陰間の架助たちに手とり足とりされると釣台の上にはこばれ、両手は頭上で縛られ、右足をたかだかと斜め上に、肩のあたりまで吊りあげられてしまう。



## 元禄屋の場合

左足だけで躰をやっと支えている貴子ののった釣台を、架助たちは、舞台から、ぐるりと円陣を作った客席の客たちの真中に抱えおろすと、その左右に二人ずつ拷問役人のように寄り添う。

円陣は、すぐ、二重の半円となり、舞台の上とちがって、老中領田をはじめとする男たちの酒臭いいきが、じかに貴子の肌に、せまってくる。それにしても――

「ト」の字を逆にした「ㄣ」のような姿で釣られている貴子の裸身は、美しいというよりも、むしろ、淫蕩きわまるものであった。

まず、純白の脇腹のうえ、淡雪のような二の腕の内側に、いかにもなまめいてそよいでいる漆黒の腋毛。つぎに、なかば開かれた男を誘うような朱い唇からのぞく白い歯並び。そしてもっとも淫らなのは、ほんとうに、これこそ、もう、どうしようもなく曝けだされた女の羞恥。

蘭麝の香りが、ムンムンと漂い、男たちの赤く濁った眼が、喰い入るように注がれる。「紫蘭の門と、ひとくちに言うが、それぞれ

品位というものが、ござっての」

元禄屋は、ぐいっと盃をのみほすと、かたわらの老中領田下野にむかってニタツと笑ってみせた。

老中といえども、こと女にかけては、儂のほうか――という、稚氣満々とした風情である。

「女は女よ。ことさら変わったこともありはせぬぞ」

勘定吟味役の佐渡刑部が、ひややかに云うのを、小馬鹿にするような眼で、眺めやり、「昔、世阿弥とか云う能楽の達者が、芸の位を九位にわけましての。上三花に妙花・龍深・閑花風。中三花は正花・広精・浅文風。そして、下三花として強細風・強龜風・龜鈴。これをいちいち説明しては、五年も十年もかかりましようが」

と、ぐいっと、酒盃をはすと、貴子の肌から漂う香りを、ふかぶかと吸いこみ、

「わたしは、紫蘭の門を、九品にわけておりますのじゃ」

ひとひざ乗り出した佐渡刑部たちに、「フッフッフ、いままで、めったなことでは云わなんだことですが」

と前置して、得意げに語りだしたところに

よれば、上品ほん、中品ほん、下品ほんがあるという。

上品を、玄、幽、聖

中品を、仁、深、密

下品を、縮げほん、広、浅

と云い、下品げほんの下は、米糠か豆腐滓のようなものであり、広はただ、だだっぴろいだけで、家具調度類の揃っていない大広間のようなもの、縮げほんになると前二者より、やや、ましであるが、まだまだ下品であることに変わりはない。

中品の下の密になると、すこしは色艶の案配もよくなってくる。その案配のこまやかなのが深であり、それにいっそうのこまやかさを加えたのが、中品の上だという。

「その上は、さて、何と云おうか。聖せいにしても幽ゆうにしても、ちょっと言い現わし難い。まして、玄の境地は、筆舌では表現できまい。老子の云う無名天地元始有名万物之母と云うところかの」

さすがは、元禄屋、男としての学あるところを、酔いにまかせて披露したあと、「この女はまさしく、上品。上品も、聖なるか幽なるかは、何とも申されぬが……」

あとは、めずらしく酔ったらしく、道の道とすべきは常道にあらず、名の名

とすべきは常道にあらず

とか、「玄之又玄、衆妙の門」とか、老子の道德経を眩きながら、ごろりと横になつてしまった。

この元禄屋、豊太閣が、天正大判千五百枚を溶解してつくりあげた大分銅金三千箇の埋蔵金を狙うだけあって、なかなかの傑物であることは、間違いない。

眠つたと見せかけて、心中、ひそかに、五夜のロザリオにきざまれた和蘭数字の謎を、酔つてますますさえる頭脳で考えつづける。

甲夜——色は勾へど、散りぬを、16・16

・22・12・3

丙夜、丁夜——。

戌夜のロザリオは、將軍徳川家斉の子と自称する徳夜叉の手にあり。乙夜のそれは、まだ皆目、行方が知れない。

## 責められ証文

元禄屋の胸中を知るよしもない佐渡刑部たちは、眼のまえにぶらさがっている、ことばどおり釣り台の、蘭麝の香りもゆかしい菊亭貴子の裸身を眺めて、この上ない快楽感に酔い痴れている。

「もう少しふりかけてやろうか。どうじゃ」にじりよった佐渡刑部に、  
「お、お許しを、ほんとに、お許しくださいませ……」

いくらか、疼痛はおさまったものの、黒胡椒のはいったギヤマンの爆をみると、怖気だつ貴子であった。

「フッフッフ、よほどこたえたらしいの。みてのとおり元禄屋さんはうたたねじゃ。あとはこの儂が、あんたを責める。よいかな」

この別宅の主人利倉屋庄右衛門、だんご鼻をうごめかせて、

「そこでだが、すべて約束事には、手形証文というものがなくてはならぬ。その証文が欲しいのじゃ」

「証、証文と申されますと」

「フッフッフ、儂等に責められてもいいさい文句は云いませぬという承諾書のことよ」

「そ、そのような！」

「いやと言われるか。それならば、佐渡さまも持っていられしやる、黒胡椒をたっぷりとふりかけて進ぜようかの」

利倉屋の意図は——、

証文をとることによって、この高貴の女性を完全に屈服させることができる。それに、

あられもない言葉を唇にするときの風情が、このうえないみものというもの。

利倉屋は、清兵衛をよびよせ何事か、ひそひそと囁くいっぽう、青江散位の前に文机と筆硯をそろえてさせて、書き役を依頼し、  
「さて、どうなさる。黒胡椒責めか、誓約証文か。どちらでも、おすきなように」

と、貴子の凝脂の、ほどよくのった肩先から乳房のあたりに、だんご鼻をこすりつけてひくひくと蘭麝の体臭を嗅ぎまわる。

（なぜ、妾が証文などを、この男たちにとられなければならないのか！）

貴子は、屈辱に身のすくむ思いである。

（妾は責められますとどうして云えよう！）かとて、この以上の黒胡椒責めは——。

「イヤ！ イヤです。妾、とてもそのようなことはイヤです！」

激しい抗議の言葉が、思わず口に出る。

「イヤって、なにが、いやなのだい、奥方さま。云うのがイヤか、黒胡椒がイヤか、はつきりさせなよ」

「そうともさ。それとも、そうして、いつまでもぶらさがっていて、とっくりと見せてくれるというのかい」

「こっちはどっちでもいいんだぜ。二日でも



三日でも、ほれ、ほれ、こうしてさ」

貴子の真正面から美男の槍助が、はり裂けんばかりにひらかれきった太股に沿って指を這わせてゆき、

「ヒャアッ！ お、おやめになつてえ！」

何度か、悲鳴をあげさせる。

五百匁蠟燭のひとつが、ジ、ジッと音をたてて消え、架助が新しいのとり替える。

ニヤニヤと、なりゆきを見守っていた利倉屋が、

「よし、決まった。黒胡椒責め！ 佐渡さまどうぞ！」

と強い声でいう。

待ってたぞとばかりに、ギヤマンの小塚の黒灰色の粉を筆のさきにつけた刑部が、すばやくサッ、サッとなすりつけた。

瞬間、ほとばしった貴子の絶叫は、すさまじいまでの、ひびきをもっていた。

裸身を大弓のようにひきしぼり、乳白色にきらめく太股を痙攣させたかと思うと、双の乳房が、はりつめて、幾条かの静脈が胸もとを、つっぱしる。

「もう、一筆！」

二度目の攻撃が、すかさず反復される。

三撃目！

貴子は、唇の端から唾をとばして叫んだ。

「お、お、お許しを！ 何でも、もう、何でもいたしますからあ！」

涙と汗と唾に、くちやくちやになった顔を苦痛にゆがめて訴える貴子を、じろじろと眺めた佐渡刑部は、

「云いつけをなんでもきくと申すのじゃな」

「ハ、ハイッ！ な、なんでも。なにごとでも！ 許して、許してくださいませ！」

利倉屋と視線をあわせてニタツと笑った刑部に代って、清兵衛がすすみでると、ながい垂髪をかきわけて桜貝のように染まった貴子の耳朵に、何事かをささやく。

イヤ、イヤと激しく顔をよこに振る貴子であつたが、形容しがたい疼痛がこみあげてきて、一刻も早く取りのぞきたいという、やむにやまれない気持が、遂に、乾いた唇から、あられもない言葉を吐かせてしまう。

高貴の姫として生まれ、中納要家の御台所となった身してみれば、それは、まさに死にまさる屈辱であろう。

が、

黒胡椒の責苦から解放されたいという気持が、それをうわまわっていた。

「お、おゆるしを！ 申します、申しますか

ら、もう、これ以上は！」

全身をくねらせて叫んだ貴子は、

「妾は、妾、菊亭貴子は、今日から、皆さまがたの手で、どのようにとり扱われましょうと異存はございません。どうか、この、この妾を、み、みな様方で、女に、女にしてくださいませ」

何という屈辱！

貴子の顔から一切の血の気が失せる。

「よし、よし、その調子だ。次はな」

清兵衛の耳打ちどおり貴子はつづけた。

「妾は、いま、裸にされておりまする」

「裸じゃあねえ、スッ裸と云うんだ！」

「そ、そのように、はしたないことを！」

「なにが、はしたねえんだ。はしたねえのはお前さんじゃあないかよ」

清兵衛の手が、じわじわと黒胡椒へと伸びかかる。

「ヒヒイッ！ 云います、云います！ 許してえ！」

「早く云いなよ。さあ、ほざくんだ！」

「……妾は、スッ裸のまま元禄屋さまたちにお仕えいたします。縛られ、責められ、拷問を、つ、つつしんでお受けいたします。どうか、妾を可愛がって下さいませえ！」

イメージギャラリー

『山小屋の来客』

岡

たかし



「つぎは、こう云うのだ！」

清兵衛が囁いたのは、どうしても女である  
限り口には出せない言葉であった。

「云わねえと、もうひとふり、するぜ」

と脅かされて、

「妾の、アアッ！ 妾の……ア、ア……」

云いはじめたものの、これだけは、どうし

ても口には、だせない言葉——。

じれったそうに、何度も口ごもる貴子に、  
やっと、たすけ舟がでた。「始めてのことだ。今日はこのくらいにして  
やろうじゃあないか、誓約もしたことだし」

うまい料理は、ゆっくり喰うにかぎるとい  
う魂胆なのであろう、吊りあげられた両手を  
自由にすると、青江が書きとどめた奉書  
紙の末尾に、自分の手を、震える貴子の腕に  
副えて署名させる。

「これでよしと。ではヒリヒリする所を洗っ  
てやろう。誰がよい、名指ししてみな」

「ど、どなたでも、早く、はやく、どうにか  
してくださいませ！」

女は、ときに豹変するという。

今、どのようにでもなさって下さいませ、  
スツ裸のままで廻られます——と云わされ、  
それに署名までさせられた瞬間、貴子は、な  
にかこう、胸につかえていたものがとりのぞ  
かれたような、いや、なかば、すてばちな気  
持にとらわれていた。

ふたたび頭上に高く吊られた双腕を、白蛇  
のようにくねらせて、

「早く洗ってくださいませ！」

という言葉にも、妙になまめかしい風情が  
こめられ、太腿からふくらはぎにかけての蠢  
きにも、仇っぽい官能的な媚態が、急に、あ  
ふれてきたかのように思われるのであった。

柳眉をさかだてて、抵抗する女には、また  
それなりの妖艶さがある。



しかし、やはり、女の色っぽさは、男に従うところ、男のいいなりになるところにこそより香り高く匂いでるものなのである。

「だから、誰に洗ってもらいたいと云っているのだ。老中領田さまか、丸田屋さんか、それとも、この儂か」

利倉屋はだんだん鼻を、ひくくして訊ねた。

「ぜ、ぜ、ぜんべえ、善兵衛にお願い……」

「あ、ア、アッシですかい！」

おどろいたのは、当人の善兵衛であった。

市村座の下足番、一生拝むこともできない老中や勘定吟味役をはじめとするお歴々の連なる座に列するだけで破格の光栄。それが、いま、かつての御台所さまのご指名を、おお

せつかったのである。

「あ、ありがてえことで！」

とびだした善兵衛――

獄門の牢助がはこんできた角皿のなかの手拭いを、震える手でにぎりしめると、

「あ、あ、ありがてえことで、奥方さま」

お歴々の旦那衆をさしおいて、自分の名がよばれた興奮に、善兵衛の五体がふるえた。

つい、さきほどまで、いたぶっていた奥方さまではあった。が、あときは無我夢中。

いま、十数人の、ことには、同僚の清兵衛の

嫉妬の視線を、この愚鈍な男でも、背中に痛いほど感じて、たかだかと、吊りあげられてる貴子の右脚のふくらはぎから太股に手拭いを這わせていくのであった。

「お、お、奥方さまアッ！ も、もったいな

いことで、まったく、もう……」

拭きながら善兵衛が、どもる。

「よいのですよ、善兵衛。妾、これで、これで、すこしは疼きが、とまったような……」

と云いかけたものの黒胡椒の粉は、そう簡単に拭きとれるものではない。手拭いに附着した粉が、かえってあたりかまわず肌にしみこむこともあるうし、善兵衛は、なおためらいを感じていた。

「善兵衛。もっと、お水、お水をつけて、くださいな……」

一刻も早く疼痛から逃がりたい貴子が人前

も、はばかり頼みこむと、善兵衛が忠実にこれにに応じて、たっぷりと角皿の水を手拭いに、しみこませて、拭きあげていく。

「ウ、ウウッ……ウ……ウ」

フウッと、たまっていた息をいくどか貴子が吐きだす。幾条かの水滴が、玉のような左の太腿を伝わって膝へ、そしてふくらはぎへとながれていく。

「あとひと押しというところでしょうな、旦那」

じいっと見守りつづけていた羅卒の鞭兵衛が、利倉屋に話しかける。

車座になって、酒盃をあげている男たちもまた、鞭兵衛の言葉に、うなずいた。

あとひと押しで、疑いもなくこの女は、屈服してしまう。肉体だけでなく、心をも自由にあやつることができるようであらうと。

夜は、もう、四つ半をすぎて、九つが、ちかい。

## たわし責め

九つどころか、八つ、八つ半がすぎても利倉屋たちは、貴子に対する責めをやめようとはしなかった。

それは執拗なまでの、実に、ねちねちとした責めと云えた。

男が十数人いたせいかも知れない。あるいは、貴子の女体が、美しすぎるせいなのかも知れぬ。

ともかく、利倉屋たちは、心身ともに、くたくたになった菊亭貴子への責折檻をやめる気配を、いっこうに、しめさなかった。

一人の女に、十数人の男たち——

善兵衛が、黒胡椒をやっと拭きとると、あとはもう、佐渡刑部や、北町奉行所の工頭監物たちが、それぞれ、一達流捕縄術をはじめ方円流、八重垣流、竹内流と、世に高名な捕縄の縄捌きを、釣り台から解放した全裸の貴子を女囚とみなして披露するのであった。

女谷流の達者をほこる逆剝の美女衛門一家も負けじとばかり腕をふるう。

「女谷流菱衆縄高足！」

陰間の架助が、いまでも、貴子を正面の角柱に縛りつけ、左右の足首に縄をからませると得意気に叫ぶ。老子のいわゆる「玄牝」を原点にしての「V」型の緊縛作法。

「同じく女谷流多角縄六角！」負けじとばかりに、引廻しの棒助が、貴子の背後と前面に六角形をきちんと六つ、縄でつくと、くるくると回転させて、厳しい縄目からとび出した紅真珠のようにあざやかな乳首を、三度四度、指さきで、はじめてみせる。

もう、貴子は、なかば意識を失っていた。

赤房・針谷・両鎌と、女体に対する考案がなされた捕縄術のかずかずを受け、飽くことを知らぬげに、もてあそばれる悦虐の怒濤のなかで、縄目の喰いこむ衝撃だけを、やっと

の思いで、肌に意識していた。

「おつぎは、どなたの番ですか。奥方さまは、早く早くとお待ちなさっているようで」

それが、さも普通のことであるかのように槍助は、云う。

「俺がすんだから、種彦さんの番でしょ」

「あたしも、さっきすんだ所ですが。でも、よろしかったら何回でも」

もうすっかり酒に酔ったらしく種彦は、笠倉屋たちをかきわけて、すすみでると、

「みればみるほど、まったく絶品でげすよなこの女」

ドサツと倒れてむように、貴子の前に坐りこむのであった。

「アウ！ アウウウ……」

この段階にたちいたって貴子が、なおも呻きをあげたということは、その女らしさが、いかに得難いものであるかの、なによりの証拠と云えよう。

男の数は十七人——合わせて三十四本の腕百七十本の指に襲いかかられ、撫でさすられつねられ、抓みあげられて、なおかつ、女としての反応を保ちつづけるということは、なみたいていのことではない。

「さすがは元禄屋さん御自慢の女。責め甲斐

がありますなあ」

笠倉屋も丸田屋もおどろいたように云い、種彦のこれでもか、これでもかという、いたぶりに、軽く瞳をとじ、なかば唇をひらいた恍惚の表情のなかにも、どこか、まだ、抵抗の気配を残している貴子の顔に、交互に、賞讃の眼をおくるのであった。

「種彦さん。こいつを使って最後のとどめをさしちゃあ、いかがです」

逆剝の美女衛門がさしだしたのは、尖端にたわしのくくりつけられた二尺余の棒。

「ちょっと非道すぎやしませんか、親分」

「フッフッフ、見かけほどじゃ、ござんせん。触ってみればわかります」

手にとって触った種彦がニヤツとする。

「特別あつらえですな。これなら、大丈夫」

馬の毛か、狸の毛か、筆の穂先よりかはいくらかかためのそのたわしの棒を左手にした種彦は、それの廻らなくなった声で、

「御台所さまあ。ちょっと眼をあけておくんせえ。見てもらいたいんですあ。ほれ」

とよびかけたが、貴子の瞳は、いっこう、ひらかれはしなかった。

「為永先生が、せっかくああ云ってくださっているんだ。開きなよ、おい！」



引廻の棒助と獄門の牢助の二人が、左右から、貴子の脇の上下に指をあてる。  
 焦点は合わなかったが、貴子の視野に、あきらかに女体を責めるに応わしいもの——と思われる物体が、ぼんやりと映る。

「イヤ、イヤ……」  
 豊満な乳房をブルンと顫わせた貴子は、「もう、これ以上なされますと、貴子は、ほんとに、もう、もう、ほんとにダメ、ダメになってしまいます。お許しになって……」



……イメージギャラリー……

『華やかな連罪』

志 羽 利 也

絶えいるような声であった。が——、  
 「種彦先生、お手伝いしますぜ」  
 周囲が、許してはおかなかった。青江散位を始め七、八人が、あらためて貴子を、両膝立て開股後手縛りにしてしまうと、ひしひしと、そのまわりを取りかこみ、さかんに種彦を、けしかける。

「では、ごゆるりと最後まで」  
 芝居がかった口調で云って、あたりを笑わしてから、「そうれっ！」と、かけ声もろとも、たわしを突き出す。

「ひえッ！」

悲鳴とともに、貴子の足の指が、大きくそりかえり、後手に縛られている両手の指が、にぎりしめられたり、ひらかれたりする。

喰いしばった奥歯が、ギリリツと鳴り、のけぞった白い咽喉に、二滴、三滴、玉のような汗が、したたりおちていく——。

野卑な言葉を、てんでに投げかけられるなかで貴子は、はねる。種彦の手にする二尺余の棒が、左に右に、上下に、さらには、斜め上へと、こじりあげられ、はては、ぐるぐるっと大きく円を描いて回転する。

その動きにつれて、貴子が、躍る。  
 囁るたびに麝香と蜂蜜の香りが、いよいよ

濃艶さをまして広間にただよい、獅子鼻、驚鼻、だんご鼻、理財鼻に、かぎっ鼻、豚鼻、下女鼻、象の鼻、帝王鼻にいたるまで、十七人の男たちのとりどりの鼻が、匂いをかぎわけようと迫ってくる。

腋、額、唇、首頸、乳房、手の指のまたに脇腹、耳朵……女の躰というものは、それぞれの場所ですれぞれ得難い香りをただよわせるもの。種彦の手中にあるたわしの攻撃のまえに、貴子の裸身が、満山これ百花散乱とばかり馥郁とした匂いを、ただよわせる。

と、ついに抗しかねたか、一瞬、貴子が全身の筋肉の抵抗をといた。がっくりと垂れた顔といい、燦く肩から背へとながれる黒髪といい、その情景は、十年に一度、花咲くという月下の白蘭を偲ばせる美しさであった。

ややあって——、取りかこむ男たちの灼けつく視線に、ふとわれにかえったのであるうか、うっすらと瞳を開いた貴子は、囲りの男たちのキラキラ光る眼をみとめると、ふたたび朦朧とした桃色の霧のなかに、身心をさまよわせていくのであった。

## 勅使到着

天の橋立股のぞき——あの誰でも知っている姿を、前に半回転させて青畳の上にひきすえられるという、女にとって屈辱きわまりない形に縛りつけられた貴子の柔肌に、さらに種彦のたわし責めがこれでもかこれでもかというに繰り返される。その惨めさこのうえない女体を肴に領田たちは、あらためて酒をくみかわす。

「傾国の美女と申すが、まさしくこの女、それよのう。旗本・御家人どもの生計を一手ににぎる蔵宿のそなたたちに、かほど珍重されとは、女の栄耀も、ひときわじゃ」

「なにを、おっしゃいます。老中さまこそ、一時も目を離さずお楽しみみの御様子で。フッフッフ……国を傾けるほどの絶品。早く女として、味わってみたいもの」

「そのことよ。元禄屋の申すには、勅使饗応の席で、余に抱かせると申しておる。その勅使が誰であろう、この女の前夫、中納言押小路高明卿」

「聞いております。女を責めるは、その女が惚れた男の目のまえと元禄屋さんが」

貴子の責め苦も知らぬげにうたたねしていた元禄屋は、どうやら本格的に熟睡したらしく、あたりかまわぬ高いびきをあげている。

「さすがは日本中の富をも、うごかそうほどの男。あっぱれな奴」

領田は、寝姿に目をやりながら、「いまひとりはいかがいたした。従三位民部大録久我親元の娘で大蔵大輔柳原宗忠の正室であった久我雅子とか申す女性は」

「以前にもまして」

利倉屋が低くてまるい鼻をうごめかせる。

「貴子姫とは違うて敏感な女性じゃったが、それではいよいよ味がよくなったと申すか」

「いかにも」

「面白いことよ。貴子には前夫をひき合わせる。雅子は副使の葉室邦行が会う日を待ちのぞんでおるであろうて」

「葉室と云いますと」

淫らに笑った領田の手が、目のまえに惜しげもなく、さらけ出されている貴子の白蘭の花びらのような太股から、甘く漂ってくる、かおりを鉤鼻いっばいに、かぐ。

老中領田、何を企んでおるのであろうか。

その頃——

勅使押小路中納言高明の一行は、品川宿本陣で長旅の最後の夜を過ごしていた。

「唐は江戸は始めてじゃが、はて、いかよう





懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

# 鼻孔自虐の記録

中村 葉奈男



カット・志羽利也

私が鼻責めの魅力に目覚めたのは、いつの頃だったでしょうか。そのきっかけが、どこにあったのか、それを今、思い出す事は出来ません。とにかく、ぼんやりした最初の想い出は小学生の頃（当時は国民学校といいましたが）の事です。何かに憑かれたような気持ちで、私は一人、自分の鼻を洗濯バサミでつまんで楽しんでいました。あれから、もう二十五年は過ぎたでしょうか。こうして奇クに何かを書こうとペンを走らせている今、私の鼻は口ウで塞がれているのです。私の鼻の鼻中

隔には、直径八ミリ程の穴があいています。その穴に中細ロウソク（一、五号）を横に通しロウソクの両端に火を点けました。更に、そのロウソクと鼻孔のすき間へ別のロウソクで熱ロウを落とし、鼻孔から空気の洩れる事のないようにしました。今、私の鼻は横に通されたロウソクと、そのまわりを埋めたロウの塊とで息の出来ないようになっていました。そして、ロウソクの両端の火は次第に顔に近づいて来るのです。熱い、まぶしい、目がくらむ……ああ駄目です。私は我慢できず、ロウソクの火を消してしまいました。でも、鼻一杯の口ウで息の出来ない状態は同じです。私はこのまま口で苦しい呼吸をしながら、皆さんに私のこれまでの自虐と鼻責めの記録を綴ってみたいと思います、矢も楯もたまらずペンをとりました。鼻がふさがっていますと、何故か頭の回転が鈍くなるような気がします。もともと文章の下手な私ですので、何か、まとまりのない記録になりそうですが、初期の頃から、いろいろと工夫して、一人で実行してきた鼻責めのいくつかを、記憶をたどりながら書いてみることにします。

一、鼻中隔を麻ひもで縛ること。

近くの山へ登って、麻ひもを鼻孔から、す



すり込み、口の奥を通して反対の鼻孔へ出し鼻中隔を、しっかり縛ります。麻ひもの一端を木にしばりつけて、繋がれた家畜の感覚を味わいました。中学校の頃のことです。細かい方法は省略しますが、その頃の優等生だった私は、こんな性癖を他人に知られるのが何よりも怖ろしく、それでも矢も楯もたまらず何度か山へ登ったことを覚えています。始めは、おそろおそろ周囲を見渡して、誰もいないことを確認して始めるのですが、一旦、麻ひもが鼻へ、すすり込まれて行くと、妙に度胸がすわり、時には全裸になって、大声をあげ、牛の鳴きまねをしたりしました。

## 二、鼻中隔へ針を通すこと。

針といっても、いろいろなものが、あります。長い針金の先を尖らし、鼻中隔へ突き通した上、さまざまに曲げて鼻の形を変化させる遊びは大変、気に入る、何度も繰り返してコーフンしました。一本では物足りず、三、四本、通したこともあります。何本、通しても、殆ど血が出ないのは、むしろ不思議なくらいでした。大学も後半の頃のことです。まだ奇クとの出逢いはありませんでしたが、この広い世間には必ず同好の人がいる筈だ、という信念のようなものがあって、私は次第に

大胆になっていったようです。

やがて、ただ針金を通すだけでは物足りなくなり、針金を通したあとへ市販の止め輪を通してみました。文字通り鼻輪がついたことになり、一段と家畜らしくなった気持で私を楽しませてくれました。

## 三、鼻中隔へ穴を明けること。

これは前回（四十六年十月号）の告白「鼻責めにつかれて」で御紹介した通りです。その後、鼻の穴は更に大きくなり、今は直径八ミリ、鉛筆が自由に通るようになりました。

## 四、鼻中隔の穴へ白いナイロン線を入れて銀座を歩くこと。

やや長いナイロン線で両端が鼻孔から少しはみ出しています。

銀座は孤独な都会の象徴です。あれだけ沢山の人が歩いていくのに、知った顔に出逢うことは殆どありません。たそがれの銀座でしたが、真白な、直径二ミリほどのナイロン線が両の鼻孔から覗いているのは、一寸、気をつければ、すぐわかる筈でした。変な奴がいと思われても、知らない人なら、かまわない。いや、むしろ変な奴と思われたい、少しでもジロジロ見られたい、軽べつされたい。そんな思いだったのです。しかし、意外に殆

どの人は気がつかないのか、忙しそうに又は楽しそうに、私の方へは目もくれず、どんどん、すれ違っていきます。孤独な都会の病はこれほどまでに無関心という症状を作り出しているのでしょうか……。

私は、じれったくなって、ナイロン線を片方の側へ引っ張り出し、目立ちやすいようにしました。それでも尚、気にもかけずに通り過ぎる人が大部分です。しかし今度は、時々ジロジロと見ながら行く人が、何人か出て来ました。そんな時、私は頭の前から足の先までジーンと何かが走り抜けるような、張りつめた興奮を覚えるのです。

こんなことをする私は変態なのだろうか、と時々自分で思うことがあります。でも私の行動は、このような時でも常に細心の注意を払っており、理性的だと思えますし、普段の考えや行動に異常があるとは思えません。ただ私は小さい時から好奇心が強く、新しいこと、めずらしいことに気づくと、何でもやってみたくなる方でした。その好奇心が、たまたま、鼻と自虐の方へ向いたただけなのではないでしょうか。好奇心から近づいた、この道ですが、実に刺激的で奥深く、味わいもあり一人で手軽に出来る上、これほど楽しいこと

はないように思います。こんな楽しみも知らずに死んでいく人人は、何と気の毒なことでしょうか。それにひきかえ、この私は何と幸せなのでしょいか。そんな勝手な考えに酔っている此頃の私なのです。

五、鼻中隔の穴へ草花を通し、鼻のまわりを生花で飾って夜の街を歩くこと。

これは、穴がずっと大きくなってから実行したことです。さすがに人通りの多い昼間はばかれ、人通りが殆どなくなった夜の十時過ぎに、街の歩道を歩きました。人通りはなくとも車の流れは、まだ多く、花で飾った鼻が、度々ヘッドライトに、あかあかと照らし出されます。何人かの運転手は、この変な顔に気づいたに相違ありません。中には徐行して見ていく人も、いたようです。でも私には車の中の人、どんな人なのか、どんな顔をしているのか全く、わからないのです。私は盲の晒し者同然なのでした。

六、鼻中隔の穴へ鼻輪を五個通し、それに繫いだ鎖を耳にかけ、鼻を中心としたリングと鎖の飾りつけをして、自転車で街を走ること。

今度は下町の、夜でも比較的、人の通っているバス通りを夜十一時過ぎに走りました。

風呂帰りの人、縄のれんで飲み疲れた人、そんな人がポツリポツリと歩いていきます。こんな時には、昼間の雑踏よりも、かえって行き逢う人の姿が目に残るものです。一方、知った人に逢う確率は極めて稀です。つまり、今の私にとっては絶好の条件なのです。鎖とリングを鼻から、ぶら下げた異様な格好をしていきますので、正面から見れば、すぐそれと判ります。はじめは勇気がなく、片手で自転車をやつりながら、片手で顔の一部を覆ったりしていましたが、次第に大胆になり、遂には正面から歩いて来る人がいると、わざとゆっくり走って、ジロジロ見てもらうようになりしました。自転車を使ったのは、万一、知人に逢った場合、自転車なら逸早く逃げて、後でシラを切ることも出来るからです。ともあれ、これもスリリングで素晴らしい冒険でした。家へ帰って、ふとんにもぐり込んだあと出逢った人の表情を、一つ一つ、まざまざと思い浮かべると、再び何ともいえない興奮が湧き起こってくるのでした。

七、鼻孔へ煙草を二本、差し、鼻で煙草を吸うこと。

これは簡単に手で煙草を支えて吸ってもよいのですが、一層、刺激的なのは、鼻孔に煙

草を突っ込み、その周囲をロウで固めて取れないようにしてから、煙草に火をつけることです。ロウを鼻のまわりに落とす愉しみもさることながら、この場合には煙草を通じてしか空気は鼻へ入りません。呼吸をしようとすると、いや応なしに煙草の煙が鼻へ入ってきます。それを、そうはさせじとハアハア口で呼吸をするのですが、悲しいことに鼻の呼吸を完全に止めることは出来ず、むせ返るような煙の中で、驚くほど早く煙草が減ってゆきます。やがて鼻が熱さで耐えられなくなり、夢中で手で、もみ消すのです。手の熱さは勿論ですが、そんなものを感じている余裕はありません。口に靴下などを突込んで、口からの呼吸を止めてしまう方法は一層、強烈ですが、一度、実行した際、急性胃炎を起こした経験から私は、やらないことにしています。

八、鎖とリングを使って股間縛りをし、股間を通した鎖を鼻中隔の穴へも通して、リングで、しっかり止めること。

小さなボウリングピンのついたキーホルダーを私は愛用しています。このボウリングピンをアヌスに入れておき、キーホルダーの鎖を利用して股間縛りの鎖に繋ぎ止めておくのです。股間から鼻へ伸びた鎖は出来るだけ短



くしておきます。アヌスと鼻孔との感覚のシンフォニーが最高です。

鼻とは関係ありませんが、鎖は別にも、いろいろな使い方をしています。例えば、ある時は鎖をリングで止めて股間縛りをし、その上から洋服を着て会社へ出勤したことがあります。

アヌスにボウリングピン、腹部中央に大型の止め輪、背中にも止め輪を置き、腹の止め輪からボウリングピンを経由して背中の止め輪へ、背中から両肩を経由して再び腹の止め輪へ鎖で繋がります（出来るだけ鎖は短く、筋肉に喰い込むようにしています）。腹と背中の止め輪は腹部をひきしめるように横へも鎖でつながります。別の特別製のリングを股間の〇〇にはめ込み、これに連結した鎖を前後の止め輪につなぐのです。会社への行き帰り、会社での仕事中、立ったり坐ったりする度にいや応なしに鎖がズルズルと下着の中で動き時には痛み、時には異物感等々……で、仕事も殆ど上の空になります。同僚に気取られまいと平静を、よそおふことの難しさ。つい顔をしかめ、「どうかしたの」といわれて、その場を、どうすることも出来ず、赤面してしまふこともありました。

こんなことを書くと、いつもいい加減な仕事ばかりしているように思われるかも知れませんが、決してそんなことはありません。私も真面目なサラリーマンの一人ですし、仕事は何よりも大切にしているつもりです。この日も念のため、休みをとってあったのですがどうしても片づけたい仕事があるからと、半日わざと出勤しての話でした。同僚をだましているという点で一半の責めはあるかも知れませんが、それなりの義務や手続は済ませているつもりです。自分の休みに他人に迷惑を掛けず、自分なりに楽しむ方法が、これであったとしても、許されるのではないのでしょうか。しかし、この遊びは危険もあり、やはり仕事場は神聖にしておきたいという私の気持ちもあって、その後は実行しておりません。

ともあれ、これは又、全て知人に周囲から監視されているという点で、スリルがあり、一種の感激を味わうことが出来ました。

#### 九、鼻でミルクを飲むこと。

平らな皿に、人肌ほどに暖めたミルクを入れ、それを鼻をならして飲むのですが、喉の奥から口へ湧き出して来るミルクの味、鼻孔の奥へ走り込む白流の感触が何ともいえません。気分をそれらしくするために、鎖をぶら

さげたボウリングピンを尻尾の代りにし、首に鎖を巻いて柱の釘に留め、口は使えないように、ひもで後へ縛っておきます。ひもが、二、三本、口を割っている程度で、無理をすれば口は使えるでしょうが「使えないのだ」と思い込むことにしています。床に置いてある皿のミルクを四つん這いになって、鼻をピクピクさせながら、嬉しそうに嗅ぎまわった挙句、皿の中へ鼻を突込んで、すすり込むように飲むのです。

「ああ、どなたか、せめて私の口を自由にして下さい。本当に奴れいの分際で勝手なことをいえないのは解っています。でも、食べたリ飲んだりする時位、口を自由にさせて下さい。でも……、鼻でいただく、何故こんなに美味しいのでしょうか。私は、やはり鼻で飲むのが、ふさわしいのでしょうか」

そんなことを考えながら、始めてミルクを飲んだときの感激は今でも忘れることは出来ません。一生、何も食べず、ミルクだけで生活出来たらなあ、とさえ思いましたが、妻子の手前、そんなことも出来ません。しかし、時々、一人になった時のお三時は、これに決めています。少々砂糖を入れると一層おいしいうです。

## 十、鼻でURINを飲むこと。

ミルクと同じですが、さめてからでは味が悪くなりますので、トイレ（又は浴場）へコップを持ち込み、コップに受けたものを、そのまま飲みます。普通のコップでもよいのですが、折紙で作った紙コップが、ポケットにしのばせたりするのに便利ですので、私はこれを愛用しています。水がすぐには通らない良質のポスター用紙、合成紙などを折紙の材料にして紙コップを作ります。これはトイレへ入ってから折ってもよく、どこでも簡単に出来ますので、手軽で他人に怪しまれることはないので安心して使います。鼻の下に紙コップを当てて、すすり込むようにすると比較的楽に飲めるのです。もちろん、大部分は直接鼻孔から喉を通して胃へ流れ込むわけですが一部は喉の奥から口中へ溢れ出て来ます。私のURINは、そのまま飲むと、とても渋く塩辛くて飲みにくいのですが、鼻からの場合、少量が口の奥から出てくる程度ですのでちょうどよい風味、塩加減になり、大変美味しいのです。トイレで充分、堪能し、出て来たあとにも鼻孔の奥に残ったURINが時々水鼻汁をさそい出してくれますので、二、三度は、すすり込んで、塩味を楽しむことにして

います。

私の鼻中隔の穴には普段、詰め栓が、してありますが、そのすき間にURINが浸み込んで、やがて乾燥しますと、小便所特有の、あの香りが固着するのです。数時間後でも、鼻中隔の端をつまんで横穴を抜けるようにしますと、あのなつかしい香りが、かなり強く感じられます。時々鼻をいじっては、残り香を楽しむのも大変、気に入っているのです。

## 十一、アヌスからの御馳走を鼻につめ込むこと。

つめ込んだだけでは、ただ息苦しくなるだけですので、つめたあと、その真中へヨウジかマッチ棒で細い孔を通す事にしています。すると、そこから空気が吸い込まれ、ふくよかな香りで、卒倒しそうな感激を味わうことが出来るのです。その感激を味わいながら、新しい御馳走を少しづつ、ちぎって食べるのです。ほろ苦いけれど、ねっとりしたコクのある味が口中一杯に広がって、鼻孔の香りと調和してくれます。ああ、世間の人は、どうして、こんな感激を知ろうとしないのでしょうか。

それにしても、こんなことをする私は、やはり変態なのでしょうか。いや、他人に知ら

れなければ変態とはいえない等、誰だって多かれ少なかれ秘密を持っているものです。何一つ秘密のない人があったとしたら、それこそ味気ない、つまらない人間なのではないでしょうか。

とはいっても、こんな時の私は、誰か他人に見られたい、見てもらいたいという気持ちが一方では非常に強いのです。誰でもいい、「お前なんか犬畜生以下じゃないか。美しい女王様の便器になりたいという気持なら、まだ判る。フン、自分のものを食べて喜んでなんて……。犬や馬でも、そんなことはしないよ」そう言ってさげすみ、軽べつされ、さんざん馬鹿にされて、出来ることなら、つばや小便をひっかけてほしい。ああ、私は実は「変態だ」と、ののしられたいのです。でもそれがどうしても出来ないのは、私がまだ正常すぎるからでしょうか。

こうしていると私は真実Mであることを思い知らされる気持です。自分を虐めるということは、受動態と同時に能動態をも含んでいるように思えますが、私の場合は全く受動態である自分へのみ意味があるのです。

私は今、トイレで一切、紙を使わないことにしています。後始末は全て手でして、その



手を、くんくんと嗅ぎながら、きれいになめてしまうのです。こうするようになってから毎日毎日のトイレが、とても楽しみになりました。便意をもよおしてくると、急にそわそわして落着きがなくなるのが、自分でもわかるようです。

普通、排泄の匂いは、いやなものです。もちろん私にとっても以前は、いやな匂いでした。しかし、ある倒錯した状態になると、普段とは全く違った感覚を持つものです。

「私は、みじめな家畜人間なのだ。こんな匂いの好きな動物なのだ」と思って鼻孔をふくります時、私は倒錯した気持になるのです。それでも始めは便器のそばへ鼻を近づけて、くんくんするのが精一杯の私でした。それが何度か繰り返すうちに、本当によい香だと感じるようになりました。そして、その香を、もっと強烈に感じたいと思う様になり、鼻孔へ入れ、更に食べる様になったのです。でも毎日こんなことをしているわけではありません。前にも書きましたように、私はこれでも真面目なサラリーマンのつもりです。そのあとは余程きれいに洗わないと匂いがとれず、周囲の人に怪しまれてしまうでしょう。周囲の人よりも先ず自分自身の気持が乱れて仕事

に打ち込めなくなってしまいます。休みの日又は仕事が終わってから秘密の遊びに夢中になっても、仕事の時は精一杯、仕事に打ち込むのが私のやり方です。但しトイレへ行った時だけは仕事中でも小さな私の時間。後始末を手で済ませ、その手をなめるのは、ささやかながら胸躍る楽しみなのです。手についた香の良さ、そしてなめる時の全身が痺れるような興奮……私にとってトイレは、いろいろな意味で天国にも値する所です。

## 十二、鼻中隔の穴へローソクを通して両端に火をつけること。

これはこの告白の始めに書いた通りです。立ったままでやりますと、眉毛をこがしたり垂れた口で上着を汚したりしますので、原則として仰向けになり、その上で鼻中隔の穴へローソクを横に通し、両端に火をつけるようにしているのです。耳のワキから頬にかけて、熱口ウが至近距離からポタポタと、したり落ち、瞬間の熱さと、それに続く頬のこわばりが、私を有頂天にさせてくれます。はじめ興奮のあまり、火が両鼻翼へ近づくと忘れ、両の鼻翼へ火傷をしてしまったことがあります。

鼻孔にローソクを二本、差し、別の熱口ウ

で、これを固定して、鼻孔を燭台として使うこともやってみました。もう一つ、刺激が少ないようです。

以上、私がこれまでに工夫して来た、いろいろな鼻責めについて書いて来ましたが、全て自分で自分を責める事に終始しています。己の限界も知り、気分も勿論、自分で盛り上げていくわけです。他人に責められるよりも自由な便利さがあり、一人で結構、楽しんでいきます。これからも、さまざまな自虐の方法を工夫し、楽しみたいと思います。

しかし一方、他人の自由にされるところにMの真髄があるとすれば、一人で責める「自由な便利さ」というのは結局、にせ物のMではない、ともいえそうです。やはり一度、他人に思いきり鼻をいじめられてみたい……いつも、そういう気持が私のどこかにあるのです。どなたか、私の鼻を嘲り、笑い、鼻孔に、いろいろなものを詰め込み、踏んづけ、つばを吐きかけてくれる方、私の鼻中隔に通した鼻輪の鎖を曳きまわしてくれる方は、いないでしょうか。もしそんな方がいたら、お礼に、どんな御奉仕でもさせていたいただきたいと考え続けている今の私です。 八以上▽